

平成30年7月豪雨災害(広島県)

体験談集



—— 発行 ——

公益社団法人 砂防学会
広島市防災士ネットワーク

目 次

編集に当たって	広島市防災士ネットワーク	柳迫 長三	1
体験談集の刊行に寄せて	広島大学大学院総合科学研究科教授	海堀 正博	3
体験談編集に携わって	広島大学総合科学研究科博士課程前期	湯浅 梨奈	4

平成 30 年 7 月豪雨体験談寄稿者の体験位置図（下表の No を参照）	5
---------------------------------------	---

No	被災場所	氏 名	体 験 談「題 目」	頁
①	東区馬木7	島 中 浩 美	災害にあと、お父さんが亡くなりました。	6
		T a M e R i K i	勇気を持って避難 【写】	7
		り ぼ ん	自分なりの危機管理	9
		ピ ン チ ャ ン	初めての土石流災害に遭遇に思う	9
	東区馬木8	馬木八丁目の住人	平成 30 年 7 月の豪雨災害の記憶 【写】	11
		a y u t o m o	平成 30 年 7 月豪雨災害 【写】	13
②	東区戸坂出江2	空 の う え	災害を通じて感じたこと 【写】	15
③	南区楠那	K ・ H	西日本豪雨を振り返って	18
		Y ・ H	西日本豪雨に寄せて	20
④	南区北大河町	結 美 子	貴重な体験	21
⑤	南区似島	くまのプーさん	1876 豪雨 【写】	22
		岡 本 真由美	腰まで埋まって消防署に助けてもらった	24
		小 原 輝 夫	アツという間の増水 【写】	27
⑥	南区青崎2	谷 本 憲 五	河川は、河川の側はこんなにも怖いものなのか！ 【写】	28
⑦	安芸区 上瀬野	川 本 清 彦	土石流前にキンキンと金属の音がした 【写】	31
		岡 野 昭 美佐子	あの時、お友達が電話を掛けてくれたから	33
		舩 下 信 夫	被害の発生したのは、大本谷川の上流 【写】	35
⑧	安芸区瀬野南	村 上 陽 三 幸	地域のきずなを大切に・ 笑われてもいいけ～早く逃げんさいよ 【写】	37
⑨	安芸区 瀬野町	ふ く ち ゃ ン	まだ大丈夫じゃろう、と思っていたうちに 【写】	41
		西 原 幸 宏 悦 子	「三途の河」ってこんな感じなのかな 【写】	43
		白髪 防災士	防災に携わっている住民の思い 【写】	46
⑩	安芸区 矢野西4	吉 田 英 明	生活避難場所と災害ボランティアセンターでの 支援活動から見てきたこと 【写】	50
	安芸区 矢野西5	河 村 洋 美	指定の避難場所ではない矢野公民館へ避難した私達 【写】	61
		田 口 文 男	安否確認	62

No	被災場所	氏 名	体 験 談 「題 目」	頁
⑩	安芸区 矢野西7	西 谷 クニ子	災害に寄せて	63
		加 藤 由美子	7月6日の西日本豪雨災害について	64
		Y ・ T	平成30年7月豪雨災害を振り返って	65
⑪	安芸区矢野東5	助 金 淳	平成30年7月西日本豪雨災害～矢野東5丁目の現場では～【写】	66
	安芸区 矢野東6	T	無題	73
		COCCOASA	7月7日の朝	74
		曾根田 秀 夫	無題	75
		矢野東保育園	7月6日 今日も雨	75
		夏 目 義 弘	「ナナちゃん」とともに【写】	77
	安芸区 矢野東7	松 田 永 伸	災害受けて感じた事	81
		K ・ K	矢野東7丁目のあの時	81
		小 畑 司	私のあの日、あの時の記憶と行動	82
		酒 井	7／6 大水害で	86
		菊 川 勝 美	7月6日 土砂災害の恐怖【写】	87
		匿 名	住み慣れた団地	89
		宝蔵寺 俊 明	初めての豪雨災害の体験と今後の対応【写】	90
		谷 本 明	突如襲ってきた土石流！【写】	93
		伊 木 則 人	広域的被害をもたらした「平成最悪の水害」【写】	94
⑫	安芸区 矢野南3	高 山 和 代	寄り添って【写】	107
		Kunsei T	土石流の直撃を受けました	108
	安芸区 矢野南4	末 永 昭 二	災害時の対応とボランティアへの感謝【写】	111
		ス コ ッ プ	土砂災害の被災地となって【写】	115
		M A Y U K O	7・6 私たち家族の過ち【写】	118
		井 上 順 子	7月豪雨について思いと感謝【写】	119
		な が く つ	7月豪雨災害で学んだこと【写】	121
		シ ャ ー ズ	逃げるかとどまるか！【写】	126
	安芸区矢野南	浦 野 紀 元	西日本豪雨災害・避難所管理の体験版（災害発生から2ヶ月）	138
⑬	安芸区矢野 畑賀	Ｉ さ ん	「一緒に避難しよう」ご近所と決めていた。	149
		木井直 法 子	人を大切に、一言を大切に、助け合うから命が助かる【写】	150
		山 根 美和子	保育園での避難状況【写】	155
		谷 本 正 治	災害発生（発生予想）時の避難行動について【写】	157
		匿 名	想定はしとったけど…【写】	159
⑭	安佐北区 白木町井原	大 東 敬 子	豪雨災害と山頂地滑り【写】	163
		廣 畑 一 孝	今回の災害で体験したことや感じた内容【写】	165

No	被災場所	氏 名	体 験 談 「題 目」	頁
⑮	安佐北区 白木町 三田	中 野 隆 吉	西日本豪雨に寄せて	173
		宇 野 昭 義	「息子が流された」と思った	174
		佐々木 繁 成	7月の豪雨災害にあって 【写】	176
⑯	安佐北区 狩留家町	横 田 邦 子	多くのご支援に感謝、ありがとうございました。 【写】	179
		黒 川 章 男	狩留家・ボランティアセンターを終えて 【写】	181
⑰	安佐北区 深川4	俄 か 班 長	逃げろ！逃げろ！生き延びろ！ 【写】	186
		イ ル	集中豪雨時に自宅不在の時	188
	安佐北区 深川5	Y T	罹災 【写】	189
		寺 脇 純 子 (深川保育園長)	7月の豪雨災害を振り返って	194
		原 義 喜 (深川小学校長)	感謝の思い 【写】	195
		荒 川 忠 臣	豪雨災害に思う 【写】	196
		い っ び つ	避難しよう	197
		タ テ ち ゃ ん	被害の知られていない町 【写】	199
⑱	安佐北区口田1	は ま ち ゃ ん	7月6日のあの日 【写】	201
	安佐北区 口田2	H I D E ・ K	豪雨災害を乗り越えて	202
		菅 原 展 枝	7月6日の朝 【写】	203
⑲	安佐北区 口田南3	渡 辺 清 子	山がキシキシ 【写】	205
		登田精治・郁子	娘の家がスーと流れた。 【写】	207
		木 戸 敏 明	長雨、大雨が降ったら避難しなさいよ	212
	安佐北区口田南5	パ ー マ ン	安佐北区口田南5丁目災害見ていました 【写】	214
	安佐北区口田南8	穴 田 武 司	矢口が丘団地・口田中学校へ大量の土砂流出 【写】	217
⑳	安佐北区可部東6	路 傍 の 石	平成26年8月の豪雨災害に被害者として	221
㉑	安芸高田市 向原	あ あ ち ゃ ん	7/6の大雨 【写】	224
		中 村 千 鳥	無題	225
		高 野 清 孝	無題	225
㉒	熊野町 川角5	城 後 伸 行	『自分は遭わない』。これが命の線引き 【写】	225
		串 山 直 樹	無題 【写】	231
㉓	坂町 小屋浦2	K O B U N O	災害に向き合って思うこと 【写】	234
		西 谷 征 士	無題	236
		匿 名	昭和20年も水害を経験	236
		窪 野 久 野	このカミナリは長いね	239
		出 下 一 教	無題	241
		匿 名	無題	245
		當 田 英 明	協力 【写】	246

No	被災場所	氏 名	体 験 談「題 目」	頁
②④	呉市 天応宮町	吉 川 三治郎	2018 年 7 月 6 日 金曜日の夜 【写】	256
		大之木 美代子	無題	258
		新 本 節 子	10 日分の備蓄をしていました	260
		井 田 純一郎	庭に水が来て、泳いで家に入りました。	265
②⑤	呉市 天応西条3	H ・ A	忘れられない体験	267
		須 藤 忠 石	雨の音にかき消されて、迫り来る濁流に気づかなかった	268
		井手原 稔	H 30. 7. 6 豪雨災害を体験、そして・・・ 【写】	268
		藤 田 繁 逸	天応地区は谷間だから、大量の水が流れることは想像していた。	272
		島 地 志一郎	無題 【写】	275
		西 田 スミ子	解体家屋一平面図 【写】	277
②⑥	竹原市下野	内 山 修	「平成 30 年 7 月豪雨から学んだこと」～後世への警鐘～	278
②⑦	竹原市新庄町	植 向 進	無題	280
②⑧	竹原市田万里	野 村 時 代	無題	281
②⑨	竹原市東野	山 田 榮次郎	西日本豪雨と私 【写】	282
	竹原市	室 津 一 之	被災写真 【写】	285
③⑩	東広島市黒瀬町飯田	大 野 昭 慶	民生委員としての活動が、災害時に命を守ります 【写】	286
③⑪	三原市木原6	奥 田 愛 矢	絶望と再起の狭間で	303
③⑫	三原市下北方	M ・ H	豪雨災害を振り返って	304
③⑬	三原市沼田西町小原	匿 名	無題 【写】	305
③⑭	三原市 沼田西町松江	M ・ M	無題 【写】	307
		是 安 義 正	被災のあと、他県へ転居 【写】	311
	三原市沼田西町	宮 垣 里 枝	平成 30 年 7 月 6 日西日本豪雨災害 沼田西小学校体育館避難所の記録 【写】	314

※体験談欄【写】は、写真、イラストを添付したもの。

平成 30 年 7 月豪雨災害による 西日本土砂災害に基づく緊急提言	砂防学会 会長	海堀 正博	327
あとがき	広島市防災士ネットワーク	柳迫 長三	331

編集に当たって

広島市防災士ネットワーク

代表世話人 柳 迫 長 三

1999年（平成11年）6月29日午後広島市・呉市で、集中豪雨により比較的規模の大きい災害が発生しました。この災害は当時新しい都市型災害として注目され、福岡ではJR博多駅が水浸しとなり都市機能が麻痺し、広島では新興住宅地で土石流が発生し「都市型土砂災害」と呼ばれました。1998年施行の被災者再建支援法の初適用事例（広島県全域）となりました。また広島での土砂災害を機に土砂災害警戒区域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律（土砂災害防止法）が制定されました。

この災害時、私は救助隊員として安佐北区亀山の土石流被災地で救助活動を行うよう指令を受けて出動しました。住宅地の一角にあった1軒の大きな母屋や納屋が土石流に巻き込まれ下敷きとなり家族が行方不明とのことで、1日中搜索活動を行いました。私の活動中に家族を見つけることはできませんでした。搜索活動中、家族であろう1人の女性がただ茫然と私達の活動を見守っている姿は印象的で、今でも忘れることはできません。その時は「今日は見つけれなかったけど、いつか他の隊員が見つけてくれるから!」「こんなにたくさんさんの土砂の中から、見つけるには大変だなー重機は手配してあるのかな?」など、同僚と会話したこと

を覚えています。慣れもあるのか、被災者の気持ちになった会話はしていません。その後、私はあの時の自分の気持ちがあまりにも被災者の気持ちとかけ離れていたことに気が付きました。

あの時の女性は、どんな気持ちであそこから私たちの一人一人の搜索活動を見ていたのか?今、現在はどうなのか?次第に私はその時の被災者の気持ち、さらに近くで私達の搜索活動を見詰める住民の気持ちを知りたくなりました。

私は、その地域の自主防災会長さんを紹介していただき、あの女性から「何か、当時の気持ちをお話したくなり、お手紙を頂くつもりじゃないか?」とお願いしました。

その会長さんも早速訪ねて行かれたそうですが、「何もありません。」とただ一言だったそうです。その後1年が過ぎ、地元自主防災会は、避難訓練を行い、災害現場で慰霊の催しを行う際、再び会長さんが「何かコメントを!」とお願いされました。その際一言だけ「早く逃げてください。」と言われたそうです。

地元自主防災会は、その後毎年避難訓練を行っておられますが、その後は一切訓練に参加せず、静かに過ごしておられるとのこと。そして、約19年経過した昨年、「わが町防災マップ」の作成支援で、再び当時の会長さんにお会いすることができ、「この地域でマップを作成するには、あの女性のコメントを載せることが、地域の皆さんへ大きな防災意識付けとなると思います。マップの裏面でいいからコメントを入れることはできませんか?」とまず

お願いしました。

会長は、あの女性に遭いに行かれ、そして、送っていただいた手紙は、20年前の体験談としてマップの裏に乗せることができました。

この地域でこれからずっと語り継がれていく、19年前の土砂災害に関する思いは、同じことが繰り返しているようにしか見えなideしよう。

犠牲者が「なぜゼロのならないか？」の答えを導き出す前に、今を生きる私達と将来再び災害を経験するであろう後世の諸君に対し、大きな影響力を持たせるため、あの女性の言葉をかみしめると同時に、これまで発行している「平成26年8月20日広島豪雨災害体験談集」「平成27年9月関東・東北豪雨災害体験談集」そして、土砂災害の前兆現象を調査した「緊急避難マップ」を繰り返し読んでいくことが重要と私は考えます。

今回の「平成30年7月豪雨災害体験談集」の発行が最後になることを切に希望し、発刊のご挨拶とさせていただきます。

【6・29 豪雨災害で家族が犠牲となられた女性の

手記の一部を掲載します】

この日は朝より大雨で、お母さんが朝からイライラしていたので、「私は大丈夫よ!」と言って2階に行き、窓をあけて見ると川が濁流となつて流れていました。上の橋を見ると、今にも越しそうな感じで、水が濁つて出ていたけど、水を田に落として、井手からあふれ出ていました。テレビを観ていると、何とも言えぬ「ゴォー」というような音がして、少しして台所に行くと、相変わらずお母さんはウロウロと出たり入ったりして合羽を着て、前にも大雨でひどい目に遭つたことの話聞かせてもらった。その時はこんなひどい目に合うとは夢にも思いませんでした。思い出すのもイヤです。地響きのような音がして、いつきに水が出て：：午後4時頃だったと思いますが、外は薄暗く、一気に水が出て、一気に家と倉が押し流されていました。

父さんは離れでテレビの水戸黄門様を見乍ら、お母さんも一緒に見ていました。それで2人と孫までも一度に逝つてしまいました。

私と娘は、外にいて助かりました。

こんな悲惨な土砂災害は二度と起こしてはならないと決意を新たにしました。

体験談集の刊行に寄せて

公益社団法人砂防学会会長・

広島大学大学院総合科学研究科教授

海堀 正博

まずはじめに、体験談をお寄せいただいたみなさまには心から感謝いたします。

被災された方々の体験談には、災害そのものやその悲惨さだけでなく、だからこそそれを未然に防ぐことの大切さ、家族や近隣の人同士、また、地域を超えた人々の協力による減災のための行動や取り組みの大切さなど、読む者の魂を揺さぶるような「氣」が含まれています。それまで災害を経験したことのない人に対しても、「災害」とはどういうものなのか、「災害」が起きるとどのようなになってしまうのかをはっきりと認識させる力を持っています。

災害が起きるたびに、二度とこのような悲惨なことにならないように、今後の平穏を祈りつつ将来を背負う若い世代や災害未経験者に伝えていきたいと思うのですが、「伝える」というのはそんなに簡単なことではありません。悲惨な経験をされた方々の声や言葉や表現にこそ、実際の災害を経験したことのない者の心を動かす力があるのだと思います。だからこそ、被災された方々には思い出したくもない体験だろうと思いつつも、申し訳ないがぜ

ひ語り部の一人になっていただいて、危険性のあるところに住んでいながら災害への備えを何もしておられない人たちや、災害が自分事ではなく他人事と思ひ込んでいる人たちに語りかけて欲しいのです。

「石碑」や「古文書」「古絵図」などと同様、「体験談集」も人々に伝える方法の一つです。「語り部」による直接的伝え方よりは力は小さいかもしれませんが、しかし、遠方の方々にも手にとって読んでいただくことでより多くの人たちに影響を与えられる可能性は高いと思います。

災害によって悲惨な状況に陥ってもそこから立ち上がり、将来に向けてまた歩み出されている被災者や被災地域の人々には逞しさを感じます。体験談を読んで人生観が変わるといような経験をされる方もいることでしょう。一生の中で遭遇するさまざまな艱難や苦しみを乗り越えるための勇気や励ましを感じられる方もいることでしょう。そこからまた強く生きる力を得られる方も多くいらっしゃるのではないかと思います。

体験談を寄せてくださったみなさま、また、体験談集に仕上げるまで中心となって多くの協力者に働きかけてくださった柳迫さんにも、衷心より感謝の意を表します。ありがとうございました。

「体験談集の聴き取りにあたって」

広島大学総合科学研究科 博士課程前期2年

湯 浅 梨 奈

人を思いやる方々は、災害に強い。これは平成30年に発生した7月豪雨災害の被災者への聴き取りをさせていただいた際に、私を感じたことでした。

昨秋、防災関係のイベントに参加した際に、初めて防災士ネットワーク代表の柳迫長三さんとお会いしました。そのときに、本体験談作成の件についてお声掛けいただきました。それから誠に微量ながら、体験談集めのための聴き取りに携わらせていただきました。

私は、この度の豪雨災害の体験談の聴き取りを通し、人生にとつてとても大切なことを学ばせていただきました。日々に感謝をすること。人を思いやること。一見関係のないことのように思えますが、これらは全て、防災の重要な基盤であると感じています。被災された方の中には、お友達からの避難の誘いの電話をきっかけに避難をされ、命が守られた方もいらっしゃいました。反対に、近所の方々を気遣って、一緒に避難の声かけをし、人の命を救った方々もおられました。このようなお話を聞かせていただいた時、「人を大切にすることが、意識的にも無意識的にも、命を守ることに繋がっている」と、強く思いました。

辛い経験をお話されることは、大変な苦痛をとまなうことです。

それにも関わらず、皆様は親切に、そして丁寧に、被災体験をお話してくださいました。中には、被災現場まで一緒に出向き、災害発生当時の様子などを詳細に説明して下さった方々、他にも被災されたご近所の方を紹介して下さった方々もいらっしゃいました。そして、皆様から、「ご苦労様」、「体験談集作り、がんばってね」など、大変心温まる応援のお言葉まで頂きました。辛い思いをされているのは被災された方々であるはずなのに、励まされたのは私の方でした。聴き取りが終わるたびに、言葉では言い表すことのできない気持ちになりました。

皆様への感謝と敬意を込めるとともに、この体験談集づくりを通し、被災者を生み出さないためのお手伝いさせていただきたいと思っています。

私事ではありますが、現在の大学院を修了した後は、2019年の春より地元の新聞記者としてお仕事するようになります。皆様方の貴重な声が、多くの人々の目や耳に触れ、少しでも防災のためになるよう貢献させていただきたいです。これからも地元の方々とともに、平和な街づくりを目指してこうと思います。

この度は、体験談集にご協力して下さった全ての方々に心より感謝申し上げます。

さいごに、このたびの平成30年7月豪雨災害の被害により、お亡くなりになった方のご冥福とご家族へお悔やみ申し上げますと共に、被災された方々が明るく元気に暮らせる生活が、1日でも早く戻ってくることを心からお祈りいたします。

平成 30 年 7 月豪雨災害体験談集寄稿者の位置



(C) Yhoo Japan,(C)ZENRIN

110km

(本地図は国土地理院から引用したものです)

①【広島市東区馬木】

馬木七丁目

島 中 浩 美

題目「災害のあと、お父さんが亡くなりました。」

(問) 7月6日の状況からお話し下さい。

家に居て雨が降っているのは知っていたが、全然外を見ていないので、外の様子は判らなかった。

娘が(午後) 7時か8時頃「馬木の方は大ごとになっている」と電話してきたので、びっくりして裏を開けてみると、水がいっぱい来ていた。下駄箱や靴がひっくり返って浮いていた。

庭にも水がいっぱいで、別宅にいる婿を呼んで、ここからおんぶしてもらって娘の家に行った。一晚 娘の家に泊って、朝になって救急車を呼んでお父さんを病院へ連れて行った。

娘の家は、坂道を下ってまっすぐな位置にあるので上から流れて来た水は娘の所へ行くのかと思ったら、娘の家の手前で曲がりうちの方へ来たから我家が大変なことになった。

娘の家は、床下浸水で、車は2台ともだめになったが、水は全部私の家の庭に溜まっていた。

病院から帰ってみると庭先のブロック塀が壊れていたのでビックリした。家の中は床上浸水でカーペットがぐちゃぐちゃになっていた。土曜日と日曜日にボランティアの方に来てもらって片付

けた。

その他は、近所の方に土を出してもらいました。

お父さんは、2週間ほど市民病院へ入院し、その後舟入病院へ1週間ほどいました。途中「もう駄目だろう。」とは覚悟していた。家に帰っていたら、夜中2時ごろ舟入病院から電話がかかって来て、病院へ駆けつけたが3時過ぎに亡くなりました。

私は間に合いませんでした。

毎日 もうだめかも?と思っていたのであきらめがついた。

医師から「胃がんの手術をして、腸や肝臓・十二指腸まで全部出しました。」と言われたが、本人はそれまでは元気でゴルフやゲートボールをし、いっぱい食べたり遊んだりしていた。それで、早く進んだんだと思う。

私は、被災後、まず「寝る所を作らないといけん」と思って、家の修理を急いでもらいました。

娘の家から修理をするのを見ていました。

(問) 避難はしましたか?

避難はしなかった。病人を連れて避難所へ行くのは大変なので、どこにも行く気持ちにはなれなかった。

私は本家(セブンイレブン)に泊まった際、「避難をしてください」という行政からの情報はありませんでした。とにかくお父さんのことが気になっていましたので。

(問) 隣近所の協力体制はどうでしたか?

地域の方は、「上の方がひどい」と言って、私のうちの後片づけに一人も来て下さらなかった。

しかし、周りの3軒だけは来てくれて、裏の泥を出してくれた。沢山の量の土があるので、「多すぎて、どうにもならん。」と言っておられた。私は、住めるところはあるので、後回しにされたと思っている。

それを聞いた娘が「市に言ったら何とかしてくれるのでは？」と言ったので、市に連絡するとすぐに来てくれた。

あれから3日ぐらいできれいになった。ダンプや重機がたくさん来てくれた。

(問)以前にもこのような災害はあったのか

お父さんが言っていたが、昔、大谷で災害があったようなことは聞いている。が詳しいことは判らない。ちょうど60年前の話です。

(問)教訓は

この水路は狭いので、雨が降ったら、急に増水する。大きな水路にして欲しい。

(問)地域の協力体制は

私は、嫁に来た身なのでよくわからないが、上の方には新しく入ってきた人ばかりです。

この8班の方は、私の家のあと片付けにだれも来てくれなかったが、下の班は仲良くしておられる様子です。

(平成30年9月21日 柳迫 聴き取り)

馬木七丁目

ペンネーム：TaMeRiKi

題目「勇気を持って避難」

7月6日(金) その日も朝から雨が降り続き、携帯のアラームが鳴り響いていました。

いつも通り会社へ行き、仕事をしていましたが、あまりの大雨、警報が発令されて会社の会長から「早く帰宅するように！」と連絡を受け、15時30分に帰宅した。

その後は、テレビ・携帯で土砂災害警戒情報を常に確認しながら、自らも外の様子を何度も見て確認し、「大丈夫かな？」と思いつつ、「この地域は大丈夫だ。」と思っていました。

19時すぎ、テレビで「朝にかけて記録的大雨が降る恐れがある」という情報を聞き、窓の外を確認すると、段差プレートが流れるくらい家の前の道路が冠水しはじめていました。

それでもまだ、自分は「大丈夫！」と思っていましたが、嫁さんの「すぐ避難するよ！」の一言で、急いで避難準備をはじめ、19時35分過ぎに、隣の父と自分の家族4人で間一髪、小学校の体育館に避難することができました。

(母は妹の家に居たので後日、合流できました。)

避難した時は、ほとんど人がいなかったのですが、時間が経つにつれて体育館いっぱいになり人があふれ、「これはただ事ではない。」と感じました。

その日の夜は、ほとんど寝れず朝を迎えました。翌朝5時30分頃、父と自宅に戻ったのですが、自宅周辺が濁流で近づく事が出来ず、向いの家の駐車場屋根からベランダに入らせてもらい自宅を見ると、家の前に駐車していた車のフロントガラスまで濁流が流れていました。それを見て唖然としました。

それから、3日間ほど体育館、弟家族の家、施設で避難生活をさせてもらい、4日目からは、自宅に戻り床上浸水していたので、2階での生活を約1ヶ月、その約1ヶ月間で会社の先輩、後輩、近所の方々、ボランティアの人達に助けられ、土砂を取り除き、何とか普通の生活ができるようになりました。

この西日本豪雨で被災して思ったことは、「自分で大丈夫だ！」と勝手に判断せず、テレビ・携帯などの情報を参考にしながら、的確に判断し早めに安全な場所に避難することが、家族と自分の命を守ることだ。と改めて感じました。

そして、「避難をする勇気が必要だ！」と感じました。
今、家族と一緒に生活できていることに感謝します。



自宅周辺の様子



馬木七丁目

ペンネーム…りぼん

題目「自分なりの危機管理」

7月6日 金曜日の朝 いつものように仕事に行き、その日は職場で早めの帰宅を促され、帰宅途中の車の中 携帯のアラームの音を聞きながら帰宅しました。

職場の温品の方が「車で避難します。」とか、深川の方が「道が冠水している。」とか、メールをもらいながら、自分の住んでいる「馬木は川があっても、家から離れているので、大丈夫。いつもの感じ」と、樂觀していました。

電話があつたその後、ふとベランダに出た。

家の上の方から水が流れている。あの光景を見た時に、「大変なことになっている。」という認識になりました。

私達の避難は、遅かつたのではないかと思います。

テレビのイメージでいうと、こういう時は「誰か助けに来てくれる。」とっていました。

そうではなく、「自分の命は自分で守る」そのためには、避難勧告・指示等を敏感に感じなくてはいけないことと近所の方との連携です。

今後はご近所の方と相談し助け合って、避難する際は消防に連絡して、一諸に避難所まで行くことにします。

今まで災害に対して、「広島は大丈夫！」とか、ひとことのよ

うに考えていた自分がいたことを、とても反省しています。

これからは、自分自身でできる最低限度の備えと命を守る行動を取りたいです。

今回の災害の出来事を、これから生きて行くための、「人生の教訓」として心に刻みたいと思います。

馬木八丁目

ペンネーム…ピンちゃん

題目「初めての土石流災害に遭遇に思う」

我が家は、大谷川河川から少しだけ離れているため、異常な大雨の音により近所で異常な事態が起きていることに全然気づかず、ただ私は余りの降りように 家の前の道路（森林公園への道）の確認に外に出た所

19..00 外に出て前の道路を確認

※山道からの濁流が道路を川状態（一時道路に20cm位の水深）に濁流と化し、不安となり慌てて馬木交番に「如何すればいいか？」と電話する。

19..07 馬木交番は留守。

※留守（警戒のために巡回中とのメッセージ）

19..12 一一九番通報（女性が対応）

※「今各地で大変な状況なので大きな被害か怪我をされた方が

おられれば、再度連絡を下さい」との返事。

県内で大きな災害が発生しているのを実感した。

19
20 川 川 の 状 況 を 確 認

※橋（釜の上橋）の欄干から5mぐらいの高さまで流木が折り重なって積みあがっていた。

※下の家の表と通用門から水が流れており、川には近寄れず

※何か一種異様なガソリンの様な揮発性の匂いと土の匂いが鼻を突いた。

※巡回中の警察官が近づき、この匂いは土砂災害の起きる際に出るから早急に避難するよう勧告された。

※我家は大丈夫だと感じたが、後期高齢者で何かあったら人に迷惑が！と思い。

19
30 避 難 隣 へ 電 話 し 安 否 確 認 と 下 の 家 の 状 況 を 確 認 す る 。

すでに隣の家は避難されていた。

19
34 長 男 （ 府 中 ） 宅 に 避 難 さ せ て く れ る よ う に 依 頼 。

19
37 知 人 ・ 関 係 先 等 に 電 話 連 絡

19
58 下 隣 家 か ら の 連 絡 。 福 木 小 学 校 へ 隣 と 一 緒 に 避 難 す る と

確 認

20
19 長 男 に 電 話 （ 府 中 の 駐 車 場 に 迎 え 頼 む ）

20
38 次 男 か ら 安 否 の 確 認 の た め 電 話 あ り

2018年7月8日

09
00 避 難 所 か ら 家 を 様 子 見 に 車 で 帰 る 道 中 、 上 温 品 付 近 で 渋

滞1時間以上費やした。

近所を見て回ったが、水が溢れており下の家や川向うの家は近寄ることもできない状況だ。

残念ながら上の1名が犠牲（男性）とられた。

馬木でこの様な災害が発生するとは、想像したこともなかった。今回は異常な大雨と、山の伐採した木の放置・砂防ダムの点検がおざなりに放置されたことが、大きな土石流災害の原因と考察している。すなわち人災と感じている。

激熱の日々の救援・復旧活動（警察・消防・ボランティア）が、土砂流木の撤去運搬に携わって頂き、又業者の多くの人々に頭の下がる思いです。

何も出来ない自分に改めて気付かされ、自然の力の恐怖を実感した。

発生から2か月が経過したが、被害を受けられた方達に未だに申し訳ない様な複雑な気持ちが続いている。1日も早く河川改修がなされて、隣近所の方達の生活が災害以前の様に戻り消えていく明かりが灯ることを祈ります。

馬木八丁目

ペンネーム…馬木八丁目の住人

題目「平成30年7月の豪雨災害の記憶」

我が家に隣接する川「大谷川」が流れている。

この山は深く安芸区瀬野に繋がり、大規模な渇水状況でも水は枯れることなく、周辺の農作地に水を供給し、上流には自然豊かな未整備のキャンプ場があり、地域の人達の憩いの場所でもあった。

7月6日災害発生当日は、1週間程前より断続的に降り続いていた雨、その降り方は昭和47年の県北一帯を襲った豪雨災害を思い起こさせるような激しい振り方だった。

日頃の大雨時でも、川の石が濁流に流され「ゴロゴロ」と音を立てる時もあるので、さほど気にはしていなかったが、この日は13時頃から普段聞くことのない音と微動な振動を感じてはいたので、気にしながら用心はしていた。

18時頃、食事をしながらテレビで野球観戦をしていた。すると突然大きな「ドドン」という音と振動を感じ、窓から川を見ると濁流と流木が上流から物凄い勢いで押し寄せて来る。

日頃の川の様相は一変し、護岸は完全に崩壊、水位も両護岸の堤防を破堤寸前まで押し寄せくるのを見て、咄嗟に危険と感じ、食卓の物もそのままにし、何も持たずお隣に声をかけ、お年寄りと奥さんを車に乗せて、避難所に出発しようと坂道を下るが、後

ろから濁流が押し寄せてくる。

何とか避難所に着くと、そこには既に20人ほどの方が避難していた。

時間が経つにつれ多くの方で、狭い避難所は人であふれていた。

翌朝、雨も小康状態になり、一旦帰宅、住まいは無事であったが、周辺の状況は昨夜以上に一変、見る影もない状況であった。護岸は大きく崩壊し、田畑には流木や巨岩がゴロゴロ、森林公園入口の橋が落下し庭先まで流れ着き、少し下流の何軒かは土石流が流れ込み、家財に大きな損害を受け、生命も奪われるという大惨事となった。

これまで、このような災害は想定もしていなかったが、現在では世界的・国内の状況を見ても、予想もしない災害が発生している事を認識し今後の教訓としたい。

この度の災害で、尊い命を奪われた方々のご冥福をお祈りいたします。





題目「平成30年7月豪雨災害」

馬木八丁目
ペンネーム…ayutomo

7月6日夕方激しい雨が降っていた。わが家の近くには大谷川が流れている。

家の横の車道は、濁流で川の様になっていて危険を感じた。

午後8時頃近所の方が「避難するよ」と声を掛けて下さり、豪雨の中、車で避難場所の福木小学校へ行った。体育館の中には入らなかったが、車内で少し雨の様子を見ていた。

小降りになったので帰宅し、1階では不安なので2階で過ごした。

翌日、川の側の人に話を聞くと「土石流で岩がぶつかる音や濁流が凄くて怖かった」と言われていました。

後日 川の様子を見に行くと、上流から流木と土石で森林公園入り口の橋も両岸の樹木も流されていた。

大谷川は小川だったので、災害後は土砂と岩が流されて川幅も広がり川底までは5m位掘り下がっていた。

わが家に被害はなかったのですが、下の方では大変な被害に遭われた方々がおられ、自然災害の怖さを今回初めて身近で経験しました。





②【広島市東区戸坂】

戸坂出江二丁目

ペンネーム…空のうえ

題目「災害を通じて感じたこと」

「今日はよく降りますネ。」「ほんまじゃね」

夕方から降る雨は、徐々に激しさを増し、窓から外を見ると道が川のようになりつつある。携帯からは大雨警報のベルが鳴り止まず、テレビでは「命を守る行動を」と何度も繰り返し返された。そんなこと言われても・・・どうすればいいんじやろう・・・と窓を眺めていた。

その雨音は段々と夜にむけて さらに激しくなっていく。寝ていても、屋根をたたく雨音は 今までに聞いたことのないくらいの音だった。

天井から雨漏りしそうなほどに。

翌朝、少し雨音は小さくなり、黒い雲はどこかに行っていた。

テレビを付けてみると、目を疑う光景が。広島が、えっ

一晩にして土砂に埋まっていた。通ったことのある道が、道路が、街並みが。

翌日から友達や出会う人に、道が濁流と化して流れる動画や床下浸水や車の浸水や家の前まで土砂が流れてきたと。

ドアを開けたら、家のすぐ前まで・・・土砂とガレキが押し寄せ

ていたと。

交通網は、遮断され コンビニにはお茶やお弁当がなく スーパーには 豆腐 牛乳 野菜がなくなっていた。あるのは、カップラーメンとジュース類。長靴を履いた人が、水、ガスコンロ、ガスのカセットコンロ、飲み物、食料を大量に買い込んでいく姿を目にした。

その日から、いたるところで断水が放送され始めた。

水道から水が出ない。

土砂災害・水害の襲った地域、離島は、ほぼ上下水道が使えなくなり、ほぼ1カ月近い断水が続いた。

水が出ないと、トイレが使えない。料理が作れない。食器があらえない。となると、なるべくトイレに行かないようにしてしまい、野菜を取ることが少なくなり、水分量が減り、便秘をひきおこす。以前和式トイレで1日に6、10リットル近い水がいり、洋式トイレではバケツ1杯の水と水を流すコツがある。

こんなにも、トイレに水があるとは！

街の中に住んでいると、何でも買い出しで飲料水や水を使用することになる。

離島や古民家などの井戸のある家はないと思った。

毎日テレビから流れる土砂災害の映像と現実に見る。

芸備線沿いの橋の崩落の景色 それを目にすると その夜から夜に寝ると不安になることを知った。(トラウマというのは、こ

ういうことなんだ」

様々な状況を目にして、人は逆に、いても立ってもいられなくなる

自分の地域が、かろうじて災害を受けなかったも、何もせずに
いられない。自分にも何かできることは、と思うのである。

今までは、どこか他人事だった災害が、まじかで目の当たりに
すると、こうまでも違うものだ。

知り合いや近くの災害場所のお手伝いに行く。

ボランティアで行っているつもりなのだが、逆にボランティア
センターの人や災害に遭った人が気を使って親切にしてくださる
のだ。人と人のつながりを感じる何とも心地よいという、いけ
ないのかもしれないが、交流の場になっていたのである。

少しづつ、お互いの距離が近づく事になり、災害に遭われた方
がポツリポツリと語り始めた。

「断捨離しよう思うとったからね」「でも何もなくなっても
うた。」「田んぼは一反あったのに」「何年かかるだろうか？また
米作れるかのう？」「トラクターも全部流れてしまった。」「断捨
離しよう思ったサ」「3軒隣は、亡くなって流されたんよ」

そこに、近所の人に来て、また話し始めた。

「家に帰って お風呂に入って 出かけるのに車に乗った瞬間
山のほうからドーンという大きな音がしてきた。

ふと見ると、隣の家が移動している。すーと滑るように移動

した家は、段差のあるところでカタツと傾き止まった。と思った
瞬間、ドーン、ドーンと大きな音とともに土砂が家をのみこんだ。
「あつ」と、そのあと大きなドガンと、いう音がしたと思っ
たら、今度は大きな岩がゴロリ ゴロリとその家をめがけて押し
寄せて来た。それを見て避難した。」と話された。

この1か月半の間に、色々な方の体験を耳にした。それで私が
感じた事は

☆家に井戸があること。台所、風呂、トイレへと必ずつなげておく。
☆昔ながらの生活を体験しておく事。キャンプや薪でご飯を炊く
事。（子どもの時しっかりと！）薪でお風呂が沸かせること。
外で田畑を作ること。（食料を自分の力で確保できること。又
は作ること。）

☆トイレができること。（サバイバル生活をできるように。）

☆自分のカンを信じる事

恐怖を感じたら、すぐに避難すること。

☆山裾に家を建てないこと、地形や水脈の通る道を知っておくこ
と土砂の流れる道は、大体に決まっているので、自分の地域の
安全性やどこに避難するべきかシュミレーションをしておく。

☆石碑を読む、その地域の資料や歴史を見ておく。過去の災害を
知ること。

☆災害に直面した時、仲間を作る。

通れる道を聞いたり、安全な場所、スーパ－の場所

人を通して情報を得る。

一人ではなく、近くに同じように被災した人と話して仲間になる。

恐怖心がとれ、気持ちを落ち着かせて、次の行動を冷静に取れるように!!

以前災害は、いつどこで起こるかわからない。

しかし、起こった時に、まずは何が必要であるか?を冷静に考えて行動する。

または、観察力がいると思う、そして、人ごとではなく、その災害の状況を自分の目で見て、体験しておくことが、生き残るコツではないだろうか。

その体験談に、耳を傾けること。

ともに、協力し復興する現場に足を運ぶことも今から必要な気がする。

自分自身の目で見ておく事が・・



平成 30 年 7 月 7 日 広島市安芸区矢野 7 丁目 土石流の発生場所

③【広島市南区楠那】

楠那町

ペンネーム…K・H

題目「西日本豪雨を振り返って」

子どもたちと避難して気づいたこと

7月6日 あまりにもひどい雨に恐怖が起こった。

14時 避難準備情報が出る、子どもの施設のリーダーである私はすぐ避難の準備を周知する。

自分は避難所に連絡する。公民館と小学校だ。そして保護者全員に迎えの依頼のメールをする。

寝ている子どもたち、この間にできるだけ持ち物をそろえ、落ち着いて起こして移動できるように！と思った。ゆっくり落ち着いて…急いで焦ってしまうと、大人も子どももパニックになる。

1人1人が有効な判断ができるように、みんなの力で、安心安全な避難ができるよう、防災研修で伺った学びを活かしていこうと腹をくくる。

全員に周知した後、準備のできたクラスから避難する。

避難しやすいよう玄関を大きく開き、外に乳母車を置きブルーシートを広げる。裸足で歩けるよう未満児が動きやすいようにし

ておく。

ロビーで3歳未満児はゆっくり靴を履く。3歳以上児は、くつやカバンを待って避難する。

シューズのままで動くのが良かった。持ち物は無理のないように、玄関で減らして階段を上がる。

おやつの時間と重なるので、無理のないよう調理に持って行ってもらおう。このとききれいなシート、雑巾、台拭きが必要になった。その後、遊ぶための絵本、おもちゃも必要になった。

職員が、思いつくと「〇〇取ってきます。」と取りに行ける距離に、避難していたため助かった。

それぞれの場所で、待機できる人がいると連絡がつきやすいと感じた。また、小学校に避難する場合、その近くに川もある程度の下見が自転車等でできたらよかったと後で思った。

避難情報が、15時30分、避難勧告になり小学校へ避難を準備する。早めの保護者へのメールをして避難したので30分余りで多くの保護者が迎えに来てくれていて、あと3歳未満の子が6名、3歳以上の子が3名になっていた。公民館にお礼を伝え、小学校へ連絡する。

作っていたカップを使用し、16時、落ち着いて避難をする。

待っていくものは、これでいいか？忘れ物はない？と職員同士で声をかけあい、シートとオモチャと、水と、お菓子も持ち、ゆつくりと小学校へ向かう。

大きい子は、きちんとカップを着て濡れることはなかったが、小さい子はいやがる子がいた。

乳母車用のシートをかけると体をくるむことができ濡れなかったと、後で職員から聞いた。

小学校に着いて、シートを敷いて場所を確保し子どもたちが落ち着けるようにする。

この時、つい立てに代わるものなどあれば、小さい子が小さい空間を確保し落ち着くことができたのでは、と後から思う。しばらくすると広い体育館を走ろうとする子もいた。

体育館は暑く水分補給が必要と感じた。皆で水分補給をして少し落ち着く。これからの動きを話し合い、帰られる職員は帰ってもらう。職場に1人待機し外部からの連絡を待つようにする。

17時30分保護者が来て、全員無事に帰宅する。ちょうどそのころ、土砂崩れがあったと話を聞く。保護者に家の方は大丈夫か？と確認をして帰ってもらう。

その後報告をして帰る準備をするが、玄関の前のグレーチング

から水があふれ浸水するのでは、と危ぶまれたので土嚢を作り置く。役に立たないような気もしたが気は心というつもりだった。

その後、施設の休園が続き、毎日連絡報告が続くなか、職員や子どもや保護者の安否確認をしていくことは人数が少ない中、大変であった。後で避難指示の間は施設には入れないこと。避難勧告になったら、入ってもいいこと等を知る。こういう知識がわかってないことで動きに、戸惑いが起こり、準備がおろそかになるということも後でわかった。

人は見通しがないと不安になり、精神的に苦痛になりイライラしてきて正常の判断ができなくなるように思う。

暗闇の中 少しでも希望が持てると気持ち明るくなる。集まれるとき集まれる場所に集まり、なるべく多くの人が、交替で責任を持ちながら対応できるようにリーダーは事前に考えていかなくてはいけないのだ。と強く感じた。

楠那町

ペンネーム…Y・H

題目「西日本豪雨に寄せて」

7月6日夕方、東区から帰宅。南区楠那に帰るまで4時間あまりかかり、10時に家着いた。道がとても混んでいた。水がすごい溢れている、どうか流れないで・・・そんな思いだった。

家の前は冠水していた。土砂が下まで流れて、流木もあった。門柱は壊れ、家にかかるコンクリートの階段も土砂で見えなくなった。電柱も倒れていた。2ヶ月前につけたテラスの手すりも全て壊れていた。

消防団が来てくれた。長い期間兄の家に避難した。家の下は冠水で駐車場にも車が入られない。とてもショックだった。哑然とした。言葉がなかった。

平成3年から2回目。またかという気持ちだった。当待子供は小学1年生と小学校5年生、夜中に2階に寝ている時に嫌な音や土砂の臭いがした。兄に電話して助けにきてもらった。その時は土砂がくずれて、木がずれて家からロープを待って下に降りた。怖い思いをした、その当時がよみがえった。

7月7日横の溝にロープを渡して、ロープを持って上がり、要るものを取りに行った。

1か月余り夫の兄のところに住まわせてもらい、7月24日には土砂を撤去してもらい、やっと8月に入って電柱が元にもどり、電気が通った。エコキュートもやっとついて我が家に戻れた。妹や弟が遠くから来てくれて、要らないものを出す手伝いをしてくれた。交通手段がなくて手助けに来られなかったそうだ。

災害を振り返ってみて困ったのは、工事はどこから来てくれているのか、県から頼まれているのか、市から頼まれてきているのかわからないことだった。アパートの方が頼んでいるのか、どこかの依頼で誰が頼んで、どういう工事が進んでいるのか皆目検討がつかなかった。

情報が入らない、手続きも分からない、とにかく罹災証明だけはもうように勧められ取った。

「半壊」という状態で認定された。

避難所に避難しているといういろいろ情報がもらえるが、個々になると情報が入らないことが残念だった。一番困っている時に情報が入らず、見通しがなく不安が大きかった。こういう時こそ、見通しのつく支援対策が欲しいと思った。

④【広島市南区北大河町】

北大河町

ペンネーム…結美子

題目「貴重な体験」

7月6日 呉に用事があり、出かけて行きました。

夕方6時すぎに帰路に着きました。あまりの大降りなので、天応から高速に載って帰ろうと思ったのですが、乗りそびれてしまいました。でも「広島からの車は呉に向けて帰ってるよね、まあ大丈夫だろう」と進んでいたのですが、だんだん停まっている方の時間が長くなり、ついには進まなくなりました。

道路には土砂が増え、反対車線の車が少しスピードを出して泥水をバシャーと浴びせられ、「スピードを緩めて走ってくればいいのに！自分勝手な人」と腹を立てたりしていましたが、だんだん不安が大きくなってきました。

水尻駅に着くと水かさもどんどん増えてきて、このまま水の中へ居て大丈夫??? 駅に上がる坂がある。そこに上がるとエンジンは無事かも? と思って進んだのですが、大木が横たわっている上がれない!! どうしよう?? 窓をあけて隣に停まっているトラックの運転手さんに声を掛け、「前に進めますか?」と聞くと「ダメダメ。水嵩は増えるばかりじゃけー、エンジンが動いているんじゃないけー、引き帰しんさい。」と言われ、慌てて向きを変えて

引き返しました。

呉の友達に「今日泊めてくれる?」と電話しながら、引き返している、また、車の流れが悪くなり、よくよく見ると道路の真ん中に大木が横たわる。土砂が・・呉にも帰れない。どうしよう??? 。

シモハナ物流の駐車場が横に、そこに避難しよう。車を停めて、ほっと一息。あートイレに行きたい。今度はトイレ探し。女の子と一緒の若いママ。ちょっと聞いてみた。「建物の横にトイレがありますよ。使ってもいいって事務員さんが・」 「ありがとう」と慌ててトイレへ。建物の入り口で事務員さんが、「トイレは奥です。使ってください。」と優しい声で案内してくれました。嬉しかったです。

トイレから帰ると私の車の前に泊めていた車の人が仁王立ちで「どこに行つとったんなー」と大きな声で「すいません。トイレに」「邪魔になるじゃがー、常識がないのう」と、どなられました。「早よう 車、動かせやー」と言われ、大急ぎで車を移動させました。その方はどこに行かれたのか?

その日は車中泊。夜が明けて周りが見えぬ光景に声も出ない程でした。

崩れた土砂の上にライトの付いたままの乗用車が、見るも無残な光景でした。

昨日トイレを聞いたお母さんと子供たち、そこに心配して自転

車で駆け付けたお父さんが来ていて、お話をしていました。そこにシモハナの事務員さんが、「さっき軽自動車が4、5台水を渡って、広島へ帰ったそうですよ」と状況を伝えるに来てくれました。ほんとに帰れるのかな？

「じゃー私が先に先陣をきって行ってみるね」と水尻駅へと・・・そこへ消防士さんが居て「その車で行くと、壊れるよ。途中で動かんようになるからやめとき」と言われ断念。

元のところへ戻っていると、避難所があるからと聞き、お友達になったお母さんに電話して避難所を伝えなければ、「子供がじつとしていないから夕方行きます。」私1人で避難所へ。

ところが夕方、そのお母さんから電話で「渡れたよ！」その一言で「私も帰る」と、避難所を出て、まだ水のある道を渡って帰りました。

その日の夜、水尻ですごい土砂崩れ。あーあの時頑張って帰ってきてよかった。

この水害で人の温かさ、親切さ、気配りの良さと瞬時の判断が人の明暗を決めるのだと思います。貴重な経験に感謝です。

⑤【広島市南区似島町】

似島町字家下

ペンネーム…くまのブーさん

題目「1876豪雨」

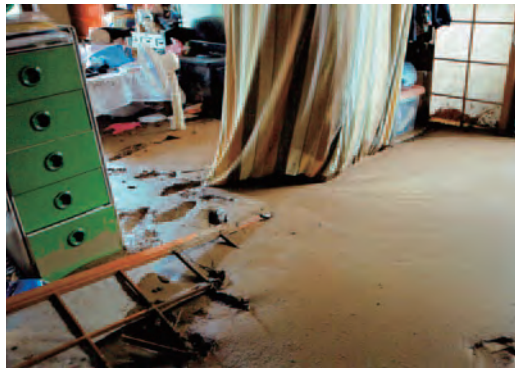
雨が降ってきて、「高齢者避難開始」とサイレンが鳴ったので、母と一緒に避難場所へ行き、その時はまだ大丈夫だったので、一度家に戻り避難しようと外に出たら濁流により歩くことが難しくかった。

家に戻り、足を洗って台所に行ったら窓ガラスが割れて家の中に土砂が入ってきました。

電気が消えたので2階に上がり窓から外を見ると、外灯、周りの家には電気がついていて、家の前と道路にたくさん水が流れているのが見えた。朝方不安なので、消防士さんに迎えに来てもらい一緒に出ました。

出してみると、がれきや土砂で水路が詰まり、山のようになっていて水路から水が流れるのではなく、家の前を水が流れていて、道路に流れている状態だったのでびっくりしました。

家に帰ってみると、水路を挟んだもう一軒の家が沢山の土砂や泥が入っていて愕然としました。電気は漏電・水道は漏水・ガスは無かったので近所宅に約1ヶ月お世話になり、今は修理をしてもらいながら家に住んでいます。



※砂防ダムが壊れています。まだまだ大きな岩、大きな木、土砂が沢山あり、雨が降ったり、台風が来ると不安です。水路を掃除しても掃除して詰まってしまう状態です。どうしたらよいか、途方に暮れています。どうしたらよいでしょうか？

似島町家下

岡本 真由美

題目「腰まで埋まって消防署に助けてもらった。」

(問) 7月6日の様子からお聞かせください。

7月6日夕方主人と「よう降るネー」と話していた。

夕方5時ごろ消防署の「避難しなさい。」というサイレンが鳴った。その時は別に何とも思わなかった。外も見に行かなかった。

6時ごろ、夕食を食べ始めた。そしたら隣の息子が「消防が避難した方がいいよ!」と言って来た。と伝えに来た。そうして玄関を開けたら土の臭いがしていた。「土臭いねー」言うたら、お父さんが懐中電灯を持って来て外を照らしながら「どこがー どこがー」と探していた。土臭い青臭い匂いがプーンとしていた。お父さんが「こりゃーだめだ。ずるでー落ちるデー」と言って叫んでいた。小松の息子が「おっちゃんずるどー」と言ったら、「ドーン」と音がした。

7時30分頃 父さんはずっと後、「道路の水はけや道を造らないと泥水が家に入るから」と言って一生懸命作業していた。お父さんは「大丈夫だから家に居れ」と言っていたが、隣の息子が「周りの人はみんな避難しているデー」と言うて来たので、回りの人は誰もおらんことが判った。「みんなが出たのにうちだけ避難しないのは悪い。私1人だから・・」とちょっと心配になって犬を連れて、みんなから10分ぐらい遅れて外へ出た。すると、ここで

(自宅横の通路を指さす) ドボンとハマった。

お父さんは、「そのまま家に居たらどういう事なかったのにーわしの言うことを聞かんケーじゃ」言うている。いきなり、腰まで埋まってしまった。「腰までならまだ行かれる」と思って下がったら、だんだん深くなって、周りは木やら泥やらで胸の辺りまでになった。

それでその隣の磯村さんに「松ちゃん 松ちゃん」言うて叫んだ。しかし。誰も助けに来てくれなかった。家の外にあった洗濯機は遠くに流されていたのが見えた。これを見て自身が大変な状況であることに気が付いた。下着まで全部泥に浸かっていた。唯一携帯があつたのに気が付いた。すぐ友達に電話して「今、コーコー(今の状況を説明)で埋まっとるんよ」と言った。そしたら「埋まっとる?何がー」「うちが埋まっとるんよ。磯村さんとの横じゃケー。消防に言うてー」と言ったら、その人も現在、消防に「避難しとる」と言った。そして消防士に伝えてくれて、消防士が1人だけ、石橋の方から来てくれて、真ん中の方まで来たら「動かんとしてよ。動かんとしてよ。」というて、普段から顔を知っている消防の人が来てくれた。犬を離すと、体半分浮いている。消防の人が、「動いてはいけんよ。力を抜いてー」と言っ

て肩の所を抱えて、「いち にの さん」と引っ張ったら足が浮いた。土の上に持ち上げられ、そばの畑に移動した。「こうゆう時は下に下ったらいけん。犬だけ抱いといてー」と言っ

の人と一緒に上に登って、避難所に行った。避難所へ行くとみんなにあいさつして、消防の外のところに水道があるから、そこで犬と自分を洗った。着替えがないし、困ったなーと思っていたら、違うおばさんが下着の替えを上下持っていたから、「よかったらこれを着るー」いうて、貸してもらいました。1晩そこに居りました。

その時はパニックになつとるから、子供に連絡はしていない。携帯はだめになった。その時、娘が心配して家に電話してもお父さんは出ない。公民館に電話してもわからん。言うて、私の友達の所に娘が電話して、「コーコーしてお父さんとお母さんと連絡が取れん。」と心配していた。そして、友達の携帯に「お母さんがそこに居らんか？」と連絡が入り、「おるよー」と言うことで、娘に電話した。

息子には、連絡船「こふじ」の人に「携帯電話がだめで連絡がつかん」と伝えてもらった。

避難所へ入ったとき、住所や名前を書かないといけんのを、私は濡れているし、犬もいるし、勝手に図書室の方に入って行つたから、息子や息子の友達が私を探しても見つけれず、お父さんもどこにいるか見つけれず、困っていたらしい。

そうしている内に、コミュニティの若い衆が私を見つけて「おばちゃん、ここにおるんじゃー、おばちゃん探しよるんじゃー」言うて、息子に連絡してくれた。

お父さんは、「家で待つとるかわからんよ。」と言うていたら、消防の方が夜11時半ごろ見に行ってくれて、「お父さん居ったよ。大丈夫よ。」と言ってくれた。家はどうも無かった。そして、朝消防の人と一緒に家まで帰った。

いうことで一晩ずーと横にもならず、友達も股関節の手術をして具合が悪いのに一緒に居てくれた。そして帰って着替えして、現場を見に行くとももの凄いことになっていた。

昨夜、雨が降って、あのままそこにいたら生き埋めになっていた。唯一携帯が助けてくれた。携帯がなかったら朝までおらんといけんかった。お父さんが覗きに来るかもしれんけど、ここが通り道だから人が通るかもしれんけど・・。ずーと1人でおらんといけんかった。

朝には、私が埋まった道はきれいになっていた。その時はパニックになっているから何にも思わなかったけど、だんだん気になり出した。今は山になった泥を見ると怖い。それから、みっともない。皆は早く知って避難していたので「すいません。すいません」言うて「あんたは浸かったんじゃーいうて」と言われるたびに頭を下げていた。しかも避難所では、図書室の隅の方にいたため見つてもらえず心配をかけた。島中の恥さらしになった。

お父さんは、ずっと後から水路を2つ造って、水が全部流れるようにした。やっぱりお父さんのいう事を聞けばよかったかな。と思っている。2階もどうもなっていないのに・・と思う。

(問) この辺の方はどの時点で避難しましたか？

6時頃。消防の人が家の所まで来て、「避難して下さい」と言っていた。しかし、私は「お父さんがこのぐらいいなら大丈夫だ」と言っていたので避難しなかった。

息子たちは県外に住んでいるから「何かあったんではないか？」と心配してくれた。お父さんは「アーゆう時は早う子供に連絡するもんよー」言うて怒られた。その時はそんなことは全然思いつかなかった。その時は「パニックとふうが悪いのどー。」

この道は暗い。どぼーっと浸かって、そのまま下っていったから余計にひどいことになった。次第に足が浮いた状態になって動かれんようになった。そして足を抜こうとしても抜かれんから、手で抜こうとしたが無理で、片足を地面に着かせようとしたら次第に沈んでいった。

後から考えるに、あの時自分がどうにかしようともがいたら、だんだん沈んでいって圧迫死をするということが解った。

そして、携帯も1回だけ繋がり、あとはだめになった。あの1回が命拾い。携帯があったから良かったねーと言われ、携帯はナイロン袋に入れて置くのがいい。とも言われた。

あの時は沢山学びました。人の言うことを聞くこと、人に連いて行くこと。消防の人が「避難をしないで。」と言って来たら、みんなと一緒に行動する。そして、避難場所入口に受付表があれば名前や住所を必ず書いて入る。それを勝手に入ると、みんなか

ら探されるようになる。名前もないし、家に連絡しても連絡が付かんし、携帯しても連絡が付かんし、だれでも心配するよね。今は笑いごと。あの時は本当に感じた。

埋まっている時は、足を抜こうとしても足が痛い。砂が長靴に入ってじゃりじゃり痛い言うもんじゃーない。犬は怖らすと次から困るから「お利口さんしとるんよ。お利口さんしとるんよ」と言うて大変だった。しかし犬がおらんかったら、パニックになっていたと思う。

(問) 今回の災害でどんなことをみんなに伝えたいか？

1人で動いたらいけん。一人では絶対ダメ。誰かと一緒に行動しないといけん。単独行動が一番悪い。

日頃は地域の様子をしっかり知つとらんといけん。傾斜があるとか。出る所は何処がいいか？水路を飛び越えなくてはいいけんとか。そんなことをしっかり頭に入れておかないといけんと思った。今までしっかり入れていたと思ったけど、災害時は全然ダメだった。

70年前うちのお父さんとお祖母ちゃんが此処で水害に遇っている。ここは2回目です。その時は犠牲者が出ている。うちの主人のお母さんとおばあちゃん(姑さん)がよう降るねーと姑さんが外に出たから、嫁さんも出ないといけんと思って息子(今の私の主人)と兄弟(年上のお兄ちゃん)に預けて外に出た。するとドーンと来て、姑さんや嫁さんが主人やお兄ちゃんを「たかい、たか

い」して助かった。と聞いている。しかし、姑と主人のお母さんと亡くしている。あの時は島では沢山犠牲者が出ている。だから普段から気を付けておかないと・・とは思っていた。当日もご飯食べながら「すべるのだったらこっちだろう」と話しをしていたが、大丈夫ではなかった。予想が外れた。

普段から消防の人や消防団の人と面識がなければならぬと思った。みんなのことをよく知っているのが解った。消防の人はえらい。

この島は年寄りばかりだから、ハチの巣を取ってくれたり、蛇を捕まえてくれたり、本当に感謝している。

消防の人が言っているが、何かあったら「消防の箱（ホースと筒先の格納箱）の番号を覚えておいてくれ」。すると「すぐ場所がわかる」と言ってくれた。自分の家の近くの番号を覚えておいて欲しい。ここだったら29番です。言うたら直ぐにわかるらしい。

次は地震だろうけど、ここは地山だから大丈夫。しかし地震が来ても何が来ても周りに誰もおらんじゃけー、どうにもならないと思っている。子供が電話してきて「2階に上がって待ってれ」と言われとるけど、「まだまだ大丈夫」と言う頭でいる。

題目「アツという間の増水」

雨が降り始めたのか？と思うと、庭先にどんどん水が入り始め、30cmほどの深さになりました。

外にある倉庫内冷凍庫も水に浸かる寸前で中の食品をすべて取り出し、対処しましたが家の前の道は水が流れ、早く渡ろうとすると足がとられる、水の力がいかに強いかが解りました。

消防署員の呼びかけで避難しましたが、ふと我に返り駐車場の車は？と思い見に行くと、なんと土砂に3分の一程度埋まっていたが、この土砂は山の斜面が崩れ、それが再び畑の土砂を誘い流れ込みました。かなりショックな姿で、近づこうとした所、体半分が沈み込み、四つん這いでその場を脱出しました。

後日ニュースで真砂土の怖さを知りました。



似島町

小原輝夫

⑥【広島市南区青崎】

青崎二丁目

広島市防災士ネットワーク

谷 本 憲 五

題目「河川は、河川の側はこんなにも怖いものなのか！」

2018. 7. 6 (金) 22時頃、実家の兄から電話があった。

「〃畑賀の道が流されてなくなったぞ〃!」「え〃!なに〃!はんまに〃!」それでも自分には想像も出来なくて理解?に苦しんだ!前日からの雨に続いて、この日も降り続く雨。広島県各地で避難勧告発令、その後気象庁から《大雨特別警報》が発表された!広島では、初めての大雨特別警報!それから各地で続々と《避難指示》が発令された!テレビでも!スマホでも!広島の各地でとんでもない事になっている。

安芸区畑賀からは、川のそばの道路が欠落した所に車が突っ込んで行く。(未だに二人の子供さんは、行方不明のままである。)

安芸区矢野からは、川が土石流で詰まり川が氾濫、道路で渋滞中の車を襲う。まるでゴミでも洗い流すかの様に車を押し流す。当然車内には人が乗っていた。一瞬目を疑う!?

安芸郡坂町からは、JR坂駅周辺の床上浸水。何故この地域が床上浸水に?

翌日も河川の決壊、氾濫等による災害被害が続々と放映される。

今回の西日本豪雨災害、広島では7月6日の夕方に時間雨量50ミリを記録しているが雨量強度としては強くなかった。しかしながら総雨量では各地で軒並み400ミリを超えている。この地域の地質(まさ土)からして総雨量400ミリが今回の大災害を引き起こしてしまった。山の斜面で保水出来なくなった雨水は土石流と化し降り続く雨と一緒に谷間を下り川へ流れ込む。大量の土石流は川を埋めつくし、また橋等の通過面積が狭くなった場所でも氾濫する。そして低い所へ低い所へ流れて行く。川のそばの家屋をなぎ倒し、家屋を押し流し、家屋に流れ込む。又アスファルトの道路に出た土石流は、速度を増し一気に駆け下るその地域が一番低い所まで!河川は超高水位、行き場のなくなった土石流は、河川の土手或いは〃〃の線路を堤防としてどんどん溜まる!溜まる!あつという間に床上浸水!

2018. 7. 7 (土)の朝、安芸区畑賀の実家と連絡を取り状況を確認した。実家は被災していなかったが実家のある奥畑地区は、幹線道路2箇所が流されてなくなった。加えて、停電、断水の孤立状態だと言う。実家には井戸があるので水の心配は要らない。停電で冷蔵庫が使えないので、バイクの前後荷台に目一杯の水を積み込み南区青崎の自宅を出発した。

安芸郡海田町では、瀬野川とJR山陽本線付近で冠水、旧道では上市地区と山畝地区(急傾斜地で家が押しつぶされながらも九死に一生を得た)同級生と50年振りの再会が出来た。青春を

共にした仲間だ。生きていてくれて本当に良かった！」で土砂崩れにより通行不能、畝橋から国道2号線に出る。瀬野川は泥水で一杯、流れも速い。橋を超えそうな勢い、この橋大丈夫？と不安がよぎった！国信橋を渡るも畑賀地区に進入出来ない。砂走橋から迂回して安芸区のJR中野駅前へ。（学生時代に通学の為毎日お世話になったが、僅かな浸水すら記憶にない。）床上浸水域を水没しながらもバイクを走らせる。やっとの思いで畑賀地区へ。川の両岸はジグザグにえぐられて虫食い状態、老朽化した橋は壊され見る影もない。川の状況道路の状況を確認しながら奥へと進む。山際にある昔からの狭い生活路をバイクで登って行く。そしてやっとの思いで奥畑地区の実家に着いた。

被害状況は、実家地域の停電が約1日、断水は約1週間、道路は約1ヶ月で仮復旧となった。大きな土砂災害は為角地区と下本郷影地区の2ヶ所で幸いなことに死者ゼロだった。感銘を受けた光景を紹介します。為角地区の2軒の家が山側に大きな岩で庭石を築き家屋との間に池を設けてありました。迫りくる土石流の速度を緩め、土石流の流入を最小限にとどめ床上まであと一歩のところ床下で食い止めていました。加えて地域町内会の結束です。災害の翌日から屋敷内の土砂かきだし作業、通学路確保の為に土砂取り除き作業を午前中3時間、夕方2時間、皆さんが毎日交代で既にやっていた。安芸区ボラセンが開設されたのは被災の1週間後でした。このいち早い助け合いの光景はあちこちで見かけま

した。今年の夏は猛暑で復旧作業も大変きついものでした。多くの行事が自粛ムードの中で、この為角地区は盆踊り、秋祭りとなしています。こんな時だからこそ、辛い時だからこそみんなで一緒に頑張ってやろうじゃないか！地域の結束力の強さを見せつけられました。畑賀川の中流域から下流域にかけては、川岸が家の基礎がえぐられ家は傾き今も避難生活を余儀なくされている。又川が氾濫して3軒の家がなぎ倒されている。

現在では川には大きな石が転がり小さな堰堤は壊され川底の岩肌も覗く。総延長約5kmの畑賀川、仮復旧の為に積まれた1トン土のうがなんと！なんと！約6000個！無残な姿となっている。呉娑々宇山と蓮華寺山と日野浦山に囲まれた静かな山村の広島市安芸区畑賀、この地域で生まれ育って65年今までに見たことのない光景だった。最近では山を守る人もなく、山は荒れ山は枯れ山の保水力も失くなった。山に食べ物が少なくなりイノシシやシカたちが山里へ、家の周りを我が物顔で活動している。野山を駆けまわり川に遊んだ少年期から青年期、わが心の故郷安芸区畑賀、今でも休みになると足を運ぶ。

《歴史は繰り返される！大正15年9月11日！

畑賀大水害！死者35名行方不明1名！》

小さい頃聞いた話。『あの時はバケツをひっくり返す程の雨が降った！横井出、西垣内の谷から丁度講中蔵のある所一帯がバツサリ流された！呉娑々宇山が大きく崩れた！』自分が通った畑賀



小学校にはその時流出した大きな岩で造られた水害碑が建てられている！またしても起きてしまった自然の脅威！そしてまたやってくる自然の脅威！地球温暖化の影響か！世界中で大規模災害が多発する！明日は我が身！である。

インフラに大打撃！ライフライン完全ストップ！日本壊滅とまで予想される南海トラフ巨大地震！間もなくやって来る事は必至です！皆さん災害対策の準備を始めましょう！生き延びる道を探しましょう！《自分のために！そして大切な人のために！》

〳地域づくりは防災から〳



⑦【広島市安芸区上瀬野町】

上瀬野町

川 本 清 彦

題目「土石流前にキンキンと金属の音がした」

まさか自分とこがこんな被害を受けるとは思っていなかったの
で、避難までは考えていない。

夕方、五日市に居る娘から電話があって、「お父さん・お母さん 救命胴衣を着ときんさいよ!」というので、そんな馬鹿なことがあるわけがないと思いながら、母さんに救命胴衣を着せて、離れの2階へ行かせていたが、私は7時ごろから、敷地入り口の大手で川の様子を見ていた。

救命胴衣は船を持っているから以前から持っていた。

雨はずーっと降り続き、川の水がどんどん増えて行く。川が氾濫する前に川の土手の口が開いた（河岸のコンクリート性の護岸がめくれた状態）。こっち側の土手が開いたので、車が落ちてはいけないと思い、石野君と一緒に三角のポールを3個置きに行った。その時は、川の上から1mぐらいの水位でした。それから10分ぐらいしたら、バースと土手が開いて、橋の下に引っ掛かり、川を堰き止めたようになり、それから橋の上に向けてあふれ出した。それが8時ごろだったと思う。それから堰き止められた川は、水が増えて来たので、私は10cmぐらいずつ家の方へ下がっていた。

8時27分 私は、それから大手のところで外の様子を見ていたら、最初、土石流の音ではなく、砂埃の臭い（土のにおい）が、雨の中付近に漂い始めた。そして金属の音が聞こえて来た。それは、バイパス工事で使用する事務所の鋼材（10m×5m）や橋を作る鋼材がキンキンという音がなりだしたので、これはまともな状態でないと判断し、慌てて家の方へ逃げたが、後ろを振り向くと私のすぐ後ろにその鋼材が流れついていて、もう少しで私は死ぬところだった。

自宅は、一瞬のうちに敷地の1mぐらい（赤いポストまで）土砂がたまったが、建物の中までは入らなかった。その間3〜4秒ぐらいの出来事でした。私は「わー」と咄嗟に逃げられましたが、その時はまだ暗かったので、全体の状況は判らなかった。

翌朝見ると、車庫の上に自治会の倉庫が載っていた。私の家の車庫は3本柱ですが、これが2本柱の車庫だったら、車も車庫も全部だめになっていたと思うが、お蔭様で車は後ろが少し傷ついたぐらいで済んだ。

この付近には、集会所もないし、瀬野川小学校も遠いので避難できない。我が家は2階へ避難することになっているが、下の藤田さんは、「ガサガサという音を聞き慌てて2階へ上がったが、一瞬のうちに1階へ土砂が入ってきた。」と言っています。

今回の災害は、私のうちは、大きな被害は受けず、しかも間一



髪で命拾いをしたので、何とか人のためにといい、あれから道路の土砂撤去や被災した家の後片付けをしている。

(平成30年11月30日 柳迫 聴き取り)



川本家の庭先
(川の状況を見ていた位置)



上流の作業所とバイパス工事現場の被災状況



自宅上流の桜の木には、流木や鉄骨が巻き付いている。



上瀬野町

岡野 昭

美佐子

題目「あの時、お友達が電話をかけてくれたから」

7月6日17頃から、「結構雨が降るなあ」と感じていた。

私の家の目の前には小さな山がある。過去に2、3回ほど、この山が崩れたことがあり、「雨が降ると怖いな」と思っていた。

だから大雨が降って心配な時はいつも、山から一番離れたところに位置する台所で過ごしていた。雨が降ったら2階に避難するという方法もあるが、私の妻は足が悪く、2階へ上がることができない。飼っている大きな犬も階段を登ることが出来ないのです、1階の台所で過ごしている。あの7月6日の日も、台所にブルーシートを引いて、妻がおにぎりを作り、自宅内避難の準備をしていた。

台所で準備をしていたときに、近所のお友達から電話がかかってきた。「今日は雨の降り方が結構強いから、うちへ避難しにおいで」と言ってくれた。今まで、外に避難したことはない。その日もあまり危機感を感じてなかったが、「せっかく声をかけてくれたから一晩だけお世話になろうか」と妻と話し合い、避難させてもらうことにした。友達のお宅に移動する時、雨はそれほど強く降っている感じはしなかった。ペットの犬を連れて、他の大事な物は家に置いたまま、身体だけで避難させてもらった。

18時頃に友達宅に避難した。妻は足が悪いので、お友達のベッ

ドを借りることになった。友達の家で過ごしていた時、犬が廊下で吠えていたため、犬が落ち着くまで外に出してやろうと思い、外に出してやっていた。ちょうどその時、「ドーンッ！」という物凄い音がした。そして、その家の2軒上あたりから土石流がドバーッ！と流れて来た。すぐ家に入り、119に電話したが、繋がらない。22時ぐらいになって消防署の方が来られ、「ここも危険だから、他へ避難してください」と言われた。しかし、避難所である小学校も公民館も危険な状態だったらしく、行けなかった。避難させてもらっていたお宅の友達は2階に上がったが、私の妻は足が悪いから2階へは上がれない。消防署の方は「すぐ近所の川より離れたところの近くなら大丈夫だから探して避難してくれ」と言うが、その辺りに知り合いもない。たまたま、川から少し離れたところに、昔借りていた車庫があったので、「そこに居らしてもらおうか」ということで、妻と犬を車に乗せて行った。また偶然、その車庫の上には別のご夫婦も避難しに来ていた。でもらった。そのお宅には別のご夫婦も避難しに来ていた。

それから24時か25時頃、雨が小降りになっていたから、歩いて自分の家に歩帰ってみた。そしたら、もう、家がなくなっていた。台所の勝手口のドアも下がめくれ、家の中から濁流が流れてきていた。その時、近所の人々が心配して私たち夫婦を探しに来てくれた。私の姿をみて、「アキラさんがおったー!!!」と凄く喜んでくれた。私も、「生きとるよー!」と返事をした。

翌朝、再び自分の家に帰ってみると、家の中がぐちゃぐちゃ。冷蔵庫も倒れ、テーブルも倒れて、土も1mくらい入ってきていた。あの時友達が電話を掛けてくれていなかったら、あのまま台所で妻と私と犬は、おそらく駄目だったと思う。いつも雨が多い時は台所に避難をしていて、外に避難をしたのは、初めてのことだった。

大雨の時はいつも自分の家の小さな山が崩れるのではないかと怖かった。しかし今回は、崩れたのはこの山ではなかった。家の前を流れる川の上流に、堰堤があるのだが、その上から崩れたのが、何軒か家を巻き込みながら、ドーンと、ズーっと下まで降りてきていた。まさか、そこから流れてくるとは思わなかった。うちには家の柱や、皮の剥けた木、石などが、表側のガラスを破って家に流れてきていた。

あんなの、テレビの中の出来事だと思っていた。まさか自分の身に振りかかるとは思わなかった。夢を見ているみたい。実際に現場を見ても、受け入れられないというか。よく分からなかった。どこから土石流が流れてきたのかも分からない。現実を、受け入れることが出来なかった。

友達や友達の息子さんたちが、あの暑い中、土砂を出してくれた。有難い。有難いな、と思った。「明日は仕事だからちょっと来れないが」、と言って、仕事が終わったあと夕方に1時間でも

手伝いに来てくれたりしていた。すごくありがたかった。「自分は今から仕事だから、息子だけ手伝いに行くから」と言って息子さんが来てくれることもあった。家の中の土砂撤去は、とりあえず2週間くらいかかった。家の周りの土砂がまだ沢山残っていたので、そのあとボランティアさんに1週間ほど来ていただいた、綺麗にいただいた。本当に感謝している。暑い中だったので、10、20分ほど作業して、それから休憩して、を繰り返しての活動だった。本当に暑かった。

とりあえず綺麗にはなったが、この状態では住むことも出来ない。天井から何からやり直さないといけなかった為、家は解体することにした。家の玄関の前には横幅2mほどの水路と、橋が架かっている。流れてくる流木などが橋にひっかかり、川に土砂がたまったことで水が溢れ出し、水路が変わって自分の家の方に流れてきたと思われる。

今は、上瀬野南にある妻の親戚の家が空いていたので、そこで生活させてもらっている。地元の方々はありがたいことに、百年に1回の雨だし早く帰っておいで、「いつ帰ってくるの?」と声を掛けてくれる。ただ、実際、百年に1回の雨は何度も頻繁に起きている。やっぱり、もう怖い。そこでもう一度住もうとは思わない。もう怖いから。今住んでいるところでも、やっぱり、ちよつとでも強い雨が降ると怖い。神経質になっている。

早め早めの避難が大事。被災後、引っ越してすぐに、避難所の場所などを把握した。被災を体験した今はもう、すぐに避難するようにしている。どこにいても安全な場所というのはないと思う。何時何が起こるか分からないから。明るいうちに早めの避難をすることが何よりも第一だ。空振りになってもいい。それしかない。でもきつと、災害を体験した人にしか、（危険さ、避難の重要さに）ピンとこないと思う。だから難しい。大雨の中、真っ暗でよく見えない中、避難できる状態でもない。避難のタイミングが、難しいと思う。避難中に災害に遭う人もいる。空振りになって、「大したことなかったじゃん」となるかもしれないが、それでもやはり、早め早めの避難しかないと思う。

体が不自由な人や、犬がいる家は、避難所での生活はなかなか出来ない。たとえ早めの避難をすることが出来ても、飼い犬などのペットは避難所に連れて行くことが出来ないため、なかなか避難できない。そのような人たちにとっては、特に難しいと思う。そうかといって、体の不自由な人、足が悪い人などは、2階に上がることも出来ない。やはり難しいところがある。

声をかけてくださる存在が有難い。近所付き合いが大切。前に住んでいた家でも、みな家族構成などお互いに知っていた。「何かあったらうちにおいでね」と隣の奥さんもいつも言ってくれていた。

新しいこの場所でも、近所付き合いを大切にしていこうと思う。

（湯浅 聴き取り）

題目「被害の発生したのは、大本谷川の上流」

上瀬野町
舛下信夫

上流の東広島市から大本谷川が流れています。

その川が被害を発生しました。国有林の谷2カ所から土石流が出ました。通常1mか2mぐらいの川巾でちよろちよろ流れる川が2カ所から土石流が発生し、川幅も60m、70mの川に拡大しました。今回の災害でこの地区では残念ながら一緒にやってきた4名の方が亡くなり、9棟が全壊の被害を受けた。そのうちの一番上流の4軒が跡形のない状態となり基礎のコンクリートが残っているぐらいで、土石流によって跡形がないんです。

7月6日のことですが、雨の降り方が尋常な降り方ではないので、奥さんと「これはなんか起こるぞ」と予感はおりました。

午後8時半ごろ、土のにおいがしてドガンという大きな音がした。電気が消えて、何が起こったかわからない状態で、妻と一緒に懐中電灯を持って2階に上がり、2階から外を見ると「下の橋が土砂と流木で埋まっている状態だった。その時市道には水が流れていて、橋のすぐ下流の道路に大きな石や流木が流れてきていた。そのような状態で一晩中寝ることができず、舗装道路の上を水が流れていて、いつの間にか市道のアスファルトがめくれ、水道管が表れて、道路が流された。何が起こったか理解できない状態で、夜が明けて団地の人も何人か下りてこられた。私の家の

下には畑があったが、ここに流木や石が山のように流れついていた。農機具を入れていた倉庫も流されていた。土砂と流木がものすごい量、流れていて、前の家も流木に襲われ、JRの線路も流木と土砂で埋まっていた。

電気・水道が全然だめになり、我が家には手掘りの井戸があった。友達が水中ポンプを用意してくれて、洗濯や手洗い、便所の水に使った。飲料水は、うちの上の家が打ち抜き井戸を持っておられたので、使用させてもらいました。

市道が、崩壊したので、陸の孤島になったので、住民の人と一緒に、鉄道を横切る仮の歩道を造りました。市道が川の状態となっていたので、その方法しかない状態でした。市道復旧は、7月15日、水道の復旧が7月25日です。約1か月後、ボランティアの要請をすると「道路のない所は危険で派遣できない。」ということだった。すぐには対応してもらえなかったけど、7月22日にボランティアさんが来てくれました。社協、連合から派遣していただいて土砂の搬出や家の片付けなどをしてもらいました。

この地域は、4人なくなりましたが、いまだに1名はどこへ流されたかわからず、自衛隊、都道府県警察、全国の消防がかなりの幅となった川の搜索を重機でこっちに移動したり、あっちに移動したりしながら探してくれました。一番うれしかったのは、JRの線路にも大量の土砂が流れていたが、そこに警察犬が搜索に来てくれました。重機で流木を取り除いた後、自衛隊の方がテミ

で土砂を少しずつかき分けてくれました。この時人間の命は大変重いものだと痛感し、併せて涙が出てきました。皆さんが被災者目線で一生懸命やっていた姿に本当に感激しました。

7月6日午後8時半に土石流が発生しましたが、この辺の方は避難することは無かった。

これまで防災訓練は実施したことは無い。これまで昭和20年9月枕崎台風で、山陽本線も流れるほどの大きな災害が起きていた。地域として自主防災活動はしていない。これから行うことは無いと思う。

今は、被災地にワイヤーネットとサイレンを付けているが、これを鳴らしてみようと思っています。私達の地域は高齢者ばかりで、若い人がいない地域となった。機動力がない地域で、災害復旧が第1で、それぞれが目先のことばかりでそんな余裕がない。それに手足となって動く人がいないのが現実です。これまでのいろいろと話はしているが前に進まない。非常に頭を痛めている。

(平成30年11月20日 柳迫 聴き取り)



団地入り口付近



瀬野パイパスの橋脚付近



団地中央付近から着た（上流）を見



この付近は、東広島市

⑧【広島市安芸区瀬野南】

瀬野南一丁目

村上陽三

幸

題目「地域のきずなを大切に・

笑われてもいいけー早く逃げんさいよ。」

私の地域は、南側に山がせまり、北側は瀬野川が流れ、土砂災害、川の氾濫と隣り合わせの場所です。

私は、他県の出身で、この地域へ住んで30年近くになりますが、今回のようなひどい災害は、初めてです。

かつて、瀬野川が氾濫し、多くの家屋や、牛小屋が流れた事も、近隣のお年寄りの方から聞いていました。

私自身が被災していませんので、体験談を書くか、迷いましたが、後世の人に少しでも参考になれば、幸いです。

豪雨の日、2018年7月6日、私は、いつも通り会社に出勤していました。

会社内の放送で大雨の為、J Rが屋で止まると知らせてもらい、早めに帰宅した為、混乱なく帰宅できました。

正確な時間は覚えていないのですが（17・30頃）、安芸区に「避難準備、高齢者避難開始」が発令されました。

私の妻は、お年寄りを連れて、避難所（福祉センター）へ避難しました。私と子どもは、家で川の様子を見ながら避難するか迷っ

ていました。そのうち、近所の方に教えて頂いた、川の氾濫の目安の土管や、階段まで水が達したのです。雨は一向に止む気配はなく、橋の上にも川の水がかかりはじめ、危険を感じてきました。そして、18時30分頃、避難中の妻から避難所の駐車場が水没し、入り口まで水が来ていると連絡がありました。（瀬野川でなく、駅の線路下を通って瀬野川へ流れる、小さい榎山川が氾濫した事を、後日知りました。）

私はこの連絡を受けて、避難するのをあきらめ、必要品を2階に移動し、自宅にとどまる事を決めました。

この後、避難勧告や、避難指示（緊急）の携帯メールを、何度も繰り返し受信する事となります。

結局、土砂崩れ、川の氾濫を気にしながら、一晚中怖い思いをしながら、眠れない夜を過ごしました。

2018年7月7日の朝を迎え、瀬野川の様子を見ると、旧国道の土手の色々な所から、滝のように川に向かって泥水が流れ込んでいました。旧国道は、1時冠水し、水の深さは、人の胸まであったそうです。

川の上流側を見ると、橋が崩落しており、水道管が破裂し、水が勢いよく噴き出しているのが見えました。（橋に設置していた、光ケーブルも切断され、固定電話（ip）、パソコンでのインターネットも長期間、使用不可でした。）

川の南側でも、バイパスより上から来ている小川が氾濫し、土

石流となって、瀬野川まで届いていました。

こうして、地域としては、床下浸水や、床上浸水の家が多数あり、また、農地も土砂が流れこみ、機械の倉庫も中の機械ごと土砂に埋まってしまった所もありました。

瀬野駅やJAも土砂や泥水によって被害を受け、長期間に渡り、不便な生活をする事となります。

2号線が寸断、JRは瀬野駅被害の為、陸の孤島の状態で、23日は、食料の調達にも困る状態でした。

自身は、7月7日～7月15日まで、会社の判断で、通勤困難者として出勤停止となりました。

この間は、地域の方々と共に、力を合わせて土砂の撤去など、自分達のできる範囲で、片づけを行いました。

ボランティアの人達にも助けられ、私達の地域は、比較的早く落ち着いたように思います。

猛暑の中、熱中症に気をつけながらの作業で、ボランティアの方々には、本当に感謝しています。

線状降水帯ができる豪雨が、危険な事は、数年前の安佐北区の災害からも知っていましたが、まさか自分達の地域で、今回の様な災害が起きるとは、考えてもみませんでした。

ましてや、瀬野川が氾濫するならわかりますが、普段水量の少ない、支流の川が氾濫し多くの土砂や、大きな石を運び、被害が出た事に驚きました。

今回の様な災害が、地球温暖化の為、頻繁におこるのか、50年に1度の事なのか、わかりません。

しかし、本当に危険だと思ったときには、逃げようとしてもその時には、逃げられないことがわかりました。

たとえ10回に1回大災害が発生したとしても、避難を心がける事が、命を守る行動につながると思います。

今回、私自身は、被害なしでしたが、早く避難していれば、7月6日の夜、怖い思いをしなかったはずでした。ただ、今回の様に、避難所だからと言って油断してはなりません。想定外の事が起きるかもしれないからです。

◆将来来る災害に対する心がまえとして

①本当に危険だと思いう前に避難する。

②避難所だからと言って油断してはならない。想定外の事が起きるかもしれない。

③晋段から食料や水の備えをしておくこと。

④昔段から、地域のつながりを大切に。いざと言うとき、人の力は絶大です。

「避難所（瀬野福祉センターの様子について）」

妻（民生委員、児童委員）の体験談

菓雨の日、2018年7月6日（17:30頃）、私は安芸区に「避

難準備、高齢者避難開始」が発令されたので、高齢者一人暮らしの方々と一緒に、避難所（瀬野福祉センター）へ避難しました。

最初は7人程度でしたが、時間がたつにつれ避難者は増え、1時は150人ほど、いたと思います。

当初は、食料や、毛布などもなく、代わりに座布団使用していました。

18時30分頃、1階から2階に移動する様に指示があり、外の様子を見ると、福祉センターの駐車場が、水浸しで入り口まで水が来ていました。（車のタイヤの上まで）

菓雨の中、水没した道路を通って来られる方や、川の中を救助された方など、全身ずぶ濡れで避難所に来られる方もおられました。その中で、体調を崩す方もおられ、救急車を呼んでも、電話すら通じない。切迫した状況も発生しました。

幸い、似た症状を経験された方がおられ、皆で協力し、対処したことで、何とか大事に至らずに済みました。

その日の夜、家は大丈夫だろうか？と心配しながら、ほとんど寝れませんでした。（夜中でも、若い方が、入り口から入った水をかき出してくれていました。）

2018年7月7日朝、夜が明けて、2階の窓から見ると、瀬野駅や駐車場を川のように濁流が流れており唖然としました。

この日の朝食と夕食は、地域の方から頂いた米、野菜を、私を含め、有志で調理し、おむすび（300個）、具が少しの味噌汁を、

皆さんで食べて頂きました。（提供頂いたおかげで2日間助かりました。本当にありがとうございます。）

この日は、7月6日より人が多く、地域の避難者、帰宅困難者であふれていました。

2018年7月8日 ようやく水が引き、瀬野小学校（備蓄場所）からも避難用の食料や毛布が届きました。

私は昼には、自宅に戻りましたが、この時福祉センターには、まだ100人ほどの人がいたと思います。

実は、この災害の2ヶ月前から、地域の災害マップ作りを進めていました。

防災士の西佐古さん、地域の方達と一緒に、自分達の住む地域を実際に歩き、危険箇所や、避難場所を確認した事が、今回の災害で役に立ったと思います。でも、想定外も多かったと思います。一番印象に残っている事は、「笑われてもいいけど、早く逃げんさいよ。」の言葉でした。

主人と子供は、家に残りましたが、私は早く避難し、やはり防災士の方が言った通り逃げてよかったです。

主人の文中にもありますが、本当に大丈夫だろうか？不安な夜を過ごさず済んだと思います。

ただ、避難所であっても、想定外の事もあるので、油断してはならないと思いました。

これからも、私は、笑われてもいいけど、早く逃げます。



崩落した橋



瀬野川へ濁流が流れ込む様子



バイパスより上の小川に氾濫で土石流



旧国道冠水

⑨【広島市安芸区瀬野】

瀬野一丁目

ペンネーム…ふくちゃん

題目「まだ大丈夫じゃろう、と思っていたうちに」

7月6日はずっと家にいた。雨が降っていたので、夕方、外に出て川の水位を確認していたが、「たいしたことないな」と思っていた。それから1時間くらいが経過した。

1時間もしないうちに鉄橋にゴミが引っかかっている。川の水が、駅の方と駐車場の方へ二手に別れた。農協の方へも、水がダーっと。もうこちら一面が川になっていた。ものの一瞬だ。一気に来た。二号線も川になっていた。トラックのタイヤに半分以上水があり、動ける状況ではなかった。上の方でよく雨が降ったのか知らないが、家の前の川（榎山川）その鉄橋のところにもゴミなどが詰まって、水が溢れ出した。水の、道路への溢れ方が半端じゃない。ダムを放流するような水の勢い。まるで滝のような様子だ。畑の土も全部持って行かれた。この光景を見たときは、パニック。びっくりというよりもパニック。「どうしようかー」という感じで。とにかく、なんかもう「この世の出来事じゃろうか」という感じだった。

家の中にも水が入ってきた。本当に恐ろしかった。家の中に水が入ってくるから、家の中の椅子も全部テーブルの上に上げた。

この部屋（台所）も水に浸かった。水は翌日には引いていた。しかし、水が引いたあとが大変だ。瓦礫とか土とか泥とかがいっぱい。玄関なんて特に酷かった。床下にも泥が溜まっていた。家の中でも、床が高い部分はなんとか、畳を洗う程度で済んだのだが、室外機は3つダメになった。室外機というのは、室外機だけを換えることが出来なかったため、本体ごと3体全て買い換えた。給湯器もダメになったのでお湯はしばらく使えなかった。お湯が出ないので、お風呂は水道の水を鍋でわかし、掛け湯をしてしばらく過ごしていた。一番困ったのは水洗トイレだ。朝、川の水をバケツですくって、並べておく。1回のトイレを使うのに、水が小さいバケツ2杯要る。結構な量だ。

ひと山できるほどの石が線路の上にあり、凄かった。「どこから石が流れてきたんじゃろか」というほどの石が、流れてきていた。町内に30cmほどの土砂が積もっていて、なかなか歩けない。しばらくは長靴を履きスニーカーまで歩いて買い物をしていた。お店の中は、ラーメンもない、パンもない、魚もない、飲み物もない。レジも1時間くらい並んで待った。スーパーストにはしかなかった。近所の農協も土砂でダメになっていたし、車で移動もできないので大変だった。自動車もエンジンの中にゴミが入ってダメになった。何ヶ月不自由したとか・・。

土砂撤去はボランティアの人たちが一生懸命して下さった。エアコンも壊れていて、一番暑いときだった。ボランティアさんたちに40分置きに麦茶を出すなどして、出来ることをお互いに助けた。

土砂災害は天災だから、被災者を減らすのは難しいと思う。しかし、一番良い方法は、自然破壊をしないことだと思う。昔は雨が降ったとき、水が一度には出なかった。山に水がしみこんで、少々雨が降ってもダツとならない。あとからじわじわと流れてくる。しかし今は、降ったら、ダツと流れてくる。昔は保水をしていた山が、今では団地などに変わり、保水ができない。水を貯める所が無くなって、大雨になったときは、一気に流れてくるようになってきた。田んぼや、保水力のあるものが全部宅地になっている。また昭和の終わり頃からか、川はずっと上まで全部コンクリートで覆われるようになった。もしかすると、その影響もあるかもしれない。どっちの方が良いのかは分からないが、いずれにしても、今は水がダツと流れてくる。「まだ大丈夫じゃろう」と思っていたら、パツと気が付いたときはもう遅い。気をつけないといけない。どこに逃げようか？頭の中に入れておかないといけない、とつくづく思う。

あの時、まさかこうなるとは夢にも思わなかった。それこそ「想

定外」だ。地形だけではなくて、直接に被害を受けた人は人の性格まで変わる。雨や台風には、ドキドキする。怖さを感じる。今年の台風はヒヤヒヤした。「2時災害になりませんように」と祈るしかなかった。全部今まで他人事みたいに思っていた。自分がこういう風に体験してみて、人の有り難さがわかった。やっぱり感謝の気持ちを、いつも持つておかないといけないと思った。人間は一人じゃ生きていけない。みんなには、随分と助けてもらった。ご近所さんは大切。なんかあった時には、やっぱり助け合わないといけない。

(湯浅 聴き取り)



ふくちゃんさんのお宅周辺 (JR瀬野駅付近)

瀬野二丁目

西原 幸宏

悦子

題目「三途の河ってこんな感じなのかな」

7月6日の夕方6時過ぎ、テレビニュースを見ていた。外は、雨は降っていたものの、それほど大雨だった感じでもない。家のすぐ横の河川の水位も、いつもとそれほど変わらなかった。するとその時、テレビのテロップが流れ、すぐこの上にある、みどり坂に避難指示が出ているではないか。「え、何でこのみどり坂に指示が出ているの？」と驚いた。その時、また外の川の様子を見てみると、既にこの橋あたりで、いつの間にかバサン、バサンと水が溢れていた。それから「これはまずいわ！」と思い、避難の準備をした。

18時40分頃に裏道を通り、ここから少し上にある「グループホーム藤の家」に避難させてもらった。もうその時には、この地面の辺り一面に、水がうつすらとヒタヒタになっていた。でも、雨はそれほど降っていない。避難時に傘も必要が無かったくらいだ。ただ、その避難時には、まさか後でこれほどの量の土砂が家や庭に入ってくるとは想像もしていなかった。安芸区で災害になるとは想像外。台風の雨で目の前の川（榎山川）が満杯になっていたことはあるが、最悪の事態でもその程度くらいにしか頭になかった。

私は犬を飼っているが、避難時、犬はおんぶするわけにはいかない。ただど置いていくわけにもいかない。とりあえず風呂敷に包んで一緒に連れて行った。避難した先で、夫は外の様子を気にして何度も外に出ようとす。深夜24時頃に少し小降りになり、「これじゃったらもう大丈夫だろう」と言う夫と一緒に、家に帰った。その時は、それ以上酷くなるとは思いもしなかった。

家に帰ったが、なかなか寝られない。さっきまでは小降りだったが、深夜3〜4時頃、濁流と雨の音が「異常」になった。テレビでよく「異常な音」というが、これがその「異常な音」か、と知った。普段とは違う物凄い音。外が気になり、電気もショートして真っ暗の中、ローソクを持って外を出てみると、川、道路関係なしに、「この辺り一面が川」になっていた。

朝方起きてみると、車がこの庭に入り込んでいた。ここは危ない。だけど家の中は水位が1mくらいまであり、外に出ることなんて出来ない。近所の方に脚立を持ってきてもらい、裏からなんとか脱出した。その日、外の道路に白い石がコロコロと沢山転がっているのが目に入った。ふと、「三途の河ってこんな感じかしら」と思った。

7月8日、町内会の方々などが朝8時にうちに集合した。ちょうど暑い時期だから13時撤収。週3回ほど町内会が率先して集まり、それ以外はボランティアさんたちの温かい協力のもと土砂撤

去が行われた。ボランティアの皆さんの力があつたからできたと思う。ひとりじゃできない。近所の方々がたくさん助けてくださったのできたと思う。

それは大きい。

また、猛暑の中、エアコンが壊れなかったから良かったと思う。それだけでも幸せだなと思った。本当に大変だったけど、みなさんに助けてもらった。

また助かったのは、友達がみかん箱いっぱい缶詰を送ってくれたこと。農協も営業停止、JRも線路が破壊され使えない。お金があっても、物を買いくところがない。ところが知人は私達に食料を早めに送ってくくださった。その後、私たちの地域は孤立した。本当にこれは助かった。

災害後、1ヶ月過ぎてやっと車が使えて役所に行くと、それらが大変、後期高齢者にとっては役所関係がややこしい。手続きも課によって違う。何から何まで全部皆さんの力を借りて手続きをする始末で、大変ご迷惑をおかけした。

災害の写真が罹災証明のときに必要。そのことは後から知った。災害後すぐは、写真を撮っている余裕なんてなかった。だけど、次起きた時は、すぐに写真に記録を残そうと思う。

自然にはさからっちゃいけない。どうにもならない。水を止めることなどは、人間以上の力だ。逆らうのではなくて、利用した

方がいい。災害が発生すると、もうどう止めることもできない。

この川（榎山川）は、洪水危険区域になっていたが、どうすることもできない。準備をしていたも、どうにもならない。60年前も洪水が起きて、川がいっぱいになったが「酷くてもそこまでだろう」と思っていた。ただ、今は昔と違って、道路がアスファルトで舗装されている。川の水がうまく流れていかない。水のチカラは、やっぱり、すごい。やっぱり想像を絶する。水っていうのは、もう、何かがある前に早く避難しようと思う。

だけど、年を取った時に、「避難しなさい」と言われても「大丈夫じゃ」と思ってたなかなか避難しないこと。しかし、気がついた時には、もう遅い。「なんでここに、どれだけの土砂がどこから流れてきたん」と思う。

大変だが、気が滅入ったらいけない、と自分がしっかりしておかないと、と思う。また、見栄を張らずに、皆さんに「困っています、助けてください」というのが一番だと思う。

この地域はみんな大きな怪我なく命を落とした方もいなかった。ので良かった。災害直後、本当に大変だったけど、みなさんに助けてもらった。感謝している。

（湯浅 聴き取り）



西原さんのお宅と周辺

ペンネーム…白髪の防災士

題目「防災に携わっている住民の思い」

8. 20豪雨災害以降、毎年安芸区でも避難勧告が、発令されて居ますが、その都度に学区避難所の福祉会館へ出向き（広島市の「わがまち防災マップ作成」アドバイザーとしての活動に於いて、早めの避難を繰り返し提唱！）行政が深夜に来館解錠まで（発令から30〜40分くらい要するが、地区での解錠が出来ない状況だと「命を守る早めの避難！」にリンクされないので自主的にこの活動を継続中！早めに避難しても解錠されてなければ、行かなくなるのに未だ改善されないのは、何故なのか！？行政は、開錠時間を含めて説明を要する！）の間に避難者を玄関先で迎え、解錠説明し開館後も朝まで張り付くことにしているが、備蓄倉庫もなければ、情報手段のテレビや・ラジオもなく（避難者の部屋には）私は、手持ちのスマホで雨雲レーダー情報を見て、避難者への情報提供、帰宅タイミングの想定をしたりして夜明けを迎えるのだが、避難者の方は娯楽室の畳上で、唯一ある薄座布団を枕に横になるだけで、なんとも貧相？（毛布は、必需品）、本年度から生活避難所となり備蓄倉庫品の一部を移設することで、行政との話し合いに賛同していたが、この度の大災害は間に合わず備蓄のない学区避難所で朝を迎える200人弱の避難者のストレスは如何ばかりかと同情を禁じえませんが、学区避難所が深夜に開設され

た際の警備員＋行政2名（男女各1名）陣容で、責任者を明確にする組織体制表（マニュアル）等を即刻掲示しないと混乱する。

例年では、夜明けとともに避難者も三々五々帰宅の途に着くケースだったので、さしたる混乱もないが、この度のような長期の開設に成れば、訓練等が出来てないのもあって、それなりの方々が、活動を始めると混乱があった！★備蓄倉庫が、8月3日小学校・福祉会館へ移設されたようだが、自主防災会の立場で9月に知ったが、行政よりの連絡はなかった！

豪雨災害発生（7月6日）の学区避難所は、開館中でもあり、日中より避難者の方は来館を始めて居られたが、例年では深夜の場合だったので、行政（男友2人）の来館開錠待ちに出向いて、この度では福祉会館に向かず自宅での安全場所（我家の避難場所）に待機して、情報（スマホ、テレビ・パソコン等）収集に徹していたら、例年では地区自主防災会長（主婦）「以降Mさんと略称」が、一早く要支援者を車で避難所への移動をさせてお世話をして居られるMさんとは、携帯メールでの避難所の情報交換をしながら私は、町内近所の方と避難のタイミングや避難場所の相談に応じたりしながら住宅や山・河川・水路・田畑等町内（近隣）を優先的に状況把握に努めて居るところへ会長Mさんから「緊急！避難所に病人の方が居て消防署にも連絡取れない直ぐ来てください！」との電話で、避難所へ出向く活動に切替えて、軽トラの移動で21時JR駅北駐車場にたどり着き降車、徒歩でJR駅陸

橋を渡って階段を下り駅前に出たら膝まで浸かる。線路からの濁流に阻まれながらも避難所の福祉会館に到着したが、駐車場から玄関前に向かう間にも濁流に足を取られないよう気配りしながら歩行を余儀なくされる状態に災害の深刻さを感じながら避難所館内に入った。一時期は、床上浸水した旨だった。病の方は2階トレーニングルームで寝て居られて、会長Mさんと2人の女性で看病中だったが、私の活動はまず近隣のクリニックに院長を訪ねて往診依頼したが、クリニックへの浸水が発生しており断念して帰館、次には寒気で震える人用の毛布や避難所への土砂濁流侵入浸水阻止として、スコップ・クワ等を自宅へ取りに帰る。準備の上、再び福祉会館へ帰館、まず、1階電気室への浸水すると、受電設備へ重大事故（漏電・停電等の電気災害）が発生することから、絶対に浸水阻止が必要と判断（電気関係仕事なのもあって）して、玄関先で取り組んだ。途中から行政・避難者数名の方からも協力を戴きながら、ほぼ徹夜で濁流侵入阻止作業を行う。ホウキとスコップの人海戦術で、いつ終わるとも解らない中で、ひたすら濁流を押返す作業の繰返しと玄関内に侵入した水をバケツや塵取りによる汲み取り排水に雑巾絞りとするもので工夫しながら何とか目的を果たすことが出来たが、疲労困憊（ストレスの中）にも関わらず最後まで頑張って、作業に携わって戴いた方々（地区内住居でない方も居られたかも知れませんか？）の姿勢には、敬服と感謝の気持ちで一杯だ。一方の学区内団体組織からは、例年もさ

ることながらこの度も避難所開設に伴う防災ボランティア活動に自らの意思を持って率先で駆けつけて来た方を個々での把握をして居りませんが、少なくとも限りなくゼロに近い状態に愕然とする。これは、これまでの防災活動への取組みが軽弱（学区防災に関する認識欠如）と思料する。この度の豪雨災害の対応を反省してみると、これから発生が危惧されている地球レベルでの気象環境変化における大災害や被害を小さくする地域レベルでの活動に對し大きな危惧を覚えます。

この度には、学区に於いて災害対策本部なる組織を9日に連合町内会・社協による合同会議と称して開催されるも肝心な自主防災会（防災士を含め）の参加要請は、なされなかった事実や以降での運営内容に関しても首をかしげざるを得ないこと直面するとともに疑問が終始して、学区の自主防災に重みのない位置づけには、不信感を抱くに十二分過ぎる証に感じますが、防災関係者に限らず違和感を持つ方が、もし他にも居られたなら救いですが、上を見る体質で、もの申さずでは地域の「自助・共助！」のスローガンには、ほど遠く防災減災への危機感もさることながら、いつ起こるとも分からない災害対応に憂いを感じます。

学区内の町内・自治会（計50地区）の半数は、広島市が推進中の「わがまち防災マップ作成」に取組みを済ませて居られて、発災翌日の学区内避難者は350人を数えた事実は、少なからずとも地区住民の防災意識が高揚している証の裏付けとして、確信

できます。

発災直後の住民による自主片づけに伴って、土砂等土嚢をマイ軽トラ持込んで、仮置場所への運搬作業を地区のボランティア仲間と汗をかく一方で、独自での各地区の状況調査（住宅や家電の浸水に於ける漏電等の電気事故防止チェック作業とアドバイス等）と合わせての広島市防災アドバイザーとして携わった各地区で、防災マップ作成の内容と災害状況を検証する活動の道中では、住民の方へのご挨拶と防災マップ作成を共にした方々からも声をかけて戴く会話の中で「アドバイザーの説明が、この災害内容と当たっていた！」等の寸評を戴けたことは、「早めの避難行動を実行する！」に繋がったことの事実として実感をして居ります。

また、これからの防災活動に於いてもこの度の豪雨災害場所は、人的被害を受けておられる場所を含めて、自らの足を運んで見聞するとともに知識と記録に残して伝承する活動を継続中ですが、未だ学区内では今後に繋がる防災への取組みの動きも見えない環境下での活動は、ともすれば孤軍奮闘に成りがちなのですが、少し範囲を広げて安芸区内外へと目を向け活動すれば、仲間も増えて防災士を目指す女性Dさんのご様では、全国的なボランティア活動でのドローン空撮による災害場所上流部や砂防堤等の状況把握が出来る動画を提供戴ける機会にも恵まれたりしているのも防災活動をしていればこそですが、身近な地区での活動に於いては、時折心が折れそうにもなる中で、同じく防災活動を通じて面

識を戴いている行政の方からも激励のエールを戴いて、奮起したりと波のある活動ですが「防災活動は、地味だけど信念を持って続けるのが尊い！」と改めて思い返して活動継続への力を得たのもこの度の災害での体験によります。

これからの復興復旧への道のりは、長く行政主導での「人・力・金」に負うところが、大きな要素と認識をして居りますが、住民個々の意識改革なしでの「地域（地区）」に於いて防災減災への自主的取り組み！」は、所詮掛け声でしかありません。

地域でのネットワークとなる部分へは、機あるごとに行政としての毅然とした姿勢を示して戴くように強く要望を致します。



瀬野 商店街（旧道一帯の被災状況）柳迫撮影



J R 瀬野駅周辺の被災状況（柳迫撮影）



⑩【広島市安芸区矢野西】

矢野西四丁目

広島市防災士ネットワーク 会員

吉田 英明

題目「生活避難場所と災害ボランティアセンターでの

支援活動から見えてきたこと」

■災害発生前の避難準備・高齢者等避難開始、避難勧告、避難指示《緊急》発令状況

◆7月6日午後5時34分、安芸区災害警戒本部から避難準備・高齢者等避難開始の発令。

7月6日午後6時5分、安芸区災害対策本部から避難勧告発令。

7月6日午後8時17分、安芸区災害対策本部から避難指示《緊急》の発令。

◆災害発生・土砂災害発生時刻は7月6日午後7時20分頃（中国新聞朝刊記事から）

7月6日午後7時20分頃、矢野町を取り囲む東西南の山々が降り続く雨により土砂くずれが発生し、絵下山を源流とする矢野町の中央を南北に流れる矢野川、宮下川が流出した土砂により氾濫。

この土砂崩れで県道矢野安浦線は通行止めとなり広島く熊野線の道路は早朝から深夜まで大渋滞となり、JR呉線は坂町から呉間の至る所で線路が土砂災害の被害に遭い、呉線は海田市駅で運

行中止となった。また矢野東7丁目の防犯カメラの映像では洪水で川となった県道を車両数台が北方面に押流されていくのがYouTubeの映像から確認された。

梅河ハイツでは土砂が完成したばかりの治山ダムをのり越え大量の土砂が団地内の民家を押し流した。この土砂のなかにはコアストーンと呼ばれる直径約3m、重さ30トン（広島市推計）の花こう岩が含まれていた。

1の1 生活避難場所、矢野西小学校体育館での避難者の方から聴き取り

①難場所へ向けて

7月6日（金）午後6時25分、まだ小雨のなか自宅から高台の矢野西小学校へ徒歩で向かう。途中、土砂災害警戒区域（6月26日、広島県による土砂災害危険区域の指定に係る説明会で指定予定）の急傾斜地の異常はないか確認しながら午後6時55分避難場所の体育館に到着。

体育館には広島市の職員の方が2人と大浜町内会の一家4人（小学生2人）が避難。

この家族の自宅は「矢野川より低地にあるので食料品、飲料水などの非常持ち出し品をプラスチックのケースに置いて早めに自家用車で避難しました。」とのお話。体育館は高台にあり冷たい風が通りぬけて暑さは感じられない。避難者が増えないので19時

15分頃、強い雨のなか避難場所をあとに帰宅の途に。

その後の避難場所での避難者のかたから聴き取り状況等

② 7月11日（水）午前9時45分～10時54分

③ 7月13日（金）午後0時50分～1時35分

④ 7月15日（日）午後3時30分～4時40分

⑤ 7月19日（木）午前11時10分～11時30分

◆ 矢野東7丁目から避難された20才代の男性

6日（金）の夜大雨のため家族に車で迎えに来てもらったが家に帰れず一人で避難しています。

・ 困っていることはありませんか？

災害の被害情報が知りたい、スマホでは詳しく分からない。

◆ 矢野東6丁目から避難された夫婦のかた

矢野福祉センター・矢野小学校に避難したけれど、断水・停電のために矢野西小学校に避難してきました。

・ 体調・困ったことはありませんか？

いまのところないです。

◆ 小屋浦町から避難された中年の女性

広島からタクシーで帰宅途中、坂町水尻から先に行けず7日（土）からここに避難をしています。

小屋浦の自宅は低い場所にあるため一階が土石流で床上浸水被害に遭いこれからどうしたらいいのか

・ 水、食べ物はいくらありますか？

十分足りています。

・ 罹災証明が必要ですね

・ 窓の外に衣類を干されていますがどこで洗濯をされたんですか？

トイレで洗濯をして窓の外に干しておけば直ぐ乾きます。

・ 着替えはどうされていますか？

トイレで着替えています。

・ 長期間の避難になれば洗濯機があつたらいいですね

早く家に帰ればいいですね

エコノミークラス症候群にならないように体操をしたりして身体を動かすようにしてください

◆ 大浜町内会から避難された家族5人のかた

町内会長、矢野町内会の業者さんからの支援がありがたい。

◆ 田中町内会から避難された男性

8日（日）から避難している。

・ 体調、食事、困ったことはありませんか？

足が悪いけど体育館は涼しく広く体調は良い。

情報がほしい、テレビ・ラジオの設置を希望

地図で町内の通行止め箇所などの情報が知りたい。

水・食事は足りている。

車イスで利用できるトイレがない。

◆矢野西5丁目から避難された親子（男性）

・いつ避難されたのですか？

玄関が土砂で埋まり戸を開けることができず窓から外に出て矢野小学校へ行こうとしたが道路、校庭は浸水しており避難できなかった。今日（11日）父は持病があり歩くのが難しく救急車でここに避難しました。

・困ったことはないですか？

父の薬を持って避難できず困っていたが、この下の病院で薬を貰うことができました。

・お父さんの体調が悪くなったら遠慮しないで受付の方につてください。

◆大浜町内会から避難された高齢の男性

・避難はどのようにされましたか？

自宅が浸水し家の修理に時間がかかりそうだし、あなたは一人者だから避難場所へ避難したらと近所の人からのすすめで自分で避難しました。

・なにか困ったことはありませんか？

避難をしてタダで食事をしていると陰口を言われた。

自動車運転免許の更新手続きは済んでいるが新免許証を警察に受け取りに行かれないで困っている。

コーヒーを飲むのが習慣になっており、朝コーヒーを入れて飲むために体育館の中央に準備してある机でコーヒーをいれてい

たら、近くの避難者から「うるさい。」と怒鳴られた。

食事が口に合わない時は、近くのコンビニへ行って購入している。新聞をいれて欲しい。

◆体育館のステージの前で避難をしている高齢の女性と若い男性の親子のかた

・近くの避難者の話で、「ステージ前からトイレまで遠いため高齢の女性がトイレに間に合わなかつそうです。」

1の2 避難場所、矢野西小学校体育館以外に避難された方から聴き取り

◆矢野東7丁目から矢野南小学校に避難された三人の家族のかた

・避難時はどんな状況でしたか？

自宅にいたら外の様子が変だと感じ、外を見ると水が流れており、避難するために夫が急いで近くの駐車場に駆け付けたが激しい水の流れて自宅に戻ることができず、近くの家に避難。

残った二人は自宅の2階に避難して一夜を過ごし、矢野南小学校に避難しました。 自家用車は土石流に流されました。

◆矢野西5丁目から避難されたかた

娘を矢野駅まで迎えにいった家近くまで帰ったら、道路が水が勢いよく流れておりこれ以上前に進めなくなり、娘は矢野福祉センターに避難、私は近くの駐車場に車を置いて矢野公民館に避難。翌朝矢野小学校へ避難しました。

◆避難場所での行政と避難者の対応

広島市の職員2名が毎日交代で体育館の入口に設置された受付テーブルで対応、(午前8時30分～午後9時)

◆避難場所での食料

避難者への食料は、行政が7月7日(土)の朝から給食を準備。行政が提供する食料は、朝はおむすび2個、昼は三角おむすび2個またはパン、夜は弁当。町内のお好み焼店から焼そばの差し入れがしばらくあったが、食中毒発生の恐れがあるとの理由で差し入れは中止となる。

◆体育館内の猛暑等の対策状況

- ・7月6日大型扇風機1台設置。
- ・7月11日大型扇風機が3台設置された。
- ・7月13日大型扇風機からスポットクーラーに取り替え(3台)。
- ・7月15日スポットクーラーから大型クーラーへ取り替え(8台)。
- ・7月18日冷凍庫が設置された。
- ・7月18日洗濯機が設置された。

◆体育館内での避難者の方々の状況

避難された順に窓側、ステージの前と壁側に沿って場所をとられ、中央部分は足の悪い男性だけ避難された当初は、床にレジャーシート・ブルーシートを敷いたり中には直接床の上で休んでおられた。数日たったころ巻いてあった体育用のマットを広げベット代わ

りに利用されているのが見られた。

その後、7月13日にダンボール製のベットと衝立が設置された。

◆風呂の利用状況

・矢野町内のお風呂屋さんが風呂を無料で開放、ただし午後5時から利用可能。

・7月15日から、避難場所の矢野南小学校で自衛隊が設営したプール型の風呂が利用可能となる。ここから矢野南小学校への移動はマイクロバスで送迎。

◆体育館を訪ねて来られた方(確認できた方)

- ・警察官(男性と女性)、
- ・安芸区「医療支援班」

・矢野町町内会連合会会長・社協副会長」

◆避難者の方の行動と要望等の対応結果

・矢野西5丁目から避難の男性は体調が悪くなられ病院に入院された。

・大浜から避難の高齢の男性の自動車運転免許証は受け取ることができた。

・新聞は翌日から5部置かれるようになった。

◆避難場所から見えてきたこと感じたこと

- ①矢野学区以外からの避難者が多くあった。
- ②矢野町以外からの避難者もあった。
- ③聴き取りにはどんな言葉で話をすればよいのか。

④聴き取りには明るく、心よく対応していただいた。皆さん話好き？

⑤避難者の方は支援されることに感謝され遠慮がちであった。

⑥ちょっとした音に注意が必要。

テレビ等の設置には設置場所の検討が重要である。

⑦女性の着替場所が確保されていなかった。

⑧女性の洗濯物の干場が確保されなかった。

⑨避難されている方に避難所運営ルールについて、あれこれこちらの理想を言うのは躊躇した。

⑩避難者が使用できる部屋を多くできないか。

⑪行政から避難者への食料配布が早かった。

⑫町内のお好み焼店から差し入れ、銭湯の無料開放があった。

⑬各種団体からの炊き出しは見られなかった。

⑭警察官の巡回は防犯上必要であり防犯組合も続けられることをお願いしたい。

⑮避難者の少ない避難場所では各種組織の支援が少ないように感じた。

⑯高齢者の避難者が多かったけど避難行動要支援者の支援が確実にできたのか。

⑰受付・防犯体制等避難所運営体制が十分に行われなく行政に任せきりで避難者の要望を十分に聴き対応することができなかった。

⑱避難所運営は訓練どおりにはいかない。

⑲災害時には自主防災会役員も被害を受け十分に活動できない。

活動できる防災組織への見直しと今後は長期避難者のための防災訓練へと内容の変更が必要と思われる。

◆9月5日 矢野西小学校 避難場所閉鎖

◆矢野西小学校の子供たちは、体育館、プールの利用ができなかった。

2の1 安芸区災害ボランティアセンター矢野宮下サテライトでの運営支援活動

・災害発生後、7月14日（土）安芸区災害ボランティアセンターが矢野町のほぼ中央となる宮下川沿いの宮下公園・老人いこいの家 清風荘に矢野宮下サテライトを開設。

・サテライト本部長（矢野町社会福祉協議会 会長 望月 寛）

安芸区社会福祉協議会のスタッフは安芸区船越から宮下サテライトまで炎天下自転車移動することになった。

・宮下サテライトは安芸区社会福祉協議会のスタッフ（若狭・河野・崎井）が公園全体を見渡せる公園の中央に構える形で配置されました。（別図 配置図のとおり）

◆7月14日（土）宮下サテライトでのボランティア活動開始

・活動は先に各戸へ配布された「ボランティアニーズ受付票」の回答をもとに活動しますが回答枚数が少なく、ニーズ場所への道路状況が不詳で道路状況を確認することからスタート。

- ・それまでに矢野小学校・矢野幼稚園・福祉センター・公民館等の公共施設の被災状況を把握することから活動を始めた。
- ・スタッフの方は地理に不案内から「矢野町案内図」にニーズ場所と道路状況を書き入れることに。サテライト開設早々災害の被害が大きい矢野西7丁目、東7丁目の町内会長さんから早くボランティアの派遣要請があった。
- ・ボランティアセンターでは、まだ道路状況等が把握出来ていなく派遣要請があった地域は避難指示が解除されていない所もあり、二次災害など安全面を考慮するとボランティアを派遣することはできず苦渋の対応となった。
- ・道路状況を把握するため歩いて町内を見て回ったところ、矢野東7丁目、矢野西7丁目の県道・市道や宅地に土砂が堆積し、押し流された数台の車両が道路上に放置され、矢野川の中には数台の車両が折重なるように放置されている光景にであった。
- ・矢野西6丁目では道路が川となり、矢野川から宮下川に流れこみ、近くの福祉センター・矢野幼稚園には数台の車両と土砂が堆積。
- ・矢野小学校の校庭は1m位土砂が堆積しているのが見られた。多量に堆積した土砂と車両の撤去は、ボランティアでは困難で重機による撤去が必要。
- ・このような状況での矢野西7丁目、矢野東7丁目のニーズに対しては道路事情が復旧されるのを待つしかなく、被害の大き

- かった地域の方には理解してもらおうようにお願いするしかなかった。
- ・矢野東7丁目の天神町内会では、引き続き個人で重機を使用しでの復旧を行うことに、また現地に「連合組織」によるボランティア拠点を設置し対応することになった。
- ・宮下ボランティアセンターでは被害状況が少しずつ分かるにつれてボランティアの派遣もスムーズに対応できるようになった。これには、ボランティアの現地案内役として矢野町民児協の方による協力がありました。このような協力はありがたいことであった。
- ・宮下ボランティアセンターでは毎日冷たい飲料水・冷やしタオル・氷の準備で多量の氷が必要であった。氷の確保にはGコープから配達、K遊戯場から無償で提供された、ただし氷はボランティアセンター運営協力者（主に広島市防災士ネットワーク会員 Tさん）が毎日バイクで受け取りに行くことに、またニーズ現場への水・氷・資材の運搬等で活躍したのが小型のバイクであった。
- ・氷については矢野町女性会から町民へ氷の提供を呼びかけがあったことから毎日ボランティアセンターに個人から届けられました。この氷を使って冷した飲料水・冷やしタオルの作成には矢野学区以外の女性が運営支援ボランティアとして多数参加され、朝早くから作業がおこなわれた。

◆7月14日(土) 午前9時からボランティア受付開始

・ボランティアの多くはJR呉線海田市駅で運転中止と国道31号線が大渋滞のため海田市から徒歩で宮下サテライトに参加。

・ボランティア数・・・128名

・矢野小学校通学路を重点に矢野児童館、宮下公園廻りのニーズ対応。

◆7月15日(日) 午前9時～10時30分ボランティア受付

・ボランティア数・・・200名

◆ボランティアに参加した組織等

・広島市災害ボランティア連絡調整会議メンバーのJC、広島市防災士ネットワーク等。

・防災士ネットワークは安芸区内のボランティアセンターの活動状況等の情報を共有しながら各センターでの激励、運営支援のため防災士派遣、物資援助の活動をおこなった。

・センター運営支援として岩手県・宮城県・東京都など全国の社協から。またニーズ対応のボランティアの方も全国からの支援者。一部の方はマイスコップ持参でボランティアに参加。

・中学生、高校生、矢野町内のボランティア参加者も、小学生と一緒に参加された方、2回3回と複数回参加された方など多数のボランティア参加があった。作業は連日炎天下のなかで熱中症と戦いながらの活動となった。また郵便局前、公民館など各地で有志による支援拠点を構え活動を行う姿も見られた。

◆7月の中頃から、「災害臨時NPOチーム旅商人」が埼玉市からボランティアに参加。

・主にニーズの中で床板を剥がして床下の泥撤去作業と公園内に設置した軽トラを改造した車でボランティア、地域の人達にコーヒーなどが無料で提供された。

◆7月14日～9月5日の間で宮下サテライトでは台風の接近に伴い二度にわたりテント撤収資材等の清風荘へ保管、テントの組立、資材等の運びだし設置をすることとなった。

◆サテライト運営支援で資材・物品の補充

・土のう袋・スコップ・一輪車など不足する物は速やかに補充がされ運営に支障を起こすことがなかった。

また、地域の方が土のう袋を貰いたい、一輪車・スコップなど借りたいとの話があれば 快く対応された安芸区社協スタッフに感謝するばかりであった。

◆9月5日(水) ボランティアセンター宮下サテライト閉鎖

・延べボランティア数・・・約5、400人(矢野町社会福祉協議会情報)

・ボランティアニーズ数の減少と宮下サテライトのスタッフ数、ニーズ場所が遠距離でボランティアの移動に時間がかかる等を検討した結果閉鎖することになった。

・一部地域でボランティアニーズが残っていますが、今後は安芸区災害ボランティアセンター本部で受付窓口を一本化しボラン

ティアニーズに対応することになる。

◆宮下サテライトでの私の運営支援活動日数は41日でした。

矢野宮下サテライトで運営支援から見えてきたこととお願い

①サテライトを設置して早期にボランティアニーズに対応できなかった。

②サテライト本部長・副部長とも自宅が被災した中での活動は平常心でいらなかったのでは。

③矢野西7丁目、矢野東7丁目の被災された町内会の会長さんが被害状況を詳しく調査し、〃そんな余裕はない〃かもしれないがサテライト本部と早期に情報共有ができなかったのか。

④また、個人で行政等に対して復旧へのお願いはむずかしく、町内会長またはボランティアセンター長を含めて対応できなかったのだろうか。

①、②③、④に対してのお願い

①・③ボランティアニーズ票の目的を詳しく説明し早期の配布と回収を対策をお願いしたい。

② 非常時には安心して交代できる人・組織作りが必要だと感じました。

④ ボランティアセンター本部とは別の災害対策本部を立ち上げて被災状況を調査し情報をボランティアセンターと共有するようしたらよいのでは。

・災害対策本部はあったのか？

あったのならば見えるような場所に対応して頂きたい、そうすれば皆さん納得されたのではないでしょうか。

2の3 矢野宮下サテライトで運営支援から見えてきたこと

◆土砂災害の危険地域と認識されていたのだろうか？

・今回の土砂災害か所は行政が作成したハザードマップで示された危険個所であった。

◆なぜ避難行動が遅れたのだろうか？

・今まで大きな災害に遭うことがなかった。

・ダム（治山ダム）が完成したばかりで安心していった。（梅河ハイツ）

・いつどのタイミングで避難するべきかよくわからなかった。

・近所の人はまだ避難していなかった、近所の人が避難しだしたので避難をはじめた。

◆避難場所はどこか知られていなかった？

・災害種別により避難場所地が異なり避難場所がどこになるのか知られていなかった。

◆30トンのコアストーンを含む土砂の流れ、車両が濁流に流された。自然の力には勝てないと認識されていたのだろうか？

・災害に遭ったことがないのでわからなかった。

◆過去に大災害があったのに、教訓にならなかったの？

・災害はあったような気がするがよくわからない。

実は明治40年7月15日の大災害を伝える「災害の碑」が矢野東

5丁目2番矢野橋のたもとにあり。碑は当時矢野村の北の端となる海田村への主要道路のそばにあったが、現在は北部の干拓地が埋め立てられ宅地に開発され、この地域を含めて家屋が建て込んでしまい碑の存在すら忘れられることになった。当時、明治42年の人口は4,5400人ぐらいと推定される。



3 防災・減災に向けてできることは？

今回の海田町、矢野町、瀬野川町、畑賀町、瀬野町、坂町、小屋浦町：の災害から大多数の方が「自然の力には勝てない」と認識され、防災について関心をもたれている。いま自主防災会として何らかの行動が必要である。

◆行動として、広島市が進めている「わがまち防災マップ作り」を提案し、皆で防災・減災を考えてゆくべきである。

防災・減災を目指し、ここ矢野学区で「わがまち防災マップ作り」を行った町内会がありました。

町内会は〇〇町内会で、町内会の南側の山には土石流危険渓流があることから危機感を持たれた町内会長さんがマップ作りを計画されました。町内会の道路はクランク状の一本道で災害時の避難に時間がかかることから早めの避難開始・避難場所と避難ルートの検討。そして避難が遅れた場合の緊急避難場所も検討。防災マップは平成30年5月に完成し各戸に配布されました。配布されたわずか2カ月後に土石流が発生し町内会の周辺では土砂が堆積するも大きな被害はないようでした。（被害が小さく見えても人によっては大きい場合もあり、外から判断するべきでないこともありますのでご了承ください）

◆避難場所と避難ルートはどうするか、日頃から自分の目で確認しておく。

◆避難はいつするのか、行政などから発令される①注意喚起②避

難準備・高齢者等避難開始③避難勧告④避難指示（緊急）のうち遅くても③避難勧告で避難を開始。

④避難指示での避難は危険性が明らかに高まった状況、できれば②避難準備・高齢者等避難開始で余裕をもって避難をする。

◆自主防災会は空振りを覚悟で①注意喚起の段階で避難場所を開設し避難者を早期に受け入れる体制をとる。

◆近年の世界的な異常気象では、100年に1度の大災害ではなくまた地震発生確率も高まっていると言われている。

大災害はいつ起きるか分かりません。防災・減災に向けて心がまえと対策を防災訓練等の機会をつくり周知していくとともに、今後矢野町全体で今回の災害の被害を次の世代に風化させることのないように継承していきたいところです。

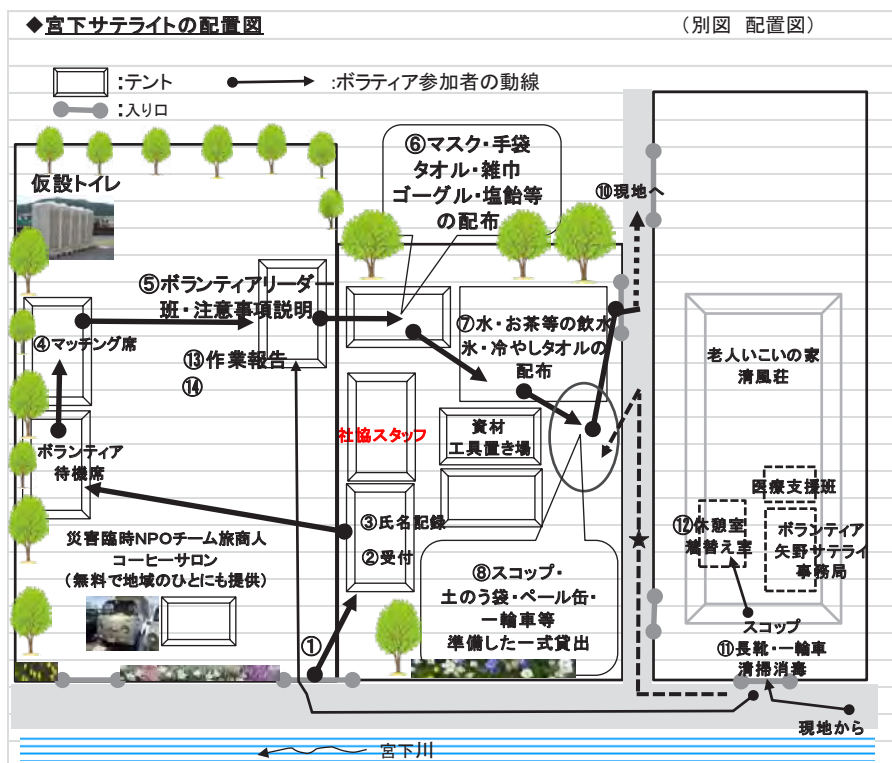
以上体験と書いていただきました。

宮下サテライトの配置図

①西側入口からのボランティアが来セン↓②センター受付（ボランティア保険加入の確認）↓③ボランティア確認・登録↓④ボランティア待機席、マッチング席↓⑤ボランティアリーダーから班の確認と注意事項の周知↓⑥マスク、ゴーグル、タオル、軍手、塩飴等の受け取り↓⑦水お茶等飲み物、冷やしタオルの受け取り↓⑧角スコ、丸スコップ、土のう袋、ペール缶を一輪車に標準装備を貸出↓⑨現地案内者とともに公園南口から現地へ↓⑩現地

作業・作業終了↓⑪老人いこいの家清風荘前でスコップ、ペール缶、長靴等の洗浄↓⑫クレーラー設置の清風荘で休息↓⑬サテライトに戻りボランティアリーダーが当日の作業報告↓⑭解散 以上のような流れ。

・★汚れたスコップ、一輪車の洗浄と返還は運営支援者が実施。



宮下サテライト南側から



②受付



③ボランティア受付②受付



④待機席、
マッチング席



⑤待機席、
マッチング席



資材置き場



⑧スコップ、
一輪車の貸出し

矢野西五丁目

河村洋美

題目「指定の避難場所ではない矢野公民館へ避難した私達」

7月6日夕方6時過ぎ、「お前、出てみいや！」と夫の緊迫した声に驚いて家の外に出てみると、表の道路が深さ30cmくらいの川のようになっていて、家の前に置いて、いつも水やりをしていたプランターがプカプカ浮いて流れている。

咄嗟に近所の3人暮らしの年寄りの家族のことが頭をよぎった。連れに行かなければ。と家の方に目をやると、すでに隣の散髪屋のお兄さんが79歳のお爺さんを連れてきて避難してくる所だった。すぐに公民館へおじいさんを連れて行きロビーに座らせ、残る2人を連れに行こうとしたけれど、15分の間に水は膝上ぐらいまで来て、土砂交じりの水に逆らって進むことはできない。止む無く、「公民館へ行き、館長へ避難させてほしい」と話していると、帰宅難者が次々と入ってきた。

自転車で帰宅途中、転んでけがをした男性、車で帰宅しようとしたが、車が流されそうなので近くの駐車場に停めさせてもらった女性等、次々と入館してくる。館長が鍵を持って2階に上がり、避難者の受け入れが始まった。

「おじいさんの家のほかの家族2人は、近所の家に預かってもらった。」と夫が帰ってきた。

矢野小学校へ避難しようとしたけれど、道路が川のようになっ

て渡れない。消防の人が「公民館へ行け。」と言われたと、裏道を通ってたどり着いた東町内会の家族が何組も訪れる。

「白鳥の上のほうが崩れたらしい。」とか、断片的な情報が入るが、テレビは無く、スマホの避難指示の音が鳴り響く中、23人は眠れない夜を過ごした。

公式の避難場所ではない公民館に朝食は無い。近所の人の差し入れと、公民館職員の奥さんの作ってくれたおむすびでホッと息ついた朝、目にしたのは公民館の電柱の脇に根の付いて川の剥けた大木が2本とタンスらしき物が流れついていた。

橋に瓦礫がかかって流れを変え、道が川になり、Kさんの家が水の通り道となり、家具が流されたのだ。

3日目になって水はひかないが、公民館が避難場所に指定されて、食事や毛布が届き始め、市役所の担当の人が当直をしてくれるようになった。

雨が止んで、日中は家の片付けに帰るが、泥を洗い流しも、又どろどろの状態を繰り返し、ともに避難しているSさん家族の泥の掻き出しは、高齢のためとても無理と思われたので、私が大家さんにかけて合つて、清掃業者に頼むことに了承してもらった。

真っ黒い泥を掻き出すのに丸2日。家の中を乾かすのと、裏の川の水が引くのを待ち、壊れた入り口のガラス戸をベニヤ板で補修してもらい、最後に残った2家族5人は7月20日避難場所を引き上げることができた。

生まれて71年、この場所で生まれきた。

危機感のなさと言われれば、そのとおりだがバケツをひっくり返すような雨ではなかったし、サイレンも鳴らなかった。

原始的な方法だが、けたたましくサイレンを鳴らしてもらったら、私でもハツとするかもしれない。

もう一つ、「雨が3〜4日降り続いています。何ミリの雨は、大地に〇〇ミリ位水を含んでいます。土砂崩れの起こりやすい条件になっています。堅固な造りの建物に避難を考えてください。」と言っただろう。「指定された避難場所へ行け。」と言わず、「近くのしっかりした建物に移動しましょう。」と言ってほしい。避難場所と避難生活をする場所は違うのだから。

「子ども110番」のような「避難110番」があってもよいのではないか。

「個人の家で、何人も夜を明かした。」という話を聞いた。何かあった時、駆け込める避難場所、それは近くにある堅固な建物、マンションでも病院でも公共施設でも良い、受け入れて欲しいと切に願います。



題目「安否確認」

○7月7日朝、昨日の豪雨が信じがたい小康状態、安否確認は「今」担当区域を巡回

○結果

高下谷…住宅横 崖上の畑が土砂崩落、土砂流入1軒
濁流により車数台、流木等で道路遮断（100mぐらい陥没）

矢野西七丁目
田口文男

床上浸水1軒、倉庫崩壊1軒

西 条…住宅裏山斜面崩落 土砂倒木により家屋崩壊

同家屋反対側のアパートで道路に面した平屋建て、2階建ての2件が壁、窓が損壊。

合計6軒が被災されました。1日も早く平穏な暮らしが戻ることを祈念します。

○担当区域外については、思い浮かべる都度 涙があふれ、記すことにならず、お許しの程。

○サテライト支援

開設後、5日目に応援要請を受け、参加10数回案内させていたできました。

県内外から矢野へ約6000名の方々が活動されました。

支援要請宅に案内する際、話すに「東日本、熊本震災でお世話頂いた御礼に参りました。居てもたつてもおられんで、来たんじゃない」等々、9月5日最終日には今日で10回目です。(3名)話された方がおられました。

地元の県庁職員、小中高大教員(クラブ員含む)、の姿も散見されました。

○矢野小6年生・児童が学校を見に来て、これは大変、自発的に活動、この姿を見た弟が「僕も行く」、この話を聴いた父親が「それじゃー親子で行こう」と活動・・・

感謝、感謝ありがたい。勿体ない。何度も何度も本当にありが

とうございました。

※矢野小授業再開、多くの保護者による活動の成果 大なりと聞きました。嬉しい思いを味わいました。校長先生の熱い熱い思いを感じました。ありがたい。勿体ない。

題目「災害に寄せて」

先日、7月6日の災害の原稿の依頼を受けた西谷でございます。

いざ自分が体験した恐怖を書こうとペンを取りましたが、災害の怖さをどう表現したらよいか、難しく書き表すことができません。

でも、私自身76年間、生きていて体験した事実は一生涯わすれることは無い事実だと思い、胸にしまつて、これから生き様を全うして、元気に行かされた命を大事にして生きて行こうと思ひます。

私には、書けることはこれくらいしかありません。依頼をうまく表現できなくてすいませんでした。

追伸…随分考えましたが、本当に活字に表現するのは難しいことです。依頼にこたえることができなく、提出が遅れてしまいました。随分考えました末に提出します。

矢野西七丁目
西 谷 クニ子

⑪【広島市安芸区矢野東】

矢野東二丁目

加藤 由美子

題目「7月6日の西日本豪雨について」

共働き夫婦と息子2人 高3・高1の4人の家族です。

昼過ぎの午後1時になって私の（母）会社では「J.Rが止まるかもしれないからできるだけ早く仕事を片付けて帰るように」と指示が出ました。

子供たちは、朝から自宅待機を経て、休校になり自宅にいました。

昼前から豪雨になる情報が判ると団地の自主防災会の役員のみなさんが、手分けをして団地のみなさんに避難を呼びかけてくださっていたようです。

うちは共働きのため、平日はいないのでいつも申し訳なく思っています。

私は3時 なんとか仕事を片付けて広島駅に向かうと、もう既に電車は止まっていてタクシー・バスも長蛇の列となり並びつつも、主人に連絡をとり、なんとか迎えにきてもらうように頼みつつ待っていました。

ひどい渋滞だったらしく5時半ごろにやっと迎えにきてもらって広島駅から海田方面の自宅に向かっている間にどんだん雨はひどくなり、車で帰る道中にも船越のあたりで、これは車が止まる

かもしれないと思うほど水がたまっているとありました。

自宅にいる子供たちから何度も「雨の降り方怖いけど自分たちは自宅で待機していて大丈夫？裏山は崩れないかな？」「泥水の雨がすごい勢いで上の団地から流れてきてるけどどうしよう？」など何度も電話をかけてきました。

私は「避難するから荷物をまとめて待つておいて」と言っていたのですが、後から考えると、「数分で帰宅するから」といって待機させておいて何もなかったから良かったけど、土石流が流れてきていてもおかしくなかった。

子供が最初に「雨がひどくなったから逃げようか！」と言ったときに「逃げなさい」というべきだった。と反省しています。

本当に何もなくて、命が助かってよかったです。

午後6時19分から、緊迫した感じで長男から電話が計6回入っていて、自宅に着いたのが29分ごろ、もう坂道が常に水が流れるような感じになっていました。

どうやって避難しようか？と考えていたら、避難所開設いただいた福祉センターが「車で避難してもよい」との情報をいただいで、自治会の同じ班の人に「逃げますよ」と声をかけてまわり、車に乗り込み避難しました。

福祉センターに着いたところに、団地の自主防災役員のみなさんより何度も連絡が入り「お年寄りや、逃げ遅れた人の手伝いをしてください。」とのことで、主人だけが車でもどることになりま

した。

車から降りて福祉センターの入り口に向かって歩くと、ひざ下10cmくらいまで冠水していて、ほんの少しだけしか歩かなかったのに、とても時間がかかりました。

この冠水の中、もしも車でなくて歩いて福祉センターまでくるとは不可能だと、実際冠水の道路に立って初めて実感しました。

自宅に帰ってから避難所へ向かうまで数分の出来事でしたが、冠水するスピードにも驚きました。

主人が団地に戻り、手助けをしていると、爆発か小型ジェット機が落ちたかのような音がしたらしく、となりのマンションの駐車場に大量の土石流が落ちてきました。

うちの団地の一軒は、その崩落で半分がなくなってしまいました。大変衝撃的な様子でした。

団地ととなりのマンションの間には沢があり（南幸川という名前がついているのを後で知りました）もうずっと長い間、この沢にそって土砂崩れの危険があるとは警戒をしてきました。

予測通り、この沢にそって崩落があり、ある意味この危険予測があったからこそ自主防災活動を進めてきて、今回人的被害にならなかったのだと、団地のみなさんのおかげだと感謝しています。

大雨が降り、災害レベルになるまでのスピードの速さを考えたら、老人の方などは特に避難準備で動かなければ無理だなと実感しています。

そして避難するときのために、雨の中歩くための準備もしておくべきと思い、靴や長い棒（前に道があるか付きながら歩くための）、明るい電燈など準備しました。

あの豪雨から台風などの時にも何度も避難しました。

避難しても被害はなくて、避難も必要がないのではないかと！と思うことも何度もありましたが、自治会の会長さんの合言葉「被害はなくても避難訓練をしていると思って避難しましょう」という言葉に従い、身を守る活動をしていければと思っています。

矢野東二丁目

ペンネーム：Y・T

題目「平成30年7月豪雨災害を振り返って」

あの豪雨災害から1夜明けて7日朝、自宅が心配なので避難所から帰る。

近くまで帰ってみると、自宅は無事な様子。少しホッとしたのもつかの間、家の階段下から見ると裏山が大きく崩れ、庭は大変な瓦礫・土砂で半分位埋まり、山側の部屋は大きく破壊され瓦礫・土砂が入り込み何も出来ない状態でした。

ご近所も山側5軒は大変な被害でした。幸いライフラインの方は大きな支障もなくどうにか生活は出来そうでした。80歳代の夫婦2人暮らしでは何もできず主人はすっかり氣力を無くして何も

手に着かない様子、近くに住んでいる姪が強引に連れて帰り、夜は好きなお酒をいただいたりしてゆっくり泊めてもらい、元氣になって帰りました。

7月9日（3日後）には、自治会防災会の方・近所の方が来て下さり災害部屋の片づけ、防犯の面等考慮、屋根にはブルーシートを掛けていただきました。災害後の、6日間の避難は心身ともに疲れましたが、多くの方からのお見舞い・暖かい言葉に励まされ辛い状況を乗り越えることが出来ました。

この地区は土砂災害危険地域に指定されている。自治会の防災会は若い方を中心に、しっかりした組織を作られていて災害前も度々集会があり防災マップ作り・配布などあり少しは防災に対する意識があつたように思いますが、心のどこかに今迄50年くらい何事もなかったからと云う気持ちはあつたと思います。

災害前日（6日）は防災無線・携帯電話など、ひっきりなしに情報が入り、防災会役員の方が早めの避難を呼び掛けて下さり、午後5時前には避難しました。避難所では携帯電話に避難情報がどんどん入って来るので大変な状況になっていることは大体予想していましたが、やはり帰ってみて吃驚いたしました。

公的機関からも援助をしていただき、災害後3ヶ月弱で重機による瓦礫の撤去・今現在は法面にブルーシートが張ってあり仮工事をしていただいています。今後大雨が降ると二次災害の発生も考えられ大変不安です。

住宅の改修も10月末から取り掛かっていただき、ほぼ使える状態になり元の生活に近づきつつあります。

避難せず山が崩れるのを、目の当たりにしたらどんなに怖かったかと思います。高齢なので早めの避難を心掛けたいと思っています。

県・市・地区の方々には大変お世話になり有難うございました。

矢野東5丁目

田中町内会 自主防災会 委員

助 金 淳

題目「平成30年7月西日本豪雨災害」矢野東5丁目の現場では」

はじめに」

平成30年7月6日の豪雨では、広島県内で死者108人、行方不明者6人を出した。安芸区で23人、矢野町でも12人（町民8人）の死者を出す大惨事となった。筆者の住む田中町内会は矢野東5丁目と六丁目の境を流れる熊崎川が土石流で埋まり土砂があふれ、町内会全体を呑み込んだ。

筆者は、当初は田中町内会自主防災会委員として動いたが、その後、土石流流域住民（田中、熊崎、花上、立田、鯨の5町内会）で立ち上げた臨時の対策会議で災害担当に指名され、町内会長をはじめ、その他の役員の方々のご指導のもと事態に対応すること

になった。この度本誌の場をお借りして、この未曾有の出来事に住民がどのように対処したか筆者の体験を通して報告をさせていただきます。

～救出～

事態を時系列で追ってみる。

7月5日からの雨は、7月6日午前中に一旦小止みとなったが夕方に向け雨脚を強めた。

午後7時9分、国道沿いに住む知人が矢野アンダーの赤色灯の点灯に気づき、メール連絡をくれた。次いで午後7時45分か50分だったか、わが家の子どもたちが2軒東隣の県道を濁流が流れているのに気づいた。外に出てみると、濁流は県道を足首よりも深く流れ、さらに勢いを増してきた。花上交差点では、上り線に停車中の6台の車が流れに動けなくなっており、さらに県道の上流から簡易トイレが流れ来て、交差点を出合橋方面へ左折するのを見て初めて、事態の異常さを実感した。

流れに足を取られながら道路を渡り、停車している6台に近づき事態の異常さを告げた。見ると乳幼児2人を含むお子さん連れの女性もあった。自宅に戻り、高校生の長男を呼び、ロープ代わりにドラム型延長コードを持ち出して、再度交差点に戻り、車中の人に避難を呼びかけた。なんとか扉は開き、6台のうち脱出を拒否された先頭車両を除く5台の車から、男女8人を車外へ誘導

した。コードを道路わきの歩道の柵に結び、長男と2人で道路向かいのわが家へ誘導した。さらに途中で50歳代の女性と、80歳代の母親2人を消防団員から委託され、計10人にわが家へ一時的に避難していただいた。

緊急避難を伝えるために110番通報をした。電話は通じなかった。午後10時近くなって警察から返信があった。避難者全員が電話面談を受け、緊急避難として記録された。

雨は激しく、断続的に降り続き、県道からわが家に流れが入り込んできた。みるみる増水して、深夜までに縁側のサッシ戸を10cmほど超える水位となった。縁側と台所が浸水した。避難者の協力も得て懸命に水を汲み上げて流し台に排水した。幸いに下水は生きていた。

～一夜明けて～

翌7月7日朝、雨は小止みになった。避難者らは、各々家族の迎えで帰宅、または、生活避難場所の矢野西小学校へ移られた。

一時床上まであった水が引いた後、自宅はサッシ戸の高さまで深さ約50cmの土砂と泥に浸かっていた。

電話で町内会長以下、町内会役員と連絡を取り合い、各班長が班内の住民の安否確認し、長期戦になるだろうことを踏まえ通院状況と薬の残数を確認した。

県道に出てみると土砂は50cmほど堆積し、流れはさらに新たな

土砂を運んでいた。交差点に留め置かれた車は扉まで埋まっていた。先頭のワゴン車に残った男性2人には、夜のうちに軽食と飲み物を差し入れたが、朝には姿がなかった。その車を含め、多くの車は施錠され、ギヤはParkingに入られており、撤去の際に支障となった。わが家に避難した方にも連絡先をお聞きしていない方があり、車の撤去に困ることとなった。

地域は土砂に埋もれ、完全に孤立してしまっていた。

土砂の流れは、田中熊崎町内会集会所の地点から、熊崎川下流域側と県道を下手側流れるに二手の流れがあり、県道側の熊崎川の流れは花上交差点で左折して、出合橋までの町道を土砂で埋め続けていた。さらに花上側では、山田川が花上交差点までの筋を土砂で埋めて、二股道を渡辺薬局側へ流れていた。

流れを宅地内に入れないため土嚢袋を持ち寄るが全く足りず、安芸環境事務所に土嚢袋を求めた。土嚢袋は、7月7日2千枚、8日4千枚、10日に4千枚、12日にさらに4千枚など、最終的に計2万枚を貰い受けて、各町内会で分け合って利用した。

住民は、堆積土砂で土嚢を作り、土手を築いて懸命に流入を防ごうとした。

～臨時集会～

7日18時から、流域となった熊崎・田中・花上・鯨・立田の五つの町内会の住民のうち、集まれる者約50人に呼び掛けて、田中

熊崎町内会集会所にて緊急に集会がもたれた。各々の箇所での状況が報告された。

ここで住民の健康と被災状況が確認された。幸いにライフラインはほとんどの世帯で確保されていたが、熊崎町内会の一部が断水と停電を受けていることが報告された。

被災状況は、熊崎川が東町内会の白鳥神社の裏手から中国電気保安協会矢野営業所に至る一帯で、その上流からの土石流によって破壊され、8軒余りの住宅を土砂が呑み込んでいた。土砂はそのまま熊崎川を矢野川と合流する出合橋まで埋め、田中町内会全域の生活道から宅地内へ流れ込み、各戸を4、50cmの深さの土砂と泥が埋めた。土石流はもう一筋、集会所から右折して県道を流れ、花上交差点から左折して出合橋までの町道を埋め、町道に面した立田町内会から鯨町内会の家屋を埋めた。花上町内会では、山田川が最下流の暗渠を花上交差点から下流の出合橋まで土砂で埋めたうえ、さらにその上の道路を70から50cmほど堆積した。流れは花上町内会から県道に向けての二股道を右折し、渡辺薬局横から鯨町内会へ流入し、鯨町内会を矢野支所西側まで水没させていた。いずれの流域も幸いに人的被害は免れたものの、7月12日までに県道に接するエリアは、花上交差点で最大で約1・2m土砂が堆積し、交差点東西の町道では、出合橋までの町道で約50cm（前述）、路地から各家庭の敷地内で50から20cmの土砂もしくは泥が堆積した。

継続する土砂の流れをどこへ向けるかが、下流域の住宅への迷惑もあり問題となった。

事態収拾のカギは、重機が入るために県道の土砂を除去すること、そのためには県道への流れを止める必要があること、土石流を熊崎川、矢野川へ戻すことに絞られた。

この集会で筆者は、若役として、臨時5町内会連合会災害対策担当に指名され現場指揮と行政対応を行うことになった。

集会は、その後1週間、毎日夕方に開催され、その日の作業の進捗とその後の作業手順を話し合った。

行政対応

集会では、行政対応についても話し合われた。望月鯨町内会長、重本田中町内会長、棗熊崎町内会長、高山花上町内会長、長船立田町内会長代理で小鷹狩氏の5人の名前で安芸区区长へ陳情書を作成した。9日、区役所にて重本、高山、棗の3町内会長が山本区長に陳情書を手渡した。未曾有の大規模な同時多発災害に区も対応に追われていることが伝えられたそうである。

土砂との闘い 多くの人の協力

7月7日から最初の8日間、ここで多くの若者が活躍してくれた。

地元高校、大学生らが友人に呼びかけ、さらに携帯電話スマー

トホンなどで被災状況の画像や映像を拡散し、それを見た若者たちが市内や遠方から駆けつけてくれた。さらに地元の中学生も集まり、スコップで土砂や泥を土嚢袋に詰めて運び、積み上げ、水の流入を防いでくれた。

7月8日になって雨が上がると猛暑となった。みな声を掛け合って休憩をとり、水分、塩分の補給を声掛けあった。体を冷やすために流れに体を浸す者もあった。

7月8日、広島市議会議員が2人、この地を訪れた。田中、熊崎、花上町内会長が2時間にわたってこの地を案内した。議員は住民から状況と要望を聞き取るなど入念な調査をされ、国や市に報告を約束した。

地元在住の業者もこの事態に家族や従業員を総動員し、持ち出せる小型油圧ショベルを繰り出して土砂の除去に尽力された。熊崎川下流域の出合橋までの町道は、地元建設資材業(株)石信さんが、7月10日までに堆積土砂を除去された。県道と熊崎川上流域から集会所周辺部分の堆積土砂の除去は、地元のダンブ業(株)月森興業さんや、地元建設業(有)カキタ68のご家族・知人が当たった。近隣の中華料理店さん家族も総出で、花上町内会側から県道下手の、土砂の除去や土嚢積み、県道の車両撤去に携わってくれた。その他、解体業者よろず屋の従業員も町内くまなく歩きまわって尽力してくれた。廃業されていた高山石油さんは、休憩所を提供してくれた。矢野に仮住まいして南区吉島で工事を請け負って

いた鳥取県の鋼管杭打ち業者(有)中原組の5名は油圧ショベルを使って県道に置き去りの車両撤去や鯨町内会の堆積土砂の除去に尽力された。また、この間、土砂の仮置き場にカー用品店モンテカルロさん、中国電気保安協会矢野営業所さん、弥栄地所さんが協力してくれた。

こうして7月12日午後、土砂の流れは熊崎川・矢野川へ戻り、県道への流入は止まった。

行政との対応②、県道と矢野川の堆積土砂の除去

県道は住民にとっても、おそらく行政にとっても重要な拠点であると思われた。

① 道上手の矢野東7丁目や矢野峠、熊野町川角では、いまだ行方不明者の捜索が続いており、その拠点へのアクセスルートが必要となるからだ。

② 問題もあった。熊崎川へ流れを戻しても、合流する矢野川では堆積土砂のために出合橋地点ですでに飽和しており、再度あふれ出す恐れがあった。

③ さらに矢野川では、上流の姫宮神社付近の川の埋没が課題となっており、下流域の飽和はここでも大きな支障となっていた。筆者は県道の堆積土砂推定量と矢野川の飽和状況、除去する場合の土砂の仮置き場と仮置き場までのアクセスルートを提案書にまとめた。その晩のうちに広島市災害対策本部・安芸区災害対策

本部へ報告し、提案書をメール提出した。

翌13日、広島市道路局、下水道局、広島県西部建設事務所、陸上自衛隊が本格的に現地入りし、まず午後半日、県道の土砂除去を開始した。翌14日からは陸上自衛隊が代わって土砂除去作業を始めた。7月16日、道路中央を1車線分、自衛隊車両が通れるよう開通させた。翌17日には矢野東7丁目天神交差点下手で県道をふさいでいた大型トレーラーを自衛隊が撤去し、その後、次々と自衛隊の重機がこの県道を使って峠土手の災害現場へと展開していった。

矢野川については、県西部建設事務所が当初予定よりも3日間前倒しで川床の浚渫作業に入り、10月の現在まで継続されている。花上町内会では、道路下に埋設の下水道に土砂が詰まって汚物が道路に溢れていたため、下水道局に報告し対応していただいた。状況が常に変化するため、現場の住民や土木・建築業の方と相談し、必要な作戦を段階的かつ具体的に練って、町内会長と協議を重ね、その都度、区の災害対策本部に報告した。最後までかかった花上地区の山田川の溢水対策も花上町内会会長と協議して行政折衝を継続した。

ボランティア

7月14日、清風荘にボランティアセンターが立ち上がった。田中町内会では、多くの家屋・敷地内の土砂が土嚢袋に詰めら

れ、14日までに路地に出されてため、正規のボランティアさんには、残る泥の除去と決められた場所への土嚢運びを依頼した。こうして当地への行政対応は遅れたものの、作業は予想よりも手早く進めることができた。

「第3次作業 泥の除去作業」

被災から10日が過ぎた7月16日（月曜日）、町内会の現役世代の多くが勤務再開を果たせた。筆者も職場へ出向き、被災状況と復旧活動の報告をした。職場は、これまでの欠勤を災害特別休暇としてくれ、さらに1週間の追加休暇を認めてくれた。

第3次作業は、男手の多くがいない中、残された住民で泥の除去を続けた。世帯により泥の流入量に大きな差があり、多い世帯で、ざっと見積もってダンブ3分の2杯分の土砂があったものと思われたが、14日にはその大半の除去を終えたことは前述の通りである。

残る世帯は、県道に隣接する3町内会10世帯あまり。それぞれの家庭が毎日土砂と泥を土嚢袋に入れて運び出す作業を続けた。家族や親戚が集まって作業を継続する家庭のほか、独居世帯に隣家が集まって一つが終わると、次の一つへと協力し合って作業を進めていった。

県外からのボランティアがこれを支援してくれた。彼らは、尾崎神社社務所に寝泊まりし、町内を限なく戸別訪問して、敷地内

の土砂や床下の泥の除去、床下消毒を手掛けてくれた。かくいうわが家も、この方たちのお力を借りて泥の撤去を終えた。

「おわりに」

多く支援をいただいて、この未曾有の事態に対応することができた。田中町内会では、36世帯約70戸とその子供たち、花上、鯨町内会それぞれ50名余り、熊崎・鯨・立田町内会でも20世帯、毎日50人以上の中・高・大学生や成人のボランティアの皆さんなど、最初の1週間で述べ1800人以上の人々がこの地に集結して作業に当たってくれた。用いた土嚢袋2万枚がその規模を物語っている。よくもまあ、けが人、病人も出さずにできたものだと思う。それには相互の声掛けや笑顔があった。すべての人に感謝する。

その後、台風の襲来や秋雨があり、その都度、増水して県道が浸かったが、やがて県道の側溝も復旧し、何とか日常を取り戻せた。市議会、行政の皆さん、土木、建築、解体業などの多くの専門業者の皆さんは、7月から現在まで、いまだに休みなく復旧作業に当たられている。本当の意味での復旧はまだ先のことになりそうだが、まずはこの時点での感謝を言わせていただきたい。本当にありがとうございました。

文献

- 1) 西日本豪雨①その時…中国新聞平成30年9月7日朝刊16頁
- 2) 平成30年7月豪雨災害に関する情報…国土地理院 災害写真
- 3) (https://saigai.gsi.go.jp/1/H30_07gouu/071Ihiroshimasakamachi/photo/qv/004_0043-qv.jpg)



矢野東六丁目

ペンネーム：T

7月6日 19時過ぎに帰宅しました。

熊野別れの高架線の下は通行止め。

矢野川も氾濫寸前、花上付近はタイヤが浸かるほど水が流れ、走行が難しかったです。

19時半ごろ、夕食を食べました。裏の川は水位が高く、いつもより大きな音でゴーゴーと音を立てていました。

しばらくして、音が地鳴りのように変わりました。窓をあけて見たら、川上の方から土石流が流れ込み、畑に土砂や木材がいっぱいに広がりました。すべて上流で壊された物です。

電線からは火花が散りました。身の危険を感じたので、川と反対の方に逃げようと思いました。家を飛び出して前の道路に行きました。その道路にも土砂や流木が少し上の方まで流れてきていました。

結局、家に戻り2階で避難することになりました。

夜中 ずっと川の音がゴロゴロ ゴーゴーと大きな音がして恐ろしかったです。

生くさい土砂の何とも言えない独特の臭いがしました。



矢野東六丁目

ペンネーム…COCOASA

題目「7月6日の朝」

前日から降り続ける雨に珍しく早々と中学校が休校となった。

ちょっとした食料があった方が良かった、カップ麺やパンなど降りしきる雨の中、買い物に出かけた。

午後から、携帯に避難勧告の知らせが次々に入り、だんだんそのエリアが居住区に近づいてきた。SNSで町内の様子が判り、すこし避難を意識し始めた夕方。

焼山の知人から避難してくるように再三連絡があり、また知人消防士から、いつでも出る準備をした方が良くというアドバイスを受けたので「今日のところはご飯を食べたら焼山へ行こう」と夕食の準備をしていた。

あまりに強く降るので外を確認したところ、家の前が川のように流れていた。この時19時25分 雨水のみ、側溝も吹いておらず「大丈夫泥水じゃないね」と子供と家に入るも5分後、もう一度外に出ると側溝から泥水、臭いもする。なんとなく様子が違うと感じ、「急ごう」と声を掛けた。

19時40分 今までとは違うメッセージ「最大級の警戒をしてください」これらはただ事ではない。と思った矢先19時42分地鳴りのような音とともに土砂と大木が家の前に流れつく玄関から出ることが不可能と分かった瞬間、頭の中は真っ白。

家族にとにかく、何でもよいから長ズボン、長袖を着るように伝え、準備をしながら経路を考えた。掃出し窓から外へ出ると、大腿部まで水が来ており、恐怖を感じながら避難所の小学校へ急いだ。

今、7月6日を振り返ってみると、休校になったり、買い置きしたり、いつもと違う状況だったので、もう少し踏み込んで難を避ける行動をしていれば危険な思いをしなくて済んだかもしれない。あの時家から出ない方が安全だったかもしれない。30分早く車で出かけたなら土砂に巻き込まれ、この世に存在していないかもしれない。だったかもしれない。

結果論ばかりの中、今回の災害を経験し明確になったこともある。避難する際の出口は玄関とは限らないこと。ゆえに非常袋を玄関のみに置いても持ち出しできるとは限らないこと。歳を重ねた両親は、自分が思っている以上に動けないこと。車が通れない路地を歩いて確認しておく事。

これ等を踏まえ、避難勧告や指示を待つのではなく、自分たちで早く行動することが大事だと学んだ。2度と味わいたくない体験であるが、この経験を忘れずにいようと思う。

矢野東六丁目

曾根田 秀 男

7月7日 雨が何時止むのか?と思ひながら、午後になり市から避難指示が出ましたが、雨が降る中、「認知症の5」で歩けない女房があり、避難するのが難しく家に留まっていました。

5時ごろ、兄から「大丈夫か?」と電話があった。その時点では「川の音が少し大きくなったかな!というぐらいで」と返事をしたが、7時ごろ、ドーン、ゴトゴトと音がしたので玄関へ出て外を見た。前に立っていた建築屋の建物がなくなっており、濁流と石木が流れていた。恐ろしくなつて川に面した部屋から遠い部屋に移動した。長い間眠れなかった。

朝明けて、外に出てみると、川は埋まり、小川の橋がめくれて車庫によりかかり流木と大きな岩で川の水は畑を崩して、その方向に流れ、車庫の中の自動車は土石・流木で半分埋まっていた。また、橋に通じる道は、土石・流木で通れない状態になっていた。横上にある畑の段にしてある石垣も土もイノシシ除けの柵も無くなっていた。

下の家の中村さん宅は、玄関の前に大きな大木が5、6本も横たわり風呂の建物はなくなり家は傾いていた。

矢野東六丁目

矢野東保育園

題目「7月6日 今日も雨」

その日は、雨が続き8日目。「今日こそ、避難準備情報が出るかもしれない。いや、また空振りに終わるに違いない」そう思いながらも、土砂災害マニュアルどおり職員は、園庭に車を乗り入れた。私達の保育園、矢野東保育園は権現山のふもとにあり、周囲は緑豊かな自然に囲まれ、0歳児、5歳児まで約90名の小さな保育園だ。

ここは、土砂災害危険区域であり、マニュアルでは「避難準備・高齢者等避難開始」情報が発令されると、子ども達を連れて近隣の矢野小学校まで避難しなければならないことになっていた。職員は年度が変わるごとに、土砂災害マニュアルを読み返し、避難するのには・・・とシミュレーションを繰り返し、もしもに備えていた。

7月6日、朝から園長は、パソコンのメッシュ情報とにらめっこし、赤い雲がこちらに向かっているか?ラジオで情報を聞くなかで交通情報などを聞き、情報を積極的に仕入れていた。

職員は、七夕会をにわかに済ませ、給食を早く済ませると8歳以上児は、カバンと靴を持ち、2階の空き保育室で午睡をし、8歳未満児も早めの午睡開始、また、車での輸送を考え、必要な物をそれぞれのカバンの中に入れ、6人ずつをひとまとめにして、

車に乗り込む段取りをしていた。

しかし、その日は、マニュアルにある8台目の車の職員が夏休で2台のみだったため、ピストン輸送を考えながら、順番を決めていた。

2・17「高齢者等避難開始情報」発令・・・園長は、マチコミメールで保護者に避難することを伝え、お迎えを要請するとともに、保育企画課へ連絡し準備ができ次第、矢野小学校へ避難することを伝えた。

同時に職員は、子ども達をにわか起こし、排泄を済ませ、8歳以上児は、階下に降り、合羽を身に着けて。(事前に練習していたので、スムーズにすることができた。)

3歳未満児は、カバンを階下に降ろし、保育士たちは、子ども達を車に乗せようと準備していた。

マチコミメールを見た夏休の職員が、園に応援に来て3歳未満児を乗せる避難車に加わった。(12台になる)

保育企画課より、お迎えを待つよう指示があり、一旦、3時まで出発を待った。

その間に、8歳以上児15名(昼迎え5人を含む) 3歳未満児6名(昼迎え1人を含む)迎えがあった。

3・00 避難開始・・・園長は保育企画課に避難を始める事

を伝え、3歳以上児は徒歩で(保育4名、応援2名、職員の家族が応援に駆け付け引率)、3歳未満児は、車で避難を始める。雨あしは強くなり始めていた。

車での避難の際、矢野川を見ると、ところどころ、水の勢いが強くなっているところが見られたが、車でスムーズに避難できた。渋滞などもなかった。

先発の車が矢野小学校に到着すると、地域公立幼稚園職員・近隣公立保育園職員も応援に駆け付け、また、勤務を終了し帰宅した矢野東保育園職員も駆け付け、子ども達を車からおろし、小学校2階教室へ垂直避難した。3歳以上児たちは、徒歩で矢野川のほとりを避難した。矢野川の嵩は増し、濁流で合流するところは水しぶきを上げて危険な状態だったが、無事到着し2階教室へと避難できた。

そうこうしていると、2号車3号車・・・と到着し、全員が避難完了(15・28)

すでに、メールを見て小学校で待つ保護者や避難の道中迎えに来る保護者もいた。

小学校に着いてからは、電話で一人一人お迎えの要請をし、17・30最後の子のお迎えが来た。

職員は、小学校の教室の掃除をし、片づけをすると園に帰り、園の片づけをし、施錠。帰宅の途に就いた。(18・30)(その後、

全職員が家路についたのは、19・30ごろだった。」

今回の避難を経験して、日ごろからシミュレーションして練習することの大切さを改めて感じた。合羽の着方や避難路の確認、事前に小学校へ出向き、どこの部屋を借りるか、避難車がどこから侵入するか？など丁寧な取り組みは、非常に役に立った。

しかし、そこまでしても、実際には、小学校生徒の下校と重なり、小学校側の連携不足で、私達の車の進入経路が事前に教員に伝わっておらず、足止めされてしまうなど小さなハプニングも見られた。

また、新たな課題も考えられ、車での避難の練習などができなかったり、運転者の欠席 時の問題・安全面での問題など考えうることは山積みとなった。私たちは、この課題に丁寧に向き合い、保護者へのお迎え要請のタイミングや安全な避難場所と避難方法を具体的に考え、マニュアルを深めた。さらに、職員や保護者はもとより、地域ともしっかり連携し、毎年の防災研修を恒例化するなど、避難の意識を高めていけるよう日々計画し、今回の災害を決して風化させることのないよう日々取り組んでいきたい。

最後に、今回私たち矢野東保育園の職員や保護者が、この災害で速やかに避難できたのは、事前に柳迫氏に参観日に講演をしてもらい、その後、地域民生委員・町内会と共に職員研修を受け、豪雨の際どうすればいいか、どんなことが考えうるかを学んでい

たので、何の躊躇もなく速やかに行動に移せた。

あの道を歩いて逃げたんだね。」もし、少しでも遅ければ……」テレビや新聞で報道された矢野の景色を見て、私達はあの日を振り返った。私たちが避難したあの道が、ひどい土砂に覆われ道がなくなるとは、あの時の私たちは考えもしなかった。

ただ、柳迫氏の「赤い雨がきたら（メッシュ情報の雲の色）、黄色のところ（土砂災害区域を示す地図）ではないところに逃げる」の言葉を一心に避難し、ひどくなる前に、迷わず動き、避難できた。

まさに、私たちは実際に体験し、事実だと確信できる。

明日からも、また、矢野東保育園で保育は続く、子どもたちの笑顔のために、私たちは、この事を今後も伝えていき、子どもたちの笑顔を守りたいと思っている。

矢野東六丁目

夏目義弘

題目「ナナちゃん」とともに」

（問）7月6日は、どうしていましたか？

家の雨漏りがすごいひどかった。

夕方 炊飯器のスイッチを入れて、おかずをしようかなーと思っていたら、上の人が「おじさん。こちらに連れて来にゃーお

家が倒れるよ！」と言うて、おんぶして連れて来てもらった。

私も見に行ったが、まだ大したことは無いと思ってが、だんだん水が上になってきて、うち方の土地は水浸しになった。家の建っている土地の上を流れ出した。平屋の家は雨漏り、下は水浸しで、畳の上に20cmぐらいになっていた。もう住めないですよ。地震が来たら家の下敷きになるところが、水だから助かった。隣の人の咄嗟の判断が良かったと思う。命の恩人です。その家でみんな息子もそこで、休んで夜のごはんを頂いて、その後の家にその人も一緒に泊めてもらった。

私はあの子が気になるから、息子に「ナナ」を連れ来てといった。「ナナ」はこの写真のとおり猫の子で、7月の中頃生まれたから「ナナ」という名前にして、今6歳になる。「ナナを連れて来てくれー」と言っていたら、息子も流されるところだった。水がこのくらいあるから「今出なよー」言うて、隣の人が、「危ないから行くな」言うて。だから命拾いしたよね。息子もうちよつとで殺しよった。「あの子を連れて来い。」と私が言ったものだから。この子はこの子で「みんな家に居たのに、誰もおらんようになって自分だけ残された。」言うて、御膳の上に腰掛を置いて、腰掛の上で一晩中泣いていたみたい。誰もおらん中でただ水の音だけで…。私は皆が「行くな」言うてじゃけー、ほいじゃー朝になるまで待とうか！と止めてもろうたが寝られんですよ。いい具合に隠れてくれていればいいが？家の中で。

(問)雨の時はテレビを観ていたんではないですか？

あの時はテレビをつけたまま、おかずをするか？お風呂を沸かそうか？言うて、雨がひどくなっているので、お風呂だって傘をさして行かにゃーいけん。外だから。トイレも。この人は中で、アパートだから中にトイレがあるから。戸を開けたらすぐできるけど、私と息子は外だから。アパートじゃ言うても、もう20年ぐらい住んでくれていた人が、「水洗トイレにしてもらえませんか？」言うて来られたけど、「5千円上げるからそれで水洗トイレにしてくれ。」と言われても、うちは家賃が2万2千円で、それで5千円上げたところで、直してから、また入るとこのじゃつたら解るけど、20年も住んでいてくれるから水洗トイレの問題で、「私は家主をやめるから何処かい所があれば行つてください。

この家は売ろう思うんじゃ」言うて。出てもうたけど、売るにも問題がある。アパートにいた夫婦に女の子がおつて、その子は小学校3年か4年でノイローゼになって、あの子の病気が治るまで、家で飼う犬を最初飼っていたけど、その犬が死んだから、今度は猫ちゃんを飼いだして、それは雌だから、「赤ちゃんが生まれたら知り合いにあげるから」と言うような話になって、それがだんだん増えて、家の中はわや！ですよ。爪をといでなんかして：(問)お父さんは糖尿ですか？

お父さんは糖尿で、何もうやーせん。糖尿で耳は聞こえるけど

目が見えない。私は、耳鳴りがずーとしていて、いつの間にか聞こえんようになった。息子が大きな声で話をしてくれん。

〔問〕今は、アパートへ帰られんようになった？

全然ないから。家は流れたし。住んどの家は役場から「瓦を直せ」と言ってきた。言うてきたあの家は雨漏りで、中は水浸し、アパートの家は倒れて流れる。植木も流れた。「くろがね」か、椿か。植えとったのが全部流れて、今残っているのは、あのぼろ家とトイレと風呂。

〔問〕災害の時に臭いとかなんか感じませんでしたか？

隣の人が来るまで全然わからなかった。えらい雨がよく降るなー。と思っていた。雨漏りがすごいから、バケツをあっちこっち受けたりし寄ったら、連れてきちゃって、外に出ると水が上がりっているよね。咄嗟の判断で命を助けてもろうた。田尾山さん言う人。隣の人が助けてくれた。うち方のすぐ上の人。

事故でこちらの目が全然見えない。

〔問〕その他なんか今回の災害で話しておきたいことはありますか？

家族で住みたい。家が、ないから

今息子が探している。猫ちゃんがいるでしょ。

今、家を探している。中々ないみたい。お父さんは糖尿病。

25・6年前になるかな。糖尿になって。目が見えない。府中の難波内科へずーと係っていた。最近はこの先生の先生になった。

目が見えん。耳はよう聞こえる。悪口言っていたらすぐ聞こえる。ちよっとは見えるんじやろー。灯りぐらひは。松茸を取りに行つて目について目が悪くなつて「眼科へ連れて行け。」とは言わない。眼科へ行くのが嫌いな。上下右左いうのが嫌なんじやろー。糖尿になつて初めて。目が見える方が白内障になつて、見えるんなら見てもらいに行き、広大で手術したら、脳膜がどうにかなつていたんでしよう。

私も白内障だと今言われているけど、手術はしたくない。メクラになつたらいやだもの。

こっちの目は全然見えん。43歳の時、事故にあつて右に私がバイクでぶつかった。その時後遺症は無いけど、えらい目が飛び出よう。物が二重に見えるから。桧垣先生のとこに入院して、「先生どうも目がおかしいから眼科へ生かしてください。」海田の岸本眼科へ行かせてもらったら、「すぐ県病院へ行きなさい」と言われた。岸本眼科へいたら、「すぐ県病院へ行きなさい。」と言われ、県病院行ったら入院、なかなかじゃーない。それから手術して目の玉が飛び出たのをに入れてもらったら見えんようになつてしもうた。腫瘍かなんかできとったんじや思う。こっちは全然見えないし、反対は白内障言われようるけど、今のところ見えるから。耳がちよっと遠いけど、あなたの顔は見える。年取っ

てここ来てから、年寄り扱いされている。まだ78歳よ。私はまだ若いと思っているけど。

(問)災害のことでなんか気になることは？

雨はすごかった。水が上がってくるのがすごいよね。50年に1回ぐらいの雨でしょう。今度地震が来るといけど、ぼろ屋が倒れるんじゃないかな？と思っている。

私は矢野に来て、50年以上になるけど、あんとに水が出たことは無かった。雨が降ったこともない。

(問)今からどのようにしてもらいたい？

もうあそこの土地はだめ。直してももう住もう思わん。息子に「ほかの土地を買い」と言っている。もうあそこには住みたくない。今度は安全なところ住みたい。川がなくて、山の近くも悪いよね。

テレビではよく見るが、明日はわが身と思って見ていた。海の近くもいやよね。いいところがないよ。いま日本は何処へ行ってもいいところがない。

何で矢野では、プレハブみたいなものを作ればいいのにね。ちゃんとした住宅が欲しい。決まったらすぐ引っ越しする。今の所ないから。今息子が頼んだり相談したりしている。



7月19日 矢野峠 (撮影 柳迫長三)

矢野東七丁目

松田 永伸

題目「災害を受けて感じたこと」

家に帰宅中、近所の山から土の匂いと水が流れる量が「いつもと違うな」って、思いながら帰宅したが、気になって外を見ていたら、道路を走る車も水しぶきを上げているのを見て「大丈夫かな？」って思い、外に出てみると雨の音もすぐ道路を流れる水も多くなって、車も動けなくなり、流木とか色々なものが流されてきて、車に乗っている人からも「子供だけでも助けてください。」と言っているのを近所の人が聞いたので、近所の人と助けに行った。その際、水の量がどんどん増えてきて、自分も踏ん張るのが必死なぐらいになって、「周りの人からも危ないよ」って言われて戻った。直後に鉄砲水が来て、車も一気に流されて、もう少して自分も流されるところで、震えが止まらなくなりました。その後、ボーとしていたら流されてきたという全身泥だらけの女性が助けを求めて来たから、家で救助が来るまで休んでもらって、けが人がいることを消防に連絡しても「自衛隊に要請しているの、とにかく来るまでは待つてほしい」と言われ、夜中に自衛隊が来てくれたけど、「救護班ではないから救護できません」と言われた。再び待つていたが来てもらえず、警察の人が他のけが人を救助しておりて来たから、けが人がいることを伝えてやっと災害から3日後に救助されたけど、酷かったらしくても助かった

たので、安心した。

今回の災害で、県外の仲間が色んなところも大変と思って大型トラックで物質とか運んでくれてすごくうれしくて感謝です。一人一人ができることをしていかなないと、前にも進まないと思うし、助け合いが必要だと感じました。

矢野東七丁目

ペンネーム…K・K

題目「矢野東7丁目のあの時」

7月6日 夕食を済ませ激しい雨の降り方が気になりながら、片付けをしていた午後7時過ぎ、車で通勤している息子から「家、大丈夫？道路はすごい水で全く前へ進まない。」とメールがありました。でも私の中では何時もより激しいけど、一時的なものかな！と楽観的でした。その時、お隣の奥様が「家族の方がまだ誰も帰宅されておらず、家の後ろがコンクリートの崖で、心配だ。」と言ってこられた。「それに何か異様な土のにおいがする。気持ち悪いね。」と言いながら、2人で我が家の軒下で塀越しに外を見たら、バス通りがものすごい川の流れになっていました。

交差点では、車が立ち往生していて、バス通りを熊野方面からヘッドライトを付けた車がくるくる回りながら次々と流されて来て、交差点に停車中の車にぶつかり、私達の視界から消えてしま

いました。初めて見た光景でした。「わぁー」と2人で声を上げたら、背後でドカーンと大きな音がして、びっくりして庭を移動してみると、奥の方から流れて来た大きな岩・大木が我が家のすぐそばの小さな橋・ガードレールにぶつかって、道を塞いでいました。後に知ったのですが、それで土石流が行場を失い、両側の近隣の多くの家に流れ込み、大災害となってしまいました。

その夜は、不安に思って、集まって来られた近所の方十数人と一緒にお隣の駐車場で椅子や食料を持ち寄って過ごしました。家が土砂で埋まって帰れない方もいらっしゃいました。

次の日も、バス通りは、激しい濁流で多くの方が救助を要請されても、救急車、レスキュー車、自衛隊も向こう側には来ているのに道路を渡れず、私達も孤立状態でした。

3日後に専門家の方が来て下さり、道路の水がようやく川のようになり、道路を渡れるようになりました。

その時は家の周りの状況しからなかったけど、日が経つにつれて、すぐ近くで亡くなられた方、行方不明の方がいらっしやることをテレビで新聞等で知り、ひとごとのように思っていたところもあって、災害を69年の人生の中で初めて経験しました。

我が家は被害を免れたけど、家族を失われた方、家が全壊し住めなくなった方、土砂が入り込み再び住むために修理されている方、…少しでも希望の持てる日が来ますように。

災害後長く通行できなかったなじみの道路を歩いて、家々・景

色をみて、2度と起らないように祈りつつ、万が一起こった時はどうすべきか？すぐにでも考えておかねばいけないと思います

題目「私のあの日、あの時の記憶と行動」

矢野東七丁目

小畑 司

7月6日 この日は「台風」と「梅雨前線の南下そして停滞」

雨は、梅雨末期の降り方で激しかったと思います。私は仕事があるために、自宅に息子2人を残し、志和に向かいました。

家を出発して直ぐですから午後5時ごろからでしたか、雨足は強まり、その内、防災メールが次々に入ってくるようになりました。何とか会社へ着き、バタバタしていたころ、妻から1通のメールがありました。

「車が流れよる」意味が解らず電話をしてみると、「県道矢野安浦線が川になって、何台も何台も熊野方面から流されて来て、自宅から見える電柱にぶつかっている」というものでした。

私の仕事も大雨で中止が決まり、志和を午後10時に出発、ラジオではあちらこちら土砂崩れで生埋めになっているとの事。

家に急ぐもすんなりには前に進めず、天神に着いたのは午前4時。もちろん家までは帰れず、バス停に車を止めて明るくなるの

を待ちました。

夜が明けて徒歩で県道まで下りて行くと、何台もの車が濁流と化した県道上にあり、さらに周囲を見れば宅地の一部が崩れているところ、家屋の中へ水が入っているところ、色々なものが目に飛び込んで来て、体の震えと涙が出てきました。

日中はその場から動けず、消防・警察・自衛隊の様子を見ていました。

夕方になり、何とかして自宅へ帰れたものの、停電になっていました。

翌日（8日）は、坂井さん宅へ伺い、土砂出しをしました。

9日は、朝から有志の人達と天神橋の土砂との片付け、後に近くの民家の駐車場や周囲の土砂撤去を行いました。

その日の午後の事だと思いますが、何気なく目をやった場所で2人の方が県道上の土を掘り返しておられたので声をかけると、「もしかしたら、この下に息子が埋まっているかも？」と言われたので、近くにいた町内会の方々と探し始めました。生憎、その後数日後、自宅内で発見されました。ただこの場所では、偶然とか、行方が分からなかった5歳の子供さんを発見するといったことになりました。何と云うか複雑な心境でした。実はその子供さんのお父さんとは、7日の朝に合って話をしていたからです。話までしていたのに身元の確認でいらした姿を見て、2日前の話を思い出し情けなくて仕方ありませんでした。

その後、単独ではなく、町内会のボランティア団体の1人として動きました。土のう袋とスコップ、主にダンブで土砂の排出作業、色々な場所へ行きましたが、「人手があったからできたよね」と言われるところが大半でした。延べ人数にしたら何人の方が来てくれたんだろうと思います。そして必要なものをいち早く準備してくださったことにも感謝です。

今の天神は、応急処置で止まっているところばかりです。

家族・友人を亡くされた方、家は流されたり、住むことができなくなった人もたくさんいます。元に戻ることは決まてないですが、前に進まなくてはなりません。命がある限り、あったことを糧に生きて行かないといけないと思います。

7月6日

台風の過ぎた後、梅雨前線が帯をなして停滞。洪水警報は出たままで、子供たちは学校から帰宅したのは16:00。

その後も雨足は弱まることなく、私も仕事のため自宅を後にしました。すでに県道は輪だち周りでは水の筋ができていました。

東広島バイパスの中野付近を走行中には、避難を促すメールが届き始めます。瀬野の一貫田付近では、山側からの水が道路にまで流れ出ています。志和では小規模ながら山崩れも起きていました。

○19・57

妻からのメール「車が流されよる！」私はテレビで見たことで

も言っているのか?と思いました。が、気になり電話をすると、「自宅から外を見ると熊野方面からの県道が川になり、次から次へと車が下流へと押し流されて行き、電柱に何台も何台もぶつかっている」ということでした。それでも状況がつかめず、とりあえず仕事をしていました。

○20:00

納付先から夜勤中止の通達があり、片付けをして何とか会社を出発したのが

○22:00

家の様子が気になるも付近では大渋滞で志和を脱出できたのは日付を過ぎていたと思います。

道中、町内に友人へ電話をかけ、状態を聞こうとしたところ、「呉からの帰りでまだ坂。」とのことでした。(後々、坂町の道路が水没していたと聞きました。)2号線に出してしまうと渋滞はしておらず、すんなり海田まで帰りましたが、ここから問題でバイパスは通れたもののガード下は通れないとラジオでも言っていました。仕方なく海田の住宅地をとおり抜け、矢野中をとおり、COPの前を通り、矢野出張所前へ、その時県道は完全に川へと姿を変えています。熊野方面へは通行止め。マダムジョイまで水没した道を行き、JR矢野駅方面へ、駅周辺は少し高くなっていて、水没は免れていたものの渋滞中、何とか熊野道路へ出られても、やっぱり渋滞、矢野南ニュータウンを抜け、矢野町土居の交差点まで

行きましたが、住宅地から流れ出てくる水勢には驚きました。土居の交差点までたどり着くと熊野方面へは通行止め、もちろん天神方面へも行けないため物凄い車が渋滞し、警察官が交通整理の真っ最中でした。近くにバス停があるのを思い出し、そこで夜が明けるまで仮眠を取ることに!。

7月7日 早朝より

仮眠を終え、まだ雨の降りしきる中、天神交差点へ向かうと、ゴォーと川を濁流が行くいつもの感じに思いましたが、県道が見えてきてびっくり!体が変に震え出したのを覚えています。道路が川。多数の壊れて放置してある乗用車、近くまで行くと民家の庭先が崩れているところ、住宅の中へ水が入っている所、そしてゴロゴロと音を立てて水の中を流れて行く石。反対側では天神町内の人達が様子を見に出てきていました。自然の力を辺りを一変させてしまうほどに膨大なものだ、思い知らされました。

夕方近くまで様子を見ていましたが、何とか高下谷を通りセブンイレブン近くへ行き、それから山沿いの道をとおり自宅へ帰りました。災害直後から停電していたため、夜になると真っ暗で、家々では懐中電灯やろうそくを使い夜を過ごすことになりました。

7月8日

前日、目の辺りにした庭先が崩れてしまっていたS様宅へ土砂
出し行くことになりました。このお宅では、出災直後に日広団地
を流れる、いつもは大した水量もない川の上部の山が崩れ鉄砲水
となり、団地上部の家を何軒かを襲い、そして最下部にあった家
に到達した様です。逃げる準備をしていたところへ流れ込んでき
た土石流に押し出されるように車ごと奥さんが流された。と旦那
さんから聞きました。

このお宅では、庭の部分の土の撤去、他に川の中が石や流木で
いっぱいになったため、水が溢れ、このお宅へ流れる道になった
のを変えるという作業を夕方までしました。災いにも家の中への
浸水は無く、周囲だけで助かっていました。

7月9日

朝から有志が天神橋の土の撤去。近くの民家の駐車場の土砂を
土のう袋に入れる作業をしていました。この場所では、午後から
5歳の男子が発見されました。丁度、行方不明になっていた高校
生を探していて偶然にも発見することとなりました。あまりにも
作業をしていたすぐ近くで見つけることになったので複雑な気持
ちでした。

正直なところ、土砂の撤去のことばかりが頭にあり、行方不明
者を探そうなんて考えてもなかったからです。結果、このような

形で発見に至ったことは良かったことなのかもしれません。

7月10日

昨日から一緒になって作業することになった数名と不明の高校
生の同級生などと共に、天神交差点から県道交差点から県道、そ
して旧道の辺りをスコップと土のう袋を持ち1か所、1か所片付
けて行くことになりました。

天神橋からホンダ様の横まで、本来なら川の場合が流木・土砂
で埋まっていることから、自衛隊、消防、地元企業の方と合同
で重機を使い、撤去が始まりました。周辺の山のようにあった土
のう袋も重機を使えば難なく取り除くことができ、少しずつ道路
も広くなってきたものの、民家の中から掻き出されていく土砂や
家財ですぐに又狭くなります。

数日後、行方が分からなかった高校生は、自宅の敷地内で発見
されることが事になるのですが、民間人が手を出せるのは、安全
を確保されているところばかり、手伝いに来てくれた同級生の子
らの中には違和感で一杯だったと思います。実際に親御さんはな
おさらだったと思います。

く終息く

その後、私は町内会のボランティアへ合流することになりまし
た。やることはダンプの運転が主でしたが、範囲が広いのと1台

しかないダンプの流れに困りました。

現場1軒から出てくる土のうの数は、とても多く作業に当たってくれていたボランティアの方は、1か所終われば次の場所へと体力がものを言う現状が続きます。

ある日から、連合さん、社協さんと合同での作業、そして集結さんの合流と大きな団体となり、適材適所に人を送ることができたことはとても良かったこととも思います。とても町内会の有志だけでは何時になるかわからない。復興も他の地域に比べれば早く行われたことの一つだと思います。

災害が発生してから2か月で、ニーズが出なくなり天神集会所を起点としたボランティアセンターを閉めることになりました。ただ他の地域では、まだ手付かずの地域も多く、自主的なボランティアのみなさんが頑張っていると思います。

今の私は、中々手伝いに行けない状態ですが、気持ちの中では1件でも手伝うことがしたいと思っています。

題目「7／6 大水害で」

6日夕食すみ6時ごろ、介護をしているので車いすでした。大雨が降っていました。

矢野東七丁目

ペンネーム…酒井

警報・無線が鳴りっぱなしでした。

近所の藤原さんより、電話があり「大水ですから、早く連れて出なければ！」との事。外を見ると、大雨で流れが強かった。

車に乗せ、矢野南小へと向かいました。県道は水の流れと石とでハンドルを取られそうでしたが、何とか着きました。

6・30～7・00ごろでした。藤原さん市役所の人中へ連れ込んでくださいました。助かって良かった。マットも敷いてくださいました。

7／7朝 土谷ヘルパーステーション岩坪さん 8・00

済生会病院訪問看護婦さん 8・30～9・00

梅村先生もいらっしゃいました。

すぐに入院させていただきました。

9・30現在 済生会病院はまな荘へ入院させてもらっています。家の方はまだ床下の処理が終わっていません。

ボランティアの人々の温かい支援で、助かり感謝しています。

浦野会長さん、すみません

南小学校体育館に長く居られました。

私もポリープを取りました。

9／22・23・24 床下の流入を取り、消毒もしていただき、また部屋の中の点検等、台所整理も山側の土砂木片等処理もしてくだ

さいました。

ボランティアの皆様

高山様 本当にすいませんでした。

矢野東七丁目

菊川 勝美

題目「7月6日 土砂災害の恐怖」

7月6日 夕方には携帯が何度も避難勧告のメールを（緊急速報メール）が、鳴っていましたが、気持ち的には正直！！大丈夫と思っていました。

午後7時40分ごろから、自宅前の道路の異常に気付き、外へ動画を少し撮ったのち、大きな木が根っこごと山から崩れ落ち立っていました。それを見て・・・

これは、異常だ！！やばい！！って思い、

主人に避難した方がいいかも・・・って話していると、

ドン！！ザー！！ゴンゴン！！ すごい音がしたので、窓から見ると、

濁流で、土石流、流木等々が、家の駐車場、車2台を押すように、家の方へ押し寄せるのを見えました。

「もう！！車では避難できない・・・1階は危ない！！」 っと、主人が言い、主人と私は2階へひとまず逃げました。もうすでに

停電していたので懐中電灯、携帯の明かりで、2階へ

2階の窓から外を見て、主人と私とで、雷かな？カミナリのような音がしたと思ったら、目の前の電信柱が前後に大きく揺れ、何？何？って思っていたら、

2階の窓から見える右側の山が、ドドン！！ゴゴッ！！

家（民家）を数軒、土石流、濁流により、流されてるのを、

目の辺りに見えてしまい！！『あゝア！！えゝっ！！』信じられない光景！！

主人と私は、恐怖で震えていました。

その時も、自宅の駐車場の方で ドン！！ドン！！

何かが流れてくる様子が伝わり 分かりましたので

主人と私は、この家も、次は流されるかもしれないと思い、覚悟していました。

『家が崩れる。流されるようなら、2階の窓から飛び降りるぞ！！』って主人が言っていました。（家の周り）左右から、泥水と

一緒に土砂が滝のようにすごい勢いで流れていました。

本当に、恐ろしく凄まじい光景でした。

死を覚悟した日、7月6日の夜でした。

そして、悲惨で最悪な土砂災害を経験した以上、思うことは、明るいうちに早め早めの避難が重要だと思いました。



矢野東七丁目

匿名

題目「住み慣れた団地」

7月6日の朝、確か「大雨警報」が発表されていたけど、台風接近時ではないので、2人の高校生と中学の子供1人に「警報1つだけだから、通常通りだって」と話し、「ほんの数日前に来た台風の時は大した雨量でもなかったのに自宅待機や休校だったのに、雨のひどさかしら、今日の方がひどいのにおかしいね。」という話をしたのを覚えています。

その日はパートの仕事があり、たまたま通常より早く終了したので、保育園の子を早く迎えに行きました。雨量が多いので気にはしていました。ニュースを見るとスマホに避難勧告や強い雨の予想など次々に入りました。高校生の息子や同居の父親が外の様子を見に行っていました。貧血があり、仕事後で疲れていた私は、少し横になりたい気持ちがあり、父親の「避難した方がいいのでは？」という言葉もちょっと大げさかなと思っていました。

あの日は、金曜日で夜の7時からドラえもんをしていたので、保育園の子供に見せながら、念のためになんとなく避難の準備をボチボチしていたのですが、もちろんその時スマホの危険を知らせる音は鳴りっぱなしであったのですが、ちょうどCMに入った時、停電になりました。すぐ復旧しましたが、その時にちょうど外

を見に行っていた父親も帰ってきて「今なら、まだ車で出られる！」と言いました。

その言葉と停電があったこと、スマホの鳴り止まない警報音、大雨の音、全てで避難しよう！と決心させられました。子供らの着替えと万が一のため制服、自身の服、充電コード、タオル、家にある食べ物とお菓子、母子手帳など思いついたものを詰め込んで、子供らが「え？避難するん？」というのを「とりあえず避難して大丈夫だったら帰ればいいから！」と言って、みんなで大急ぎで車に乗り込みました。玄関を出た時、周りの家からは避難しようとしている感じはありませんでした。私らも夜の避難で、避難をいまずるのが正解か解らないまま車3台に分かれて出発しました。

運転しながら見えたのは、マンホールの穴から水が吹き上げているところ、川のような道路、水の通り道になっている住宅の庭から次々と流れ出ているバケツや鉢でした。

私達は下って避難所の矢野南小学校へ向かいましたが、家路を急ぐ数台の熊野方面へ向かう車とすれ違いました。矢野南小学校へ上がろうと信号待ちをしていた所、前に行く父親から「どこへ行くか？」車から降りて来て言われ、外を見るとコンビニの横、「矢野南小学校へ上がるために通らなければならない道が2本とも冠水して、車が引き返していったので、側のバス停で様子を見よう。」とそこへ避難しました。

しばらくすると、同じ団地や隣の団地に住んでいる子供の友人

から次々と状況が知らされ、尋常じゃない事が起きているのが解りました。そして、広島熊野道路の熊野方面が通行止めになったのか、一つも動かない車列がずらりと並び、緊急車両が通れなくなっていました。そのため反対車線を通ってパトカーや消防車・救急車がサイレンを鳴らしながら通りだし、何時かわからないのですが、自衛隊の災害派遣の車がパトカーに先導されて、次々と来出したので、団地内に残っている人に「早く」で知らせました。

一夜明けたら団地が大変なことになっている写真が、次々子供のスマホに届き、信じられず大変動揺しました。

一夜で世界が一変しました。私が幼いころから住んでいる、子供が小さいころ、子供の友達がたくさん遊びに来ていた。子供と毎年ドングリを拾い、クワガタを探したあの景色は、見れなくなっしまいました。景色だけでなく人命も家も奪ってしまった自然の力の前に為す術がない、悲しさでいっぱいです。しかし、毎日のように高校生の子がボランティアに加わり、他のボランティアの方と共に、復興するよう頑張ってくれています。そこに希望があるように思います。

題目「初めての豪雨災害の体験と今後の対応」

〔状況〕

平成30年7月6日今日は朝から携帯電話やテレビで私の住んでいる所近隣の地域に避難勧告や避難し時の情報が頻繁に入っている。

過去に経験のない、また40年間も平穏に暮らしていた私は気にもせず、日常を過ごしていた。夕方7時過ぎごろ、テレビで対巨人戦を観ていた時、突然「ドカーン」と雷が落ちたような音がし、家が少し揺れた。

2階から妻が「大変だ!」と同時に、私は「何かあったか?」階段をとおり2階に上がって外を見た。家は柱が1本折れ、台所がめちゃくちゃに崩れ、外は石と土砂と枯れ木で、高さ7mほどの小山となり、堰となり、水は高い方へ逆流し、廻りは土砂が2m位堆積し、外へは出られない状況になっていた。

しばらくして、家の中に水の混じって土砂が、1分で2cmぐらい入ってきた。このままでは、家に閉じ込められる、何とかして避難する方法を考えた。

〔脱出と避難〕

両側（道路側）は土砂の堆積で出られない。裏側は4m位の石垣であるが、裏側しか脱出する方法がないと判断した。丁度家の

矢野東七丁目

宝蔵寺 俊 明

仕切りのブロック塀が2m有り、ぶら下がりながらそこに下り、さらに2m滑り降りた。幸い下には5mくらいのアルミの梯子があったので、力を絞って我が家の柵に立てかけ脱出できた。その時、近所の人が懐中電灯を持って助けに来てくれた。地獄に仏を見た気がした。

「避難所生活と復旧作業」

矢野南小学校で約40日間お世話になり、家の内外の土砂の排出と必需品の持ち出し等を行った。当初は何から手を付ければいいのか？判断が付かず、がっかりするだけだった。ブルトーザなどの重機やボランティアの応援で徐々に先が見えた。誠にありがたい。まず、道路に積もった土砂や災害ゴミの除去から始まり、生活に必要な移動ができるようになった。そして電気や水道が復旧した。

もう一つ重要な要素は、人の復旧である。避難所には市役所等の人が常駐し、色々な気遣いで、丁寧に、優しくそして書類等の指導又は、食料や飲料水、作業用品など無償で被災者に負担がかからない配慮が十分になされていたと思う。

「被災の低減」

不幸中の幸い、私ども夫婦にはケガや疾病など人的な被害はなかった。団地では、3人もの死者が出た。突発的な山崩れや鉄砲水などを除けば、被災は大幅に減らすことができると思う。

1、「人の被災」

住所付近の危険度の把握、避難訓練への参加、避難情報の受け入れ、避難場所、経路、緊急時の持ち出し品など意識して早めに行動すること。

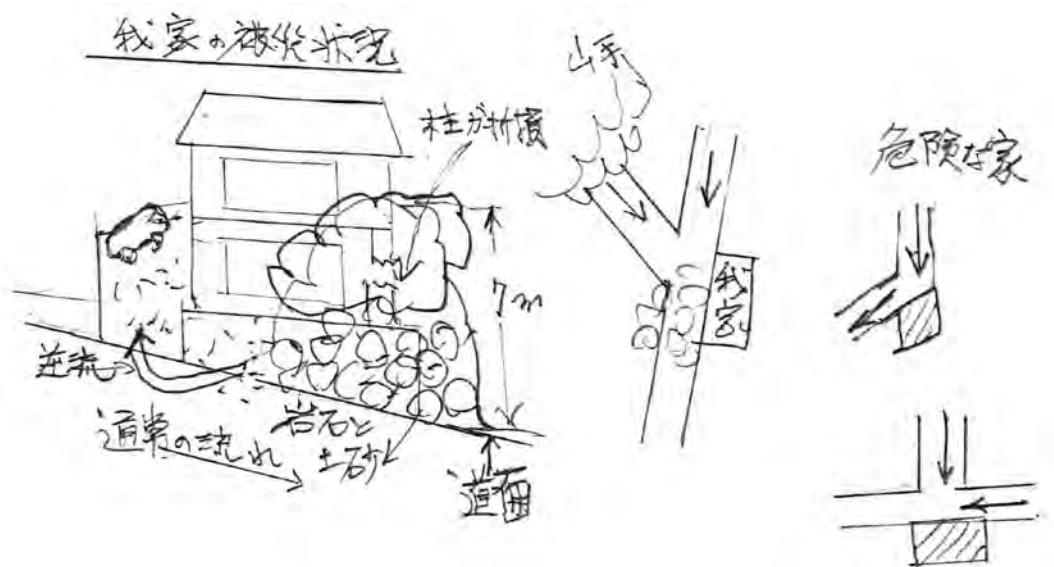
2、「地形と設備等の不備」

山崩れ、がけ崩れ、土砂流出などの災害が、予測される場所に、公的な設備や諸政策や規制が必要と思われる。

① ハザードマップで危険とみなされるところは、砂防ダムや保全活動を進める。

② 「地形や水の流れなど危険性が予想される場所に家を建てさせない」

③ 大雨で土石流を伴った時は、道路が川とかし、対面する建物危険です。



流石は、形状や重量や大きさが様々であり、どの位置で留まるかわからない。
一旦留まると次から次へと堆積し、堰となって流れの方向が変わる。

矢野東七丁目

谷 本 明

題目「突如襲ってきた土石流！」

昨日から降り続いた雨が、さらに激しさを増して来たのは、夜も更けた19時過ぎだった。その夜は、食事も終わり、のんびりとテレビを観ていたが、スマホの避難警報が数回鳴り、その内停電となってしまった。

蝋燭の灯りを頼りながら、外の雨音の様子をうかがっていると、突然ゴーツ、ドッドーン、ガシャーンという音に驚いて、窓から外を覗いてみると、裏山から道路を経て大量の土砂と水が玄関に一気に流れ込んできた。これは大変なことになったと思い、消防署に通報したが、「県道34号線が濁流のため現場に行けないので、直ちに安全な場所へ避難して下さい。」との回答だった。家族と共に玄関から避難しようとしたが、すでに1m以上の土砂で埋まって出られず、右往左往していたが、脚立を渡して何とか救い出し、土砂と濁流の中を、近所のガレージへ、とりあえず避難したのである。

この地域に住み始めて、40年が経過したが、こんな天災は一度も経験したことは無く、今回も他人事のような安易な考えでいたことが反省点だと思う。

天災は、いつ・どこで起きるかわからないので、常に防災意識を高めるとともに、貴重な経験を今後、生活していくうえで糧に

したいと思う。



矢野東七丁目

伊 木 則 人

題目「広域的被害をもたらした「平成最悪の水害」

平成26年8月20日に広島県広島市の北部、安佐北区や安佐南区の住宅地等で発生した大規模な土砂災害。積乱雲が数珠つなぎになって線状降水帯を形成する「バックビルディング現象」により局地的な豪雨をもたらし、これが大規模な土砂災害を招いた。この時、専門家は「こうした気象現象やそれに伴う土砂災害は、今後いつ、どこで起こってもおかしくない」と明言した。事実、平成27年9月関東・東北豪雨や平成29年7月九州北部豪雨なども同現象が原因の記録的な大雨により、大きな被害をもたらしている。

そして今年、広域的被害をもたらした「平成最悪の水害」が発生した。前線や台風第7号の影響により、日本付近に暖かく非常に湿った空気が供給され続け、西日本を中心に全国的に広い範囲で記録的な大雨となった。6月28日から7月8日までの総降水量が四国地方で1800mm、東海地方で1200mmを超えるところがあるなど、7月の月降水量平年値の2〜4倍となる大雨を記録。また、九州北部、四国、中国、近畿、東海、北海道地方の多くの観測地点で24、48、72時間降水量の値が観測史上第1位となるなど、広い範囲における長時間の記録的な大雨をもたらした。この大雨について、岐阜県、京都府、兵庫県、岡山県、鳥取県、広島県、愛媛県、高知県、福岡県、佐賀県、長崎県の1府10県に対し、気

象庁は特別警報を発表し、最大限の警戒を呼びかけた。後に、防災科学技術研究所が解析を行ったところ、広島県以外にも岡山県や岐阜県など各地において「バックビルディング現象」の発生が確認された。

さまざまなエリアで同時多発的に集中豪雨が発生したことで、至る所で河川の氾濫、浸水害、土砂災害等が発生。死傷者、行方不明者は231人（9月10日現在・消防庁発表）にものぼり、死者・行方不明者299人を記録した昭和57年7月豪雨による長崎大水害以降で最悪の水害、平成最悪の水害としてメディアに取り上げられた。また、全国各地で断水や電話の不通といったライフラインへの被害が発生したほか、道路網の寸断や鉄道の運休等の交通障害が発生した。こうした被害規模などを踏まえ、気象庁はこの豪雨について「平成30年7月豪雨」と命名。また、人的・建物被害が西日本エリアに集中したことから、報道などでは「西日本豪雨災害」と呼称されている。

西日本豪雨災害において最も多くの人的被害が発生したのが広島県だ。その中でも広島市は死傷者、行方不明をあわせ55人（8月13日現在・広島県発表）という大きな被害を受けている。土砂崩れが多発し土石流に襲われた広島市安芸区の矢野東地区では、道路上に転がる巨石や土砂、瓦礫の除去は進んだが、住宅を襲った土砂はまだ当時のままの状態のところが多数残っている。



平時は交通量が多い県道 34 号線の天神交差点。発災後数日間は濁流のように水が勢いよく流れていた。写真右手に見えるのが、ドライバーらが車を乗り捨て、助けを求め駆け込んだホンダカーズ呉中矢野店。



崩れた山の状況。このような個所が数多くある。



完成したばかりの治山ダムも土石流を防ぎきることができなかった。



梅河団地の状況。治山ダムを突破した土石流が道路を駆け抜けた。



土石流に運ばれてきた巨大なコアストーンが至る所に転がる。



上流では山からの水が道路を流れ続けている。



土石流により破壊された住宅。地震などによる倒壊とは異なる破損状況を見せる。



倒壊した家屋が道路を塞ぐ。



下流も橋に瓦礫等が詰まり川から水が溢れ道路に流れる。



県道 34 号線。土砂流出により路面が崩落。



流された車両が住宅に衝突し折り重なるように留まっている。



下流域では細かい土砂が堆積する。



景色が一変した住宅街にて破壊された家屋の状況を確認しながら搜索活動を実施する広島市消防局の救助隊員。

第一回

想像を絶する大規模な災害に直面した際に、私たちは何ができるのだろうか。

その時、何をせねばならず、どこまでできるのだろうか。

これまでの経験が活かされた場面もあれば、想像もしない現実に打ちのめされもした。

あの日の記憶を、記録として残すために――

平成30年7月6日。この日は関西での打ち合わせを行うため、午前5時に広島市安芸区矢野東にある自宅を出発した。また、前月の平成30年6月18日に発生した大阪府北部地震の復旧活動として、消防ボランティア団体「集結」の方々が高槻市にて瓦がズレた屋根に対してブルーシートを張る活動を行っているという。関西方面に向くのであれば、この活動に参加したい。そこで、7月6日から7月9日までの予定で関西方面に向かうこととした。

この時点ですでに雨は降っていたが、それほどの雨量ではなかった。しかし、山陽自動車道は大雨の影響で時速50km規制がかけられ、すでに広島県内から渋滞が発生していた。午前8時頃に尾道IC（広島県）まで至るが、以降の玉島IC（岡山県）の間が通行止めとなり一般道へ降ろされる。「一般道で先に進めば倉敷IC辺りから山陽自動車道に戻れるだろう」と思っていた。だ

が、交通情報を調べると通行止め区間はいつの間にか備前ICにまで拡大していた。打ち合わせは10時からの予定であり、間に合いそうにない。先方へ電話し、事情の説明と午後からへ時間変更をお願いした。その後も激しい渋滞によりなかなか進めず、岡山市内に入ったのは出発から7時間が経過した午後0時だった。この段階で打ち合わせにお邪魔することを断念。再度先方に電話を入れ、日程変更の調整を図った。そして、翌日からのボランティア活動に参加すべく、目的地を大阪府豊中市に変更した。

この日はちょうど、関東の大学に通い運動部に所属する息子が、国体の予選試合に出場するため広島に帰って来る予定だった。授業が終わり次第、夕方以降の新幹線に乗ると聞いていたが、昼の段階で東京―大阪間で運休という情報を耳にしていた。午後4時頃に息子へ電話をすると、新横浜駅のみどりの窓口で切符を買うところだった。「広島は結構雨が降つとるし、大会は中止なんじゃないんか？」と伝えるも、中止の連絡がなく、みどりの窓口で確認したところ新幹線が動いているとのことなので、ひとまず広島へ向かうという答えが返ってきた。結果として息子は新幹線に乗って広島に向った。これが後の私にとって有難い結果につながることになる。

夕刻になっても兵庫県を抜けることができない。これまでの間、幾度となく会社のスタッフや家族と連絡を取っていた。広島では

雨が降り続き、中区にある我が社の前の道路も、まるでプールのように1m近くの水が溜まったと聞いた。だが、それ以上の大きな被害に関する情報は入ってこない。兵庫県まで進出している状況であり、今から戻っても……。この段階ではまだそんなことを考えていた。

しかし、状況は一変する。そして、大変な事態が起きていると知った時には、遅かった。午後7時30分ころ、同居する母から電話が入った。

「ものすごい雨よ！」

私を含め、家族は全員仕事で出ており、自宅には母が一人だった。怖がる母が落ち着くよう話しかけていると、気になる言葉が耳に残った。

「・・・土の臭いがする」

この一言で、自宅周辺がどのような状況にあるかが理解できた。土の臭いは「土砂崩れの兆候」として広く知られているものだ。自宅周辺は山も近く、土の臭いそのものは少しの雨でも感じられる環境だ。だから逆に「あえて言葉にするほどの臭い」として母が感じ、それを私に伝えてきているという時点で異常な状況が起きている可能性を示唆しているのだ。

とにかく山から離れた安全な場所に避難するよう伝え、いったん電話を切った。そして30分ほど経ったころ、再び母から電話が入った。電話がつながると同時に、パニック状態の母の声が聞こ

えてきた。「ご近所の方と合流できた」「山から凄い音がしとる！」
「県道の上から車が玉突きしながら、何台もグルグル回りながら流されていきよる!!」悲鳴を挟みながら必死に伝えようとする母。間もなく、大きな叫び声を上げると、信じられない言葉を発した。

「奥の山から土石流じゃわ!!」

——早く広島に帰らねばならない。そう悟った。

母からの電話でリアルタイムに発災を知り、地元の知人や消防団の仲間からも電話やLINEを通じて「矢野東7丁目天神町内で土砂崩れが多発してるらしい」「坂町や熊野町も甚大な被害が出てるようだ」「緊急消防援助隊と自衛隊に派遣要請がなされた」といった情報が入ってきた。

この頃、私はまだ兵庫県西宮市の辺りを、大阪を目指して走っていた。午後9時頃に息子に連絡がつき「名古屋付近で立ち往生している」と確認した。新幹線がいつ動き出し、どこまでいけるかわからない。ならば息子と合流し、一緒に広島に戻る方がよいと考えたのだ。

午後10時頃に、当初の目的地だった豊中市にある消防ボランティア団体「集結」のベース基地に到着した。「地元が大変な事になっているようなので、申し訳ありませんが広島に帰ります」とご挨拶だけさせてもらい、豊中市を後にした。

ちょうどその頃、息子から「新幹線が動き出した」と連絡が入った。次の停車駅は京都。そこで京都駅で合流することにした。大阪から京都までは順調に車を走らせることができ、午後11時40分頃に無事に息子と合流が果たせた。

広島へ向かう。高速道路が通行止めのため一般道しか使えない。移動距離はおよそ360km。深夜であり、雨も小康状態であることから、午前中には戻れると思っていた。内陸の一般道を通るルートが若干早い、それは平時の話。山間部を抜けるルートであれば土砂崩れなどで通行不能となっている可能性があり、逃げ道もない。そこで、海寄りの神戸、加古川を経由するルートを選択した。日付が変わった7日の午前9時頃になって倉敷市までたどり着いた。この先は激しい雨に襲われたエリアが続くため、さらに道路状況が悪くなるはずだ。そこでしばしの休憩をとり、朝食も済ませた。

早々に出発するも、予想通り全く進めない状況に襲われた。午後4時頃になって尾道市に入る。至る所で土砂崩れや冠水が発生しており、国道、県道、旧道など、あらゆる道を選びながら車を走らせ続けた。ナビの経路案内は生活道路を除外して幹線道路を優先するため、案内通りに車を進めれば必ず大渋滞に巻き込まれる。そこで、経路案内は使用せず、地図を広域表示にして西に向かう道、回避路があるルートを目視で探して走った。

また「どの道が生きているか」というリアルタイム情報を把握するため、各地で面識のある地元消防関係者に連絡を取り、道路情報の交換を行った。これにより通れる道、裏道を教えてもらい、私はそのルートが実際に通行可能であったかなどをフィードバックした。当初、こうした問い合わせを行うことに躊躇したが、ある地域で「その道を伊木さんが通れたなら、私たちもそのルートで通報先に向かうことができそうだ」といった言葉をもたらした。災害多発の状態にあり、地元消防組織は道路調査などに人員を割くことができない。そうした中で、私の「通行できた」という情報が役立つ場面があったのだ。

そして、情報収集と並行した移動に力を発揮してくれたのが息子の存在である。交代要員がいたことから車をノンストップで進めることができ、細かな情報収集や地図確認も可能となったのだ。本来であれば数時間で移動できる区間であっても、中途半端な迂回では、大渋滞にはまって逆効果となる。そこで、西の広島方面へ向かうのに、北や南へ大きく迂回せねばならず、走行距離が予測不能な程かさむ状態だった。こうした悪条件の中、息子のサポートを得つつ、7日の午後10時過ぎに広島市内へたどり着いた。

広島に戻ったが、自宅には帰れなかった。自宅のある矢野東7丁目は濁流や土砂、木、巨石、流され大破した車などで道路が塞がれ、完全に孤立していたのだ。我が家は被害を免れることがで

きたが、家が全壊し帰る場所がない人、あるいは家に居るのが怖いといった近隣住民に避難スペースとして開放した。自宅に一人だった母はその近隣住民16名と共に励まし合い、協力し合いながら2晩目を過ごしていた。

我が社の経理を務める妻も、発災当時は会社に残っていたため、自宅には帰れないでいた。そこで、避難先として身を寄せていた南区の親戚の家に向かった。

「お疲れさま」

妻が私たちを迎えてくれた。6日の朝に家を出てから40時間ぶりの再会。何とか帰ってこられたと実感できた。

「行ってくるけえ」

「気をつけてね」

あまり言葉は交わさず、妻や息子と別れ、そのまま私は所属する広島市安芸消防団矢野西分団の詰所へ向かった。

帰広はゴールではなく、災害との長い戦いが始まることを意味している。詰所へ向かう車の中で、私は「覚悟」を決めた。



一般道の状況。至る所で冠水していた。



発災から2日目の広島市安芸区矢野東の様子。道路が土砂、木、巨石、流され大破した車などで埋め尽くされている。



河川を見ると水の量が増え、茶色く濁った状態だった。



道路に土砂が流入しているところも多かった。

第二回

仕事のため関西方面に出ていた私は、発災翌日の7日午後10時過ぎになってようやく広島市内へ戻ることができた。自宅周辺は通行不能の状態と聞いていたため、所属する消防団の詰所へと向かった。午後11時頃に安芸区にある広島市安芸消防団矢野西分団の詰所付近へ到着すると、住宅街の至る所で冠水が起っていた。すでに仲間の団員たちは活動を行っており、私も合流した。土のうをポンプ車に積み込み搬送し、家屋への水の流入を少しでも抑えるべく積み上げていった。可能な限りの活動を終え、日付が変わった8日午前1時頃に詰所へ戻り、活動再開予定の7時まで仲間とともに仮眠をとった。

今回の豪雨災害では消防団の特徴である即時対応力や動員力を活かし、発災直後から人命検索や救助活動等を実施したほか、女性消防団員は避難所での支援活動等を実施。7月6日から8月13日までの39日間に延べ6,294人が活動を行った。また、広島市内の各消防団は各区の管轄区域のほか、広島市全域の応援や、消防事務を受託する海田町、熊野町、坂町への応援活動を実施した。矢野西分団の管轄区域では依然として活動に着手できないない場所がある状況。そこで、8日は活動場所を数か所に分け活動することが決定。私は自宅周辺での活動を申告し、詰所を後にした。自宅から500mの範囲は車を乗り入れることができない状態。

最寄りの避難所である広島市立矢野南小学校に車を置き、そこから歩いて自宅へ向かった。変わり果てた町の様子は想像を超えていた。これまでにボランティア活動で入った他都市での被災地の光景が、日々生活していた我が町に広がっている。慌ただしく消防、警察、自衛隊、各機関の関係者が走り回っている。山からの水が濁流となり、川から溢れた水が県道を塞ぎ容易に渡ることができない。自宅のある安芸区矢野東7丁目へはこの県道を渡らねばならない。天神交差点では現場で活動する救助実施機関により親綱が設定されており、これに安全帯をかけ、何とか渡ることができた。

自宅へ戻れたのは正午頃だった。我が家は辛うじて被災を免れており、直近の避難所までの移動も困難なことから私設の避難所として開放し、近隣住民が身を寄せていた。状況は最悪だ。話を聞けば、行方不明者も相当数出ているようだ。すでに発災から40時間が経過しており、行方不明者の捜索が第一優先であると考えた。この少し前、取材などを通じて繋がりがあった愛知の現役消防士H氏から連絡があった。H氏は災害現場活動へのドローン活用に取り組んでおり、東京で地理情報科学を研究するI氏やその助手の方とともにボランティアでの情報収集活動のために広島へ向かっているという。発災直後で交通が麻痺する中、3人が午後2時頃に駆けつけてくれた。私の自宅を拠点とし、町内の山から海まで約5kmのエリアを移動しながら、ドローンによる撮影を

行ってくれた。至る所で川や側溝が氾濫し、道路は濁流で塞がれている。この水をなんとかせねば、捜索活動や孤立地域の解消が出来ない。明るいうちに片道5kmの道程を2往復し、町内の状況をくまなく撮影し、分析した。

山から海までの中間に位置する私の住む矢野東7丁目の団地は、矢野川から越水した水が県道を濁流となって流れており、孤立化を招いていた。越水の原因は上流で大型トラックが川に落ち、瓦礫などと一緒になって水をせき止めたことで県道へ逃げるように流れ出しているため。そこから約500m下流では、県道上で大型トラックが横転し道を塞いでいるため、これにより濁流は再び流れを変え川に戻っていることが分かった。

山からの濁流は一部で県道に進路を変えているものの、すぐに川へと戻っている。つまり、この流れを変えても下流域の水量に変化はない。画像により海までの状況を確認するも、現状以上の氾濫を引き起こしそうな障害物はなかった。そうと分かれば上流側のトラックと、後の活動に障害となる下流側のトラックそれぞれを撤去するのみだ。現場にて重機による道路啓開活動を行っていた自衛隊の指揮官を訪ね、ドローンで撮影した映像をもとに専門家の3人とともに状況を説明し、トラック撤去について進言した。

「わかりました、やりましょう！」

時間はすでに夕刻。自衛隊は大型重機による活動を終了し撤収を始めていたところだった。しかし、私たちの提供した情報を受け止め、自衛隊がトラックの撤去に着手してくれた。また、解体業を営む消防団の仲間も職場の重機をもって駆けつけてくれた。発災から約50時間経った7月8日の午後9時頃にトラックの撤去が完了。県道を塞いでいた濁流は川へと流れを戻し、団地は孤立状態から脱したのである。厳しい環境ながらも人の往来が可能になった。つまり、搜索活動を行う人員も投入が容易になり、効率が格段に上がるはずだ。だが、やるべきことはまだある。効率的で漏れない搜索活動のための資料を作るべく、ドローンで撮影した画像を基に情報解析と分析を深夜3時過ぎまで続けた。

9日は早朝5時より安芸消防署の講堂に設置された現地総合調整所に向かった。ここは安芸区に加え、広島市が消防事務を受託する海田町、熊野町、坂町で発生した土砂災害等に的確に対応するため設置されたもの。調整所には広島市消防局や消防団、緊急消防援助隊、警察、自衛隊などが集結し、朝と夕方の2回調整会議を実施して活動計画の検討や調整、活動結果の情報共有等が行われていた。朝の調整会議に合わせ、夜中のうちに仕上げた資料を基に情報提供を行った。現場の最新状況を映し出した資料は安全管理にも役立つ。土砂がどこまでの程度崩れ、どう流れたかを把握すれば、搜索活動も効果的に実施でき、さらに二次崩落など

が発生した際に活動隊員が退避する方向などを検討することができからだ。

その後は、地上からの目線で状況を把握すべく町内を歩き回った。アスファルトが剥がれ、流された車や土石が道を塞ぐ。今年2月に完成したばかりの治山ダムの前にあった住宅は跡形もなく流されている。さらに、至る所に巨大なコアストーンが転がる。この治山ダムから少し下がった場所でも、住宅に土石や流された車両などが押し寄せ、家の形はあれど壊滅的な状態だった。知人の女性は川沿いの道を、行方不明になった息子の名を叫びながら歩く。搜索活動が出来るようになった喜びとは裏腹に、恐怖や不安、そして焦りがこみ上げる。行方不明者を一刻も早く見つけた。気持ちばかりが先走った。

私にできることで、私にしかできないこと。そう考え実行したのが俯瞰的な状況把握と情報の共有だ。例えば地域住民。下流域に暮らす人々は流された土砂の撤去に追われ、上流域の現状に意識を向けることはできない。そして現場で活動する救助者たちはローテーションにより活動を継続しており、一連の状況の変化を通して把握するのは困難だ。一刻も早い行方不明者の発見はもちろん、地域住民やそれを救うために活動する人々のいずれも二次災害に遭わせたくない。その一心から、現場、各機関の現地指揮本部、現地総合調整所、避難所など関係する局面を何度も往復し、情報収集と共有に力を入れた。

初期の段階で力を注いだのは安否情報の把握だ。安否情報は警察が確認を進めていたが、「居ない者を探す」という作業は非常に難しく、やはり難航している様子だった。この手助けができないかと、私は避難所である矢野南小学校と矢野小学校に向かい、避難所運営を担当する職員に話を聞いた。すると「収容世帯と人数」は把握しているが、安否情報は確認していないという。そこで、人が集まる食事を配布するタイミングで「安否がわからない人を知っている人」が居ないか呼びかけてもらい、どこの誰が行方不明になっているかを洗い出した。この情報は逐一、現地総合調整所に提供していった。また、県道の往来が可能になったことで、避難所から自宅へ着替えを取り戻る者も増えてきた。そこで「自宅に戻る際は現地指揮本部に立ち寄ってください」と呼びかけた。現地指揮本部は各活動現場に設置されており、現地総合調整所で決定された活動計画等に基づいて、広島市消防局の出動部隊はもとより、消防団、県内消防応援隊、県内応援消防団、緊急消防援助隊等の活動エリアの調整等を行うほか、関係機関等との活動調整を行っている。

「地図がありますので、自分の家の場所を示し、安否情報を伝えてください」

これは安否情報の把握だけでなく、万が一の二次災害発生時に「どこに誰が居るか」を活動機関が把握していれば対応しやすくなると思ったからだ。こうした活動を続けるうちに、何日かする

と各機関の指揮官から私に対して情報の求めが入ったり、各局面の活動状況を知らせてくれるようになった。当時はそれがどういう役割であるか考える余裕もなかったが、いわば私を「指揮支援隊」のような存在として認識してくれたようだった。

何とかではあるが進み始めた搜索活動と復旧への動き。一方で、新たな課題を検討しなければと思った。発災以降、気温が35度を超える猛暑の中で連日の活動が続けられており、現場活動する者や地域住民の体調に留意しなければならない。また、台風の襲来やゲリラ豪雨の予報など、二次災害の発生が容易に予想される出来事も続いた。過酷な環境の中、先の見えない日々が続く。一刻も早く行方不明者を助け出し、元の町並み、そしてみんなの笑顔を取り戻さねばならない。そのために自分自身が進むしかない と確信し、活動を続けた。



濁流が流れる県道 34 号線の天神交差点。水難装備を装着した警視庁の救助隊員が親綱を設定し往来の補助を行っていた。



川よりも激しい流れを見せる県道 34 号線の濁流。



河川に落ちたトラックが氾濫を招いていた。自衛隊や消防団員である地元解体業者の仲間が連携し撤去活動を実施してくれた。



アスファルトがはがれて水が流れ落ちさらに土を削る。

⑫【広島市安芸区矢野南】

矢野南三丁目

高山 和代

題目「寄り添って」

私は7月6日の豪雨災害から3日目に避難所へ行きました。すでに数名のボランティアさんが活動してくれていました。

私達ボランティアの主な活動は、健康第1を念頭に熱い毎日凍らせた栄養ゼリーや飲み物を作業に出かける方に手渡すことでした。

他にも、毎日同じ弁当で食べ辛くなられた時に、梅干しやらっきょうやプチトマトを差し入れてくれたボランティアさんもありました。

みんな避難者さんの力になりたいと一生懸命働いてくれました。誰かに支持されて働くのでなく、自主的に生き生きと活動してくれました。

私は民生委員としてボランティアさんの思いや避難者さんの話を聴いて行政に繋ぎ調整する努力をしました。

そして、2カ月経つうちに避難所は1つの家族のようになりました。

避難所を退所される家族は、「私達ボランティアとの別れが寂しい」と言って、泣いてくださいました。

何ができただかわかりませんが、1人1人のボランティアが誠意をもって接してくれたことが、この涙につながったのだと思います。

避難所は閉鎖されましたが、被災者の方のご苦労は続いています。

これからも被災者の方が日常を取り戻せるまで、お手伝いしていきます。

大勢のボランティアさんに感謝します。お疲れさまでした。





「土石流の直撃を受けました」

ペンネーム：Kunsei T
矢野南四丁目

あの7月6日は仕事を終えてマイカーで帰宅、いつもは自宅前の道路の山のすぐ下に駐車していたのですが、自宅前の道路には小石がゴロゴロしており、その山からの土砂崩れを警戒し、自宅手前の隣家の下に駐車しました。6時頃だったと思います。居間のパソコンで戯れていると、2階から息子が下りてきて、「この雨やばくねーッ？」との問いかけがあったので、玄関のドアを開けて外を見ると、滝のような雨で自宅真ん前の谷の様子は全く分かりませんが、本能的に即避難を決心。「着の身着のまま みんな逃げよう」と妻と息子に伝え、何を持って逃げたいのか、わからないので焦って居間に戻って目の前の会社カバンと毛布を



抱えて玄関を飛び出しました。その際、妻がトイレに入って行くのはわかりましたが、直ぐに避難して来るだろうと思って、矢野南小学校に車で向かいました。

体育館の受付では、「あと、妻と息子がすぐ来るはずですよ」と手続きをして待機したのですが、なかなか避難してきません。どれくらい経ったのか定かではないのですが、電話をすると、「逃げられなくなった」と。「どしたん。」「土石流に攻められて、息子の車は流された。あんたのバイクも姿が見えない。私の車は家の前に逆さまに突き刺さっていて、何もかも土砂に埋もれた。避難しようとして外に出たが、埋もれて歩けそうにない。このまま家で待機する。」「また、次に大量の土石流に攻められたら大変だから、なんとかして逃げた方がいいよ。」ぐらいまでの会話しか記憶にありません。どれくらい経ったのかわかりませんが、ようやく妻と息子がずぶ濡れで避難してきました。

自宅はどうなったか解りませんが、3人とも怪我がなくてよかったです。

なんで逃げ遅れたか考えました。私の「着の身着のまま」という言葉に妻は危機感を持たなかったのでは、ということですよ。息子は危機感をもっていたけど、母親があれやこれやと持って逃げる準備をしているのに、母を1人置いて自分が先に1人で逃げる事が出来なかったからだと思います。体育館に着いて、私が「な

んで遅れたん？ 息子は「甘かった」とだけ答えました。

この言葉の裏は「母を1人置いて逃げれるはずがない」ということでしょうか。

どのように土石流が襲ってきたのか息子に聞いてみると、目撃したようではありませんが、音を聞いたそうです。

それは「ドドー、ドドー、ドドー、ドドー、ドドー」があり、最後には「ドーン」とあったとのことですよ。こんな音を聞いてからの避難は、到底逃げ遅れます。

東北の大震災では、津波に襲われるときは「てんでんこ」ということが伝えられていると、TVを見ましたが、やはり親子ではこれも難しいのだと思いましたし、息子の優しさに感心したのと、私の伝え方の甘さを痛感しました。

翌日から妻と息子は、友人宅へ避難。私は7日から自宅で過ごしていました。

みんな怪我がなかったこと、家が損壊しなかったこと、床上浸水しなかったことにホットしていましたが、夕方床上浸水が始まりがっかりしました。

雨が小やみになると水が引いた。被害はフローリングの4cmくらい上ですよ。私はそのまま2階で就寝、朝早く起きて、階下に行くことまた、床上浸水。

玄関を開けて見ると、道路に堆積した土砂の上を水が勢いよく

流れていて、一部が溢れ出して我が家の玄関に向かって流れ込んでいた。

これが原因だと考え、ヘッドライトを点け、土嚢袋で流れを防ぐと浸水した水が引きました。水が引いたといってもフロアリングの5cmくらい下まで。土砂の撤去が始まり水位は徐々に下がっていきました。

我が家は平成7年に新築しました。その際、道路と宅地は平地でした。家の前には谷があり、治山ダムが1つ、谷からの水は前の道路下に1.8m角のトンネルを通して放水されていきました。水があふれた時のことを考えて、2尺ほど地面を上げて安心していましたが、土砂が流れてくるとは想定外です。しかも直径80cmくらいの杉の太木が息子の車を直撃した模様です。この車が自宅の損壊を防いでくれたのだと、今でも思っています。

8日からの土砂の搬出では、ボランティアの皆様には大感謝です。延べ200人くらいの応援を頂いたと思っています。その後、近所の皆さんには毎日お手伝いを頂いたおかげでショベルカーの入らないところの土砂を出すことができました。残った土砂はショベルカーですべて掻き出してもらい、災害ゴミも重機でごみステーションに搬出。(有)T建設には大感謝です。

テレビの報道による床上に大量の土砂が入り込んだ家と、我が家の数cmの床上浸水を比較すると、自宅の被害は軽微としか言いようがありません。これだけの被害で済んだのは奇跡と信じています。

被害を受けて10日くらい後に、床下の換気口に換気扇を2台取り付け、終日、換気をして床下の乾燥を急ぎました。

床下には、1.2cmくらいのヘドロがあり、9月に入って要約乾燥しひび割れが入りました。空気が入る付近は乾燥し白くなって地面より剥がれて行きます。

9月6日から床下に潜って小さなスコップで剥がし取り、バケツで搬出を始めました。

今月中には、あの土砂と縁が切れそうで、忘れられない被災の年が越せそうです。

反省①…「着の身着のまま」と言いましたが、真に危機感を伝えるなら、その手を引っ張ってでも夫々の車に連れていくべきだったと反省しています。

反省②…緊張していたのか、何をするにしても時刻を確認していませんでした。行動をおこした時刻が全く不明でした。

滝の雨を確認して、避難して来ない妻に連絡した時刻がわかれば、私が避難して(滝のような雨を見て)何分くらいで土石流が直撃したのか判明し、今後の参考にもなると

思われて仕方ありません。：：冷静になって時刻を確認できないのが実態です。

矢野南四丁目

自治会長

末 永 昭 二

題目「災害時の対応とボランティアへの感謝」

7月6日の朝から、かなりの雨だと思っていたら、矢野交流プラザの七夕祭りが中止との連絡が安芸区地域推進課から入る。矢野駅前から帰りの道路は大渋滞。

そんな折夕方女房を、予約していた向洋の整形外科病院へ送迎する。当然帰路も大渋滞であった。帰宅後18：20避難勧告が発令され、自治会の各ブロック長へ避難勧告を緊急連絡網で流す。そのような状況下、自宅の防災無線も鳴りっ放し。

更に19：20頃避難指示になり、再度緊急連絡し南小学校へ避難する旨伝える。友達のJさんに連絡して南小学校へ避難する様促すと、その時は既に自宅玄関前が土砂で溢れて玄関から出られない。と言う。そんな馬鹿な！と思う乍ら現地へ行くと、Jさん方へ通じる道路上に車が浸かって動けないでいる。

裏側の人家から流れ出ている泥水に抵抗しながら友達の家に通り着く。

避難物資をリュックに背負い足元の悪い中、南小学校の体育館へ一緒に避難する。

避難先に次第に人が集まってくる。夜遅くなくても人が来るが、体育館に入れない人もいる。体育館の屋根に響く大雨の音で一睡もできないで、気になり乍らも朝を迎える。

翌日朝6時頃小雨になり雨合羽を着て体育館を出て、災害現場へ向かうと土砂が道路に堆積している。今までとは大きく様変わり、無残な状況が明らかになった。

一旦自宅へ戻ると、女房が「左目が痛い。」と言う。緑内障で病院通いしているので気になり、すぐ海田町のM眼科へ向かうが大渋滞。幸い先生が渋滞の中、何とか病院まで辿り着け診察して貰うと出血していて緊急手術。もう少し遅いと大変な事になっていたそうで、先生に感謝！。安心して帰宅するが帰路も大渋滞になっていた。

帰宅後、土砂災害現場へ行くと道路上に堆積した土砂を、ボランティアのAさんが重機で土砂の移動及び水路を作ってくれている。初期作業してもらい非常に有り難い。

話を聞きつけた友人・知人が個人宅に次第に集まってくる。初期は個人宅へのボランティアでの作業が中心だった。

8日（日）環境局へ行き800枚の土嚢袋貰う。本日は学生中心のボランティア多数。

ボランティアで防災士のMさんが、土嚢の積み方等陣頭指揮し

てくれ助けられた。土嚢袋を更に600枚追加で貰い、夕方まで水路確保の土砂壁完成。地元の企業からも人的応援と物資の支援を受け、無我夢中で雨中の2日間を過ごす。

9日(月) になって、この日から正式にボランティア受付開始。同時にこの日梅雨明け宣言、一転の酷暑であるにもかかわらず、今日も多数のボランティアが参加。テント及び折畳机と筆記用具等段取りして、やっと本部席を確保する。

山本区長が来訪され、土砂撤去作業の早期開始を要望する。

手足の痺れがあれば水分補給と早目の休憩が必要との事。本日から各家庭のニーズを聞き、個別に人数を割り振り作業する。今日も沢山の人が参加してくれ、10人位のパートで交代で作業する。300名以上のボランティアが来られ、16時半作業終了。

10日(火) 土嚢袋が足りず企業からの支援を仰ぎ、土嚢袋詰めとバケツリレーでの炎天下作業。各作業場所には、リーダーのもとで行動する方が良いとの結論で、リーダー指名。安芸区社協の会合があるとの事で、社協のKさんと自治会のHさんが参加する。

ニュースによく出る畑質地区と矢野東の話はされたが、矢野南の話は出なかったと言う。

そこで、矢野南の現状を話すと初めて、この地区での土砂災害が認識されたと言う。

11日(水) T代議士来訪要求を伝える。夕方Y防災士来訪 土のう補強の必要性あり。

12日(木) 2丁目住民より、重機提供申入れ。今日は土嚢作り中心。13日(金) 連日の暑さで皆さん疲れているので、本日より午前中のみの作業とする。

14日(土) 今日からボランティア保険登録する。

15日(日) 再度土嚢袋調達。未だ各敷地内に土砂が堆積しているため撤玉作業する。

16日(月) この3連休は沢山のボランティアに参加して貰い、連日の人数を集計すると7日・8日の集計の無い両日を除けると、8日間で1,786人以上。平均200人以上のボランティアがあった。(登録なしの人数多数有り)

連日の疲れからか、熱中症状あるいは貧血症状の人が連日確認される。

16日(月) 今日で一般ボランティア作業終了する。

今後は行政等のボランティアを、各家庭でニーズを聞いて貰う様要請する。

テント・机・椅子・クーラーボックス・扇風機・フルーシート・筆記具等撤収

この期間自宅トイレを開放して貰った家庭には非常に感謝しています。

ボランティアの皆さんの帰路に、2軒の家庭で手洗い用の水を提保して貰った家庭も。

現実ボランティアを受けた日数は10日間で、この作業でのマンパワーとは凄いと思った。作業主体のT建設さんには朝早くから土砂撤去作業されて、排水ポンプ管理含め本当に有難う御座いました。早くから動いて貰ったN製作所さん。重機の(株)Eさん。T運輸さん。(株)Rさん。(株)Pさん。沢山の企業と一般の人に協力頂きました。重機提供申入れのSさん、支援金提供の匿名の三丁目住人さん。重機提供・人的提供・飲料提供・物資提供等沢山の人に協力して貰い感謝です。熱中症の疑いで倒れた方も何人かおられました、救急搬送の方も！酷暑の中、矢野南町内の皆さん 又近隣の皆さん本当に有難う御座いました。

復旧作業は17日以降も各家庭の敷地内整備もあり、親戚・友達等の力を借りて細々と、各家庭で整備されていました。その後も行政による道路上及び治山ダム下流と暗渠内の土砂撤去、側溝の土砂撤去作業がありました。

道路上の土砂撤去は7月中に終わり、やっと周辺道路が通れるようになると、改めて周囲がこんな情景だったのかと驚かされました。

治山ダム下流の土砂撤去が8月に入り作業継続。

盆前から道路下の暗渠内の土砂撤去作業をバキュームカーで吸い上げ、下水道局が対応してくれてこの現場は9月中旬完了した。この期間中被災者は大雨が降れば、普通の人以上に心配し、心

の休まる時がなかったそうです。これでやっと日常生活に戻れます。自治会長として初めての対応で、無我夢中で皆さんの協力を得て、迷惑を掛け乍らやってこれました。反省ばかりですが今後このような事態があれば、役立てたいと思っています。皆さん有難う！！





矢野南四丁目

ペンネーム…ス Copp

題目「土砂災害の被災地となつて」

2018年7月6日金曜日土砂災害発生

主人

東広島方面より帰宅途中道路通行止めになり、帰宅難民となる。

息子

7月8日日曜日朝10時30分避難所矢野南小学校に到着。勤務先より帰宅時、JR終日運休となり、バスセンターにむかう。

バスセンター18時48分に熊野萩原行きに乗車

大渋滞と熊野道路路川のようになっていることもあり、バスは熊野道路を上がらず。石崎本店前にて乗客を皆おろす。

そこから、矢野南小学校まで徒歩にて、23時10分ごろ到着。

私

勤務先より、帰宅途中熊野道路渋滞。9時10分家に到着。家の前は泥だらけになっていた。

19時半頃ご近所の方より、家の前の山土砂崩れ起きていると知らされ主人と息子に家には帰らないよう連絡、矢野南小学校に避難するから矢野南小学校に向かうよう伝え、20時過ぎ矢野南小学校に到着。

2018年7月7日土曜日

朝7時45分ごろより、ご近所の方々が集まって下さり家の前の山から崩れ落ちた土砂と水がこれ以上家に流れ込まないように土を高く盛り土と家の間に壁を作って下さいました。

土砂を土のう袋に入れ、盛った土が崩れてしまわないように、皆さんが土のうを積み上げて下さいました。大きな木も庭に横たわり人力では全く動かない状態でしたが、ショベルカーでたまたま通り掛かった方が助けて下さり庭から大きな岩と木を取り除いて下さいました。

通り掛かった男子高校生も必死にスコップやのこぎりを使って庭に人り込んでしまった土砂、岩、木を取り除く作業を手伝って下さり、夕方4時くらいまで皆さんが手伝って下さいました。

再び矢野南小学校に避難

2018年7月8日日曜日

朝から雨が降り矢野南小学校で過ごしました。

主人10半すぎ矢野南小学校到着、

家に向かい少しだけ家を片付けましたが雨のため、再び矢野南小学校に避難、そのまま小学校で過ごしました。

2018年7月9日月曜日～1週間

家の前の片付けをご近所お方々が手伝って下さり、

土のうをたくさん作り積み上げて下さいました。

早い段階で家の前の片付け、人力で出来る事は終わらせることができました。

4丁目町内の津川さんのお宅前治山ダムから大量の水と土砂、木が流れ車も流されていると聞き、ご近所の方々と主人と息子と一緒に片付けに向かいました。

流された車と土砂が家に入り込み、作業が困難な状態で人力ではなかなか作業が進まず重機が必要でした。

困ったこと

◎土砂災害の被災者になってしまいましたこと

感謝したいこと

◎ご近所の皆さんが集まって下さり助け下さいましたこと。

◎どうしたら良いのか分らない私達にどう動けばよいのか教えてくださる方がずっと側にいてくださり助け下さったこと。

◎ショベルカーで大きな岩と木を取り除いて下さったこと。

◎ブロック長が毎日休まず片付けに参加され、必要な物の調達をしてくださいましたこと。

◎市役所の方が早い段階で崩れた山の応急処置を手配して下さいましたこと。

本当にありがとうございます。感謝の気持ちでいっぱいです。

今困っていること。

◎家の前の山が台風や大雨でいつ崩れるかわからない状況であり、次同じ様に連日大雨が降った場合はもっと大きな災害になる恐れがある事。

◎大雨時、毎回避難しなければならない場所であること。

◎大きな災害がおきているところの作業が優先であるのでこのまま崩れた状態が長く続くと思われること。

◎この崩れている山をそのままにせず、きちんと工事していただかなければ、この地域の方々皆さん安心して暮すことができないこと。

◎夜暗いので山の状況を確認することが出来ない事。



家の前の山（現状です）

題目「7・6 私たち家族の過ち」

7月6日19:04 私は仕事に出かけるつもりで家を出た。大雨が降り続き、「避難準備」が出されているにもかかわらずである。

「まあ2時間程度行ってくるぐらい大丈夫でしょう」という気持ちだった。しかし、家を出ると家の前の道路の山際に土砂が出ていた。(写真①)

「これはやばい奴だ」家族に知らせ、慌てて避難する準備をした。何を準備すればいいのか？わからずペットの身の回りのものだけ、カバンに詰め込んで、車2台に乗り込んだ。私たち家族は、近所に告げることもなく、我が事だけしか考えていなかったのだ。家を飛び出した私達家族が、避難場所を選んだのは、遠く離れた実家だった。

理由は、避難場所にペットは連れて行けないこと。父が1人暮らしで心配だったこと。実家の周りには山も川もなく安全だと思っただけである。今思うとなんて無謀なことをしたのだ。と頭を抱える。

熊野道路に入った直後、後悔した。トンネル内は渋滞のうえ道は川のようになっていた。(19:44写真②) 黒瀬の手前では、道路が水没し、車の3分の1は水に浸かった。

国際大学辺りでは小石がゴロゴロしているのが、運転していて

もわかった。そんな中だったが私達家族は、無事に実家にたどり着き、夜を過ごした。

案の定、実家は安全だった。しかし安堵する間もなく、ツイッターで見つけた我が家の周りの様子に愕然とした。「早く戻らなきゃー」と思ったが、帰れる道は見つけられなかった。

2日後、帰れる道ができ、車を走らせたが、2日前に通ってきた道の変わり果てた様子に、生きて実家にたどり着けた奇跡を感じた。(写真③)

7月8日からは、自宅周辺の復旧作業に加わった。連日町内を中心にたくさんの方々がボランティアに来てくださった。防災士の指導のもと、復旧作業ができたことは、本当に幸運だったと感じる。

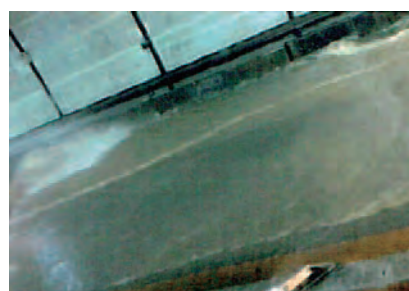
町内会長さんをはじめ、たくさんの方々が自分たちの生活を放りだして、尽力してくださったことが、復興に向けての大きな流れを生んだのだと確信している。私は心豊かな人たちがこんなにたくさんいるのだと感動を覚える。大変な災害であったし、たくさんの苦しみを生んだことは間違いないが、人々のこうした行動で被災した人たちは沢山の力をもらえるという事を知ることができたことは、宝だと思っている。

災害に直面し、多くの誤った行動を取ってしまった私達だが、こうして命を保っていることに感謝し、一人でも多くの命が守れるよう発信します。甘く見ていないこと。近くの安全な場所に身

を置くこと。周囲とのかかわり合いを大切にすること。



①



②



③

題目「7月豪雨についての思いと感謝」

矢野南四丁目
井上 順子

7月6日金曜日の朝から雨降だったが、市内に出かけた。15時過ぎから雨が激しく降り、市内の電車は止まり、バスにて17時頃自宅に帰る。

その頃から、我が家の治山ダム方面60m先の山側3箇所から茶褐色の水と石ころが法面から落ち出していた。近所の人と話して、家に帰り避難の支度をして出かけようと思った時に、「ドーン」と大きな音がした、一瞬雷かと思った。(19時20分頃)直ぐベランダに出て前方を見ると土砂と車と大木が我が家に向かって流れて来る。家の柱に当たりそうになる、どうか当たりません様にと祈る！当たれば家は崩れるだろうと手を合わせ心で「逃げる！逃げる！」と言っていました。幸いにも丸太がかすめる様に逃げてくれました。ホットしたのもつかの間、車と大木と木カブ等が下流の左隣の家の木に掛り、水の流れを堰き止められ濁流は自宅前で渦を巻き始め、家の前が池状態となる。頭の中は真っ白で震えてました。

すると裏手の方から「逃げるように！」との声でした。その時、我が家だけが停電した。暗闇の中、懐中電灯を照らして階段を下り、その時は敷地内に土砂が堆積し、床は水が上がっていて玄関から避難できず、台所側扉を開け2人の人に手を持って貰い、濁

流の中柵を越えて小学校の体育館に避難する。避難経路の道路は川状態だった。

避難所は沢山の人達、テレビでは見るけど自分が遭遇するとは思いませんでした。雨の激しさに眠れず、朝7時ごろ家に帰ると家の前の道路も川状態、家の周りが泥水・土砂・木っ端・丸太等があちこちにあった。裏側から家の中に入って見てビックリする。1階部分が泥水で埋まり、老人2人これからどうしようかと思った？。

でも知り合いの人達がぐさま駆けつけてくれて、女性陣は壁とか床上の泥水を早期に除けて、清掃してくれて非常に助かりました。だが屋外はまだまだ泥水・土砂・木々・ごみが1m以上あり、水が敷地内に入らないように地域の人達と土砂で土嚢を作り、治山ダムから山際に1m幅の流れを造る事で、道路上の水の流れが緩和された。でも7日の夜、また激しい雨が降る、昨日取り除いた所にまた土砂が積もる。ここを境に梅雨明けになり毎日毎日が酷暑、でも泥出しは続く。

15分作業して15分休憩を取る事にする。

当初は、夕方まで作業していたが酷暑の中、熱中症の恐れがあり、午前中で作業を終了する。この繰り返しで10日間（7月16日）、ボランティア・地域の人達に助けて貰いました。感謝の一言です。

その後、敷地内と道路側には、まだ土砂の山、敷地内は身内で土嚢に入れて、道路側に出す。それを建設会社の人や、ダンプカーで土砂捨て場に運んで貰いました。その繰り返しを10日間（7月

26日）する。やっと道路の土砂が無くなると、こんなにも広々していたのかと、感動しました。

また、治山ダムの暗渠も土砂がぎっしり詰まっていたから行政により土砂出しをして貰いました。

9月14日にはほぼ貫通しました。まずはほっとしました。みなさんには大変感謝しています。本当にありがとうございます。

私どもの所は幸いにも人災、家の倒壊もなくよかったとはいえ大変でした。

でも大雨が降ると又災害にあうかと心配です。





題目「7月豪雨災害で学んだこと」

西日本豪雨の被害で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

台風が発生する度に、不安な日々をお過ごしだと思います。

私の2軒先で土砂崩れ、150m先で土砂崩れが起こり、治山ダムが埋もれて大木や石が流されました。土砂は、広島県道34号線を通り矢野新1丁目まで流されました。想像を絶する光景で、どう対処してよいかわからないことばかりでした。1KM先では

矢野南四丁目

ペンネーム…ながくつ



広島県道34線が通行止めとなり、呉方面や熊野、東広島に行く手段が少なくなりました。

私は、7月7日から15日まで二次災害を防ぐ堤防づくりと土砂に埋まった家での土砂の撤去などをボランティアの方に指示しながら作業させていただきました。

今回早く復旧できたのは、土砂災害の次の日(7日)に油圧ショベルで土砂や大木をよけ、土砂が排水管に流れるよう作業してくださった建設会社の方のおかげです。8日は土砂を土嚢袋に詰め堤防を作り始めました。9日から11日までは、防災士さんの指導の下、堤防づくりを強化しました。12日からは、建設会社の方からのアドバイスをいただき、被災者の方と話し合いながら、作業させていただきました。

猛暑日が続く中、多くのボランティアの方に参加していただき作業できたこと、うれしく思います。本当にありがとうございます。

今回の災害で、学んだこと、疑問に思ったことを書かせていただきます。

〈土砂崩れが起こる前〉

- ①山の谷から泥水が始めた。
- ②山からはじめた土のにおいがして、ごうごう雨が降り、木々が揺れていた。

- ③治山ダムの土砂が崩れる前に地鳴りがしていた。

〈豪雨災害の次の日の午前6時30分〉

- ①治山ダムから流れ出た土砂は、矢野南のバス路線の道路まで出て矢野ニュータウン人口に向かって流れていた。
- ②山の谷から流れた土砂は、矢野ニュータウン第六公園の前で右折して矢野南のバス路線の道路まで出て矢野ニュータウン入り口に向かって流れていた。
- ③同じ矢野南のバス路線でも、傾斜が違うことで土砂が流れていくところと流れていないところがあった。今後、矢野南小学校に避難するときは、矢野南児童館側に渡って中道を避難したほうがいい。

〈避難について〉

- ①矢野南には、町内放送がないため、治山ダムが崩れる、道路が冠水するということがあっても気づかず逃げ遅れた人がいた。
- ②矢野南4丁目の役員の連絡網で、避難場所が開設されたら電話連絡があったが、役員自身が避難する直前だったので、職員には連絡できなかった。固定電話での連絡網では意味がないので、テレビ、緊急速報メール、広島市防災情報メール、ラジオなどで個々が判断して避難してほしい。
- ③矢野南小学校には、どの門から避難してよいかわからなかった。
- ④避難所にペットを連れていけるかわからなかったので逃げなかった。

⑤避難所では、1家族に銀マットと毛布1枚しか支給されなかった。人数が多い家庭は、バスタオルなど持って逃げるとよい。

〔7月28日～29日の台風12号接近に備えて避難した矢野南の人〕
①矢野南小学校の体育館はいっぱいで避難できないと思い、自宅の2階にいた。回覧板で知らせていなかったのだから皆さんの人に不安な思いをさせてしまった。

②避難場所が2階の多目的教室で、トイレも遠く階段を上って避難するので、介護が必要な方には難しく、自宅に帰られた。弱者への配慮が欲しかった。

③矢野南小学校のグラウンドに車を停めることができず、自宅に帰られた。第7公園が解放されていたが、連絡がなかったのだから知らなかった。

④台風や突然起こった災害で避難するとき、待つて逃げる必要最低限の食事を事前に教えてほしい。そして、小学校や中学校の道徳等で子供たちに「避難生活」ということがどういうことか話し合っていたきたい。

〔ボランティアに関して〕

私は、7月8日～7月15日まで治山ダムの土砂崩れの二次災害を防ぐ堤防づくりと、土砂に埋まった家の土砂を取り除く作業をさせていただきました。ボランティアの大半は、TwitterをはじめとするSNSで知り、手伝いに来てくださった人たちでした。

しかし、中には

・半そで、短パン、クロックスという服装で作業しようとする人

・軍手や道具、帽子や飲み物を持ってこない人

・作業に携帯を持って参加しようとした人

・被災者の家の庭にゴミを置いて帰る人

と、いう人も多くみられました。なので、作業に入っていただく前にボランティアとしての身なり（どんなに暑くても、長そで・長ズボン・軍手・タオル・帽子・長靴ないしは運動靴・飲み物を持参）や注意しておいてほしいこと等を説明させていただきました。また、ボランティア保険に加入していない場合、けがをしたら自己負担になることも加えて説明させていただきました。ボランティアをテレビ等で報道する際、今一度、「自分のものは自分で用意すること」を説明してほしいです。防災士さんが、「わたしたちはボランティアしてあげるのではなく、させて頂くということ」を忘れないで作業をして下さい」と、言われました。

土砂崩れの復旧作業のボランティア活動が初めての人が多くわからなかったのだと思います。今回学んだ事を忘れないように年に1回防災訓練を行って、いつでも行動できるようにしたいです。私自身、山から流れる水の音を聞いていたので、夜も怖くて眠れない日が続きました。その状態の中で1週間続けての作業は、きつく、判断力が鈍り、情緒不安定で、心身ともにしんどかったです。防災士さんをはじめ、工事現場の方、被災者の方、社会福

社協議会の方、娘や息子の同級生の子供たちなどたくさんの人に励ましていただき、とてもうれしかったです。小学校の先生方も毎日来て作業を手伝ってくださり、ボランティアの方の体調面も気遣ってくださりありがとうございました。今回の災害で、同じブロックに住んでいるいろいろな方と知り合うことができ、得られたものもたくさんありました。

これからは、年に1回防災訓練を行い、一人一人がすぐ行動できるよう町内全体で学んでいきたいです。そして、上でまとめる方（責任者）、指示を出す方、作業する方（ボランティア）の役割をはっきりさせ、円滑に進められるよう取り組みたいと思います。

まだ、ブルーシートで覆われた所や油圧ショベルで土砂を撤去している所がたくさんあります。一日も早い復旧と、被災された方々が日常生活に戻られるようお祈りいたします。





(C)Yahoo Japan,(C)ZENRIN

広島県広島市安芸区矢野南4丁目

住所: 広島県広島市安芸区矢野南4丁目

交通:

土砂崩れ

土砂が流れたというー (7/7(土)朝)





題目「逃げるかとどまるか！」

今回の豪雨災害に直面することとなり、発生した事象とそれに対して自分が取った行動を時系列に記し、その行動を教訓として残すことで、今後この様な災害に遭遇される方々のご参考になればと考えます。

矢野南四丁目 ペンネーム…シャーズ

経緯

7月6日（金）午後

15:00 呉線は、16:00以降間引き運転となり17:00には運休するとの情報により、社内放送で各部署の判断で退社するよう指示があった。

少し仕事が残っていたので、切りの良いところまで仕事をして駅まで行ったが「運転調整中」との表示があり、既に電車は、止まっていた。

教訓…状況は、自分の目で見て判断し、情報入れば素早く行動すべし。

数分の遅れが帰宅難民となる。

15:30 私は、帰宅難民となるのかと、駅で電車が動くのを待っている、同地区から車通勤している方に声をかけて頂き、車で自宅まで送っていただくこととなった。

教訓…送っていただいた方に感謝です。後に多くの方が帰宅難民となり自宅に帰れなかったと聞いた。ある人は自宅に2日帰れなかったらしい。私の妻もその1人。数10分の違いで結果が左右されるので、その場での早い決断と行動が必要。

17:00 大雨のため、道も渋滞しており前が見えない状態も続き、帰宅まで時間がかかった。

家に着き車を降りると土臭いにおいがしたが、路面は、たくさん雨が叩きつけているだけでまだ泥水が出ている

様子はなかった。

17:10 自宅に入るとすぐに妻から、「今日は帰宅難民となった」

との電話があった。

雨の勢いは治まらないまま、すぐに普段着に着替え晩飯の買い出しに行った。

18:00 買い物から帰ると自宅前の道路は、泥水が流れ出ていた。

以前も梅雨時期に3、4日雨が続いた時に、山から水が流れ出ていたのを目撃した。経験があったので、すぐに車から降りて、山側の確認に行った。山側の光景を見て驚いた。



会社から帰宅した時とは違い山からは泥水が流れ出ていた。

以前も何度か水があふれ出ているのを見たことはあるが、その時は、泥水ではなく普通の雨水だったが、今回は泥水が幅広く流れ出ているのを確認した。

7月6日夕方

18:05 山側からは、側溝から溢れた泥水が壁を伝って、枯葉や枝と一緒に流れ出ていた。



まだこの段階では、避難をする考えはなかったが、今思えば今回のような泥水の流出は、初めての経験だった。

18…10 何度も携帯のメールが鳴る。避難準備、避難指示、避難

勧告、何度も鳴ると感覚が鈍り、危なくなったら逃げれば
いいんだろと高を括ってしまった。

ただの雨。雷も停電もないため、そんなに不安はなかつ
た。

18…20 外で様子をみていると近所の人も声をかけてきて、雨の
様子を気にしている。

近所の人も旦那さんの帰りを待って避難するかどうか決
めると言っていた。

18…30 しばらく山からの水を見ながら山側の様子を見ていた。

泥水の流出とともに落ち葉なども一緒に流れ出てくる。

18…40 あたりも少しずつ薄暗くなる。少し雨も強くなってきた
ような気がした。誰かが、向こうから傘をさしてこちら
にくる。よく見ると町内会長さんだった。

避難勧告が出たので各家を訪問して、避難を呼び掛けて
いるとのことだった。町内会長さんは、ボランティアな
のにここまでしないといけないのかと感心した。町内会長
さんと少し立ち話をした。

雨の音で声が聞こえにくかった。小学校が避難所開設し
たので、「避難したほうが良い」とのことだった。

18…50 町内会長さんとそんな話をしていると、山側の道路が赤
くなり消防車がパトライトを回しながら、スピーカーで何

かしやべっている。

教訓…外にいても内容が聞こえにくいのだから窓を締め切った部
屋では、聞こえないだろうなと感じた。

町内会長さんの呼びかけ行動と消防車のパトロールを見て、
少し避難しないといけないのだろうなという気持ちに傾きつ
つあった。

19…00 町内会長さんとも、「何か変化があれば逃げますよ」と
話しその場で別れた。

19…10 辺りがかなり暗くなって来たが、まだ山側の様子は確認
できた。

山からの泥水の流出の様子が変わって来た。

①水の勢いが変わった。

②壁を流れる泥水の幅も広くなってきた。

③落ち葉だけでなく、小枝や小石も混ざって流出してきた。

④そのうち、握りこぶしぐらいの石も混じってきた。

19…05 泥水に石ころが混ざり始め、壁の上が路面と平行になっ
ている幅いっぱい泥水が、流れるのを見て、やっと「こ
りゃヤバイ！避難しよう」という気持ちになった。

19…10 この時点でやっと避難する気になり、とりあえず山側の
前の家の呼び鈴を押した。旦那さんが出てきた。

「さっきまでと水の出方が変わった。ここは山水の出口
正面なので、逃げたほうがいい。私もすぐに小学校に避難

するよ。」と会話し、家に帰った。

教訓…この時点で私もパニックになっていた。

泥水の変化が急だったので、避難しようと声をかけることができたのは、目の前の1軒だけだった。

19:15 すぐに家に帰り、子どもに「車で逃げるぞ！」大声で声をかけた。家には、犬がいるので置いてはいけない。

子どもには、今日買い出しに行った晩飯と自分の着替え、携帯を持って出るよう指示し、私は懐中電灯、タオル、着替え、携帯をリュックに詰め、逃げる準備を始めた。

貴重品など妻もいないのでどこに置いてあるのかもわからない。

とりあえずいつもの持っている財布だけは持って逃げた。

教訓…日頃から非常時の持ち出し品をリストアップし、準備しておくことが必要である。

19:20 子どもが「今ドスンと大きな音がした」といった。

私は、「多分雷の音だろう」と子どもに言いながら、車に乗り込む準備をした。

後から近所の人の話を総合すると、この時山から大木と大きな石が流れ出た音らしかった。

大木が電信柱と庭の壁に引っ掛かり泥水をせき止めていた。この様な状態でなかったら車での避難はできなかったであろう。

山側前の家の方は、せき止められた泥水で車での避難ができなかったと聞いた。

今回の私の避難は、明らかに遅かった。
運が良かっただけで確実に逃げ遅れていた。



逃げる判断を18:00の泥水が開始した時点にしていれば、まだ1時間の猶予があり、貴重品、非常食など必要なものを持って逃げられたと反省している。

教訓…想定外の事象も考えれば避難することに早すぎることはない。早め早めの避難を心掛けること。

19:30 車に子どもと犬を乗せ小学校へ避難。

車で家を出たときは、すでに道路に石ころや枝が転がっており、それらを避けながら避難した。

19:40 小学校に到着するとすでに車が20台ぐらいいただろうか。



ペットの犬がいたため、体育館の中へは入れず、しばらく車の中で雨が止むのを待ちながら、今日買った晩飯を食べる事にした。

しかし急いでできたので箸を持ってきてなかった。

避難に来ていた人から箸をもらい晩飯を食べた。

教訓…ペットを飼っている人は、ペットも避難させてくれる避難

所をあらかじめ確認しておく必要がある。

20:00 雨が小康状態となって来たので、子どもと犬は車にエンジンのかけたままで置いて、歩いて家の様子を見に行くこ

とにした。

家の前は泥と石と流木で覆い尽くされていた。

家が心配で確認に歩いて帰ったが、翌朝矢野東などの状況を聞いて、非常に危険な行為であった。たまたま前の日に車にガソリンを満タンにしておいたので、ガソリンの心配はなかった。

教訓…最悪車での避難生活を余儀なくされる場合を考えると、ガソリンは半分以下になった時に注いでおくか、災害が予想される前などには、満タンにしておくよう心掛ける必要がある。

21:00 家が無事であり、何とか車でも戻れそうな状態が確認できたので、ペットを連れて帰宅し、家の2階に垂直避難で一夜を過ごすことを決めた。子どもは、被害のない友達の家に行くというので、車で送り私は、家に帰った。

状況…近所の人の避難状況を確認すると半分ぐらいの人は、自宅の垂直避難だったらしい。

教訓…後のニュースなどで、災害直前に避難を促し逃げた人が災害にまきこれたケースもあると聞いた。私のように災害直前での避難促しは、避難された方に何かあった時には、促した方も逃げた方も両方傷を負うことになる。

本当に避難を促すのであれば、町内会長が取っておられた行動のように避難準備や避難指示が出た段階で活動すべきである。

22:00 翌朝夜明けとともに起きる事を考えながら、ペットとともに就寝。

犬がいることで、少しの安心感はあるが、犬との独り言が多かった。この日は、そのまま晩酌もせず寝た。

7月7日（土）

5:00 夜明けとともに外の様子を確認。何とか土砂の流出だけで大きな被害はなさそうである。

土嚢袋も何もないので、土砂を壁際に寄せることから始めた。

まずは、車が入りできるよう生活道路を確保することを考え行動にでた。

たまたまスコップなどは、4年前の緑井の土砂災害のボランティアに参加した時に買ったものがありすぐに行動に移すことができた。

9:00

近所の人も出てきて作業に入る。まだまだ山からの泥水は、弱まらない。山側のプールになっている土砂を泥水と共に押し流し、土砂に埋まった車を掘り出すことから始めた。

この時点で、町内会から土嚢袋が配られたが、全く足ら



ない状況が続く。

この土砂が側溝に入り9月半ばの今日現在も土砂が詰まっており雨水が流れない状況が続いている。

10:00 いつも近所で作業されている工事業者の方が、ショベルカーの様子が気になって朝、確認に来られ、この状況を目の当たりにされ、ボランティアで土砂の撤去作業に参加してくださった。

そのおかげで、その日のうちに土砂は壁際に避けられ山からの水もマンホールへ直接流し込むことができた。大変感謝である。



12:00 多くのボランティアと近所の協力のおかげで、その日のうちに生活道路の確保と土砂の流出被害を最小限にとどめることができた。

7月8日(日)

道路は、1台分通れる程度に土砂を壁際に寄せた。

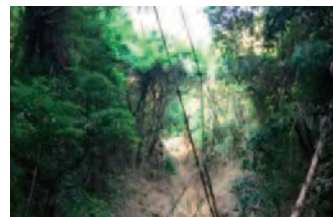
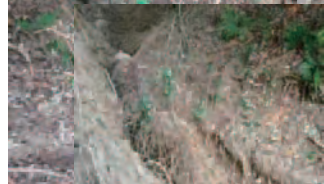
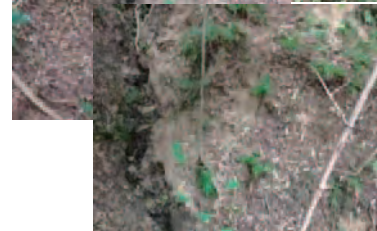


7月9～12日

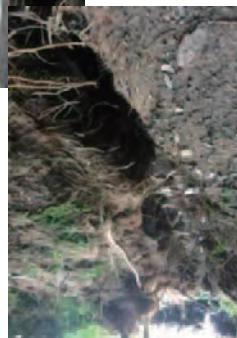
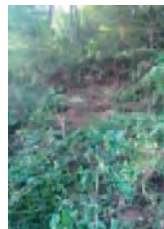
この後、土砂の散乱を防ぐため土嚢袋を積みながら、行政の支援を待つことになる



市内各地から駆け付けた消防隊員（柳迫 撮影）



急斜面が雨で削れ、
何本も倒木している。



近辺の山肌も地滑り
している



7月16日 土石流の出た山中を確認。急斜面が削られ倒木している。

教訓…行政の方による簡易治山ダムを設定してくださいでしたが、山中の崩れ方を見るとまだまだ不安が残る。

要望…早急な治山ダムの常設を希望します。

8月～9月 土砂の流出で側溝が詰まっているため、スコップを塩ビパイプで延長したもので、地道に除去活動を実施。
グレーチング間の距離が広く届かない箇所は、行政の高圧洗浄機及びバキュームカーを待つこととした。



総括

災害発生直後、多くの方が土砂撤去の行動に参加してくださいましたことに感謝いたします。

7月6日からの自分取った行動を時系列にあらためて並べてみると、間違いだらけの行動であったと実感しています。

近所の方がボランティアとして手助けしてくださいましたが、まだ山側からの泥水も流れ続けていた中の作業であり、当時は何とかしなければという思いだけで、二次的な災害など殆ど考えていませんでした。ボランティアは、大人たちでなく多くの子どもたちもそこに参加している状況であったことを鑑みると、

今後は以下のように注意して行動する必要があると考えます。

1、災害発生時には、ボランティアに参加してくださいる人たちの安全の確保と参加人員の選定、作業の内容を早急に振り分けるか考える必要がある

2、災害時が猛暑の中でもあり、熱中症になる方が何人か発生するかも？と、日頃から検討しておく必要がある。

3、作業方法、作業時間などの情報を如何に住民及びボランティアの方に素早く伝え、それらをまとめて頂くリーダーの選定を早急に実施することが必要。

4、緊急事態を想定した、リーダーの選出、現場事務局の立ち上げなど、現場に直結した情報を一括管理できるシステムを、日頃から検討しておく必要がある。



今回も山側の隣のブロックでは、治山ダムがオーバーフローし、もっと多くの土砂が流出し、多くの被害が出た、簡易現場事務所の設置も7月9日であり災害の3日後であった。

災害の発生は、今回だけではなく毎年何らかの被害があるかもしれない。と考えながら日ごろからの準備をしていきたい。

自宅前の整理ができたのち、近隣山側の治山ダムがオーバーフローしたため、こちらのボランティアへ参加しましたので、その状況も写真を下記に添付します。

7月7日(土)

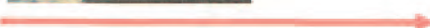
治山ダム



8月11日(土)



8月11日(土)



矢野南学区自主防災連合会 会長

浦野 紀元

題目「西日本豪雨災害・

避難所管理の体験版（災害発生から2ヶ月）」

1. 総括
 2. 当日（2018.07.06）の状況
 3. 避難所1週間の動き
 4. 07.12避難者への説明（安芸区役所・災害対策本部
 5. 生活環境の改善（入所 10日以内の設備導入）
 6. 医療体制
 7. ボランティア活動の充実・成果
 8. 避難所運営管理の確立
 9. マスコミ対策
 10. 外部からの支援
 11. 各種備品・支給品等の整備、返却
 12. 運営管理上の反省縁と要望・改善策
 13. 矢野南災害後の対応
- ① 4丁目砂防ダムへの対応
 - ② 3丁目グラウンドの土砂等仮置き場への対応
 - ③ 通学路の確保と見守り要望・改善策
- 避難所 広島市立矢野南小学校体育館
広島市安芸区矢野南4丁目17番1号

まえがき

私は平成25年4月より自主防災連合会長の職務にあります。矢野南では、平成26年11月に消防署、区役所、自治体合同の安芸区防災訓練を当地で実施しました。

平成25年以降 1年間で2回ほど台風のため、避難所を開設しました。

しかし、避難者はなく幸いにも空振りに終わりました。

今回、初めて避難者を受入れ、約2ヶ月間の運用管理（試行錯誤の中）を行いその状況をまとめたものです。

1. 豪雨災害と避難所管理の総括・概況

(1) 避難者数の推移

2018年7月6日に発生した西日本豪雨災害に備えて、多くの人が避難所にこられた。

体育館で避難されてる人、自宅が全壊、半壊、周囲が土砂に埋まっているなど各人の状況は、異なるが、基本的には8月末を目標に新生活を目指して、行政やボランティア等のサポートを受け行動する。これが避難所内の暗黙の了解として浸透し、順次減少の過程を辿っていった。

9月4日時点で残られている2名は、避難所生活中に病氣入院された事構の人であり、現在、体調回復に努められており、近々はっきりすると思う。

7/6 7/10 7/20 7/30 8/2
(570名) (250) (150) (100) (80)

8/10 8/16 8/25 8/29 8/31 9/4
(60) (50) (25) (12) (5) (2)

(2) その後の一待避難の状況

体育館で避難されている人に加え、台風や大雨警報が発令されると、避難所を経験した人を中心とした多くの方が避難して来られた。一時避難の状況を次に示す。

月日	台風ほか	一時避難者	避難場所	備考
8/1	台風12号	180名	体育館と5教室	場所不足のため
8/31	台風20号	80名	体育館	
8/23	大雨警報	45名	体育館	
9/4	台風21号	15名	体育館	
9/7	大雨警報	37名	体育館	

2. 当日の状況 (2018. 07. 06)

16:00 安芸区役所より避難所開設の電話
17:00 自宅より矢野南小学校体育館へ道路はかなりの激流であつた。

17:10 (必要な書類、体育館用鍵、お茶など持参)
体育館到着

17:40 ・既に2所帯 避難済 市職員2名
・携帯電話に額繋に避難勧告メール届く
避難者続々入館

20:00 備蓄倉庫より毛布、保温シート搬入
(対応できず、避難者に手伝ってもらふ)
避難所ほぼ満杯……約400名

・小学校所有のマット使用禁止の注意を無視して勝手に敷き始める。(一人が始めると皆一斉に)
・女性トイレの前は大渋滞長蛇の列。
・ペット持参の人は外へペットをつなぐ、または車内で過ごす。

21:00 ・トイレ用の通路の確保するも、すぐふさがる。
バスの乗客通行止めにて途中下車になり大挙して避難所に来られる。

(近隣の熊野町民、呉市焼山の人が多い)
しかしながら空間なく既に避難した人に場所少しづつ空

けてもらう。

- ・ 区役所の人に通行可能な道の間合せ殺到（情報錯そう）。
 - ・ 多くが携帯電話使用 例えば焼山の人……妻に西条
- 経由で迎えの要請（道路寸断で無理）

「事象のまとめ」

- ・ 寝る場所なし
- ・ トイレ用通路の確保困難
- ・ 携帯用充電器なし
- ・ 食事なし……後でボランティアにておにぎり配布
- ・ ほこり（挨）舞うマスクなし
- ・ タバコ……校外へ
- ・ 妊婦さん2名（1名に妊娠8ヶ月 1名9カ月）
- ・ 室内サウナ状態34℃
- ・ タオル 汗拭き 不足

避難者の内訳 約570名

- ・ 矢野南学区（矢野ニュータウン） 約400名
 - ・ 上記以外 約170名
 - ・ 矢野東6丁目、7丁目
 - ・ 矢野西
 - ・ その他（熊野町、呉市焼山、矢野町寺屋敷 等）
- 小学校グラウンド車中泊230名

3. 避難所 一週間の動き

- ・ 土砂災害発生による避難所が開設されたが、2項で述べた通り住まいへの環境が厳しい状況にあった。
- そこで各種備品の調達を行った。

(1) 各種備品の調達

- ・ 矢野南小学校より物品等多数借用（扇風機、洗濯機、ポット、机、椅子、間仕切、シャワー室）
- ・ 避難者の中で、高齢で具合が悪い人、妊婦さん、障害者の人は、クーラー設置の教室、みなみ会館に移動
- ・ 暑さ対策（体育館内34℃）
- ・ ボランティアうちわ60個差し入れ
- ・ 大型扇風機6台借用（矢野社協）
- ・ 2階の窓及び舞台裏の重厚な扉開ける、しかし、大量の虫の侵入にて4日間で中止
- (2) 小此木防災担当大臣一行の訪問をうけ、環境の改善進む
- ・ 7月9日防災大臣一行、広島県知事、安芸区長の訪問を受ける。
- ・ 避難者の方が暑さと睡眠不足のため、ぐったりしている様子を見られ、一人ひとりの悩み事を聞かれていた。
- ・ 館内は室温も高く体力的に非常に厳しいので、クーラー設置を強く要望した。
- ・ 7月10日にはスポットクーラー8台が導入され、早速利用したが、排気のためにガラス戸を開ける必要があり、虫が侵入し不

評であった。

- ・7月14日には、クーラー10台設置され、環境が大幅に改善された。

- ・同時期に自衛隊によるお風呂の開設もあり、更に皆さんをよろこばした

(3) 段ボールベットの導入

- ・7月10日には、Jパックス（株）より、100セット以上のベッ
ト部品の提供を受け、硬い寝床より解放された。

更にベット周りを段ボールで囲みプライバシー保護に大いに
役立った。

- ・段ボールベットについては、使い勝手の感想についてマスコミ2
社の取材を受けた。

- ・一時避難の人にも健康を考慮して活用を促した。またベットの
組立ては、当人とボランティア、役所が一体になってスピード
化を図った。

4. 避難者への説明会（安芸区役所・災害対策本部）

(1) 日時 7/12 19:00～20:30

(2) 出席者 本部、役所約10名

避難者 約60名

その他 10名

(3) 趣旨

7月17日（火）より、矢野南小学校の授業再開に伴い、校庭の
被害が大きく、すでに夏休みに入っている矢野小学校に移転する
ことを災害本部が要請した。

(4) 会議内容

- ・一応被災者が置かれている現状の説明を行う
- ・被災者の感情として、移転が一方的な要請に聞こえた
- ・半数は納得、但しできれば移りたくない
- ・不便な点

（自宅より遠い、途中の道路事業が不安、風呂がない、水道の
状況が不明）

- ・本部の移転先の調査が不十分で質問事項に答えられない。

- ・途中から話し合いとは無関係な中傷に始まる。

（会議中の態度など）

- ・中には強硬な反対者もいた。

5. 結論

- ・本部は、了解が得られず危機感を持ち、移転は白紙となる。

- ・避難者も危機感 避難者間の亀裂修復の必要性（個人的な意見
の食い違い生じる）

- ・運営管理としても、内部融和を図っていく必要性

- ・管内のルール作りを急ぎ、各人が協力して自力再生の道を探る

- ・その後、罹災証明書の発行手続きや新しい住宅への説明会など

へ積極的に動き出した。

当初ワンストップサービスの開始は8時半であったが、渋滞で1時間遅れで避難者が怒りだす状態になり、翌日より10時開始に変更してもらった。

5 生活環境の改善

避難所での生活が始まってから、不便な状況が続いていたが少しずつ便利な設備を導入支援し避難者の利便性を向上していった。

避難所に導入された各種設備関係

月日	導入設備	台数	支援団体	
7/8	扇風機 電気ポット 洗濯機 アコーディオンカーテン	15台 1台 1台 6個	矢野南 小学校	10日後故障
7/8	大型扇風機	6台	矢野社協	8/31返却
7/10	40型テレビ	1台	エデオン	
7/12	洗濯機	2台	同右	
7/13	冷蔵庫	2台	同右	
7/10	スポットクーラー	3台	市	7/16撤去

6. 医療体制の充実（7/6～8/5）

(1) 医療体制の実施（最初の1ヶ月）

・ 市民病院、安住市民病院 どちらか4～5名のチームで毎日訪問

・ 地元の医師 廣本クリニック 毎日 朝夕訪問

・ 赤十字病院 看護師 毎日

・ 市の保健師3名 毎日常駐

・ ボランティア 3～4名 常駐

避難者対応や支援物資の仕訳一部看護師

・ 不定期に医者訪問

7/14	大型クーラー	10台	市	
7/15	携帯充電器	3台		
7/15	お風呂	2台	自衛隊	8/5撤去 返却
7/15	電気ポット 公衆電話 テレビ 洗濯機 冷蔵庫	1台 1台 1台 2台 3台	ボランテ NHT NHK 市 市	
7/18	電子レンジ	1台	ボランテ 市	

(2) 病人への対応

避難所生活の中で、数人の方が体調不良を訴えられた。

原因としては、室内の暑さ、環境変化による睡眠不足、慣れない集団生活などがある。

そこで保健師、ボランティア、行政を中心に別の場所への移動を検討した。

- ・一部障害者の人は福祉関係の施設

- ・妊婦さん、高齢で持病のある方は、クーラー設置のある「みなみ会館（集会所）」、小学校の教室などである。

- ・その他一時的に病気になられた人は入院手続きをとった。

例えば（熱中症、内蔵障害、惹きつけ、高熱など）である。

——医療体制の充実は大きな力となった。——

7. ボランティア活動の充実・成果

(1) ボランティア発生のきっかけ

7月6日 災害発生時多くの避難者が体育館に押し寄せた。

その中に後でボランティアとして活動して下さる人も避難者の中に含まれていた。

最初は寝床の確保から始まり、次に食料の調達、日用品の確保へと進んでいった。

2～3人のボランティアから次々とその輪が広がり10人以上の集団へと拡大していった。

(2) ボランティア活動内容

- ・食料品の確保――当初は食料品は何もなく、おむすびの差入れが4～5人の方から始まり、約200個を確保することができた。

その他巻きずし、箱に詰められたおはぎなどの差入れがあった。

- ・水の確保――個人のペットボトル寄付から始まり、その後企業（いずみなど）からの寄付があり、息をつくことができた。

備蓄倉庫にもペットボトルはあったが、そこまで手が回らなかった。

- ・暑さ対策

当時の室温は34℃で、約200名以上の避難者がひしめきあっていた。流れる汗の対策として、大型扇風機6台（矢野社会福祉協議会より借用）、うちわ（個人、法人より寄付）

汗拭きタオルはネットで募集し、大量の寄付を得られた。

音通の扇風機は南小学校より約20台借用した。

- ・日用品の確保

ボランティアの体制が少しずつ整ってくるにつれて、各所より必要な日用品の確保が可能となった。

例えば（箸、テッシュペーパー、メガネ拭き、歯磨きセットなど）

(3) ボランティアの参加者

殆どの方は主婦であり、かつ仕事をされている方が中心です。

数名は保健師や看護師の資格保有者もいて、ボランティア活動経験者も2名ほどいた。

期間	避難者	参加者	活動内容
最初の20日間 (7/6～7/25)	約150名	約14名 (7～8)	病気の人の介護・支援物資の支給仕分け
20日～40日 (7/26～8/15)	約50名	約10名 (5～6)	支援物資の仕分け、支給。マッサージ、退館者支援
40日以降 (8/16～8/29)	約10名	約4名 (2～3)	支援物資の整理、他避難所移管、退館者支援

8. 避難所運用管理の確立

4項で説明しましたが、避難者の方々の不安感や市に対する不信感が増幅し、避難所内は異様な雰囲気が充満していました。

そこで市からの説明会の2日後、避難者の方々全員参加のミーティングが行なわれ一致団結して、避難生活を乗り切ろうとの表明がなされた。

これらを全体的に考慮し、避難所運用管理の必要性を痛感した。

(1) 運営委員会の設置

広島市防災士ネットワーク世話人の柳迫長三さん、避難者代表の谷本明さん、藤原直美さん、それと浦野で運営委員会を設立し、数回の話し合いを重ねた。

(2) 避難所での運営ルールの設定

運営ルールの内容については以下に示す。

避難所での運営ルール

平成30年7月18日

運営本部長 浦野紀元

避難者の皆さんが、等しく厳しい状況により、臨時の生活を迷っていることを関係者全てが理解し、相互に励ましあい協力することでも快適な生活が送れるようにしましょう。

- (1) 使用可能領域（体育館、グラウンド）以外は立ち入らない。
- (2) 運営本部の指示に従い勝手な行動を慎む。
- (3) 入退所は必ず受付を通してください。（入退室票へ記入）
- (4) 食料、物資の配給は、体育館中央で行います。
- (5) トイレは体育館後方の男子便所・女子便所を使用してください。（清掃時間は：午前9時・午後5時）
- (5) ゴミは、分別して出してください。（体育館入口）
- (可燃ゴミ・その他のプラ・ビン缶の3種）
- (7) 飲酒・喫煙は、学校敷地内は禁止とする。
- (8) ペットは室内に入れない。
- (9) 風呂（自衛隊提供）：17：30～22：00希望者は受付へ（8/5終了）
- シャワーは終日可能
- 洗たく機：要予約女性用あります
- (10) 消灯時間：午後10時
- ※午後11時にはランタン設置し全て消灯します。

- (11) 公衆電話（体育館横） 1回10分以内とします。
- (12) いきいき百歳体操は、毎日15・30・行います。
- (13) 退所の際は各自で片付けを行ってください。

運営委員会…谷本あきら、藤原直美

- (3) その他細かい運営ルールの確立
- ・ 2階のカーテンの開閉時間の設定と開閉者
 - ・ 朝食、昼食、夕食の前の漬物の準備と後片付け時間
 - ・ 避難所以外からの食事支給（弁当類）の方法
 - ・ 室内清掃作業の方法とモップの清掃方法
 - ・ 食事後のカラ弁当用のダンボール箱の準備とその廃棄方法
 - ・ お風呂、シャワー、洗濯機、電動自転車の使用申請方法
 - ・ 冷蔵庫、冷凍庫、個人用冷蔵庫の使用方法
 - ・ ごみ廃棄と廃棄依頼の方法
 - ・ 余った食事（弁当、パンなど）の取扱い
- (4) 意見箱の設置

避難者の意見、要望を吸い上げるために、市役所主導で「ご意見箱」を設けた。

それに寄せられた意見や、口頭での要望を以下に示す。

ご意見	回答	備考
お風呂の時間を遅くまで	施設運営の決まりで時間設定	

朝食にパン要望	実施予定	
各手続きのシステム化と時間短縮	ワンストップサービスの充実	
物干し場が欲しい	利用者が工夫	
コーヒーを希望	実施	
勉強机が欲しい	学校備品を借用	
女子更衣室の充実	舞台の袖に設置	
仕切りを高く	個別に相談対応	
就寝時の照明を暗く	最小限の照明	
避難所の場所変え検討	現状とする	
風呂が無くなる代品を	簡易シャワーを検討	
昼食が同じ	改善する	
昼間・照明を暗く	検討	

9. マスコミ対策、防犯対策

(1) マスコミ対策

災害発生時より多くの不特定多数の人々が出入りする。

避難者、ボランティア、尋ね人、公的機関（代議士、市会議員など）、マスコミ関係者などで、受付機能が弱くフリーパスの状態になっ

ていた。

特にマスコミ関係者は約10社くらい次々と質問を浴びせ、すぐカメラを向ける。

しかも、殆ど同じ質問を複数のマスコミ関係者が特定の人に行う。その特定の人は、話好きで愛想がいい人が質問に応じているように感じられた。

しかしながら、住民（体育館に避難している人を指す）の中には、同じ質問にウンザリしたり、写真撮影を嫌がる人も多く、規制の必要性を実感するようになった。

基本的に体育館は自宅にたとえ、本人の了解の上で体育館の外で取材に応じること。

また全てのマスコミは運営管理者の許可を得る。つまりマスコミ対策は一括管理に切り替えた。

当初は非常に面倒であったが、少しずつ理解され、対応件数も減少していった。

8月6日 原爆投下の記念日であり、災害発生後7ヵ月でもあるが、複数のマスコミ関係者の写真撮影を許可し（勿論住民の了解を得る）これを機に極力取材の制限をお願いした。

(2) 防犯対策

災害発生時より多くの不特定多数の人々が出入りする。

その中で治安維持を保つのは、非常に重要である。

当初1ヶ月は広島県以外の複数の県（例えば大阪府、愛知県、

福岡県、山口県、島根県など）より派遣された警察官が4～5人でチームを組み、1日2回の巡回警備を実施してもらった。
外部からの出入りとボランティアの支給品に関し、少しのトラブルが発生したが、その他については十分なる治安が維持された。
尚、避難者が減少しても一日1回の警備巡回は継続され、防犯に対して大きな力となっている。

10. 外部からの支援・催し物・視察

各団体からの支援と催しめ日程表

7/9	小此木防災担当大臣一行 訪問	湯崎知事、山本区長同行
7/15	訪問	斉藤 工（タレント）
7/20	訪問ワクワク学級 （袋プレゼント）	松本潤（歌手）
8/4	いなり寿司と太巻きの 差し入れ（12時・18時）	銀の皿
8/5	同右	同右
8/6	訪問 10～30	パナマ・ベネズエラ大使
同右	この世界の片隅に 訪問	ノンちゃんスタッフ
8/7	15時理学療法士 訪問	荒木脳神経外科
同右	かき氷	高知県東洋町町会議員団12名

8／8	シャボン玉・パン・かき氷	グリーンコープ、KLS
同右	昆虫と触れ合う（13時） 担々麺	昆虫館 KLS
8／10	電子ピアノ ビオラ演奏	独プロ演奏家
8／12	カキ氷訪問	舟入高校
8／18	避難者とボランティアの 交流会	矢野南自主防災会主催
8／16	いなり寿司と太巻きの 差し入れ	銀のさら
8／18	やきとりの差し入れ	(株)龍鳳
8／20	安藤美姫訪問	もみじ饅頭持参
8／20	パン差し入れ (中国新聞取材)	阿戸町パン販売店パネテリア
8／22	カレー差し入れ	HPOハートオブピース広島
8／23	寿司の差し入れ40個	銀のさら
8／24	呉 海自カレー差し入れ	呉海上自衛隊

11. 各種備品・支給品等の整備、返却

備品等の分類を以下に示す。

- ・特定の車業所より借用したもの
- 大型扇風機6台、パン焼き機、還元水用機器 テレビなど
- ・個人から提供されたもの

- テーブル、電子レンジ、食器類、簡易クーラー
- ・南小学校からの借用品
- 扇風機、電気ポット、アコーディオンカーテンなど
- ・使用済でかさむもの
- 段ボールベット、毛布、扇風機など
- ・他の避難所に待っていくものなど
- 水、日用品、タオル
- ・廃棄するもの
- 壊れた電気製品、避難所での忘れ物（殆ど衣類）など
- ・区役所一指返却
- 医薬品の残り、公的機関から支給品（テレビ、扇風機、無料電話など

12. 運営管理上の反省点と要望・改善策

- (1) 役所の人 日替り交代にて伝達事項が伝わらず
- 避難所での役所の人員・受付（3名）ワンストップS（1名）保健師（2名）計6名
- ・相互の引継ぎは機器、照明の操作、お湯の管理などがほとんどである。
 - ・引継ぎで洩れていたのは弁当の数量管理・調達方法である。
 - 避難所から仕事に行く人多く、実態を把握しないので、常に昼食が余る。

外部からの弁当の変動への対応、日替わりで数量変更あり、実態がつかめない。

避難者の9割以上いなくなった8月末の時点で、外部の人は支給廃止とすべきであった。

これについては避難者からもクレームが届いている。

弁当発注一覧表の作成を進め、一時上手くいっていたが、引継ぎ不十分でうまくいかず。

- ・ボランティア支給品と本部支給品の区別が曖昧にて、数回の失敗にて徐々に、明確になっていった。

- ・備蓄倉庫ほかの鍵保管、場所、保管箱が明確でなく、いつも机の周囲を探していた。

- ・役所の人で当避難所の手法をこまかく聞いて来る人と独断と自分の経験で物事を進める人あり、違いを納得させるのに苦労した。

(その人は別の避難所に行っていると言われる)

「継続性のある活動のため、7名中3人は昨日よりの継続勤務を希望」

(2) 運用管理者のローテーションを考える。

小生は連合町内会と自主防災会長を兼務している。

一日は7:20より始まり20:00で終わる。7:20から子供の見守り、土砂仮置き場での打合せ、4丁目砂防ダム工事の進捗状況の確認、打合せここまででは連合町内会の仕事である。

その後、9:30―20:00が避難所管理で体育館に詰めていた。約2ヶ月間休日なしで通い詰めた。

9月10日以降は、自分の時間が少し持てるようになった。自主防災会会長は5名で内4名は会社勤めである。

あと1名は土砂災害発生地区の責任者で、ボランティア募集、作業管理で重要な役割を担っていた。

しかし、特定の人に負担がかかるのは良くない。

今後の課題として有効なローテーションを考えることが、重要である。次回より実践したい。

(4) 避難所管理の心構え

「避難者には平等・公平に接する」

非常に難しい問題であるが、食事の誤発注など他にも色々あり、避難者に丁寧な説明が必要であるが、それを怠ると厳しい状況になった。実際に説明不足で不評をかった。

避難者の中にはお互いに監視状態になり、特定の人や家族に公平さを欠き、全体的に上手くいかない時があった。

「特定の人へのボランティアは、のめりこまず、極力バランスをとる」

以上今回の運用管理で、強く感じたことである。

⑬【広島市安芸区矢野畑賀】

畑賀一丁目

ペンネーム……さん

題目「一緒に避難しよう、ご近所と決めていた」
7月6日のこと

7月6日、家にいた時、外から石と石がぶつかり合うような、「ポーン！ポーン！」という甲高い音がしていた。もの凄いい音だった。「おかしいね、何の音なんかね？」と主人と一緒に話していた。すると、「ガラー！」という音が外から聞こえてきたので、車の事故が発生したのかと思った。

「何これおかしいよね、こんな雨の中、車でこの道路を通る人がおるんかしら」と主人と話し、外に出て見ると、それは車の事故の音ではなく、ガードレールごと、道がぐちゃあつと崩れる音だった。近所のマンホールも、ポーンポーンと上がっていた。「おかしい、ただ事じゃないわ！」と思った。

それを見てすぐに、警察に通報した。何度かけても通じない。やっと繋がった時、警察に「道が無くなりました。ー！！」と伝えた。すると警察が「逃げてください」と言った。どうにかして下さい。との思いで、「お婆さんを連れて、どうやって、どこに逃げればいいんですか？」と言ったが、「とにかく逃げるしかありません」と言われた。

近所の影集会所が避難所だと知っていたので、集会所に行こうとした。すると、既に道に水が「ザーツ」と流れ落ちていて、全く通れる状態ではなかった。

それで主人が、「小学校に避難する？それとも家の2階に上がる？どっちがいい？」と聞いてきた。私が「避難した方が良さそうだから、避難しましょう」と答え、雨の中、ご近所と車椅子のお婆さんと近所の方を連れて（畑賀小学校の）体育館に避難した。体育館に着いた時には、もう既に人がいっぱいの状態だった。「もういっぱいです」と言われたので、福祉センターに移動した。それでも、人がいっぱいだった。中に入ることが出来なかった。雨をしのぐために、外で待っていた。外には、他の人も沢山いらっしまった。

避難をするとき

避難をする時、近所3軒に声を掛けた。

災害より以前、町内会のアンケートが回覧板で回っていた。避難準備、勧告が出たらどうしますか？という内容のアンケートだ。そのアンケートには、「避難をする時は、近所の方にも声を掛け、一緒に避難してください」と書かれていた。あとからアンケートを取りに来た福祉の方が、私に「Iさん、ご近所のFさんは1人世帯で、避難する時は、「Iさんと一緒に避難をされたい。」とおっしゃっていました。もし避難することがあれば、Fさんに声を掛

けてくださいませんか？」と聞いてきた。そして私は「いいですよ、避難する時はFさんにお声掛けしますね」と伝えた。あの時のアンケートがあったから、今回、私はFさんに声を掛けた。それがなかったら、声は掛けなかったと思う。

人は「お節介をやいていいのかな、やくと悪いかな」という気持ちがある。始めから、「声を掛けてください」と伝えて下さっていたので、今回の被災のとき、それを思い出し、「Fさん、一緒に避難しませんか？」と言って一緒に避難した。

あのアンケートが、とても良かったと思う。声掛けしたとき、Fさんは、「はい！一緒にいきます！ちょっと待ってくださいーい！」と言い、すぐに荷物を両手に提げて出てきた。用意がいいねえと思った。きつと、準備はしていたものの「避難しようか、どうしようか」と迷っていたのだと思う。

そのアンケートがあつて本当に良かった。

豪雨から4ヶ月経った今

1週間くらい前（豪雨から4ヶ月経過）に、やっと川の水が澄んできた。

建設の方に聞くと、家の前の川の道路が直るのには、あと十数年はかかるらしい。

今は、あまり、日々文句を言っちゃいけないと思う。

普通の生活が一番良い。

畑賀三丁目

木井直 法子

題目「人を大切に・ひとことを大切に・助け合うから命が助かる」

その日は午後に健康診断に行っていた。

小雨が降っていたため、カップを着てバイクで向かった。その帰り、18:00頃には、それまで小降りだった雨がザーザーに変わって降っていた。その時もカップは着ていたけれど、「バイクにもワイパーが欲しい」と思うほど雨が激しかった。

私の家は、裏の川よりも少し高い位置にあるから、水害に対しては大丈夫だと思っていた。

家に帰ると、サイレンが聞こえた。家の裏の川を見ると、凄く大きな石が、ボールみたいに跳ね上がるような流れだった。

「ここにおったら危ない！」と思い、近所の方4人と一緒に「行こう行こう」と言って、畑賀小学校の体育館に避難した。

体育館に到着し、しばらくしてから停電になった。最近、トイレも何もかも全部電気製品だから、停電の時は困った。トイレに行っても、水洗便所は水が出ない。段ボールで作られたような簡易的なトイレが用意され、囲いも何もなかった。トイレは我慢してはいけないし、仕方なかった。本当に、初めてあのような経験させてもらった。私も戦後すぐの生まれだが、このような経験を「わあ、」と思った。

不安な気持ちの中、電気は切れる。テレビもない、ラジオもない。

情報が全くない。『どうなるんかね。どうなるんかね』と近所の人々と話していた。

そのうち、自家発電のような、大型電池のようなものが避難所で発動し、そうしているうちに電気が点いた。その日の夜は、ウトウトはしたが、よく眠れなかった。

朝起きて、雨もだいぶん小雨になったので、『ぼつぼつ自分の家に行ってみようか』と言って、みんなそれぞれの家に帰った。

周りを見ると、すごい爪痕だ。『あそここのあの木がないね』、『お隣さんのところ、エグられてから酷いことになったとるし』という感じだ。保育所の所にある消防団車庫は傾いている。道は、人も通れないような状況になっていた。

私は生活するには、普通の生活をさせてもらっていた。けど、家のお水が濁っていて飲めなかった。水だけは、あちこちと歩いて買いに行っていた。しばらくして、近所の福祉センターに給水車が来たので、近所の人に乗せもらうなどして、タンクで水を貰いに行っていた。2、3日程して、少し落ち着いたら。

ただ、この家（畑賀3丁目）よりも上の方は、随分と苦労されたいらしい。

保育所から上は、井戸を持っておられる人が結構おられ、お風呂とか洗濯の水は井戸水を使っているのだが、災害後は水が使えない。

近所の人々が、『お風呂入りに来なさいや』と言って、毎日、5

人ずつくらい交代で、お風呂を貸してあげていた。それを契機に、近所付き合いが凄く良くなったそうだ。

そのような状況の中、私も、全国テレビを見たあちらこちらのお友達から、『畑賀どうだった？』、『木井直さんの家は流されていないか？』などと、色々な温かい電話をいただいた。

今は、感謝の日々を暮らしている。

今回のような災害があっても、こうして笑顔でいれることは幸せだと思う。普通の生活させてもらってね。

まだまだ、もっと辛い状況に遭って立ち直れない人たちもいる。そういう中で、贅沢は言っていられない。

普通でいられることに感謝している。

被害

この下の方の家は、1軒は跡形もなく流れ、2軒は住まれる状況ではない。特に、畑賀の川は蛇行していて、一番危ないと思う。川のクネクネしている部分はとくに被害がすごかった。私の目で見ても、川が蛇行する所で濁流が岸にぶつかり、ダーッと崖がえぐられていたのが分かった。親子4人が乗った車も、海田の方から帰ってきている途中、車から落ちて、お母さんと男の子は車から脱出してガードレールに捕まって何とか助かったが、二人の女の子は流されて、まだ見つかっていない。こういうことがあったりした。

災害後

災害後は、若い人からお年寄りの人までボランティアさんが毎日のように、すぐく助けて下さった。絆が深くなった。だけど、もう2度とこのようなことがないようにしなければならぬ。

この地域でも年に1回くらい、防災訓練がある。今年始め頃にも防災訓練が開催され、畑賀小学校に100人程集まった。中には、「参加せんよお」と言って集まらない人もいらっしやった。私は防災訓練に参加して、何か大変なことがあった時には畑賀小学校に避難できる、ということを知った。そういう面では、訓練はやはり、大変勉強になる。「ここに駆け込めばいいんだ」という意識は、訓練に参加して身についた。今回の豪雨はその矢先だった。

今は、崩れたところに黒い土嚢を積んでもらっている。黒い土嚢は5年くらいしか保たないらしい。ビニールのようなもので出来ているから、ボロボロに破れることがあるかもしれない。その間にまた豪雨がなければいいが。ちょっと、怖い。川底もすごく浅くなっている。この川底が浅いままでは、また雨が降った時、今回よりも更に何倍もの被害が出てしまうのではないかと思う。どうなるのだろうか。だけど、どこもかしこも、災害は起きていて、土建業者さん、土木関係の方々がフル回転で、あちらこちらとお忙しい。着工する順番もあるのだろう。今からが大変だと思う。復旧には時間かかる。

意識しておくこと

色々あちこちと天災の多い日本だ。最近では北海道の方でも地震があったし、岡山の方の真備町とかも被害があった。

川よりも上に暮らさないと、水が全部入ってきたら危ない。川の近くと山の近くは出来れば遠慮したい。私の家は川よりもだいたい上に建っているから、「自分の家は大丈夫」と思っているが、もしかすると、そのような意識がいけないのかもしれない。

常に、「何が起きるかわからない」と考えていないといけない。被災してからそう思った。

豪雨があつてからは、ずっと、近所の皆が集まってもそのような話ばかりだった。「何が起きるか分かんね。もしなんかあったら助けてね」と話している。

心を救ってくれたのは

唯一助かったのは、カープ（地元の野球チーム）が頑張ってくれたことだ。やっぱり、カープが力付けてくれた。

球場でも何人もの人がひとつになつてね。素晴らしいと思う。みんなでスポーツを応援することは素晴らしいと思う。こういう災害があつても、選手達が頑張ってくださったことが、すごく力になり、やる気を起こしてくれた。

災害で大変だったけれど、応援しているその間だけは、ほんわかムードにさせてくれる。良かったなあと思った。救ってくれた

のはカープ。

「カープのおかげで、被災した皆、頑張っていらっしゃるんじゃない」って、選手達に伝えたい。

大切なこと

人って、ひとりではないと思う。皆に助けられ、生かされる。

やっぱりみんなを大切にしたい。また、「遠い親戚よりも近くの知り合い」というのは本当だと思う。今迄の人生も、色々と波乱万丈だったけれど、友達に生かされた。血が繋がっている人も大切にしないといけないが、やはり、近くの人や友達とかは大切。何でもそう。

豪雨の話からこんな話になったが、結局、多分これは全て繋がっていると思う。普段から人付き合いを大切にしておくことが大事だ。

復旧作業の時も、土や水はものすごく重たくて重労働だ。普段から筋肉をつけておかないといけない。そして、やはり、声かけが必要だ。「助けてくれる？頼むけえ」と声掛け一つしてくれたら、皆助けに来てくれる。でも、もし声かけがなかったら、周りの人は、「勝手に手伝って良いものだろうか」と躊躇してしまう。

何においても、ひとことが大事。ひとことがないために不愉快な感情も生まれる。後から、「あの人は手伝ってくれたけど、あの人は手伝ってくれなかった」という愚痴が出てきてしまう。言

葉がないために不平不満が生まれることがある。でも、皆、大変なときは優しい。誤解が生じているときも、たった「ひとこと」言だけで、解決することがある。言葉って大事。

「ありがとう」、「助けて」、「今日は出来ないわ」など。これだけで皆、平和になる。とっても簡単なことだ。

被災者を減らす為に

被災者を減らす為には、この度遭ったことを忘れずに行うこと。訓練などが開催される時は必ず参加すること。そして、近所の人たちと、日頃から濃い関係を築いておくことが大切だ。

情報を知らない人にはすぐ、なるべく広く、知らせてあげることが大事。最近が高齢化社会になり、耳や足が不自由な人も多い。そのような人たちを地域で把握し、知らせてあげることが大事。

天災はスピードが早い。「もうちょっと大丈夫だろう」と言っている間に、もう遅い。早めに情報を聞いたら、早めに（避難）行動をする。それが無駄になったとしても、早めにした方がいい。あとから後悔するのであれば、無駄でもいい。

天災は、防ぐことは出来ない。他県であっても、テレビで他県の災害を見て、他人事だと思わないで、「自分の町でもこういうところが危なそうだな」と勉強することが大切だ。他人事に考えていたら、助かる命も助からないかもしれない。

周りの人のことを知ること。優しい心をもって伝えること。地



安芸区畑賀周辺の被災状況

域の人たちが団結すること。それは、日頃から密な関係でないと出来ない。情報を知って欲しくないという家もあるが、そういうことを抜きにした関係にしておくことが必要だ。普段から隠さずオープンになり、お互いに助けてもらえるような、助け合うような気持ちになっていないと助かる命も助からないかもしれない。逆に言えば、普段から関係を築いていれば、命が助かりやすいのだと思う。

(湯浅 聴き取り)



畑賀三丁目

畑賀保育園 園長

山 根 美和子

題目「保育園での避難状況」

保育園では、7月6日（金）の午前中から雨は降っていました。が、例年通り園児と七夕会を開き、毎年七夕の日は雨のことが多いので、「今年もおりひめ様とひこぼし様は、見えないねえ。」と子どもたちと話をしながら過ごしていました。まさか、こんなことが起きるとは夢にも思わず、楽しいひと時を過ごしていました。が、状況は刻々と変わっていきました。

朝から降っていた雨は、どんどん激しくなり、雨雲レーダーを見るとオレンジ色の混ざった雲が帯状になってきていました。

幸いにも私たちは、4月に防災士の柳迫氏を招き、職員を対象に土砂災害について教えていただき、5月には、保護者を対象に講演会を開いていただき、私は幸いにも重ねてお話を聞くことができました。土砂災害についての理解を深めることができました。

また、6月29日（金）には、雨の中本番さながらの避難訓練を行い、職員で避難方法を周知していました。そのおかげもあり、7月6日当日は『雨量が1時間に40ミリに達したら、すぐに避難準備情報が発令されるから、意識しておくように』と柳迫氏より教えていただいたことを思い出し、11時頃より、飼育ケースの下から40ミリのところにビニールテープで印をつけ、スマホで1時

間のタイマーをセットし、様子を見ていました。

3時間後の2時近くになると40ミリに達し、これは危ないと思い、職員に避難を開始するように伝えました。それと同時に保護者の方へ、マチコミメールを流し、早いお迎えをお願いしました。

一方、子どもたちは、お昼寝の時間でぐっすり眠っており、避難には少し時間がかかりましたが、先生たちのいつものない様子を察し、早めに準備を行い2階に避難することができました。4・5歳児の子どもたちは、カップを着用し準備が整い次第、畑賀小学校に向かいました。雨が降る中での避難にもかかわらず、子どもたちは先生たちの誘導で必死に歩き無事到着できました。0歳児から3歳児は、歩けない子どもは職員がおんぶし、3歳児からは、歩けない子どもは職員がおんぶし、歩ける子どもは手を引いて、職員の自家用車で避難しました。職員一人一人が、自分の役割を理解して職員同志連携しながら、子どもたちを全員無事に避難することができました。私たち保育園職員にとっては、子どもの命を守るという使命を果たせたということが、大きな喜びでした。

今回このような経験をし、振り返りをした時、いろいろな課題が出てきました。現状から考えますと、高齢者等避難準備情報は、早めに発令されると思われます。この経験をいかし、どんな時でも冷静に、迅速に対応できる職員集団でいるよう努めていきたいと思っています。



H30. 7.7 (土) 撮影

ここが保育園です。
2軒後ろの家が傾き、
道路がえぐられています。



ここが保育園です。(裏)

橋を渡ってみどり坂方面に
行く道路はえぐられてない
状態です。



畑賀町

谷 本 正 治

題目「災害発生（発生予想）時の避難行動について」

我々の住む地域は、大正15年に死者36名にのぼる大水害に見舞われた地域である

あれから90年余り、今まで何回か大雨による土砂崩れ等の被害はあったものの人的被害には及ばなかった。大正15年の水害をよく知る人は現在では皆無に近い

さて、現在我々の町内会では、自治体からの災害情報により組織的に対応している。平成26年8・20広島土砂災害発生以降は防災、減災の意識が高まり、前述した大水害の経験を持つ地域でもあることから、防災組織を立ち上げて、年1回の避難訓練を実施している。

私がリーダーとして受持つ区域は、2級河川を挟んで南北に22km、家屋が点在する山間地域である。災害時生活避難場前までは最長33kmの下り坂であり、3分の1は川に沿った道路である。また、全54世帯のうち36世帯が土石流または急傾斜地の警戒区域に含まれている

7月6日から7月7日早朝にかけて大雨による川の増水で、道路の2箇所で全幅が流失し、川沿いの下り車線3箇所で陥没、護岸の部分陥没が多数発生していた

7月6日我々の区域に避難勧告が伝達されたのが18時30分前後

で、大部分の世帯がそれ以降の避難行動となった（18時30分以前に自主避難した世帯は4世帯）。生活避難場所または1次避難場所への避難行動について我々の区域では54世帯のうち約半数が地理的に車での避難が不可欠である。

今回7・6の豪雨災害において、我々の生活避難場所への避難行動についていくつか気づいた点及び再認識した点を述べる

第一に、夜間（暗くなってから）の車での行動は非常に危険を伴う

今回、避難勧告発令後、約1時間くらいで道路の流失、電柱の倒壊による電線の垂れ下がりが発生しており、激しい降雨の中では視認もしにくい。生活避難場所への避難が危険を伴うと考えられる場合は、自宅の2階であるとか、1時的に安全と思われる近所や知人宅等に避難をさせてもらう

第二に、土石流または急傾斜地の警戒区域内にある世帯は、極力避難する。

今回、警戒区域にある家屋が大きな被害を受けなかったものの、裏山の土砂くずれによる家屋内に土砂が流入したり、水路の氾濫による取付道路の陥没、家屋床下浸入等の被害が発生している

第三に、要援護者（地域のネットワーク及び防災会に登録されている者）及び1人住まい高齢者については、リーダー又は支援者（我々の地区では要援護者ごとに担当する人を指名している）が早目の避難行動を促し支援をする

避難行動に手助けや時間がかかること、夜間の避難行動の危険性や、災害発生後の停電、断水等の発生により日常生活が正常に出来なくなる可能性もあり、避難所に避難していれば自治体等の支援を受けられる

我々も今回の大規模災害を初めて経験して、情報の伝達から避難所への移動、避難所での生活など過去の避難訓練では見出せなかった問題点が数多く明らかになってきた。改めて訓練と実働の違いを知り、これらの問題点を今後の避難訓練に反映させて、町民の安全確保や防災、減災に努めたい。



題目「想定はしとったけど…」

7月6日

夕方家にいたとき、家の前に2台ほど車が止まっていることに気がついた。「ここは車が来るようなところじゃないのに、これはおかしい。もしかしたら下の川の水が溢れているのかな」と思っ
て、父親と一緒に見に行った。すると、案の定、川の水が溢れて
いた。

そこで車の人たちに、「ここは谷筋で、昔、山が崩れたことがあつ
て危ないから、誘導するから移動したほうが良い。」と伝え、別
の場所の空き地に誘導した。

下の川は、物凄く溢れていて、とても車が運転できるような状
態ではなかった。運転していた人は皆、「死ぬかと思った」と言っ
ている。ハンドルをとられながら、なんとか上がって来たようだ。
この小さな川でさえ、これほどの水が溢れている。「もっと下の
畑賀や瀬野川の方に降りれば、更に危険だと思うから、こここの辺
りにいた方が良い」と伝えた。

そして、誘導してから家に戻った時、もう既に山が崩れていて、
土砂が家の前にも来ていた。車の人と話をしている最中に、光っ
てもいないのにゴロゴロと雷の音が聞こえていた。その後19時30
分過ぎに停電になった。後になってから思うが、多分あの時、そ

のゴロゴロは、この山が崩れる音だったのではないか。よく「山
が崩れるときはゴロゴロと音が鳴る」と聞いていたが、その音を
実際に聞いている時は、それが山崩れの音だとは全然わからな
かった。雨も降っていたし、雷だと思っていた。

車が停まっていたのを見て外に出た時は、家の庭に10cmぐらい
水が溜まっていた。それを対策するために「土嚢を詰もう」と父
親と言っていた。うちの家は、道よりも低い位置にあり、どん
どん水が流れて来やすいため、土嚢を詰もうと考えていた。でも「ま
ずはこの車を誘導してからにしよう」と言っていた。もし、あの
時、その土嚢をせっせと積んでいたら、たぶん死んでいた。ゴロ
ゴロという音を聞いても山崩れだとは分からなかったくらいだ。

例えば20〜30cm手前で土砂が来ているのが分かっている、間に
合わなかったと思う。そのときは暗かったし、土砂のスピードは
ものすごく速い。「あつ」という間に、潰されていたと思う。土
砂が流れてくるスピードが時速60〜80kmだったとか聞いたことあ
るけど、もし、あのときに車を誘導していなかったら、間違いな
く死んでいた。

想定はしていた

私の家は谷筋にあり、山が崩れることは想定内だった。50〜60
年前にも隣の谷筋で山が崩れた。しかし、自分の家や畑は、この
谷筋の山からはかなり離れている。家には大きな石垣もある。だ

から、大丈夫だろうと思っていた。まさかここまで、この量の土砂が溜まるとは思いませんでした。

石や木がすごかった。1〜2mくらいは優に埋まっていた。石垣も土砂によって動かされた。

石垣があるから庭の方は大丈夫だろうと思っていたが、土砂が蛇行して（逆流して）、庭まで入ってきた。大きい岩もゴロゴロあった。庭全体が砂防ダムのようになった。

初めから父と、「もし土砂が流れてきたら、庭のシャッターを開けて、土砂が庭から外に出るようにする」と決めていた。しかし、いざ山崩れが起きた時、停電になっていたため、シャッターが動かなかった。

よかったこと

良かったのは、ボランティアさんが、東京や三重など、遠くから来て頑張ってくれたことだ。

三重の人は、一度ボランティアに来て、そしてまたその何週間後に、土日によってきてくれた。わざわざ自分で、軽トラックを運転してきて、軽トラックの荷台にブルーシート引いてそこで寝る。本当に凄いなあと思った。

砂に木が埋まっていると、木が全部枯れてしまうらしい。ボランティアの人たちが「八木でもそうだったから」と言って、木の周りの土砂をどけてくれたりもした。

「今頃の若い人は…」とか言われているけど、今回もかなり、若い人たちが来てくれた。

日本も捨てたもんじゃない。『スーパードランティア』のような人たちがいっぱいいる。そう言った面は凄く良かった。

復旧中のトラブル

今回の災害は、山崩れによる被害だけではない。

山が崩れてしまったが、砂防ダムの着手までに少なくとも2年かかるかと広島市に言われた。その2年の間までは、黒い土嚢を置いて、仮のダムにしている。

しかし、近隣の人は、「そこに土嚢置いたら、こっちに水が流れてくるじゃないか」と言う。そして、「この谷筋に新しく川を作った方が良い」という。しかし、この谷筋の一面は、私の家の畑だ。それにもともと水の流れがある訳ではない所に、新しく水を流すのはよくないと思う。皆、少しでも自分の家に水が来ないように、と思っているから大変だ。また、近隣の人は「今回の災害は山の持ち主が賠償しないといけん」と言う。

災害で色々壊れたけど、それよりも、人間関係が大変だ。

費用がかかる

石垣が土砂で壊れた部分を直したいのだが、災害によるものだから、費用は1割負担でいいらしい。それでも、すぐその辺りを

直すだけでも3百万円はかかると聞いた。とてもじゃないけどお金がかかる。

雨の認識があまかった

八木の時みたいに雨がひどく降っていれば、どうしようかと考えていたかもしれない。

認識としては「この辺りはマサ土でどこも崩れやすいから、雨量が100ミリを超えたら、避難しないといけない」と考えていた。今回の雨は、長雨だった。「梅雨の時期みたいな雨だね」という感覚。よく降るけど、4年前の八木の時のほどは酷くない。4年前は、雷もすごかったし、屋根に落ちる雨音が尋常じゃなかった。でも、今回は「よお降るなあ」という感じ。だから避難しなかった。警報とか入っているけど、「大丈夫だろう」と思っていた。家の周りに石垣もあるし、そこまで土砂は入ってこないだろうと思っていた。でも、実際石垣が動かされるほど土砂が入ってきた。認識が甘かった。

被害を減らすには

被害を減らすには、極論から言えば、危ないところに家を建てないことだと思う。でも、そもそもこの辺りも歴史も古くて、新興住宅地みたいに無理矢理切り開いて建てている訳ではない。埋め立て地でもない。避難するのはむずかしい。だけど、すごい山

の上の方に家が建っているのを見ると怖いと思う。

避難場所について

家の前に車で来ていた人のうち、1人は畑賀の人だった。その人はどうやら、畑賀小学校が避難所だということを知っていたけど、昔そこで大水害もあり、体育館に避難するのは危ないと思って、もっと上の方の、この場所に來たらしい。しかし、これも川の水が凄く、死ぬ思いで來たそう。避難場所が信用ならずに來たのだという。

避難場所は決まっていなくても、行くまでの道が危ない。避難する場所は、きちんと考えないといけない。うちのところの公民館は、川のすぐ傍の危ないところにある。

うちよりも高いところにある家が避難場所になっているけど、人の家だから家主の了解を経ないといけないから、なかなか行きにくい。

もうひとつ避難のことだ。あの車に乗ってきた人は、府中の方に逃げようと思ったけど、よく考えたら府中の方も山が崩れて危ないと思ったらしい。避難経路として行くなら、結局、もっともっと早いうちに逃げないといけない。手遅れになってしまう。

安全な場所がどこにあるのか分からないが、下手に動かずに家にいた方がまだ命が助かるかもしれないと思う。下手に動かな

いっていうことが大事だ。もちろん、住んでいる場所それぞれによって状況が異なるが。

川より低いところは危ない。水が滞留してしまうので、早く逃げないといけない。

場所によって避難の仕方がちがうと思う。山の方は、2階にいた方が良くもされない。でも裏がすぐ山だったら、逃げた方が良くもされないし。日頃からやはり、避難のことは考えておかないといけない。

私も、「避難」という発想はなかった。「どのように水をはけるか」とかそういう事は決めていたけど、やはり、災害は一瞬のことだから対処出来るわけがない。

土砂も、ズルズルとゆっくり流れて来るかと思って、そんなに一気に土砂が流れてくるとは思っていなかった。

木が流れるときに避難するのはもう遅い。

4年前に八木にボランティアに行ったが、まさか自分のところがこのような状況になるとは思っていなかった。

土砂災害発生現場の様子について

もともと山頂の方は、昔岩盤がむき出しだったと聞いたことがある。

土石流発生場所をよく見れば、岩盤の上にただ、少し砂と木が乗っているような感じだ。

今はだいたい崩れてしまっているため山の地肌が見えているが、地肌が見えていないと返って危なかったかもしれない。

(湯浅 聴き取り)



⑭【広島市安佐北区白木町井原】

題目「豪雨災害と山頂地滑り」

白木町井原

大東 敬子

7月6日 朝から降り続いている雨は、勢いを増すばかり。

夕方6時過ぎ、自治会長から、「すでに小学校へ避難している。」と連絡があった。炊き上がったご飯でむすびを作り、手近なものを詰め込んで、家と納屋の間に出たところ「ドーン」という爆響。「えッ 今の 何の音」と叫んだら、2階にいた嫁が「アー山が崩れてる！」というではないか。すぐに山側に出てみると長さ80m、幅40m田んぼの中まで崩落している。しばらく眺めていたが、その後石ころ1つ落ちてこない不気味な静けさである。沼橋の手前で幼児のいる家に車3台灯がついている。

主人が誘いに寄ってみると裏の用水があふれて、家と納屋の間が浸水しているとのこと。小学校の2階の校舎がすべて開放され、井原中の被災者・通りすがりの帰宅難民103名の避難所となった。

迫田橋崩落、店瀬橋崩落、床上浸水、床下浸水と次々情報が入る。早朝帰ると10時ごろ 消防団の方が「神の倉山頂付近で土砂崩れがありますので、用心してください。」と訪問される。

その後、3カ月、雨が降る度、避難勧告、避難指示の繰り返し。

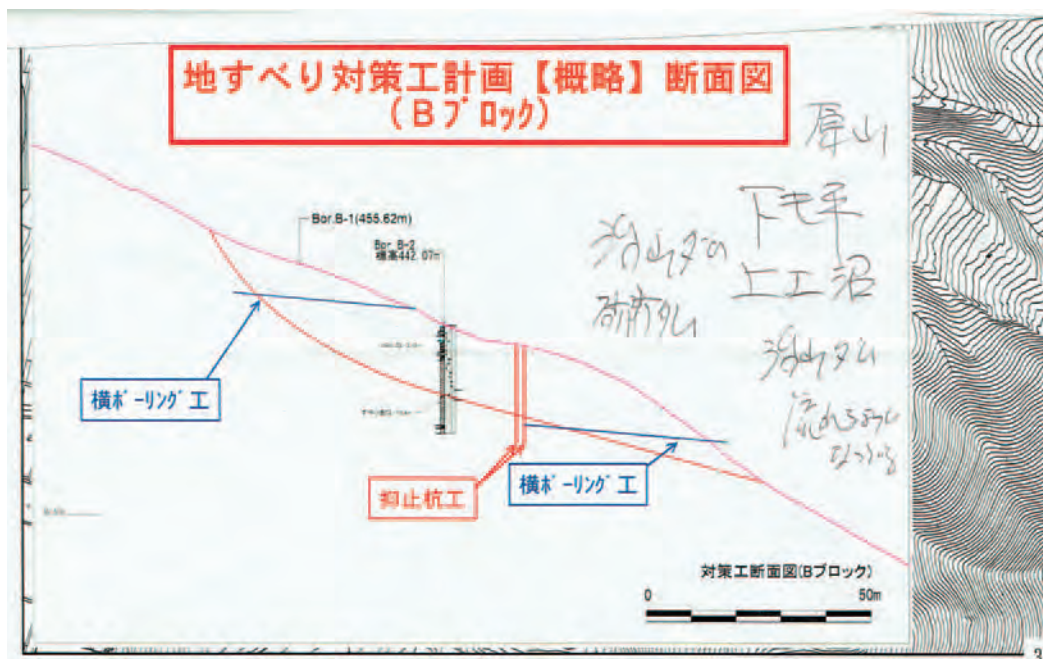
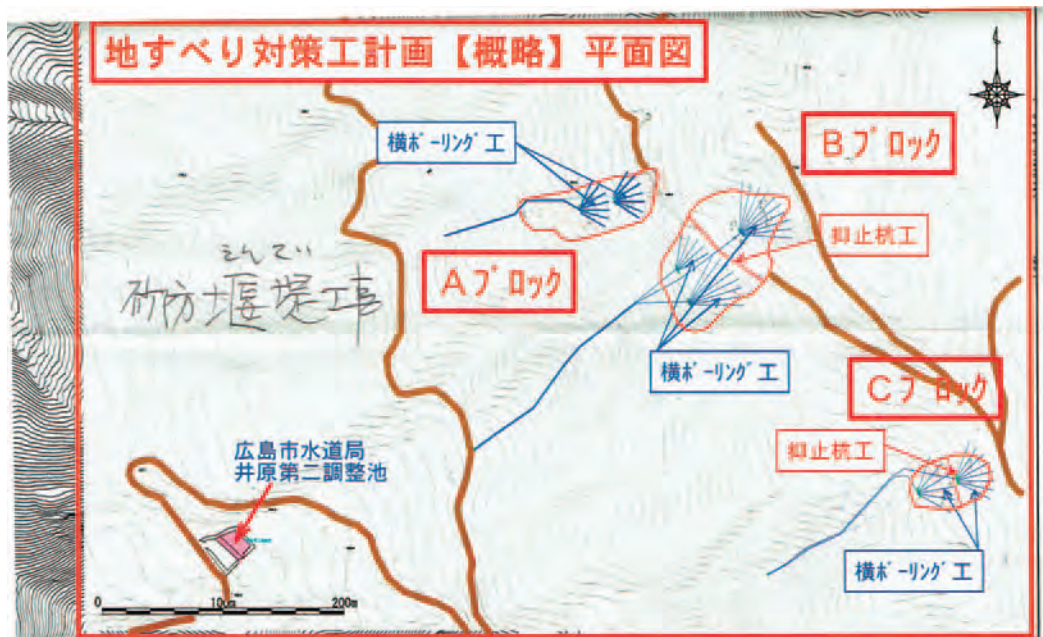
体育館での避難、集団生活で落ち着かない日が続いている。しかし、考えようによっては家や田が流出したわけでもなし。不足を言う場合ではないと分かっているが、先の見えない地滑りに精神的に体調を崩される者の多い現状である。インターネット等情報により、井原、中東、沼も有名になり、東京の親戚からも見舞いの電話がある。9月26日ようやく地滑り現場の調査により、下流に緊急砂防堰堤工事が進められるらしい。10月より現場測量に入るとか。

事前に50年ぶりの災害と放送されていたが、よく考えてみれば全くその通り。

結婚前の昭和44年6月三篠川と関川の氾濫により、実家の5反の水田が全部流出した。

直前、両親が土手の上に干していた薬種を家に持ち帰ったとたん、堤防決壊となり危機一髪 両親が命拾いした記憶ある。その時も国の激甚災害が適応された。三篠川の流れが一直線になり、1反5畝の5枚の三角形の田が残っただけである。

嫁ぎ先もその時、堤防決壊で床下浸水、田の流出と聞いた。地球温暖化による気象の変化等、想定外の災害に備えるべく、今後防災教育に力を入れる必要も大事と思います。



白木町井原

廣 畑 一 孝

題目「今回の災害で体験したことや感じた内容」

7月6日の豪雨は実に降雨強度が強く、しかも長時間続いた。こう云った豪雨は今までに経験がなく、6日の夕刻から始まって7日の未明にかけて強烈に降り続いた。

7日の早朝、三徳川の様子を見に行って想像した通り大災害になっていた。

以下に井原全体の災害の状況調査や行動について述べるなかで、体験したことや感じたことについて纏める。

A・各地区の災害状況の調査について

見張集落の大きな災害

「三篠州左岸崩壊」

県道37号線の新大見橋上流約20mの左岸の上部法面が半分くらい約20m位扶り取られていた。昨年行政にお願いして覆土した部分がそっくり失われてしまった。

この覆土が行われていなかったら、護岸が決壊して広範囲の田圃への土砂堆積、家屋の浸入等大きな災害をうけたと思われる。壊された個所は、早期に復旧しておくべきとつくづく感じた。

この土手は工場出入りの市道で10トン車の通行がある事から、早期に復旧して頂き、8月20日には完了した。

「松田井手取水口崩壊・土砂堆積」

井手の取水口付近の土手が崩壊して土砂が約120m下流まで堆積した。

この堆積地点より20m位下流に上井手（わいいで）が約2m上部を流れており、幸いにしてこの井手が使えたので、この水の一部を貰い受けて稲が干上がる事態には至らなかった。尚、松田井手は更に下流にも土石が堆積している個所があったが、この除去に際しては農林課の懸命な努力があった。

大寺集落の大きな災害

「大寺橋並びに周辺護岸の崩落」

大寺橋が流されていた。旧県道からこの橋に降りる市道と右岸の護岸も完全に崩落していた。崩壊はこの橋から約100m上流まで及んでいた。

「大寺橋上流左岸の越流による災害」

大寺橋の右岸の崩落が余りにも目立った為、左岸の越流による甚大な災害は、直ぐには気付かなかった。

◎住宅の床上浸水

4軒の住宅が床上浸入していた。多量の土砂が庭や床下に堆積していた。

2軒のお宅は常住されており、お年寄りの御夫婦と年配女性の一人住まいのお宅であった。あまりの土砂量に困惑されていた。

お隣集落なので復旧のお手伝いをしようとしてわが集落で話し合ったが、我が集落だけでは、人数が少ない事もあって井原自治連の専務局長で副会長である立場から自治連会長と話合ったところ、井原全体の災害状況を早く確認し、支援を求められる方が他にもおられれば一緒に処置して行こうではないかと云う事になり、井原全体に焦点を切り替えた。

優先的に常住者の床上浸水宅の生活環境を早期に回復することを目指して、床上浸水されたお宅を調べて回った結果、床上浸水宅23件のうち大寺地区と下市地区の7件から支援を求められたので7月8日～10日まで支援を行った。

各自治区よりボランティアを募り、支援を求められた自治区に組み込んで人員を割り振り活動した。

私がボランティアの必要性を感じたのは、がっかりされていた被災者の方が、支援活動を始めた途端に本当に嬉しい笑顔になられた時だった。

◎大規模農園の土砂堆積

大規模農園のビニールハウス32棟が土砂災害で全滅した。復旧作業は大変と思われるが、お勧めしたボランティアの支援を断られ、自力復旧で頑張っておられる。

「土石流発生による災害」

発生箇所は3ヶ所であったが、そのうち2ヶ所が土石流の災害を受けた。

3件の住宅に土石流が庭や住居に侵入し堆積した。又、2ヶ所中の1か所は砂防ネットが2階の屋根よりも高い所にあり、砂防ネットで受けきれなかった土石や巨木が高所より降って来て、近年転居してお住まいだった方は、「こんな怖い所にはもう住めない」と云って他へ転居された。

高所に石や木片が堆積しており除去作業が危険なので、市の防災課に早期の除去をお願いしているが、まだ手つかずの状態である。いつまでも残して置くと再び豪雨が起きたとき人身災害が懸念される。

「大寺橋上流右岸の崩壊」

決壊すると怖いので、早く覆土して欲しい。(近々、県と話合う)山根葉落の大きな災害

「土石流発生による災害」

土石流が市道を超えてJ R線路に堆積した。

J Rが長期運休するので、その間に土石流対策を済ませるようをお願いしている。

「住宅の床上浸水」

この御宅の前に農業用水路があり、水路の水量が多くなると水門を開けて三篠川に放流できるようになっているが、三篠川の水

位が異常に上昇して水のはけ口がなくなり、住宅に浸水した。

尚、農業用水路の大量増大は後述する栄堂川の越流に起因する。浸水の状況写真は居住者により撮られ、豪雨前から床上浸水に至るまでの状況が克明に記録されている。自分の家が大変な時に良く撮られたものと感じている。

江地集落の大きな災害

「土石流による床下浸入」

住宅横の市道が川になって4軒の住宅に流れ込み、土砂は床下にも堆積した。

この原因は、江地集落の上にある明神林道で土石流が発生し、多くの土石が市道の側溝を埋め尽くしたことにある。

土石流は林道から市道に下って来て田や畑に堆積し、水路に堆積した。

土石流は明神林道の150m位上部に発生源がある。その土石は明神林道のガードレールを倒し、更に300平方m位の農業用溜池を埋め尽くして林道を下って行った。この土石流の威力に大変驚かされた。若しも林道を車でも走っていたら一溜りもない。農業用溜池が無かったらもっと被害は大きかったと思われる。

今後、農業用溜池の復旧は勿論のこと、砂防堰設置等の対策が必要である。

「江地大橋上流左岸の崩壊」

左岸の小さな崩壊は数か所あるが、一か所大きく壊れた護岸がある。

現在、急ピッチで土嚢による仮養生が行われている。

中々、対策の様子が窺がえなかったもので、江地の自治会長より対策を急ぐように自治連に訴えがあった。この護岸から越水すると江地地区の5軒の浸水が懸念されたからである。

明神集落の大きな災害

「土石流による宅地堆積」

土石流の通路は表土がなくなっているので、上部より大きな石ころが転がり込んで来る。土石止めしておかないと危険である。

高瀬集落の大きな災害

「高瀬堰直下両岸崩落」

堰の両岸下部が削られている。早期に補修しておかないと、再び洪水になると大きく崩壊する危険がある。

「高瀬橋並びに市明橋の橋脚陥没」

早期に復旧して欲しい。

「市明橋上流左岸崩壊」

現在、復旧の兆しが見られないので、県の復興スケジュールを知りたく、近々県と話合う。

中東集落の大きな災害

「土石流発生による災害」

神乃倉山中腹からの土石流は発生源が高所であり、再度の豪雨で大崩落して、中東集落に大きく被害を発生させるのではないかと凝念している。

沼集落の大きな災害

「福田井堰の両岸直下崩落」

堰が機能していないが、揚水ポンプで農業用水を供給して頂くなど農林課の対応は早かった。

しかし、本格復旧も急がないと崩壊が拡大しないかと凝念されるので、近々県、区と話合う。

「宮道橋上流左岸崩落」

2ヶ所崩落しているが、現在復旧の兆しが見られないので、県の復興スケジュールを知りたいので、近々県と話合う。

「宮道橋上流右岸崩落」

現在復旧の兆しが見られないので、県の復興スケジュールを知りたく、近々県と話合う。

「土砂崩れによる住宅圧迫」

土砂崩れで住宅に土砂が掛かり、住宅が圧迫を受けギシギシと音を発した為、集落の支援者がある程度土砂を取り除いた。しかし、除去した土砂が少ない事と、降った雨の流れ先を、住宅から外していなかったため、雨が降ると再崩落の恐れがあった。自治連で地元ボランティアを募り土砂の撤去及び土嚢を用いて住宅地への水の浸入を防止した。

坑内の鉄製パイプや土止めの檜材は国からの助成が得られず、有志に寄付して頂いた。困った時に助けてくれた人の心を美しく感じた。

各、ボランティアのリーダーは井原自伐林業の会から選んだが安全・安心に作業を進めて頂いた。

「土石流発生による災害」

住宅の庭に土石が落ちて来た、調べてみると砂防堰が満杯状態である。

堰は土砂を止め得る容積に維持する必要があるが、個人では出来ないのではないのか、県の意見を聞く予定である。

「迫田・沼集会所裏の土石流」

今回、集会所裏の山の斜面で小規模の土石流が発生した。規模が小さく集会所崩壊に至らなかったけれど、大崩壊すると集会所は危険なので砂防対策を要望する。

迫田集落の大きな災害

「迫田橋の崩落及び同橋上下右岸の崩落」

迫田橋上流の右岸が崩落し、迫田橋の右岸橋脚が崩落した。迫田橋の鉄橋の半分が落ちたため、迫田橋下流右岸が延々と崩落した。護岸の前面がコンクリートブロックで出来ていたにも拘わらず、いとも簡単に崩落してしまった。

今迄、我々は左岸が低いため左岸の越流を懸念していたが、右岸が先に大崩壊し唖然としている次第である。右岸が水圧アタックを受け易い状況にある事を理解し、今後に対応しなければならぬ。橋の再建では少し左岸側を拡げておく必要がある。

本災害では、流れそうになった住宅が2軒あったが、土囊積みによる仮養生を早期にやっていただき住民は先ず安堵している。

戸石・新官集落の大きな災害

「土石流発生による災害」

新宮川上流より土石流が発生し新宮川を土石流が下って来た。JR線路下の連通溝が閉塞して線路上に土石が堆積した。

土石は戸石地区、新宮地区の田畑に堆積した。新宮地区の住宅にも浸入被害が出た。上流に砂防堰が設置されているが満杯状態で、砂防堰下流の約300mが土石のむき出しの溝なので洪水で土石はどんどん増えてくる。

砂防堰内の土砂の排除、土石のむき出しの溝をコンクリート施工にする等の対策が必要である。JRが長期の運休中に改善がなされるべきである。

上市1区集落の大きな災害

「床上浸入災害」

4件の住宅が床上浸水した。

上市1区地区は住宅地が低い。その為、同地区への流入水が増えたとき栄堂川に排出出来れば問題ないが、放流先の栄堂川の水位が上昇していると排出出来なくなる。栄堂川の水位が上がると打つ手がないので実に不運な地域である。

行政への対策要望事項（下記2点のうち1点の採用のお願い）

- ・ 栄堂川を拡幅する
- ・ 排水ポンプを設置して地域に入った水をポンプで栄堂川に排出する

中市集落の大きな災害

「栄堂川越水による床上浸水」

栄堂川右岸が越水し1軒の住宅が床上浸水した。

3年前から栄堂川の浚渫をお願いして来たがなされなかったのが非常に残念である。早期に対策されないと同じ災害が繰り返される。

行政への対策要望事項（下記2点のうち1点の採用のお願い）

- ・栄堂川を拡幅する
- ・護岸を全体的に嵩上げする
- ・応急的には早期に俊喋する（応急処置）

甲田集落の大きな災害

「栄堂川越水による災害」

栄堂川が越水し、管理道のアスファルト剥離、農業用ビニールハウスの浸水、田への土砂の堆積が起こった。

このままの状態では洪水の度に被害は継続するものと考えられるので、抜本的な改善化必要である。

行政への対策要望事項（下記2点のうち1点の採用のお願い）

- ・栄堂川を拡幅する
- ・護岸を全体的に嵩上げする

下市集落の大きな災害

「床上浸水災害」

この浸水は栄堂川右岸の越水が起因している。

栄堂川が越水し、中市下流の線路の下を通溝を流れる水量に限界があった為、その洪水は線路に挟まれた地区に潜まり、通溝付近の線路を崩壊させた。

その結果、洪水は下市地区に一気に流れ込み、同地区の住宅13件を床上浸水させた。

行政への対策要望事項（下記2点のうち1点の採用のお願い）

- ・栄堂川を拡幅する
- ・護岸を全体的に嵩上げする
- ・応急的には早期に俊喋する（応急処置）

8. 災害状況の調査結果の報告

被害状況の調査は、自治連役員の役員が主体になって実施した。災害状況の調査結果は、先ず重大と思われる箇所について、区役所に23項目の報告を7月10日に口頭で行い、人身災害に至りそうな箇所について早期の対策をお願いした。

引き続き書いて書面に纏めて7月13日に区役所に行き、報告と早期の復旧をお願いした。

災害を詳細に把握するため、各地域の自治会長に自地域の災害報告の提出を求め、先の報告と重複するところも出たが、全ての

災害の要因解析を加えて、7月18日に区役所に報告し、早期の復旧をお願いした。

現在は、土石流発生個所の調査を自主防災と一緒に言い、調査結果を纏め防災の観点から災害防止対策の実施をお願いする方向で進めている。

こう云った行動は災害後、日を早めるために不可欠な活動である。

C. 災害復旧状況の確認、

提出した報告書に対し、どの程度復旧が進んでいるのか、区・地域整備課員14名の方が手分けして、被災した各自治区16地区を7つのグループに分け2名の方がそれに当たりて調査が行われた。災害報告に漏れがあった場合は、この時点で追加した。

この活動は、きめ細かく復旧状況を確認でき、適格な方法である。

D. 河川危険個所の復旧状況確認

自主防災と協力して河川の危険個所の調査を実施した。その結果、全く手付かずの個所があり、住民に不安を与えている所があるため、報告書に纏めて、県や区の担当者を加えて進捗状況を確認することにした。

特に護岸に井手や橋が設置されている場合には所掌が異なるので、一時期に情報を纏める上では適切な方法である。

E. 神乃倉山の危険予知

災害復旧を早めるには、早期に災害情報を纏めて行政に報告する必要があるが、同時に危険予知活動も並行して進める必要がある。

7月8日に自治連会長と副会長2名で井原全体の災害状況を調査した時、神乃倉山の麓の小川の水が異常に濁っていたので、神乃倉山に若干の地滑りが確認されている個所の調査を行うことにした。

頂上付近に行くと崖崩れしていて車でアクセスできなかったの、長い距離を歩いて行った。疲れるので何度か行くのを止めようとしたが、皆我慢して現場に辿り着いた。崩れた個所を確認した後、来た時よりも別のルートで帰りかけたら、道に何ヶ所もひび割れがあり驚いた。しかし、このひび割れを見ただけでは、その後の行動は取らなかつたであろう。

崩れた個所より30m位、横に移動したところの道がひび割れ、しかも50cm位の段差になっていた。

このことを区役所に報告した結果、現在のような避難指示や避難勧告が繰り返される事態になった。

「区役所に報告しなくてはならなかつたのか？」と質問をされた方もおられるが、そんなことは出来ない。危険予知を災害防止に生かす活動なので当然である。

F・地区外ボランティアへの支援要請

常住者の床上浸水宅の地区内でのボランティア支援を終えた後、外部ボランティアの支援を要請した。

常住でない方、床上浸水の方等を含めてボランティアを受け入れたいお宅を対象に活動した。

休日はボランティアが多いので土曜、日曜に活動した。

最大80人／日のボランティアの方々に床下の土砂や挟雑物の除去、庭や溝に堆積した大量の土砂の除去等を支援して頂いた。

大変な猛暑の中で活動していただき、安全・安心な作業が遂行できたことに本当に感謝している。



新大見橋上流左岸護岸崩落（7月7日）



神乃倉山地滑り（7月7日）



明神林道入り口土石流後）



神乃倉山段差発生（7月）



大寺橋上流右岸市道崩落・護岸崩落



大寺橋上流右岸市道崩落・護岸崩落（7月9日）



迫田橋下流右岸崩落（7月7日 10時）



江地大橋上流左岸（7月7日 16時）

⑮【広島市安佐北区白木町三田】

白木町三田

中野 隆吉

題目「西日本豪雨に寄せて」

私がこの地に移住してから45年になります。地形は目の前に第一三篠川鉄橋がかかっている。家の裏は山です。

川に突き出た大きな岩盤の上に私の家は建てている。したがって上流からの川の水はつき出ている岩盤のため狭くなっているの、雨が降ると水位はすぐに上がります。要するにダムにすれば良いような地形です。

私がここに住んでから、大雨が降ると家の下にある田んぼは、水に浸かり水位が下がるまでは外出できない状況でした。いつものことでした。

今回の災害は想定外でした。

くしくも、7月6日は私の誕生日（70歳）で、この災害は一生忘れることはないでしょう。

この日は、朝から雨が降り、昼過ぎからだんだん激しくなると午後3時頃にはかなり水位が高くなり、これはいつもと同じ状況だろうと思っていました。しかし、夕方ごろには、見る見るうちに水位が上がり、これは異常事態と感じました。

そのうち、水かさは増し、今までにない高さになりました。

裏山からバケツで水を流したような大雨になりました。

水位が上がリ、鉄橋を超えるころには、川の水は向かい側の県道37号線まで浸かり、多くの車が高台に避難しました。

それから少しすると、雷が鳴るような大きな音が3、4回（ゴーン、ゴーン）としました。

家の前の電柱も揺れました。一時はどうなるか？と思いました。逃げる所なく、（前は川・裏は山）なすべはありませんでした。大きな音がして、10分位過ぎたころだと思います。川の水位が下がり始めました。

朝になってみると、6本あった鉄橋は、4本は落ち、橋脚は2本倒れていました。

倒れた2本は、73年前の水害で、それをそのまま使っていたそうで、（後で聞いた話）落ちた2本の鉄桁がガード下に横たわり、水の流れが変わり、排水溝を塞ぎ田んぼ・家から出る道路には水がたまり、1週間は家から出ることはできませんでした。

今は、（9月30日）倒れた橋脚、落ちた鉄橋は撤去されていますが、復旧作業は今のところ進んでいない状況です。（聞くところによれば、まだどうするか？決定されていないようです。）1日も早い復旧作業を進めることを切に要望します（その際、橋脚を高く、川幅を広くし、同じ災害が起きないように対策してください。）よろしくお願いします。

題目「息子が流された」と思った」

白木町三田
宇野 昭義

7月6日1時半ごろ、三田小学校の体育館へ鍵を開けに行っていました、それから避難してくる人の受付をするために机を出したりしておりました。

3時ごろから雨が強くなって、3時半にはかなり増水し、川幅が8割ぐらいになっていました。浸かる恐れがある水位になっていました。

6時ごろになると、上流の中央橋では、中央橋を超えるぐらいの水位になっていました。

それから、6時半ごろには満杯で小学校のグラウンドには水が上がってくるようになりました。

8時ごろには三田小学校のグラウンドは、1m 50cmぐらい水没していました。

7時ごろには、道路が半分崩れました。

わが家の家族は、みんなでJR三田駅に避難しました。

それから、10時ぐらいには、川の向かいの家が1軒流れて行きました

それから、道路が崩れた関係もあって、上流の3の峠と言う井手があるが、そこから雨水が道路に流れ始め、歩道に取り付けてある落下防止のフェンスの超えるぐらいの水位となり、郵便局の

上流で車が14、15台動けなくなって通行ができなくなりました。その運転手は1m 30cmから1m 50cmの中を右往左往していると、山本工務店の空き家がありますが、ちょうどその上流で可部の消防自動車がいことから、隊員が来て動けなくなった車の運転手を山本工務店の空き家へ誘導した。

その工務店のドアはどうやって開けたかは？解らないが、その中へ10何人が入っていました。その中にうちの孫がいた。うちの孫は「高南の市白木出張所へ土のうを取りに行け。」とお父さんに言われて土のうを取りに行った。その途中車が通行不能となり動かなくなった。うちの孫が走って帰ることにして、郵便局まできて、「今郵便局のところにいる」と電話してきた。しかし、郵便局の所に行ってみるといなかったので流されたと直感した。その時は1m 50cmぐらいの深さがあった。すぐに警察や消防へ連絡するが通じない。そうしているうちに連絡できたので「息子がおらんようになった」と通報した。私は体育館にいたのでよくわからないが、お母さんが郵便局付近まで見に行った。すると息子は見えなかったので息子が流されたと確信した。

そうしていると、山本工務店にみんなと一緒に居たことがわかり安心した。この筋を通る方々は全員三田小学校の体育館に来られた。この道が崩れたことによって自家用車が3台流された。人は大丈夫だった。車の一番上流に光南小学校の校長先生がおられた。校長先生に車が道路の側溝にはまっていたので流されなかつ

たが、ほかの3台は流されたそうです。JRは不通、道路も通行止めということで、三田小学校の体育館には160名ぐらいの人がいた。地元の人もいたけど、通りがかりに人がもの凄く居た。一番遠くの人は姫路の人がいた。山陽道が通れなくなったので、これを通り中国道へ迂回していた途中だったそうですが、ここで見動きがでなくなってしまったそうです。その人は2日ぐらいおられました。車を引っ張ってもらう手配をして帰っていかれました。その車は水に浸かって動かなくなった。道路の傍の水路に片輪脱輪したものやガードレールに引っかかったものや14、15台が道路を塞いでしまったので動かなくなった。下の方は、道路が通れないということで、三田の「ショージ」と言うショッピングセンターの駐車場やコンビニの駐車場は車が満杯になった状態になりました。

上流の中央橋は古いので、崩れるかと思ったが大丈夫であったので、現在は小学生が利用しているが、下の竜王橋は新しいので大丈夫であった。うちの家内は下の竜王橋を渡って体育館へ避難してきた。

うちは、裏から水が入って来ると川が溢れて玄関から来るのとどうにもならんようになった。ここで1mぐらいになった。だから隣に避難しようとしても流れがひどく身動きが取れなかった。上流の歩道にある転落防止が1m 50cmぐらいあるが一番上までゴミが引っかかっているのです、そのぐらいの水位があったも

のが、家に來たのでもの凄い物であったと想像できる。

上は三日市の所に1軒流されている。それは橋に物が引っかかって橋の水が両サイドに流れた。左側の家が低かったこともあり、母屋が流され、昔使っていた納屋が残った。そこで鯉を飼っておられたそうだが、数千万円の鯉が流されたそうです。かなりの設備をして鯉を飼っておられたそうです。上流の両サイドがぐちゃぐちゃになっている。

昭和47年豪雨の際、その時も同じような被害が出た。あの時もみるみる水が上がり同じようになった。今回流された家は、平成の初めに建て替えていて、当時は木造の家であった。ここ10数年前護岸を張り出した。今回の水量はけた外れの水量なので仕方ないと思う。

これまで、小学校のグラウンドに1m 50cm上がることはこれまでなかった。グラウンドが小さくなってしまったので子供はかわいそうと思う。小学校は地盤を上げた方がいいと思うが、昔増田市会議員が広げるので立ち退きして欲しいと活動した時期があったが、先生が死んだのでだめになった。

今回の災害で国が、被害のあった所は川幅を広げて作れというお触れが出てしていると聞いた。災害が発生した所は、予算を組むので全部買収して、川を広げると言っている。ここはこれまで3回家に水が入った。

ここより一番上の家は水害が発生するたびに1階が流されている。

今回で1階は倉庫にするそうです。2階で住むそうです。川を広げてもらえれば一番いいのだが。

今回の災害は、志和町が沢山雨が降ったと思う。東と西と両方から集まるから。堰がまともなところは無い。関川からこっちは雨量計がない。関川からこっちに雨量計を設置してほしい。狩留家まで1級河川であるが、あれからこっちは県管理。現在では、運動場を見て「あとどのくらいで危なくなる」という判断をしている。

思うのに、小学校のそばにあった大きな桜が3本流されている。あれが鉄橋を壊したんじゃないかと思う。上にも1本大きな雑木が流されている。47年豪雨の時に半分流れたので、当時半分直した。今回は47年に流れなかった側が流された。古い方が流れた。昭和22〜23年ごろ全部落ちたそうです。それはルース台風だと聞いたことがある。

白木町三田

佐々木 繁成

題目「7月の豪雨災害にあつて」

7月6日夕方から、いつもより雨の足音が大きく、これは家が浸水するだろうと予感しました。86歳の祖母がおりますので避難しようと思い、隣家（鉄骨造の家）が丈夫な家なの2Fへ避

難させてもらいました。

自宅は、2005年に床上30cmの経験があるため、消防団のポンプ車がきてくれ、側溝の排水を始めましたが、30分もしないうちに水位がどんどんあがり、ポンプ車も浸水の危険がでてきたので、「これでは排水が間に合わないし、ポンプ車も動けなくなるので撤収して」と、お願いしポンプ車を撤収してもらいました。

また、旧道を向原方面へ行くこうする車もありましたが、彼らにも「危ないのでこれ以上は進めない」と伝え、引き返してもらいました。自分の車も以前床上浸水した経験から、少し高い場所に移動していましたが、それも深夜12時すぎから、水位が上がリ、翌朝見たときは全損状態で買い替えることになりました。

隣家の2Fから三田小学校方面を見ていたら、小学校へ行く橋の上を水が超えはじめ、これはいままでも経験したことのない洪水と感じました。

小学校グラウンドの側にあった家が見えなくなり、流された。と気づきました。まさか家が流されるとは、全くの想定外です。しかし昨今の気象状況を考えると「想定外ということはない。何があってもおかしくない」と思うようにしなければと思っています。時間雨量30mmでも大雨なのに、時間雨量100mm降ります。今までなかった気象状況が続いて、すでに亜熱帯気候なのでしょう。だれしも自分の家が水害で流されることは考えたくないと思いますし、そうなってほしくないと思っています。しかし現在はずべ

て「想定外の降雨、想定外の気温」なのです。

一夜明け、我が家は床上1・5mの浸水、何から手をつけていか？わからず茫然としました。しかし多くのボランティアの方、親戚、友人の方々の協力により、泥にまみれた家具、家の中の泥出しをしていただきました。大方の泥だしがおわるまで約10日間かかったと思います。なれない泥だし作業で体中が痛く、夜眠れなくなりました。

しかし、この経験から人としてどうあるべきか、また自分はどうなのか？を考えさせられました。私の家の前をたまたま通りがかった人が泥出しに協力してくださり。また同じように家の前を通った人でも知らん顔。見ず知らずの人が、通りすがりで協力してくださったり、差し入れを下さったり、人の暖かさも感じることもできました。

消防団員として4年前の八木、可部地区の救助応援に参加しました。三田地区も八木地区と同じく三篠川をはさんで急傾斜地となっており、いつ同じような土砂災害が起こってもおかしくありません。とりあえず 生きているだけ幸せを感じています。

家のほうは、改築の予定ですが業者さんの手も足りず、まだ手付かずの状態です。

改修に約3カ月かかるとしています。構成もなにも考えず書きましたので、参考になるかどうかわかりませんが「自分の身は自分で守る」しかないと思います。



元安佐北消防団三田分団員
佐々木 繁成

①⑥【広島市安佐北区狩留家】

狩留家

横田 邦子

題目「多くのご支援に感謝、ありがとうございました。」

我が家は、旧県道広島→向原線をはさんで西側に三篠川、家の屋敷に添って北側に鳴川が、三篠川に合流しています。三篠川が増水すると鳴川に逆流し、小さな谷川が氾濫しかねないのです。過去にも三篠川河川改修がなされる前に大変な浸水があったと聞かされています。

7月6日降り続く雨は、先の8月20日豪雨の時に似ていて、今度はここでも起こるかもしれないという不安を感じていました。

この日は、出かける予定でしたが、昼まで様子を見ることにし、テレビを気にしながら万一に備えて避難の準備、家の大切なものを川から一番遠い安全と思う場所へできるだけ動かし始めました。お昼には雨も強くなりだしたので、鳴川に土のうを積みました。

（数年前、台風で鳴川があふれそうになった時、消防署に土のうを要請したら、「それどころではないので安全なところに避難して下さい。」と断られたので、その後すぐに土のうを作って常時そばに置いています。）

一向に雨の様子は変わらず、鳴川には石が流れる音も次第に多くなり、水も濁ってきて、上流で崩れているのでは？と不安は増

すばかりでしたが、三篠川の水位はまだ大丈夫なようでしたので、おむすびを作ったり、水を汲み置きしたりしてリュックにも持ち出し用の準備をしておりました。

5時ごろ、鳴川の濁流が急に増え、危険を感じ親戚の家へ避難のお願いをしに行き、5分後くらいには、もう我が家への小さな橋を超えてものすごい勢いで濁流が入ってきました。足が震えました。急いで長靴を履き安全な親戚へ避難しましたが、当分の間は家の中へは入らず、我が家の状態を離れて見ておりました。（しばらくすると予想すらしなかった駅の方面から大量の水が低い田や畑・屋敷に滝のように流れ込んでくるようになり1晩中、朝になっても止まりません。

明るくなつて分かったことですが、鳴川の上流が崩れて、大量の土石が芸備線の線路に阻まれ山のように積まれ、水が流れを変えて予想もしえなかった線路から駅へ向かったのです。全く予想外の状況で防ぎようもない広範囲からの濁流になすすべはありませんでした。

親戚には近所の方々も避難してこられ、心強く感じました。幸いにも命があつて、床上浸水に止まり、家が崩れなかったことを感謝することでした。

あの巨岩や大量の土砂が、ともに鳴川に流れ込んでいたら三篠川の土手も崩れ、町内はもっと恐ろしい状況が起きてたことでしょう。鳴川は石で埋め尽くされ半分の深さになってしまいまし

た。その後はすぐに町内会長様、社会福祉協議会を中心に議員の先生方も一緒に、まだ道路に水がいっぱいある中、視察に来て下さり、「2次災害が起らないよう行政とJRと協力して対処します。」と言って下さり、大きな安心を頂きました。その後、各方面の皆様のご尽力により、たちまちにボランティアセンターも立ち上がり、民生委員様をはじめ近隣の多くの方々、ボランティアの方々には本当に助けていただき感謝するばかりです。心よりお礼申し上げます。

この地球に住まわせていただいている以上、自然には全く逆らえないこと。近年の状況を見ると、「今後は何が起こるかかわからない。」という心構えで生活すること。自分でできることは、普段から心掛け「少欲知足」で余計なもの持たず、シンプルに暮らすことなど多くの反省と共に思い知らされたことでした。

浸水の後始末は、心身ともに想像を超えた苦労があります。周りの多くの皆様には言い尽くせない程の支援を頂き、感謝しかありません。本当に心からお礼申し上げます。ありがとうございます。



我が家全景（家の向こうが（三篠川） 鳴川
駅駐車場から我が家を望む



我が家から狩留家駅方面を撮影



ちびっこ広場

狩留家町

地区社会福祉協議会 会長

黒川 章 男

題目「狩留家・ボランティアセンターを終えて」

平成30年7月6日の西日本大豪雨の後処理の為、狩留家ボランティアセンターを7月8日に立ち上げました。

狩留家は広島市安佐北区狩小川小学校区（江戸時代の狩留家村・小河原村・上深川村の三つの村を合併して出来た明治時代の狩小川村の小学校区）の中の一つの旧村が現在の狩留家町です。

現在の狩留家町は世帯数420軒、人口1250人、高齢化率36%の広島に一番近い本物の田舎です。

狩留家は自然と史跡は豊かな町ですが、生活に必要な環境は、スーパードもCVSもない、言わずもがな寝泊まりできる福祉施設もない、ないない何もない狩留家です。その小さな集落の内の山間部の中心部を流れる湯坂川が大氾濫したのです。

その小さな町にボランティアセンターを開設するには常時センター管理員や、オペレーション管理担当も必要です。ニーズの把握とボランティアの募集体制や受け入れ態勢を整える必要があります。

しかし、センター長を引き受けようとする私達夫婦は後期高齢者に分類される年齢です。私たちは4年前の安佐北区社協が開設した安佐北区ボランティアセンターの時、支援に入ろうとすると、

あなたたち夫婦は高齢なので現場に入らないで集計業務等裏方支援をしてくださいと言われ、そうさせていただきました。従って現場の体験も全体の組み立ても全く分かっていませんでした。

しかし、過疎、高齢者の町に、ボランティアが必要といっても地域内のボランティアは極僅かであり、おられても大半の方々は自分の家屋や農地、庭の被災の後処理に追われています。

だからこそ、狩留家にボランティアセンターを立ち上げて外部ボランティアさんを狩留家に導入することが必要と判断し8日に開設しました。

小学校区単位でボランティアセンターを開設したらという意見が区等にはあったようですが平素の社協活動も狩留家地区社協として活動しているので小学校区単位では、いざという時にコミュニケーションも協力体制もとりにくいと思いました。

田舎の小学校区は広域な地域ですからボランティアセンターを小学校に創っても情報は入り難いし、被災場所への移動も車での移動しかなくその上県道はあちこちが決壊し車は動かない状態でもありました。

地区のボランティアセンターが地域密着のセンターの役割をしないで地域総括センターになり、狩留家にはそのサテライト的なセンターの設置が必要になると思い、狩留家独自で狩留家ボランティアセンターを設けることにしました。

しかし、初めての事で何をどうすればよいか分からず、右往左

往しながら集会所の老人の部屋（8畳の間）でボランティアセンター事務局を開設しました。何をどうすればよいか分からないが、4年前の作業の流れや管理書類の情報を安佐北区社協から送ってもらい形式書類はアウトプット出来ました。

翌日9日の朝、立ち上げようとして準備中の狩留家・ボランティアセンターに2人の若者がボランティアグッズ持参で現れました。ボランティア助成物資を大量に荷降ろししてくれました。帰り際に「一番困っていることは何か」と聞かれ、何をどうすればいいのか途方に暮れている。「人材が欲しい」というと二人の若者は即座に、「私たちが応援しよう」と即断即決――！

その後からは、来られた若者達二人の采配とネットワークで、数多くの情報と物資がどんどん届きました。そのお二人は各々防災士でした。このお二人は、以前から防災の関係でお世話になっていた柳迫さんがお二人に狩留家を応援するようとのアドバイスをして狩留家に派遣頂いた結果、狩留家の応援隊として来て頂くれたのでした。

私達狩留家ジンは、地区情報を提供し若者が定めてくれた全体の流れに沿って分業しながら、見守るだけでした。

素晴らしい二人のリードで、狩留家集会所をフルに使った狩留家ボランティアセンターが運営出来ました。

又一段落したところで周辺にあるボランティアセンターが防災グッズが足りないところへのグッズ配送中継基地の役割も果たし

ました。

若いママさんボランティアのために、現役の保母さんや、OB保母さんによる「お子様預かりボランティアセンター」としても機能しました。

〈ボランティアセンターを運営して感じたこと〉

①ボランティアを要望しているニーズ案件がどれだけあるのか？センターとして正確な把握が不十分であった。各町内会でニーズを把握したものがセンターに連絡され切れていなかった。

②センターと各町内会（狩留家は4つの町内会で構成されている）との連携が不十分であった。

③ニーズの規模とタイミニングとボランティア供給のデータ化↓「見える化」が必要であった。

例えば、現在持っている「ニーズの見える化」、着手状況の「見える化」、ニーズの在庫量の「見える化」とボランティア供給量予測の「見える化」が出来て総体が一覧として「見える化」が出来ておれば管理者も担当者も今何をなすべきかが判断しやすかったと思います。

狩留家という小さな地域を再区分して町内会別・ニーズの種類別・規模等の「見える化」の表を張り出し、終了・継続中・未完案件等が一目で誰でもが見え、分かるような一覧表にまとめ

て張り出せばよかったと終了後に思いました。

④ボランティア募集はSNS情報と、安佐北区ボランティアセンターの情報でボランティアの量が規定されるので私達地元人にもSNSのスキルをアップさせる必要性を痛感しました。

⑤立上げ当初、近隣地区の口田・落合地区等からのボランティアの大量応援があり大変助かりました。又安佐南区の方々も多く応援に来て頂きました。又、千葉県、東京、関西、九州等の遠隔地からのボランティアの方々もおられました。改めて狩留家は、近隣地域の応援を得ながら存立しているありがたさを、そうして日本中のボランティアの皆さんに助けられながら存在している狩留家を実感しました。本当にありがとうございました。

⑥ボランティアに参加された方々のスピリットは、「こんな災害が発生した時は、ボランティアに参加することは国民の義務である」「過酷な条件下でのボランティア労働は普段の自分の平かな生活への「みそぎ」でもある」と感じておられるようにさえ感じました。多くのボランティアさん達が、猛暑の過酷な活動を終えてセンターに帰って来られた時の「おれはやってきたぞ!」というすがすがしい自己達成感に浸られた満足感に満ちた、表情を幾度となく心地よく拝見させていただきました。そして多くのボランティアさんがお帰りの時、「本日はありがとうございました」と頭を下げて挨拶されてお帰りになりました。その姿に何度か目頭を熱くしたものです。皆さん本当にありが

とうございました。

⑦狩留家の中学生が10人位ボランティアに参加してくれました。中には一人で10日間位参加してくれた女子中学生もいました。狩留家の中学生万歳です。今後の狩留家に大きな光明を見つめることが出来ました。この様な若者が参加してくれることは、未来の狩留家は盤石です。

お世話になった防災士の方々、近隣地区の社協の皆様、遠隔地から又近隣から駆け付けていただいたボランティアの皆様、安佐北区社協ボランティアの皆様有難うございました。最後に地元でボランティアに掛け参じて活躍して頂いた皆さんに感謝申し上げます。福祉の心!ボランティアの心!は何と美しいものか、神々しさすら感じました。

〈ボランティアセンターを運営しての反省点〉

①被災当初に徹底した被災状況の組織的な把握をしなかったので、ぼつぼつのニーズの発掘となり対応が若干遅れたところがありました。

②各町内会は4町内会各単独で町内会長や民生委員中心にボランティア活動や地域復興活動を実施してきました。地域ごとにきめ細かい活動が出来たのだと思います。

③反面地域単位での取組では難しい大規模なニーズへの対応はボ

ランティア供給が困難と判断され地域からの情報が上がって来ず、情報が遅くなってセンターに届きました。その為、遅れてから取り組んだ例が数件ありました。

その理由は、一つには被災者側でこんな膨大な量の作業をボランティアにお願いできないと遠慮があったこと。二つ目にはこんなに大量のボランティアさんが来てくれるはずがないとのあきらめ、ニーズの依頼をされなかったことにもよります。そして、町内会側でもこんなに多くのボランティアさんが来てくれるわけがないとの判断も働いていたように感じました。狩留家ボランティアセンターと町内会の連携プレーが不十分であったことが組織的な反省です。狩留家はボランティアさんにご支援いただいた経験が一度もなかったのです。

狩留家のように過疎で小さな集落で、周辺地区と離れている所は、規模は小さくても単独ボランティアセンターを開設する方がきめ細かいフォロー体制ができたと感じました。

ボランティアセンターの立ち上げは急遽の事なので、当初は上手くは運営出来にくいと思いますが、今回の様に安佐北区社協が安佐北区の総合ボランティアセンターとしてリードして頂き、狩留家地区社協は地区センターとして連携を取り合えたことが成功の鍵であったと安佐北区社協に感謝しています。

尚、9月に入り、地区センターも一段落したところに、安佐北区

ボランティアセンターとして、各地域に新たなニーズの取り残しがないか、見落としがないか、ボランティアを派遣した結果の調査を各家庭を巡回して再チェックをして頂いたことは感謝に堪えません。

本来このようなことは地区社協にご指示いただいて、又は各地区社協が自主的にフォローアップすれば良かったのではないかと思います。しかし、若しこのような指示が出た場合、私たちにいったんボランティアセンターを閉じてから、再度のフォローアップの実施をする気力・体力が残っていたでしょうか。

区社協や地域包括支援センターの若い皆さんの活動に甘えさせていただき、狩留家地区は最期まで区社協や地域包括支援センターのお世話になりました。

安佐北区のボランティアセンター全体のボランティアスピリット万歳！です。



湯坂川が氾濫
道も崖も家の床下も流出



鳴川の土石流で芸備線を遮断・水は駅構内や民家の床下へ／ボランティアによる緊急除斥作業



集会所入口も水没

⑰【広島市安佐北区深川】

深川四丁目

ペンネーム…俄か班長

題目「逃げる！逃げる！生き延びろ！」

一昨年話題になったテレビドラマ「逃げるは恥だが役に立つ」は楽しく観賞しました。本年は、全国で台風と地震の被害が大きく「逃げる！ 逃げる！ 生き延びろ！」が話題になりそうです。

防災の講演会や訓練で「自助・共助・公助」を学んでいましたが、今回の突然の水害を体験し「自助・共助」の大切さ、「公助」の有難さを知りました。

今回の水害では、広島県と岡山県で多くの方が命を失われ、家を失われ、家財を失われました。私たちの自治班でも、家を破壊され、家財を失い、長年住み慣れた地を離れられた方（10戸中4戸 21人中7人が転居）がおられます。

幸いなことに人的被害は皆無でした。

2010年の水害被災の後、広島市防災士ネットワークの柳迫さまのご助言で、私たちの自治会と班に、水害に遭遇した時の避難対策が立案されました。その案に沿って、避難訓練も実施されました。（当時の貸料は今回の土石流が一切を水に流してくれま

したので、より実態に会った対策につくり直す予定です。）

今回の水害では、自治会からも、班内でも、情報伝達は全く機能しませんでした。が、避難の面では「テンデニコ」の精神が発揮され、全員が無事でした。

避難する時は両隣へ声かけをし、玄関に黄色のタスキを掲げ、安全な経路を選び「逃げる！逃げる！生き延びろ！」と、話し合っていたのですが、声かけと黄色のタスキ掛けを実行されない方がありました。前回同様「どこへ行ったんじゃろ！？」でした。（黄色のタスキは、本自治会の幸せのシンボルです。）

福祉協議会様の動きが素早く、ボランティアセンターの立ち上げ、ボランティアの募集と配置など援助活動が素晴らしく、被災者は「感謝！感謝！」です。

炎天下、手弁当で、土砂のかき出し、被災家具類の搬出、重い土袋の搬出などお助けくださったボランティア様、ありがとうございます。

山間部では「限界集落」が話題になっていますが、我が班は自治会内での「限界自治班」になりました。班長様が転出され、俄かに班長を仰せつかりました。

班員の動静、班内の連絡、被災住宅の片付けをこなし、日々走りまわっていましたが、最大の難問がこの「豪雨災害体験談」で



位置	避難	被害状況
A	縁故避難	流水を含む土石流が直撃 床上浸水 半壊 被災者住宅へ転居
B	Dへ避難	土石流が直撃 床上浸水 半壊 修繕して継続して生活
C	自宅	住居への被害なし 継続して生活
D	自宅	住居への被害なし 自宅前の畑へ土砂が流入 継続して生活
E	縁故避難	土砂流が流入 床上浸水 自宅前の畑に土砂が流入 継続して生活
F	縁故避難	土石流が直撃 床上浸水 浸水高が高く修繕しにくい 転居
G	自宅垂直	土砂流が流入 床下浸水 継続して生活
H	自宅垂直	土砂流が流入 床上浸水 転居
I	避難	土砂流が流入 床上浸水 転居
J	自宅垂直	多くの礫を含む土石流が直撃 半壊 床上浸水 修繕して継続生活

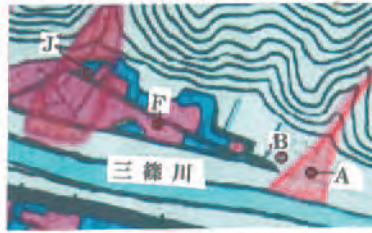
す。私的に作文のボランティアを募集したのですが「共助」の声はまったくありませんでした。

「防災士ネットワークの皆さん おしゃべりは得意も、作文なんて、他所の世界の事と思っている70歳の高齢者には、水害以上の災難ですよ!？」



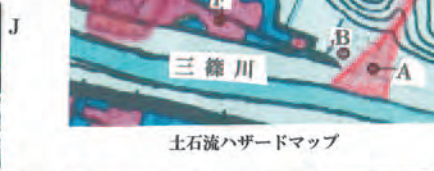
広島市安佐北区深川四丁目被災

Fは三篠川の水位の上昇により床上浸水しました。Jは青線西の土石流の直撃を受けました。マップの示すとおりでした。



土石流ハザードマップ

A・Bは三篠川の濁流と青線東の土石流の直撃を受けました。マップの示すとおりの被害を受けました。



題目「集中豪雨時に自宅不在の時」

深川五丁目
ペンネーム…イル

平成30年7月6日、午後、雨が降る中、私は広島市中区の病院に車で向かっていました。

診察後、薬を頂き帰る途中、携帯から災害情報らしき音がしたので、確認せず運転していました。

続いて、電話が次々に入るので赤信号にして止まり受けたら、妹から「今、どこにいるの?」「本川町よ!」「深川は浸水してるみたいだから、帰宅したら危ないよ!」との事。

続いて、娘からの電話で、同じことを言われ、中区にて1泊しました。

夜には、友人がメール等で私の居場所の確認やら、深川の浸水状況を知らせてくれ、私が安全な場所にいることに安堵してくれました。

家を出るときに、近所の人に声掛けをしたり、すぐ連絡が取れる友人を持つことは大切だと痛感しました。現場にいないと何もわからず不安ですから。

翌日は、道路が通行できない箇所が多々あると、又友人よりメールがあり、もう1泊 中区にて過ごしました。友人たちが私の家の様子を見に行ってくれ、「床下浸水くらいだろう」と電話してくれました。

8日に帰宅したら、車庫に土砂が入り、入庫できませんでした。前の家は床上70cmで、畳や家電品が道路に出してありました。近所も同じ状況でした。我が家は道路より1・2m地上げしてあるので一部浸水で、家で何とか生活できる状態で助かりました。今回、私が思ったことは一人暮らしの方は、特に外出時には隣人や友人に行き先を言うておく。連絡の取れる友人を持つこと。早めの避難を決行することに尽きることを知ってほしいです。

川五丁目

ペンネーム…Y・T

題目「罹災」

広島では、八木の土砂災害があったものの、自然災害は何となく自分には無縁と置いていたように思います。

この度、床上浸水の被害に遭い、自然の脅威を目の迫りしました。酷暑や台風、日本各地でのゲリラ豪雨、自然のチカラには逆らえず、100%安全な場所は無いのだと痛感した次第です。

西日本豪雨が発生した日は、娘が通う高校から昼から帰宅させるとの内容のメールが届きましたが、その時点で芸備線はすでに運転見合わせの為、バスで帰宅。帰宅後は睡眠を取っていました。

夕方になり、ふと外を見ると家の前の奥迫川の水が溢れそうな状態になっていて、大変驚き、急いで娘をたたき起こしました。八木の災害の時にも同じ水位になりましたが、雨はまだまだ降り続いていて、やむ気配もなく氾濫するかもしれないと思いました。主人は県外へ出張中。高速道路が通行止めとなり、今日は帰宅できないとの連絡があり、娘と2人で、この状態をやりすごさないといけないと思いながら、どう行動しようか考えがまとまらずにいました。

奥迫川の状況を知って、15分後、道路が冠水し始めたので車を近くの公民館に移動させることにしました。

公民館からの帰りに、土手に上がり三篠川の様子を見ると、水位がかなり上昇していたのを見て娘が「小学校へ避難しよう」と言いはじめ、避難準備を始めました。三篠川が氾濫したら命が危険にさらされるとは感じましたが、「2階にいたら大丈夫ではないか？」との思いもあり私は避難することに対して消極的でした。

18時過ぎには、水位が上がり、18時30分には家の駐車場が完全に水没した状況を確認。この流れだと床上浸水になる感じがした

ので、この時点で避難することを決めて避難準備を開始しました。

19時10分に家を出ましたが、辺りは薄暗くなっていました。その頃には玄関にまで水位が上昇し、室内の浸水も時間の問題でした。道路がすでに冠水していて車も通行止めになっていたようです。小学校までは股の辺りまで泥水に浸かりながら、ゆっくり徒歩で避難しました。避難した深川小学校も冠水。

翌朝には、早めに水が引いたので10時過ぎに帰宅。

1階は完全に浸水してしまっていました。

仮に避難せずに自宅にいたとしてもトイレは使えなかったと思います。

私の家は娘の判断で避難したことが結果的に良かったと思わざるを得ません。

今後の課題としては、防災意識を持ち続けることの難しさか！と思います。

喉元過ぎればのように、平穏な日常が戻ってくると

もうこんな大変な経験はしないのではないかと・・・と根拠のない思いも浮かんできます。

自然災害大国の日本列島

1人1人の意識改革は、如何なるものでしょう。



7月7日 室内の状況



冷蔵庫の野菜室



9：56 高陽公民館へ移動させた車、水没



7月10日 自宅外壁



7月6日 深川小学校前の道路



7月6日 自宅駐車場

18：06 自宅駐車場





深川小学校前



7月7日水没した自宅本棚



10：02 深川小学校からの帰り道



深川小学校の給食室辺り



深川小学校前



深川小学校給食室



深川小学校校庭



深川小学校の1階フロア



アクロスプラザと浸水しているＪＲ芸備線

川内六丁目

深川保育園 園長

寺 藤 純 子

題目「7月の豪雨災害を振り返って」

7月6日、私は、勤務先である保育園にいました。

午前中は七夕まつりの行事で楽しく過ごしました。

午後1時前に「避難準備・高齢者等避難開始」情報が発令され、保護者にお迎えのお願いのメールを送信したりしました。この時には、こんな大変なことになるとは思っていませんでした。

17:45には園児全員保護者に引き渡すことができましたが、職員3名は、退勤後渋滞のため帰宅困難となり小学校へと避難しました。7日（土）午前中は、小学校から保育園に行くことはできず、午後 橋が渡れるようになってから、保育園に入り点検をし、園庭まで水が上がっていた様子を確認しました。三篠川の氾濫だけでなく保育園の前後ろにある小さな水路の氾濫の凄さも感じました。

7日（土）、9日（月）は、避難情報や断水のため園児は自宅待機となりましたが、10日（火）には、断水の中で、お弁当対応の開園となりました。開園しても、園児の家庭も断水しているの、汗をかかないように、洗濯物が出ないような保育の工夫をしたり、特に この夏は、暑さが厳しかったので衛生面には特に留意して過ごしました。給水車に水を取りに行ったり、トイレや手

洗いの水の管理など、いつもの保育とは別の業務が加わり大変でしたが、職員が協力し合い保育をすすめました。

県道の通行止めによる迂回路が保育園前の道路となり、道幅の狭いところに大型車が通行したり交通量が増え、登降園時の安全に気をつけたり、舞い上がる砂ほこりにも気を配ったりしました。断水のため給食が作れませんでした、栽培物を利用しておやつに添えたり工夫をして子どもたちが楽しく食事できるように配慮しました。近隣にも、職員が交代でできる範囲内での手伝いに出ました。

17日（火）から断水が復旧し、「水が白いのには大丈夫？」という保護者の声に、水道局の「大丈夫」という話を伝え、19日（木）より給食を再開しました。

本当にいろいろなことがありましたが、いろいろな関係機関との連携の大切さやありがたさを感じました。園児や職員の中には、被災をした家庭もありましたが、今 みんな元気で登園していることをとてもうれしく思っています。

それ以後も、台風や大きな地震が次々に起きています。今後もあるようなことが起きるかわからないので、今回の災害での気づき等を、今後の災害対応に活かせるようにと、マニュアル等の見直しを行い、子どもたちの大切な命が守れるようにと思っています。

深川五丁目

深川小学校 校長

原 義 喜

題目「感謝の思い」

7月6日（金）に突然襲ってきた水害。

深川小学校は、屋外周りでは約120～130cm、室内で約80～90m位の高さまで約12時間浸水しました。その水が一気に引いた後は、敷地内にはいろいろな物が流れ込んでおり、日常が一変した有様でした。

避難所としての役目を終えた7月7日（土）の昼前頃から、復旧作業の第一歩となりました。保護者・地域の方・卒業生・本校児童等々、多くのボランティアに駆けつけていただき、猛暑のもと、また、電気や水のない中で、復旧作業は大変困難さを極めました。私達職員にとって、大変心強く、大きな勇気をいただきました。それからの学校再開に向けての復旧作業に立ち向かうことができたのも、ボランティアの皆様方の温かいお力添えがあったからと感謝しています。

それから連日の猛暑の中、多くのボランティアの皆様方が復旧作業にあたってくださいました。一日も早い学校再開への思いで一生懸命に取り組んでいただき、想像以上のスピードで復旧が進みました。しかしながら、施設面での痛み、被害の状況があまりにも甚大で児童の安全面が確保できず、夏季休業開始を7月

17日（火）からの前倒しにすることに決定しました。それからは専門業者様による作業が中心となり、ようやく8月20日（月）の学校再開にこぎつけることができました。

また、深川地区は小学校を中心に甚大な被害があり、復旧作業に少しでもお役に立てればとの思いで、体育館をボランティアセンターとして使用していただきました。

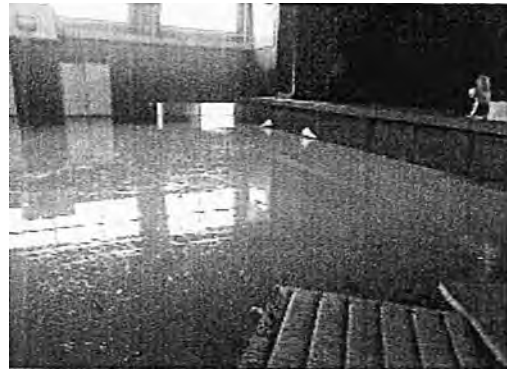
体育館の改修工事が進まず、十分に満足した状況でのボランティアセンター開設ではなかったかとは思いますが、地域の皆様から「助かった。」と言っていたいて、大変うれしく思いました。

今回の被害は児童教室、放送室、特別教室、事務室、保健室、校長室、給食室、体育館、運動場、学年園等、かなり広範囲にわたるものでした。学校再開に向けて復旧作業にご尽力いただいた全ての皆様方のお力添えがあったからこそ、学校生活の営みがあることを決して忘れず、今後も皆様方のご期待に応えられるよう一層努力して参る所存です。

皆様方の温かいご支援に心より感謝申し上げます。



深川小学校



体育館内

題目「豪雨被害に思う」

7月6日昼過ぎから雨足も激しく降り続き、三篠川に近い場所に住んでいる関係で常に水流量について気を配っていたが、危険水域に達していた。避難勧告も発令され、急いで家に帰った。

近くの奥迫川水門から逆流して、我が家が床上浸水になることは想像しなかったが、そんな状況の中、少しでも早くと思い、非常持出し物、又食料等の心配から近くのスーパーに買い出しに車

深川五丁目

荒川 忠臣

で出たが、2300m進んだ所は、すでに車のタイヤまで水があり、引き返し別の店に行き、買い物を済ませたが、帰宅できなくて、倉掛団地に避難することにした。

我が家を出かける際に、近所に「できるだけ早く避難所へ行くよう」声を掛けたが、その避難場所の小学校も床上浸水が早かった。広報も悪く、情報が少ないため、現状の把握に困った。いかに地域の自主防災組織活動が大切かを痛切に感じた。

各地の水門で防水設備にも限度がある。とは思いますが、日頃の点検作業や操作訓練活動が大切な事は言うまでの事ではなく、思えば各々少し遅れていたのではないかと感じています。

当然、各々で設備は必要な事、それらを的確に活用できるように各々の地域で、身近な情報の連絡を密にして、共有することで、少しでも早く行動に移らなくてはならない。と思います。

豪雨災害の翌日から、毎日夏の暑さをこれ程感じ、又床下を乾燥させるためには非常に助かった。

現在は、床板を貼り、畳も入れて、ゆっくり横にできる状態になり、リフォームも終わりに近づいてきて何よりと思っています。がまだまだ各々に後始末に明け暮れている家を見ると、少しでもお手伝いができればと思っています。

彼岸花も咲いて、秋野菜も植え付けの時期が来ているが、我が家では畑に泥土が堆積したままになっている。1日も早く種まきのできるようにしたいが、1人や2人では除去できないで困って

いる。

後始末には、体力の限界を感じる日々が続き、近くの病院にも大変お世話になりましたが、しかし、此の間色々と皆様のお心遣い・ご支援を頂き、何かにつけて心強く先を見る先を見ることができるようになってきました。反省しながらできる活動を精進したいと思います。



題目「避難しよう」

ペンネーム…いっぴつ

深川五丁目

この原稿を書くまでは、あれもこれも書こうと思っていましたが、紙に向かうと何を書いたら良いかわからなくなりました。とりあえず平成30年7月6日から、私たちがとった行動を書き出す事にしました。

あの日7月6日は雨だった。主人は昼過ぎから度々近くの川の水位を確認しに出かけていましたが突然夕方、大声で「避難しよう」の言葉から始まりました。(普段の主人は冷静沈着者ですが) 先ず主人がとった行動は、自家用車を近くのスーパー屋上へ移動させに行きました。

その間に私は少量の食品、飲料、貴重品、日用品をリュックサックに詰めました。

いよいよ避難開始。大雨の中、雨具を身にまとい近くの小学校へ出発。

家の外に出てみると、我が家の下流80m位の所の橋桁の下まで泥水が追っていました。

夕方6時頃の学校の避難所3階にはほんの数人しかいませんでした。

夜8時頃には20〜30人位に増えたと思います。(下半身ずぶ濡れでたどり着いた人もいらっしかったです。)

集まった所へ乾パンと飲料（それも児童の野外活動の為に用意されていたものらしい）を配給されました。

学校も避難所に指定されていながら、普段は何も用意されていないんだなあと思いました。（それにしても少ない避難者。他の方は皆、自宅の2階かしら？）

暗い灯りの中、外はどんどん増水し校門の門柱が少ししか見えなくなるまでになりました。

夜、水道、トイレ用の水も止まり7月7日の朝4時頃にはテレビも映らない状態になりました。外の状況がまったく分からなくとも不安でした。校舎は土色の海の中に立っていました。

朝食は昨夜の残り物しかありません。

朝8時頃、水が引き始め消防署の提案で引っ越す事（電源、水、食料が無い為）になり、自宅に帰る人、別の避難所へ移る人に分かれて行動を起しました。私たちは自宅へ帰ることに決めました。帰宅の道中は、ぬかるんだ泥水の中（まるで沼地）に足を取られないように注意しながら歩き、やっと10時頃たどり着きました。自宅は浸水した様子。玄関ドアを開けると、靴は散乱し、床上浸水数cmではあるが、絨毯はジュウジュウたんになり、畳はどてえーっと水を含んでおりました。

屋外の洗濯機はひっくり返りクーラーの室外機、その他、倉庫の中も泥、泥だらけになっていました。

幸い水道、ガス、電気は使えましたが、先を思うと不安でした。

その時から暑い暑い日々の中、自宅の内外、庭、倉庫の片付けが続きました。

疲れながらも必死に動きました。夜、クーラーも使えず死んだ様に眠りました。

泥水に濡れた物は何もかもゴミとなり諦め、捨てるしかありません。畳も絨毯も重たかった。

役所から床下の消毒液を配布されましたが、浸水した場所は晴天続きでも中々乾きませんでした。（乾いた所に散布しないと効果ありません）消毒専門業者も忙しくて未だに来てもらえません

今、現在も近くの空き地には土砂が割チョコの様に残っており風通しの為に窓を開けていると埃が家の中を舞っています。これが続く体調不良になるのではないかと気にかかります。

近辺の公共施設、学校、保育園、出張所、公民館等みんな浸水。昭和40年台の水害を教訓に河川改修工事されてたはずなのに……今回の河川の氾濫は、行政の水門の管理の仕方問題との声もあります。

しっかり検証すべきだと思います。

今回の水害避難で感じた事

◎自分で避難と決めたなら即実行（主人曰く今回は動物的感觉が働いて避難の道を選んだと）

◎最低限の食料、薬、身の回り品を用意する。

今回気づいた物。ソックス（避難所の床は汚れている）

ウェットティッシュ（水が出ないかもしれない）

◎自家用車を高台へ移動させる。（自宅の敷地に残して置いたら水没して使用不可能に陥る。家族複数台のためにした家庭もありました）

行政へのお願い

◎災害ゴミをこまめに地区を回って回収してほしい。（いつまでも残っている所があります。町の美観を損ねる）

◎定期的に避難所に物品が揃っているか確認する必要があると思います。

この原稿を書いている間にも台風、地震のニュースばかり災害列島で、どの様に身を守り生き抜くか個人個人考えなくては

深川五丁目

ペンネーム…タテちゃん

題目「被害の知られていない町」

平成30年7月6日に西日本を襲った集中豪雨で被害に遭った、広島市安佐北区深川4丁目、7丁目地区で約150戸が被害に遭われました。

私は、自治会役員の一人ですが、この日は1日中雨が降り続き、近くには三篠川と用水路が並行する様に流れています。その日は3回ぐらい水位の様子を見に行きました。午後4時ごろには小さな水路から道路に溢れるぐらいに成っていました。

深川小学校が避難場所ですが間に会わないと思い、近くの商業施設の2階に在る自治会集会場を午後5時ごろ開放し近所の方々に声をかけ約20名が避難され、深夜停電の中一夜を過ごしました。7日の朝、景色を見ると三篠川の氾濫は免れましたが、用水路から泥水が約1.5m溢れ、家が浸水しましたが、昼ごろには水は引きました。自宅に帰って見ると家具や家電製品が散乱しているので愕然としました。

施設にある飲食店の方が、夜の炊き出しを作って下さり、一夜を過ごしました、大変有難く思いました。

この地区は、報道ではあまり知られてはおりません。



⑱【広島市安佐北区口田】

口田一丁目

ペンネーム…はまちゃん

題目「7月6日のあの日」

雨は何日か前から降ったり止んだりの梅雨時期の特有な降り方でした。

この地域は、太田川沿いで土地も低く、太田川の水位が高くなると水門が閉まり、山側の水が流れて来るので、ポンプで太田川へ排水する地域ですが、あの日ポンプが間に合わず、家の前の道路に水が上がって来て、猫（ペット）2匹やとりあえず大切な物のみ2階へ持ち上がり、外を見ると階段下の階段（下から3段目）まで水がきたので、携帯持って腰まで濡れながら、近くのある診療まで避難しました。

まもなく、まだ近所の方が家に残っている方がおられたので、119番しましたが繋がりませんでした。

すると、左側から矢口川が決壊し、土砂や泥水がどんどん流れてきて、たまったポンプ側の水と土砂が混ざり、近所の方たちと手を繋ぎ、土砂の流れが少ない所を渡り、高台に避難しました。

娘の家も災害に遭い、口田東小学校で合流し、一晩お世話になりました。本当に怖かったです。

こんなことになるとは思いませんでした。

3日目の朝、やっと自宅に帰ることができましたが、床上80cmで、家の中は大変なことになっていました。





題目「豪雨災害を乗り越えて」

ペンネーム：HIDE・K
口田二丁目

今年7月6日から7日にかけて発生した豪雨災害は、安佐北区のみならず広島県全体いや複数県にまたがり甚大な被害をもたらしました。

今回の豪雨災害で口田学区では、3名の方が亡くなられ、豪雨が過ぎた後も、道路・鉄道といった交通機関等が麻痺するなど、

その影響は図り知れないものとなりました。

数日後、メイン通りは、復旧したものの、旧道側の復旧は進んでいなかったことを知り、微力ながら地元の復旧活動のサポートへ向かった。

旧道沿いにあった仮設テントへ行き、そこで待機されていた10数名のボランティアの方々と共に、現場へ向かうと、旧道沿いの住宅が、何棟も大量の土砂・大木等で崩壊されていたのを目の当たりにした。現場に何台もの重機が撤去作業をしていたが、「この復旧は長期戦になる」と直感した。しかし、そんな状況の中、現場で作業している方々はお互いに声を掛けあい、一方、その地区の方々は、辛いはずなのに笑顔でボランティアの方々のサポートをしてくれ、一丸となって地区の復旧活動に汗を流していた。

今回のボランティア活動は、記録的な猛暑が何日も続いたため、いかに効率的に作業を進めるかがポイントとなった。経験者を班長とした作業の役割分担や積極的に休憩時間を設けること等、私を含めた未経験者は班長の指揮下に入り、一体となった復旧作業に努めた。

また、作業だけでなく、被災された方への心配りも必要だと思う。縁あって、被災された方と、一緒に復旧作業をさせてもらった時、その方から「2階へ避難した際、人が流されるのを目撃したことがトラウマとなった。」「雨が怖い」等、本人としては言いたくないことを私に話してくれた。

私は、その時、その方に言葉を掛けることはできなかったが、言葉よりもその場へ行き、被災者の声に耳を傾けるだけでも、被災者の気持ちが少しでも和らげることができのでは、と思う。

今回の豪雨災害で、私は初めてボランティアとして、復旧作業に携わったけど、その時に大事だと思ったことは、「まず、現場へ行くこと。」「現場へ行ったら、次に自分のできることを見定め、実施すること。」「復旧作業に際しては、経験者を班長として、一丸となり、休憩時間をもうけること」である。

最後に、今回の豪雨災害を含めた災害について、今後の先行き是不透明な状況であります。

私達は、自然の猛威に対しては、無力である。そんな私たち人間が自然災害に対してできる事といえば、災害を予見し、対策を講じることもあるが、何よりも「人と人との繋がり」「いわゆる「絆」」だと思う。今回の災害復興のために集結したボランティアのように、善意で集まった人たちの気持ちに、被災者の悲痛な気持ちは幾分か癒されたことと思うし、逆もまた然りだと思う。いわゆる人は「お互いさま」で、繋がっているということだと思う。

どんなことがあっても、ボランティアの心構えとして、「お互いさま」という気持ちを忘れずにこれからも活動して行きたい。

⑬【広島市安佐北区口田南】

口田南三丁目

菅原展枝

題目「7月7日の朝」

私は、昭和41年3月にこの住所に縁があり、家を建てることができました。

近くには、せせらぎがあり、山が近いので夜は涼しく、バス停は近い5分とかからない非常に便利の良い所で、私の来た頃には農家の方がお米を作っておられ、夏には田んぼのカエルが鳴き、蛭が飛んでいました。とてもいい安らぎの住所でした。

近所で明治生まれの岩坪純一おじいちゃんが、昔60年前「水害があつたんだよ」と話してくださいました。その時はあまり気にはしていませんでした。

平成30年7月7日午前4時ごろ、3日ほど雨が降り続いていたので、心配していました。私はいつも朝3時頃には目が覚めて、ラジオを聞きながら休んでいました。すると今まで聞いたことのない音「ゴー」と地響きのする。まだ外は暗かったので、明るくなるまで待つて、雨が止んだ折、玄関を開けてびっくり、外は泥水で埋っており大変なことになったな。そのうち下のほうを見ると家が傾いたり、流された人のことを思うと胸の奥の方がい tandem 言葉が出ません。



③自宅周囲の被災状況



①自宅周囲の被災状況



④自宅周囲の被災状況



②自宅周囲の被災状況



①小田川の上流部



⑤自宅周囲の被災状況



②小田川の上流部



⑥自宅周囲の被災状況



③小田川の上流部



④小田川の上流部

題目「山がキシキシ」

7月6日昼過ぎ、雨は普通じゃーないくらい降っていましたが、避難は考えていませんでした。そして、夕方6時半ごろ外を見ていたら、山から泥水がバアーと流れてきて、家の裏の駐車場が泥水でいっぱいになりました。

自宅の玄関は駐車場から少し下がるので、ここに泥水がたまり始め、玄関が開きにくくなり始めました。「これは今逃げておかないと、逃げられなくなる。」と、一瞬で判断できるぐらいでした。でも持って逃げるものは、普段使っているカバンと、とっさに携

口田南三丁目
渡辺清子

帯の充電器と娘がいたので、おむつを1・2枚とスリッパを履いて、靴を持って一気に両親の家である「金太郎」に行きました。リュック背負って。その前にお母さんに電話したんですが、お父さんが「こっちに來い」と言われたので、それと同時にお父さんが迎えに來てくれ、玄関のドアを開けることができ、金太郎に避難しました。

金太郎も玄関が浸水し始めていましたが、私達は3階に上がり、外を見ていました。

そのあと、ご飯を食べることにして3階に持って上がり食べた後、停電で真っ暗なので早く寝ようということになり、寝ていましたが、3時半ごろ娘の授乳で起きました。

まだ雨が降り続いていましたが、少し小降りとなっていたので、もしかしたら家に帰れるかなと思って、窓をあけると、やはり帰れる状態ではないと一瞬で判断できる状態で、やめました。

3時半ぐらいに、胸騒ぎがして外を見ると、山がキシキシという音が始めました。今までに聞いたことがない音でした。隣の部屋の母を起こして、「大変よ、なんか変よ。」と話しておりました。変な音がし、そしてちょっとしたら、山が崩れてきて、土砂が流れてきました。その時の状況は、ただただ見るだけで、どうしようもなかったです。この土砂崩れの後、今度はこっちに來たら危ないので、「早く逃げよう、早く逃げよう」と父と母と娘と私はパニック状態でしたが、父が「落ち着け、落ち着け、今動く

ことはかえって危ない、落ち着いて！」と言ったので、そのまま3階に4人が固まっていました。

そのあと、再び土砂崩れが来なかったから、良かったです。

主人は、白木町で仕事でしたので、「白木町が浸水して通れなくなった。」と連絡が入りました。白木のユアーズの駐車場で1夜を明かしまして、翌朝帰ってきました。

主人には「家が流されたよ」と伝えました。

流された後、2階の寝室と仏間だけは何とか中の物を出すことができましたが、いつも娘という1階のリビングや玄関はなくなりました。いつも使用するものがリビングにありましたので、ほとんどのものがなくなりました。

ワンちゃんがいたのですが、避難するときゲージを開放してやったので命が助かりました。翌朝泥んこになって近所の方に助けてもらいました。その後田舎につれて帰ったけど、環境の変化で息絶えてしまいました。

家のものは流され、ほとんどなくなりましたが、残ったのは主人の軽トラだけになってしまいました。

私は、ここに実家があったので、ずいぶん助かりました。2、3日後の大きな台風の際は小学校へ避難しました。

町内会長さんが「避難して下さい。」と呼びかけて回られたので、避難した人が多かった。会長さんは、被災後もよく声をかけてくださいます。



今日まで、泣く暇もなくあわただしい日々を過ごしてきました。
(平成30年11月29日 柳迫 聴き取り)



写真中央付近が、渡辺宅跡

題目「娘の家がスーと流れた。」

7月6日 昼前ごろから、バケツをひっくり返したような激しい雨が降り続いていました。夕方8時ごろ、店の中に水が入ってきたので、これは「変だ!」と思い外に出てみた。すると山から

口田南三丁目

金太郎 店主

登田 精治

郁子

ものすごい勢いで水が出ていて、次第に店の中の水はくるぶしぐらいまでになってきた。その時お客さんは6人おられたが、「これはなんかおかしい」と言って帰られた。それで店を閉めることにして、隣に住んでいる娘と孫を迎えに行きました。後からの話で、娘の旦那は、白木町三田で道路に水が上がり、帰れなくなり一夜を小学校で明かしたそうです。この隣に建っている娘の家も玄関付近にどんどん水が当たり、もう少しで玄関ドアが開かなくなるくらいでした。娘には、「着の身着のままですぐ来い」と言って、8時過ぎぐらいには、孫のおしめも持たず、膝ぐらいの高さになっていた水の中を、孫は私が抱き、私の家まで来ました。娘は何をしていいかわからず、ボーとしていましたので、「3階に上がれ」と言って3階に上げました。私達は3階に上がり、外を見ると県道は、水が増えて車が通れないくらいになっていました。そうしているとお客さんの一人が「道路に水がどんどん流れていて、怖いのでここに置かせてもらえないか。車は流れてもいいので」と言われて来られたので、「いいですよ」と言って、隣の駐車場に置いて矢口に帰られました。「気を付けて帰りんさいよ」と言って別れました。

そんな状態で、「今夜は早く休もう」ということで、私は2階、母さんと娘と孫は3階で休むことになりました。

(7日) 3時過ぎ、私は母さんに「何かおかしい」と言って、たたき起こされ、3階に上がってみると、「ドーン」という音

がしたと思いますが、一機に娘の家に土砂が流れてきて、20mぐらい娘の家が横に滑るように流されていき、県道付近で止まりました。それは依然東北大震災の時、津波で家がそのままの状態で見流されている映像がありましたが、まさにそのような状態で流れていましたが、その後ろに上から流れて来た家がばらばらになって5、6軒が流れて来ました。その間を大きな木や岩と一緒に流れていました。車も何台も流れてきていました。その流された家にいたおばあさんが1人なくなりました。娘の家は、壊れることなく流され、道路の向こうの少し高い所まで流され、1階は潰れてしまいました。それを見ていた娘はパニックになっていました。それから、その水の流れが今度はこっちに来るかもわからんという恐怖に襲われ、母さんが「孫もいるし、土砂がこっちに流れて来たら危ないので、避難しよう」と3時45分ごろ言いでしたが、主人が「まーちょっと待て、外は真っ暗、水も相当流れているので、今出たら私達も流される」と思い引き留めました。そのまま、朝まで3階にいました。

朝になって上を見ると、これまであった家が何にもなくなっていた。あるはずの家がなくなっている。井上外科病院跡のビルに3軒引っかかって、崩れていた。1戸建ての借家が3軒あったが、1軒だけ残って、あとの2件は壊れていた。その中に1人若い男が頭にライトを付けて2階の窓から出てきて、水の中を泳いで、フェンスをよじ登って、隣の家の2階の窓から入り助けられ

ました。この学生は、「助けてくれ」とも言わないし、何をしているのかわからん。こちらでも水で行くこともできない。そういう状態でした。後からその男がきて「おじちゃん見よう」「見よう」「何もせんかったん」と言いうから、「消防に電話したら、消防もパニック状態が判った。私は、まだ人がおるか、どうか、わかんのですぐに来てくれ!」という「すぐに行けるかどうかかわらん」と言い、「わかりました。一応受けました」と言って切られました。そして、昼前レスキュー隊が1列に並んで7、8人来てくれました。そして流された家の下で「おいおい」という声を聞きつけ、「ここに一人いるデー」と言って若者が一人助け出されました。

土石流の起きる前の状況は、(6日)夕方5時頃、消防車が家の前に停車して、山のほうに向かって拡声器で「避難命令が出ました。避難をしてください」といった。これまでは走りながら放送している姿は見ていたが、止まって放送するのは初めて見た。これは普通じゃないと思ったが、言い方が「避難命令が出ました。」と丁寧なゆっくりと放送しているので、「避難命令が出ました。直ちに避難して下さい。」というような言い方にしないとみんな避難しないと思う。崩れるとは誰もわからんが、放送するならもう少し切迫感を持った放送をしてほしいと思った。最近「これまでにない雨」とかを先に言うので、ある程度の情報は知っているが避難はしない。その時のテレビの画面は、これまでは赤と

か白とかを見たことがあるが、紫の色がついていた。紫色を見たのは初めてで「あーゆうことがあるんだなー」と思って見たのを覚えている。そして、夕方、店の前一带にカスミがかかっていた。一带に霧が出るのは珍しいと思った。朝ならわかるが夕方のこの時間に霧が出るのは珍しい。

奥さんは、店から出たり入ったりしていたが、雨はドンドン降っていたがきれいな水であった。こちらはまだお客さんが居るころ、向こうのほうは土のうを積んでいたというのを聞いた。向こうはすでに小川を溢れて道路が川の状態になっていた。

7時過ぎごろから、茶色の水が出だったので、マスターに「茶色の水が出だしたよ」と伝え「これはいけんわー」と言っ、客さんが店に入る水を堰き止めてくれていたが、「これはどうにもならん」ということでお客さんに一旦帰ってもらった。どんどん水が入るので、ちょうど町内の人がおられたので、土のう袋をもらおうと思ったが、「土のう袋は無い」と言われた。

7日の3時半ごろと思うが、娘が「おしめを取りに帰る。」と言いだしたが、私は止めました。

そして、娘が「お母さん、変な音がする」と言った。その声が普通の声でなかったので、お母さんは「なに？」と返事をしたとき、山の土のうにおいがぷーんとしてきて、「ぴちゃぴちゃ」という音が聞こえた。石が流れる音も聞こえた。「これ何？これ何？」と言っていたら、「あれよ、あれよ」という間に家がサー

と流れて行った。上のほうまでは暗いので見えなかったが、街灯の明かりがあったところの状況は見えた。

娘は、避難していなかったら死んでいる。避難は大事だと感じた。空振りでも命が大事なので、避難勧告などが出たら早めに避難したほうがいい。しかし、今回は道路は水がいっぱいで、しかも泥が流れてきている状態だから、足を取られるから避難はできなかったと思う。

早めに避難することは大事と思う。私は、災害後どうなっているかと思い、上に上がってみると、土石流の流れたすぐ隣におばあさんが住んでおられる。そのおばあさんに聞くと「避難されたんですか」と聞くと「私たちはそんな元氣はない。行かないです。どこまでも家と一緒にです」と言われた。私は「それは無いでしょう」と思いましたけど、そんな方はたくさんおられると思いますよ。だから近くに避難所があればいいと思う。口田集会所は低い所にあるでしょう。だから行かないですよ。こちらの方はマンションの避難所へ避難された。集会所は1階にあるけど、危なかったら上に移動すればいい。町内会長のマンションを、開放されたみたいです。

犠牲になられたおばあさんも、隣の方が「おいで」と言っておられたんですが、昔からの人で「大丈夫です」と言われたそうです。半壊でベットに寝たまま土砂に埋まっていたそうです。身を守るためには避難しかないと思う。それに近所の連携が大事と思

う。以前片山さんのお宅で、柳迫さんの防災セミナーをお聞きし、近所の連携が大事と言われましたが、私達も近所で土のう積をしていることを知らされたら、それなりの対処ができたと思う。私達は商売をしている最中で、気が付かなかったけど、あれからは声をかけるようにしている。

提案ですけど、班ごとにスピーカーを付けて、状況を流すとか。雨の状況や山が崩れるかもしれないので注意を促せたらいいと思う。今は、仮のサイレンを付けているがちゃんとしたものを付けて欲しい。

昔から、地域に有線放送というものがあるが、今頃の隣同士の関係は希薄になってるので、避難するときは車に乗りんさいというような関係が必要と思う。

坂でも100年前に同じような災害があったと聞いていますが、ここでも100年前に同じような災害がありました。坂では石碑があります、私たちのところには石碑がありません。今回このようになって初めて知りました。おばあさんは、娘の時代に昔災害があった地域だから、娘のおしめやミルクを持っていくんだよ。と姑さんが言っておられたのを思い出した。私達はこのような商売をしているにもかかわらず、今回災害になって初めて100年前災害があったことを知るんですから、災害の伝承として本に残すことや石碑で残すことは大事だと感じています。

(平成30年11月20日 柳迫 聴き取り)





口田南三丁目

木戸 敏 明

題目「長雨、大雨が降ったら避難しなさいよ」

大正15年だから昭和元年 今から92年前、ここで土砂災害（山津波）が起きたことを親から聞かされていまして、「長雨、大雨が降ったら避難しなさいよ」と言われていました。それが今回、避難した一つの理由です。もう一つは娘と娘婿がいるんですが、それらが「此処は危ないから早く避難しなさいよ。」と日頃から言っていました。特に梅雨明けの大雨が降る時期は毎年言っていました。

私の子供のころは、近くに教蓮寺というお寺さんがありますが、何回もつれて行かれた覚えがあります。濁流の中、両脇を抱えられて逃げたことを覚えています。今回のように大規模な災害にならなかったけど、私の記憶では2回から3回災害が起きたことがあります。この山は、通称松笠山と言って海拔330mぐらいで、緑井の阿武山の半分ですから、大丈夫だろうと思っていたんですが・・・。

親から常に言い聞かせられていたので、何かあれば避難せんといけんかなーとは思っていた。そういう防災意識は常に持っていました。逃げないといけんということは、思っていたが、それを実行に移すことはなかなか難しい。しかも日が長いから7時でもまだ明るい、夜中の暗い時であればできるものではない。しかも

何百m先の小学校へ避難することはできるものではないと思います。テレビが避難勧告とかで避難せーというけど避難できるものではありません。よっぽどの覚悟が要ります。

7月6日、3時か4時頃県道を広報車が何か言いながら通ったのは判りましたが、雨が強いから聞こえませんでした。避難せーということだろうということは理解できましたが、避難するということにはなりません。「死んでもいい、ここに居った方がいい」という考えです。それから、外の様子を見てみると、道そのものが川のようになり、親から言われとったことを思い出して避難することにしたわけです。それから夕方5時ごろ、小田川がいっぱいになって濁流が流れているのを見た私は、「大変なことにならないければいいが？」と心配していました。

だんだん雨が激しくなるので、これは避難しようということになり、身支度をして、娘のところに行こうとしたんですが、もう前の道が濁流とがれきで、車が出せない状態になっていました。それで、裏の本家に逃げようということになりました。2mほど高い所にあります。私はすぐに身支度をして、ボストンバックに着替えや貴重品を入れて、逃げました。逃げるときも腰から下はびしょ濡れでした。裸足で逃げましたが、その時はもう大きな石が道路を流れていました。かろうじて本家までたどり着きました。本家は、今は空き家になっていたんです。

そうしていると、娘から「どうしとる？」という電話があつて、

「今本家の家に逃げとる」というと「そこはまだ危ないので、今から迎えに行くから」と言いました。私は「イヤーしゃーない、行かないといけんかー」という気持ちでいました。「娘は五日市に住んでいます、7時ごろ向こうを出たのですが、その時は雨と渋滞で、普通でしたら40分のところを3時間かかって10時ごろ来てくれました。娘の旦那は五日市で歯医者をしています、ビルに住んでいるので、うちが安心だからしばらくここにいなさい」と言ってくれました。その時は、雨が小やみ状態になっていて、県道を通れる水が一旦少なくなっていました。私は、宮田葬祭のところまでいやいやながら長靴で県道まで出ました。私と妻とでリュックサックをもって避難したわけです。

その後のことは、五日市のビルの中ですから、どのくらい雨が降っても音は入りませんので、ようわかりません。

私が言いたいのは、防災意識は持っていても、避難ということになればなかなか行動に移すことはできないということです。切羽詰まらないと避難できません。

私のお母さんが常に言い聞かせていたから、娘は避難をするよう私に言ってくれたんだと思います。「小田川の一带は危ないから、大雨の時は早く逃げるんよ!」と言っていたんだと思います。娘が五日市から迎えに来てくれたのはどうしてか?よくわからないが、娘婿が運転してきてくれた。娘婿は、町内で防災に関することはしていないのに、3時間かけてきてくれたんだから、現在、

私の命があるということですね。

(問)木戸さんが本家の家に避難するということは、自分の家がなくなりそうだということは感じましたか?

いいえ、そんなことは思わなかったです。大変なことになるとは思いましたが、私の家がつぶれるとは思いませんでした。娘が「うちに来いうちに来い」と電話してくるので、出かけたんです。しかし県道は瓦礫と濁流で車を出せる状態ではないんです。それで娘のところへ行くのをやめて、本家の家に行くことにしたんです。

翌朝、知り合いから、「木戸さん、家がなくなっているよ」という電話があり、びっくりすると同時に娘に感謝したわけです。

近所の人によると「3時50分ごろ、ドーンという大きな音がして、土石流が流れて来た」ということです。

(問)切羽詰まるということは何でしょうか

8時前ぐらいに本家から物を取りに家に帰りましたが、その時は、腰ぐらゐまで水がありました。そういう状態にならないと避難しない。テレビや広報車で「避難しなさい。」というのは避難できません。私の家の上の人ですが、テレビを見て避難した人もおられます。ですから、その人の意識でしょうね。ほとんどの人は切羽詰まらないと避難しないですよ。木戸さんは「老人会の会長や、神社の総代や農協の役員をやりました。町内会長も10年やりました。防災マップを自分で作った経験もあります。」

今回、口田は土砂災害警戒区域の指定を受けましたが、ほとんどが警戒区域です。

フジランドから下小田まで危険地域ですから、いざという時には早く避難しなくちゃいけないことは判っていると思いますよ。

今回は、町内会長さんがマンションの4階に住んでおられるので、「うちのマンションへきんさい。」と言って歩かれました。この人は以前被災した経験はありませんが、どうしてあーいうことができたかわかりませんが、この会長の呼びかけに応じてこの地域の方は避難したので犠牲者が少なかったと思います。幸い犠牲者は1人ですんだことだと思います。

(平成30年11月28日 柳迫 聴き取り)

口田南五丁目

ペンネーム：パーマン

題目「安佐北区口田南5丁目災害見ていました。」

私の自宅は、土砂で流れた家から道路と駐車場を挟んで直進50mぐらい離れた隣になります。7月6日会社から6時ごろ帰宅しました。

今までに無い雨が降り続き近隣の方は、小学校や知人宅に避難され、パトカーによる避難の呼びかけが町内で響き渡っていました。

私はシャワーを浴び、作業服に着替えて貴重品をまとめて、いつでも逃げる準備をし、インターネットで閲覧していました。

6時40分頃、山手側から聞いたことのない音？地響きがしたため、山手側の掃出しのサッシを開けたとたん、隣の家が動き始めました。「バキッバキッバキ」家は10m位平行移動し、段差のある畑に斜めに落ちた途端に土石流が一瞬にのみ込み、土砂に埋まり、その手前の土が下に移動し始めました。

目を疑いながら状況を視差しながら 何が起こっているのか？数秒すると水を含んだ土石流が流れて、下にある家に流れ込んでいきました。危険を感じて玄関から飛び出て、目にしたものは土石流に流され、自宅の畑に引っ掛かってる車2台、駐車場から流された車です。

音がして、サッシを開け、飲み込まれるまで4〜5秒だったと

思います。土が動いて土石流が流れ落ちるまでも4〜5秒だった
と思います。家から駆け出る時間も4〜5秒で出ました。一瞬で
はないー、一瞬の出来事に何が何だか理解できませんでした。そ
の後自宅は、消防、警察、レスキュー、災害復旧業者の休憩場所
となり、雨をしのぐ場となりました。

朝方3時過ぎに、山が鳴く？泣く？音がして、下山、待機した
所、口田3丁目の土石流が起こったと聞いています。



ベランダから見た土石流



夜が明けると周囲は土砂と流れ出た木材の山

口田南八丁目

矢口が丘自治会 会長

穴田 武司

題目「矢口が丘団地・口田中学校へ大量の土砂流出」

西日本豪雨のあった7月7日（土）夕刻、矢口が丘団地上部の9区、10区の方々から『ゴロゴロという雷のような大きな音がして、不安で眠れない』という報告がありましたので、すぐさま通称【加唐ため池】を見にいきました。

フェンス横の小さな沢が、巨木・岩・汚泥でいっぱいになって流れていました。いつもの【ため池】は土砂で満杯状態になり、側溝から口田中学校に隣接する【水路】も一杯で流れており、溢れ出た流木、泥水は団地内の道路・口田中学校の体育館横まで流れ込んでいた状況でした。

すぐに「矢口が丘集会所」を解放することにして、【加唐ため池】直下の9区の居住されている住民の方々に、矢口が丘集会所を臨時避難場所として開放する旨、各戸を回って説明して回りました。

緊急避難された方は和室に11名、グラウンド内にて自家用車に待機する人4名でした。

初度は役員11名でお世話し、夜間からは4名で徹夜体制をとり、我が家から家人が「炊き出し」提供を行い、更なる緊急時に備えました。

翌日の7月8日（日）の早朝には、全員が自宅に帰ることができました。

しかし、夜間にため池を超えて流れ出た【土砂】が9区・8区・7区・4区及び口田中学校体育館に大量押し寄せて、道路上に長さ300m、高さ50cmの「土砂と木の根っこ」があたり一面に散乱している状況でした。

矢口が丘自治会の役員・有志・高校生ボランティア合わせて約50名で、ショベルを使って砂を土嚢袋に詰めること約400袋、軽トラックを使用して回収し、道路脇と集会所前のグラウンドに集積しました。

7月9日（月）に、すぐさま安佐北区役所の災害対策本部に出向き、ドローンで撮影した【加唐ため池】及び上流の破壊された【3つの防砂工】の空中写真を見てもらい現状報告して、拾い集めた土嚢袋の回収を依頼及び【加唐ため池】の土砂撤去をお願いしました。

人命を失うこともなく、住居に土砂が入り込むこともなかった今回の出来事です。が、「加唐ため池」に大量に堆積している土砂の撤去を行わなければ、再度大雨があった場合に、大量の土砂・岩・大木などが、ため池を越えて9区の住居を直撃することになります。

自分の住んでいる街は、災害には無関係、の思い込みは、この大災害を経験しては、死語に等しいことと痛感しています。

自治会ではさっそく町内の危険個所を探索して、防災マップ作成に取組んでいます。

災害は忘れたころにやってくると言いますが、気象庁の今後の長期予測を目の当たりにすると、従来の固定観念では対応できない状況下であることを、地域住民の皆様に周知徹底することも【重要な防災の礎】と実感しています。

広島市及び広島県の早急なる対応により、ため池の土砂撤去は10月22日～来年の1月31日で行われることになりました。

ため池上流の【砂防工】は「林野庁」・「財務省」の承認が降り次第、工事入札があり、来年の3月頃に始まる予定です。



平成 30 年 8 月 20 日

矢口が丘自治会会員の皆様へ

矢口が丘自治会
会 長 穴田武司

『西日本豪雨災害』 矢口が丘の災害状況および対応

7 月 6 日の夕刻『大量の水が流れてきている！』と 10 区の方から一報が入りました。

早速、10 区にあるため池を巡回、1 回目 2 回目は大量の水が流れ出ていましたが、3 回目の巡回時には、靴がズバツと埋まり、大量の土砂、岩、樹々で埋めつくされ、もはやため池の用をなさず、溢れ出た土砂等は、口田中学校体育館の裏側、9 区、8 区、7 区、4 区の道路まで流出していました。

これは尋常ではないと判断、直ちに各区長に状況を連絡、矢口が丘集会所を緊急開放しました。

集会所に来られた方は 15 名、乗用車の中で夜明かしをされた方もおられました。

役員、民生委員 11 名も集会所に集結、更にその内の 4 名は、刻々と変化する気象情報に速やかに対応すべく、緊張と不安の夜を徹夜体制で臨みました。

翌日の 7 月 7 日には、役員、住民の皆さんで大量の土砂の撤去作業を行いました。

今後、台風の到来で、再度危険な状況が想定されます。

口田東学区の指定緊急避難場所は『口田東小学校』です。

避難準備・高齢者等避難開始、避難指示(緊急)の発令時は、早めに避難を開始してください。



※ 7 月 7 日 ドローンで上空から矢口が丘の災害状況を撮影



次頁に広島市ホームページに掲載の『口田東学区土砂災害ハザードマップ』を添付。
今一度、矢口が丘の警戒区域をご確認ください。

報告

平成 30 年 8 月 20 日

矢口が丘自治会会員の皆様へ

矢口が丘自治会
会 長 穴田武司

『西日本豪雨災害』の際

矢口が丘集会所に避難された方から心温まる寄付金がありました

先日の『矢口が丘盆踊り』開催中、本部席に、ひとりのご婦人が訪ねて来られました。

「先の水害時には、役員の皆さまがご親切に、何度もトイレまで介助、また食事も用意していただき、有難く頂戴しました。」と、丁重なる礼状を添えられて寄付金を頂戴致しました。

予期せぬ心温まる内容に、今後災害時にはどう対処していくか、また『ボランティア』とは何かを改めて真摯に考えさせられた出来事でした。

尚、頂戴いたしました謝礼・供代は盆踊りの寄付金として計上しましたことを報告いたします。

関係者一同、今回のお心遣いに感謝いたしております。

※添付資料 添えられていた手紙

失礼が兵隊会所の皆様
先七月六日の地震時の非難に際しまして町内の皆様方
には大変お世話様になりました心より感謝申し上げます。
頻りにトイレ介助にもお心遣いをお世話様になり
ました事に何のお礼も出来ません事申し訳がなく
思っております。
皆様方もお家族も大変な中を勇気よく朝
遅くまで居残りほんとうにありがとうございました。
食料も心使い頂き有難く頂戴させて頂きました事
ほんとうにありがとうございます。一方あります。
お陰様で私の足の方はやと減り歩ける様にな
りましてあります。むしろお返事を申し上げます。
皆様方のお陰が様です。今後共に宜々と
お祈り申し上げます。
今日は御礼の気持ちにほんの気持ちしか出来ませんが悪くす
の気持ちにどうもお礼を言いたいです。足に一つ
致しやうと思っております。どうぞお礼申し上げます。

②〇【広島市安佐北区可部東】

可部東六丁目

ペンネーム…路傍の石

題目「平成26年8月の豪雨災害に被災者として」

今回、平成30年7月に広島県等で広範囲にわたって起こった豪雨災害について、平成26年8月の豪雨災害の体験を交えて、感じていることを伝えたいと思います。

平成26年8月20日、日付が変わった深夜0時頃から雨が激しくなり始めました。

前日の19日午後6時の天気予報では、「多量の雨が降る可能性があるため、山側の家屋や川沿いの方達は、警戒をするように！」と言っておりましたが、この時間帯は小降り程度で、個人的には大雨になるとは想像していませんでした。また、雨が降ってもこの地区は、私が子どもの頃から「百年以上この地区は山火事以外あったことがない。」と古老達から伝え聞いていたため、それを信じ、この地区は自然災害は無いものと思っていました。

しかし、昭和47年に降った大雨により私の暮らす隣地区の山で土砂崩れがあり、古川という小さな川に土砂が流れ込み、根の谷川との合流付近では、床上・床下浸水がありました。このことから私は「もしかしたら私の住む台地区も土砂崩れなど、なにかしらの災害が起きるかもしれない。」という思いがありましたので、

以前から自分の家の立地や、雨が降った場合の水の流れ方などについて一応考えておりました。それでもまさか自分の家に土砂が流れ込むとまでは想像していませんでした。

20日のおそらく午前3時半頃に妻が「停電している」と私に声を掛けてきて、寝ていた私は目を覚ましました。

ですが、その時私が一番に感じたことは、「とにかく雨がすごく降っている。」ということでした。屋根瓦が雨で割れてしまうのではないかと思うほどで、雷も絶え間なく鳴っていました。

それでも私は自分の家のことより、隣地区の造成中の土地の砂が雨で流れて、古川が氾濫しないかと心配していました。

しかし、それから20分くらいして妻が今度は「焦げくさい臭いがする」と言い出しました。私は「こんなに大雨が降つとるのに、火事なんかなるかい」と言って取り合いませんでしたが、30秒から1分ぐらいいして「ざざーっ」と激しく何かが流れるような音と、小さな揺れを感じました。

確認しようと玄関から外に出てみると、家の西側にある坂道が川のようになっていて、40〜50cm位の高さの土砂が流れていました。

私は驚いて家に入り、すぐさま足の悪い妻に避難の準備をするよう促し、私もそうしようとして2、3分すると、またあの「ざざーっ」という音がしました。

今度は家の西側にある裏口から外を確認しようと、扉まであと

2 mくらいのところまで近づいたところで突然土砂が入り込んできました。扉が破れ、私の足は一気に膝の辺りまで土砂に埋まってしまいました。

妻は台所で寝巻を着替えていましたが足が土砂で埋まり、パニックのためかぼうっとしていました。

私は土砂が家の中に潜まらないよう、玄関と勝手口の扉を開け、裏口から玄関・勝手口の方向へと、土砂の通り道を作り、流れを止めないようにしました。そのため、後に家の中に残った土砂は、ふくらはぎの辺りまで留まることができました。しかしこの時、自分では冷静なつもりでしたが、やはり慌てていたため、開けなくてよい部屋の扉まで開けてしまい、一階の部屋のほとんどに土砂が入ってしまいました。

その後、私は妻を裏口から遠い東側にある倉庫に移動させましたが、土砂はそこにも流れ込んできました。そのためさらに倉庫の隣、山の尾根にあたる位置にある車庫の車の中に二人で避難しました。

妻は足が悪く、また土砂は道路に堆積しており、車を使って逃げることもできずにいました。

車の中で、さらに大量の土砂が流れてきたらと不安な気持ちでいたところ、有難いことにしばらくすると警察の方が救助に来てくださり、妻を車椅子に寄せ、担ぐようにして安全な場所まで運んでくださいました。今でもこの時のことは深く感謝しており、

忘れられません。

私の住んでいる地区は、平成24年に「土砂災害指定地域」に定められ「災害避難マニュアル」を作成し、24年と25年に避難訓練を行っていました（現在も避難訓練は継続して行っています。）

しかし、私を含め地区に暮らすおそらく全員が「災害は起きない」という心で訓練に参加していたため、26年の豪雨災害には生かされませんでした。

人は災害が起きた時には被害の大きさに恐怖におびえ、災害に対する対策を話し合ったりします。しかし年月が経過することで、災害は過去のこととなっていきます。

現在、私が住んでいる地区でも、砂防ダムや河川の整備が進むにつれ、当時に比べ災害はもう起きないという雰囲気になっているような気がします。

それでも年々、温暖化などの影響で、自然災害の頻度や規模は大きくなり、テレビなどでは50年に一度又は百年に一度の災害という言葉が、当たり前のようにならなくなりました。

あまり神経質に考えてはいけなと思います。でも安穩とせず、「災害は常にいつどこで起こってもおかしくないのだ。」という心構えは必要だと思います。

そうした中、平成30年7月に起こった豪雨災害で、広島県は再び大きな被害を受けました。

今回、私達の暮らす地区では大きな被害はありませんでした。

しかし、やはり妻は被災前には感じなかった恐怖を感じたようです。私自身も被災前と被災後では心の感じ方や行動が全く違います。

台風が来るといったニュースが流れると、どの方向へ向かっていくのかを注視し、水や食料を購入したりして備え、テレビやラジオで避難勧告ができれば、避難した方が安全だと感じる場合は、早めに避難することになっています。（本当は体の不自由な人などはもっと早い時点で行動する。こともあると思います）。真夜中だったり、家に居た方が安全だと感じる場合は無理せず、家の中でもなるべく安全と思える場所に居るようにします。

私の妻は、障害者で腰や足が悪く、着替えなど人より時間がかかるため、避難勧告が出そうな日には、寝る時は寝巻を着用しないで、普段着を着て眠るようにしています（時折、普段着でも眠れるよう訓練をしています）。

それぞれの靴を寝室に置いておき（26年の災害時、土砂が家屋の中にまで入ってきて、足を損傷したため、目覚まし時計を30分ごとにセットして状況を確認するようにしています。また普段からまとめてある飲料水や2、3分の着替えは前もって車に積み込んでおきます）。

自然災害が来ることを防ぐことはできないので、完璧ではなくても他人まかせにするだけでなく災害が起こった時、どのように行動するか想定し、準備しておくことも大切だと考えています。

たとえ被害がなかったとしても、徒労だったと思うのではなく、被害がなくて儲けもの、ぐらいの気持ちでいけばよいのではないのでしょうか。

過去は忘れなければいけませんが、忘れすぎてもいけないと考えています。

②1 【安芸高田市向原】

向原町長田

ペンネーム…ああちゃん

題目「7／6の大雨」

前日からの雨が降り、朝になっても雨は止みそうもなく、川の水がだんだんと濁り水、大きな木や色々なものが流れて来た。

お昼過ぎ、お助けワゴン（電話）から、「雨が降り、水かさが増え、とても危険ですので危ない箇所は、向原未来センターへ避難して下さい。」とのお知らせが有り、主人が「今までにない川の流れるゴォーという音が高い、早めに行こう」と言ったので、すぐに用意して未来センターへ行った。15人位来ておられて。

それから夜遅くにつれて、多くの皆さんが集まって来られた。もう中は人でいっぱいです。主人は目が不自由なため、トイレ近くに車を止め、車の中で寝るよ。トイレに行くのに中に入ってみたら、廊下に両側一杯に寝ておられた。後から来られた人も「車の中で寝た。」と言っておられました。

朝早く帰ってみてびっくりしました。堤防、護岸ブロック、谷も隣の田んぼも半分以上流れていて、川の水も家のすぐそばまで流れてとても怖かったです。でも早くから台風が来ると言っていたので、土のうを積んでもらったので助かりました。



この写真は帰って撮ったものです。

②② 【安芸郡熊野町】

熊野町川角五丁目

城 後 伸 行

熊野町川角五丁目

中 村 千 鳥

8時過ぎに夕食を終わった直後に、電気がぱつと切れて、くらしだなと思うと、水道も出ず、トイレも使用できなくなったので、外に出てみれば人影もなく、人影もなく、少し、歩いてみると、左側の家が土砂が流れていたので怖くなり家に戻りました。

熊野町川角五丁目

高 野 清 孝

平成30年7月6日20時00分 家の前の電柱が倒れドーン音と同時くらいに下の方で火災が発生しました。

行つて見ると、電柱が倒れ、車が燃えて、その後、家に火が付いたのを私は見ました。

家事を見ているとき、山手のほうから大量の水が流れてきました。

今まで見たことのない量でした。団地の人々もドロドロ口になって体育館へ避難しました。

題目「『自分は遭わない』。これが命の線引き」

7月6日の夜

私はこの町の自治会の役員をしており、ここの団地（大原ハイツ）の担当をしている。役割としては、避難勧告が出たら小学校の体育館が避難所として解錠されるので、そこに行き、避難して来られる団地住民の確認をすることだ。

7月6日は18…00に避難勧告が出され、小学校の体育館が19…00に解錠された。小学校へ向かう時、雨が結構降っていた。車から体育館に移動するだけでびしゃびしゃになるくらいの雨だ。体育館の避難所内に受付を設置し、団地住民が避難してくるのを待っていた。ずっと待っていたが、この団地からは、たったの2組しか避難しに来なかった。その2組は、避難指示が出された後すぐに避難しに来られていた。体育館に来なかった他の住民の中には、もしかすると、よその避難所や自分の身内に避難した人もいるかもしれない。小学校の体育館には、この団地（大原ハイツ）以外の所からも、避難しに来られている人たちがいた。

隣の団地から避難に来た人は、「20…20頃に、山で音がした」と言っていた。この団地では2回山が崩れたが、多くの人たちが20…20ころに山が崩れたと言っていたので、おそらく、それくらいの時間に2回目の土砂が崩れたのだろう。1回目の土砂崩れは、

団地内で19:50に停電になった為、それくらいの時間に1回目の山崩れが起き、土砂が電柱を倒して停電になったのかもしれない。私は体育館にいて、激しい雨のせいで山鳴りは聞こえなかったが、みんなの話を聞くと19:50〜20:30の間に土石流が2回発生したのではないだろうか。

避難所の受付では、連絡網表を見ながら、避難しに来ていない人たちに対して安否確認の為に電話を掛けていた。もし、電話をして繋がらなかったら、どこかへ避難しているだろうと思っていた。しかし、何度掛けても、何度掛けても、電話が繋がらない。実は、この団地の連絡網はほとんど、固定電話しか把握していなかった。だが停電中だ。固定電話は全く使えない。あの時ほど、「固定電話は使い物にならない」と思ったことない。安否確認も出来ないし、どうすることも出来なかった。今思えば、この連絡網は、実際に災害が起きたらどうなるかを考えて作られていなかったと思う。これは全くの想定外だった。次は絶対に、事前に皆の携帯電話番号を把握しておくとした。

悔やんでいること

災害で、一つだけ、今でも悔やんでいることがある。

この団地は班が4つに分かれている。それぞれの班に班長がいて、避難勧告が出たら、班長が各班の連絡網の用紙を避難所を持ってくるようになっていた。避難所から班員に電話を掛け、安否確

認をするという仕組みだ。その日の18:00に避難勧告が出た時、私は団地内の各班長に電話をして、「避難所が解錠されたら、班の連絡網表を持って、すぐに体育館に来てください」と伝えていた。私は、班長のうちの一人の携帯電話番号は知っていた。この班長はまだ体育館に来ていなかった。再度電話を掛け、連絡網表を持って避難しに来るように伝えようと思っていた。固定電話なら繋がらないのは当然だが、携帯電話でも何度掛けても繋がらない。何回掛けても繋がらなかった。その時は、既にどこかへ避難したんじゃないかと思っていた。数日後に、班長の夫に、「奥さん（班長）は無事に避難したか」と聞いたが、「避難しとらん」と言う。後から知ったのだが、その班長は、まだ家にいたとき、土砂が流れてきて、家ごと下敷きになってしまった。ご遺体は10日後くらいに見えられた。あのとき、もっと強く、「早く逃げたほうが良い」と言えば良かった。もっと強く。本当に、今でもずっと後悔している。あれだけは悔いが残る。本当に。

その夜に体育館に来た班長は私以外に一人だけだった。一人は既に土石流に遭い、亡くなっていた。もう一人は、20:30に電話をしてみた時、土砂が流れてきていたため、家のドアが開かず、外へ出られなかったようだ。あとの一人は、連絡用紙を持って一人で来た。「あんた、一人で来て、他の家族はどうしたん？」と聞くと、「まだ家でご飯食べよう」と言う。「はやく、子どもと一緒に連れて避難しに来んさい」と言って、すぐに家に返した。そ

それからすぐその班長が家に戻り、子どもを連れて車に乗った。ほとんどそのとき、土砂が崩れた。あとほんの少し遅かったら間違はなく、完全に巻き込まれていただろう。土砂はいつ崩れるかわからない。家に返したときは、まさかそのタイミングで崩れるとは思っていなかった。よく考えると、あの時、家に返したらいいなかったと思う。でも、子どもが家に残っていると聞いていたし、どうしたらいいかわからない。でもやっぱり、こういう時は家に返しちやいけないと思う。

20・40くらいに、避難所の小学校から、雨の中、団地の中で火が燃えているのが見えた。物凄い火だった。どうして雨の中、こんな火事が起きるのかとても不思議だった。後からその住民に聞いてみると、垂直避難のため2階にいたとき、窓を開けてみると目の前に車があったそうだ。一台の車が、上の方から土砂と一緒に流れてきて、ご自身の車の上に乗っかり、炎上したらしい。もしかしたらガソリンが漏れて燃えたのかもしれない。そのお宅は全焼した。雨の中、ものすごい火事だった。

何時だったかは分からないが、6日の夜に消防団が入ってきて、まだ避難をしていなかった団地の皆を連れて、深夜に団地の裏の林道を通り、町民体育館に避難してきた。真っ暗の中、細長い林道には泥水が膝の上まであり、皆その中を必死に歩いて、町民体育館に避難した。通るには大変危険な道だったが、うちの団地には、団地の出入り口が一つしかなく、土砂が出入り口を封鎖して

いた為、危険でも林道を通るしかなかった。子どもたちや、小さい子ども二人を両手に抱えて必死に歩くお母さんたちもいた。25・00に町民体育館に連絡したときは既にみな避難していた。私はそのとき、まだ小学校の体育館の受付にいたので、これらの話は後から知った。

翌朝

7月7日の朝、小学校の体育館に避難していた人たちも他の団地住民と一緒に居る方が良いと思い、一緒に町民体育館に移動した。その後、団地の中はまだ危険な為、入ってはいけないと言われていたが、それでもやはり、中がどうなったか気になる。行ってみて、その光景を目の当たりにしたとき、「うわあ……」と思った。その時、まさか、12人も亡くなるとは思っていなかった。

団地内に入ったとき、もう誰だったかは覚えてないが、ある女の人が道端に立っていた。「ばあちゃんがまだ泥の下におる」と言う。家は完全に潰れているし、その上に土砂がかかっている。助けようにも、どうしようも出来ない。本当に、やれん。人が死んだらいいけん。人が死なないようにしないといけない。

避難所生活で大変だったこと

避難所の中では、安否確認が難しかった。親戚、家族のところへ避難している人は、向こうから連絡がこない限り、連絡がとれ

ない。この団地で12人が亡くなった。みんなが避難している体育館の中、亡くなった方の知り合いはいないか、と大きな声を出して聞ける雰囲気ではない。大変辛い雰囲気だ。1週間くらい、誰も冗談も言わないし、小さい声でひそひそ話す感じだ。本当に辛い。家族が亡くなった人や、家が無事だった人が皆一緒に同じ体育館で過ごしている。やはり安否確認ができる雰囲気ではない。とても難しい。町役場は家が倒れたところだけ安否確認を行っていた。しかし、実際には避難の最中に何かが起きる可能性もある。自治会では、家の倒壊にかかわらず全員の安否を確認するようにした。亡くなった方全員のご遺体が見つかるまでは全員静かにしていた。うるさく出来ない。あの1週間が長かった。いつ団地に帰れるのがわからない。先が見えない。約150人（77家族）いる体育館の中、皆が静かに、ひそひそ話してみたいな感じで「どうなるんじやろうな」と話していた。10日目くらいにやっと、最後のひとり（班長）が見つかった。

避難所の中は、だいたい140人くらい居た。77家族。多い時には150人はいたと思う。体育館の中はいっぱいだ。発災4、5日後まではダンボールでスペースを区切って生活する。その後は、室内用のテントが支給されたので、それで過ごしていた。このテントは、上から中が見えるような形だ。倒れた人などがないか、上から覗いて確認できるようになっている。逆に言えば、プライバシーはない。

エアコンが早く来たのはとても助かった。発災3日目くらいに10台ほど届いた。あの頃はとっても暑かった。あの人数体育館に人がいたから。あれは助かった。2ヶ月くらいはずっと、エアコンは回しっぱなしだった。

最初、1週間くらいは、（危険エリアのため）全く団地に帰れなかった。お風呂も無いし、着替えもない。下着なども、外で買わないとない。歩いて避難してきた人たちは、車も持ってきていない。やっぱり、しんどい。ご飯をタダで食べさせてもらえて、タダで寝させてくれるから、何も文句は言えない。でも、やっぱり、避難所は、長くは居れない。でも居るしかない。長くなれば、やっぱりだんだん皆ストレスが溜まってくる。結構しんどい。

避難所生活では私自身も必死だった。みんなが1日を無事に過ごせることが避難所内の目的。ただそれだけのことだが、結構な人数が一緒にいるから色々なことが起きる。例えば、音が大きかったら駄目だという人もいる。しかし子どもは日中走り回る。その音が苦手な人もいる。違う人たちが一緒ひとつ同じ体育館で生活するのは難しい。中で揉め事が起こらないようにすることが本当に大変だった。

また、犬を飼っている人たちは大変だ。この団地では犬を飼っている人が多い。犬を飼っている人を無視する訳にはいけない。ただ、避難所には動物アレルギーの人もいる。これは難しいと思う。町民体育館には、体育館の他に教室があり、犬を連れている

人専用には、犬も過ごせるスペースが確保されていた。

避難所を出た後は、仮設住宅の代わりとして、県営や民間のアパート。犬などを買っている人たちは民間のアパートなどで生活した。8月の終わりにはみんな体育館から出ていた。

避難生活中に感じたこと

まず、支援物資として最初、服が沢山届くのだが、それらの服がみな中古だったこと。服が山積みされていたけど、みんな、とらない。1週間くらいしたら、服はすべて片付けた。やはり、皆、新品が着たいのだと思う。

他に感じたことは、同じ町のなかでも被災した所としていない所が、断絶しているような感じだったことだ。避難所生活中に近所のスーパーに買い物に行ったときなど、スーパーの中は、普通の世界。体育館から一歩外に出たら、全く、被災した地域という感じがしない。「他の住宅の人たちは、私たちの団地で災害が起きたこと、私たちが体育館でずっと避難生活していることを知っているのか？」と思った。「私たちの所が断絶しているような感覚だ」と、皆同じことを言っていた。あまり、こちら（被災者側）からわざわざ宣伝するようなことではないが、本当は、まだ被災している状況だということを、知ってもらいたい。同じ自治会の人にも、「なんで1ヶ月も体育館におったん」と聞かれるほどだ。すぐ近い人たちでも、被災地の状態を知らない。本当は知っても

らいたい。テレビの範囲のことしか知らないのだと思う。テレビで土砂崩れが起きたところが映し出されたのを見て、そのことしか知らない気がする。

良かったこと

災害が起きた後、ひとつだけ、良かったことがある。団地内のみんながお互いに結構仲良くなったことだ。あれだけは、良かった。団地住民は、同じ体育館の中で1ヶ月以上一緒に生活をした。そこそこで、お互いに顔を覚えた。今は世代を超えて繋がることになかない。しかし避難所生活を通して知らない世代を超えての繋がりも出来た。その関係はこれからも続いてほしいと思う。

被災者を減らすために

やはり、危ないと分かっているところには家を建てない方がいい。大きな砂防堤防を、災害が起きそうなところ全部に作ることも不可能だと思う。コストもかなりかかる。

大事なものは逃げるタイミングだ。避難勧告が出されたときは、「まだ大丈夫だろう」と思っている。でも、いざ避難指示が出されて、防災無線が放送されても、雨が強い時は、防災無線の音が聞こえない。これからは、家の中に防災無線を置いておかなくいけない。各自で買うのは大変なので、配られると良いと思う。

被災前と後の心境

19年ほど前の6月（6. 29災害）にも、この団地で大きな土砂災害があった。それもあり、土砂災害は起きるかもしれないと思っていたが、まさか、土砂がここまで流れてくるとは思っていなかった。災害の後は、団地の住人は、台風が来たときなど、すぐに逃げるようになった。でも、何も起きなかったりする。今年は何回も台風が来たが、その度に皆逃げた。しかし、あれだけ頻繁になるとやはり、少し面倒臭い。結局台風も来ず、何もないのに体育館の中に一晩過ごさないといけないから。でも、安否確認は隅々まで行った。また死んだらやれない。人は死んだらいけないから。本当に。

災害を経験したことない人に特に伝えておきたいこと

他人事にならないこと。「自分が災害に遭うわけがない」、「まさか人は死なないだろう」と思うことが、一番のマイナスだ。遭うかもしれないと意識しておくことと、意識しておかないこととは、大きく違うと思う。長い人生には何かが起きるかもしれない、と誰もが思っておかないといけない。

何でも電気に頼る生活は、災害時には怖いと思う。停電すると、しばらく何も出来ない。今回も電気の復旧には1週間程はかかった。全部電気の生活にしているときは怖い。うちはガスだけ使えたからなんとか良かった。

（湯浅 聴き取り）





図1 熊野大原ハイツの土砂災害による被害（2018.11.7 湯浅撮影）

熊野町川角五丁目

大原ハイツ復興の会 代表

串山直樹

数日前から降り続いていた大雨で、7月6日は携帯電話へ警報メールが鳴り響いていました。いつもの事だろうと思っていましたが、嫁から早く帰ってくるように催促があったので自宅から20分ほど離れた職場から、午後6時20分ごろ会社を退勤しました。会社の外に出てみると、大雨で通勤する道路は一部が冠水している状態で、いつもと違う雰囲気でした。

自宅に18時40分くらいに到着し、すぐに自宅周辺の様子を見に行きました。

その時は自宅横の山から流れてくる山水が、自宅横を流れるのですが、見たこともない量が流れていたもので、違和感がありました。19時10分頃、晩飯を終わらせ、再度、自宅の外や大原ハイツ入り口付近、周辺民家を見に行きました。

帰宅時と違い、側溝からは水が溢れ出ていて、溢れた雨水が道路の坂道を下っていました。

自宅周辺は電気が付いている家も多く、被害を遭われた方の自宅も電気が付いていました。避難していない家が多くあったのを覚えています。帰宅時から30分間でこんなにも外の様子が違う状態に、異変を感じていました。

ここで私は、その異変や違和感から、嫁に「今回は避難した方

がいいかもね」とここへ引越しをしてきて初めて避難をするか話しました。

子供も乳児ということもあり、避難することを躊躇していました。

19時30頃、風呂場へ行き子供をお風呂に入れましたが、異変や違和感が残っていたため、お風呂を中断し、20時頃、外へ、再度様子を見に行きました。

外に出る際に、テレビで避難勧告や、アナウンサーが「水が濁っていたり、泥の臭いがしたり…非常に危険な状態です…」と言っていたのを見て外に出ました。

外に出ると自宅横からの山水や、吹き出た側溝、被害に遭われた方の自宅横からは泥水が溢れ出ていました。大原ハイツ入口付近まで行き、坂道に小石や泥水が坂を下っていました。

この際、畑の肥料みたいな臭いもあり、テレビで言っていた危険な状態だと思い、明らかに異変を感じたので、「避難しよう」と伝えに自宅へ引き返していました。

その際、20時10分に一回目の土石流が木の折れる音と何か轟音と共に流れてきました。

土砂が木や車を吹き飛ばし、他の民家を押しつぶしている瞬間を目の当たりにしたので、家族に急いで車に乗るように促しました。嫁も大きな音がしたので、外を見ていたら「山が動いた」と言っていました。

家族4人、車に乗ったので、急いで大原ハイツを出ようと1本しかないので団地の出入り口に向かいましたが、一回目の土石流ですでに塞がれていました。異変や土石流に気付いた人たちも自宅から出てきて、渋滞ができていました。

下り坂に居る事を危険と思い、団地入口とは逆方向へ車ごと移動しました。

移動して数分後、20時20分ごろ、2回目の土石流が発生。土石流に巻き込まれた自宅や、車などが坂道を轟音と共に目の前に流れてきました。

その衝撃で電柱も倒れ、流れてきた車に引火し、家屋に火が付き火事も起きました。

救助される間は、付近の住民の家に家族を避難させていました。日が変わったくらいに救助の方々が団地の山道を切り開いて、皆さんを救助しました。

今回の災害では、警報や緊急メールなどは、いつもの事だろうとそれほど気にはしていませんでした。

ただ、自宅が警戒区域であること。自宅が山のすぐ下にあることから、普段から大雨の日には様子を見ていたことで、いつもとは違う違和感や異変に気付き避難をしようと思ったのが事実です。役場からの避難の放送は聞こえません。

今回の災害では、警報や普段からの様子、どちらも大切なことだと強く感じました。



②3 【安芸郡坂町小屋浦】

坂町小屋浦二丁目

ペンネーム…KOBUNO

題目「災害に向き合って思うこと」

平成30年7月6日の西日本を襲った集中豪雨は、まさに想定外の大災害でした。

結婚して43年に入ろうとしたこの年、明治40年と昭和20年にも、同じような災害が起こった話は聞いていたのです。

自分が、まさかこの災害に遭うなんて想像すらしていなかった。我が家は、この町のほぼ中心に位置しており、少々強い雨が降ったが川の水が溢れることもなく、災害には縁のないものだ。と高を括っていたのは紛れもない。

7月6日の3日前から、降り続く中、野菜の成長と収穫の楽しみを阻害する雨に、うんざりしていた。

その日は、昼前から強い雨で家の前を流れる川の水位は溢れる寸前、私は自分の車を安全な場所へと移動させたのです。その帰りの道すがら、川の水がものすごい勢いで流れ始めていた。それにもかかわらず、主人は我が家で管理する駐車場の様子を見に行っていたのです。その頃には、すでに流木や瓦礫が道や川の水を堰き止めて道いっぱい川と化して歩くのもおぼつかない中、主人はブロックと金網にしがみつき、帰るに帰れない様子を見つ

け、そのまま流されるのかと思った。私は大声で「目の前の家の2階へ避難させてもらいなさい。」と叫んでいました。我が家の庭先にも見る見るうちに土砂が流れ込み、床下にまで水が流れ込んできた。その時私がとった行動は、あらゆる開いた容器水を汲み、テーブルの椅子を上げ、電気製品やアルバム、食品やあらゆる物は高い所にあげ、懐中電灯、とローソク、ラジオや食器と水は2階に持って上がり、カーテンを結んで濡れないようにして、「雨が止んでくれれば、大丈夫だろう」と主人と不安に思いながら、待っていた。

その時、雷のような「バリバリ」という音がした。

小雨になった時、安全な道を探して主人も帰って来て、2人で1晩中水の流れが気になり一睡もできなかった。

最初に流れ込んだ水は、主流の1本から流れた瓦礫と土砂が大きな被害を起こしたようだ。翌日、消防の人が「避難しますか？」と言われ、携帯電話の充電ができると聞き、ホームセンターに避難することを決意。貴重品とタオル・着替えをとりあえずもって、1晩は少しは眠ることができた。

そこで避難していた人達に被害の様子を聞いても、町全体のこととも把握できなく現状を見るまで想像すらできなかった。

3日目の朝、近くに住む子供らが物資や土のう袋を持って来てくれ、庭や家に流れる水の流れを変える作業と一緒に作業、その日から3週間余り、子どもの家に避難させてもらい、そこから自

宅まで毎日渋滞にも巻き込まれるのを避けるため、朝は4時に起き、借りた車と歩きで通い、熱い中、土のう作りと片付け作業に明け暮れていた。今思えば疲れはピークに達していたと思います。それでも何かしら気が張っていて、数人が手伝ってくれる人や見舞いに来てくれる人にも気を使い、倒れてはならないとぎりぎりで頑張っていました。日に日に片付いていく喜びであったり、ライフラインも回復していくのも喜びとやる気と元氣も出てきたものです。

自衛隊を始め、多くのボランティアの方々、復興に携わってくださった方々には、本当に感謝いたしております。本当にありがとうございました。

今回、このような大規模災害にもかかわらず、家と命も助かったことは運が良かったとしかありません。一つ間違っていれば2人とも流され、命を落としかねない無謀な行動でした。田んぼの水や海の水を見に行かないようにと良く報道されている時、なぜ見に行くのか？理解できなかったのですが、いざ自分がそんな目に遭った時、やはり同じような行動を取っていました。そこが、人間の心理なのかと思いました。心配がそういう行動に出てしまうのでしょうか。

「自分の命は自分で守る。」これしかありません。これまでは災害は自分には縁がない、と思っていたのも否めません。どの程度が危険か？なんて予測できません。最小限自分で自分の命を守る

ることを、肝に銘じ意識を持っていかなければならない。と思いました。



坂町小屋浦二丁目

西谷 征士

平成30年7月6日午後7時30分頃、坂町から大雨特別警報（避難指示）が発令されたので、家族3人（妻、子ども、私）は、直ちに荷物を持って、避難所（小屋浦ふれあいセンター）に向かいましたが、家を出て道路に出たところ、河川は氾濫し、川と道路が分からないくらい、大量の水（約30～40cm）が、流れておりました。

避難所へ行く途中で、私が足を取られて転倒し、約50m流されましたが、何とか立ち上がりました。後ろから付いて来た妻と子どもが、近所の方が「今から避難所へ行くのは危険だから、私の家（3階建て）でよかったですら上がってください。」と、有り難い言葉を掛けていただいたので、お世話になることにして、2日間お世話になりました。

3日後に家に帰ってみると、庭には大量の土砂が入っておりましたが、家の方は玄関に約10cmくらい水が入った程度で、床上浸水は免れました。が、停電・断水で生活に困り、また、J・R呉線と国道31号線の通行止めと、生活していく上で大変不自由をいたしました。

小屋浦地区内を廻ってみますと、大規模な土砂災害による家屋の流失、河川・道路の崩壊等、広範囲にわたり甚大な被害がありました。また災害により15名の犠牲者と1名の行方不明者が発生

しました。

今回の災害発生により、全国の自衛隊・警察・消防の方々の応援、又、全国各地からのボランティアの皆様方に大変お世話になりました。

坂町小屋浦

匿名

題目「昭和20年も水害を経験」

同じ問題が出た時には、被災者の話を聞いて現地視察して、優先順位を決めてやるのが本当と思う。ただ今のやり方は我田引水で、自分が議員として当選するには自分のところに予算を取らないと自分は当選しない。これは民主主義として当然かもしれないけど、同じ案件があちこち出た場合、同じ案件をフラットに見て、優先順位を決めなくてはいけないと思うのが一つ。

それから広島市の場合、人口100万都市というのを掲げて、傾斜地でありながら造成の許可を出している。山間部であろうが谷地であろうが、とにかく人口を増やすために安易に許可を出している。

危険なのは解っている。そして安いから入って、その人が文句を言って「政権が悪い・市が悪い」と言っているけど、自分達も安いから入ったんだろう。県は県で、市は市で造成許可を出して

いる。そこらあたりをずーと見ていて、感じていても、声も小さいし、頭も薄いからどのようにしてそれを伝えるか、手段も知らんし、個人的に思うだけで。

今回、ここ小屋浦地区は、電車は止まる。道路はふさがれる。陸の孤島ですよ。何日続いたと思う。食料は無い。病院へも行かない。どういう手段で行ったかというところ、ここからポートピアまで歩いて行って、そこから船で江田島に渡って、さらに船で広島市内宇品に行ってから、病院なり、緊急の用事を済ませる。そういう動きもしたんです。ここはこの道路が1本しかない。町は「ここへ道路を付けます。」という何十年も前に話が出て、その前にゴルフ場を作ります。そういう話をして、山林を買収してる最中に、そのゴルフの景気が低くなって、ゴルフの会社が倒産、道路の話は宙ぶらりんになる。だけどやり掛けたもので、そこまですぐで町道で作ったんですが、県道でないと先に進まないものですから、できたところは町で作り、寄付して県道になっている。ちょっとだけ寄付によってできた。あーゆー中途半端なことも、坂本郷に繋がる道ができるようにするんだが？向こうは用地買収すらできていない。部分的に工事しています。それでいつできるんか？だけど今回大きな事故があって国も動き始めました。漸くこの声が届いたのも、想定外の土砂が流れたから崩れたと言うんです。想定外じゃない、今までやらなかった。あれを補強していたらあんなことにはならないと思う。もう少し早く、砂防堰堤を小さく

てもいいから作るべきだった。いっぺんにどんと作らなくてもよい。近い人がなくなっただけで余計に今回残念だ。

(問) 7月6日家に居られましたか。避難勧告や雨が降るといのは解っていましたか。

雨が降るといのは解っていましたが、あそこが崩れるというのは解りませんでした。雨は、今までも降っています。今回の雨はどういうメカニズムで、あそここの山が崩れたのか？私にはわかりません。あそここの県道の切れ目、堰堤のあった所に補強もせずに、道を広げるために山を削っているでしょう。あれは逆だと思ふ。補強しておいて、削らないと、上から力が加わると一変に崩れますよ。

大きい会社が受けて、下請けにやらして、下請けの会社はできんと言つて、ケツを割らして、次はどういうわけか、やっている最中に安佐北区の事故があった。そうすると予算は全部向こうにいつてしまった。こちらの工事がほったらかしになった。

先ず工事のやり方自体がおかしい。補強せんといて、堰堤の一番力のかかるところを削っている。素人が見てもわかる。アンカーを打ってちゃんと補強をするところある程度防げた。「今建設中、今建設中」と言っています。道がないので建設してはおりません。今頃になってから石がゴロゴロなんです。あそこは岩が斜めに有るはずなんです。そこに補強を入れて削っていくんならまだしも、それはなしに山を削って行くんですからね。工事方法も予算が少

なかったのか、親会社が取ったのか、次の会社に回らなかったのか、そういう勘繰りをしたくなる。

水害は、20年8月にあつて、そこら一帯の家が流れました。あそこに石を切つて真すぐになった岩盤があります。あれは石崖を積くの、溶材として割つたもの、川の反対にも大きな岩がありました。それも溶材として使いました、どうして知っているかという、小さい頃昭和20年、石を1個運んだらいくらというアルバイトをした覚えがあります。戦前ぐらいから、ここに住んでおる。ここは海軍工廠の社宅です。ですから規則正しく並んでいる。ここより早くできたのが、電道道の下低い所、あそこは1年早く出来上がった。どういう訳か親父が海軍工廠に引っ張られてきて、呉に来て、ここは軍需工場の近くだから安全であると思つたのだろう。ここは軍需工場の中で、ここで家をたつた、ここは新築でここに移つたのが18年、それから20年の水害がありました、それから今回です。

20年に台風、どういう台風だったか記憶にないが、昔軍が松根油を取るのに山の松の木をほとんど切つた。それで切れ目を入れたので大雨と強風で保水力が無くなり崩れたんです。ここの山は殆どが松山で松茸などが良く出ていたが、山火事であつたり松枯れではげ山になり保水力が無くなった。山は低いけど急峻です。流れたらこういうふうになるのかな。今大人になつて思うのが、山登りの帰る途中、絵下山の大木から松根油を取つた。それが倒

れましたね。戦後から山が荒れて行つたのを見ていました。山に大木がありません。今回のような大雨が降ると危ないでしょうね。
(問)何時ごろ このような状態になりましたか？

一瞬でしょう。もうカミナリかと思つたぐらいの音がしました。夜7時から8時ぐらいの間です。あまりひどいから覗こうと思つたら、そこへ車が2台埋まつて、道路は川のように泥が流れていました。1台は高い所へみんなで押し上げたんでしょう。私は怖かつたので外へ出なかつた。その時まだ水が多かつた。2台目の車は土砂が来て動かなかつた。最初の1台はまだ水があつたから浮いた状態だったのだと思う。近くの人が動かしたんでしょう。2台目は何日間も埋もれていた。

一晩だけ家に居りました。2日目からはナフコへ歩いて行きました。水が膝より少し上までありましたから。ナフコでは、食事は「パン」とか「おむすび」とか、ありました。ナフコへは2晩泊まりました。食事は海上保安庁の船が石油会社の桟橋に付けて、こっちへ運んだみたいです。食べるものに対して贅沢は言えない。あそこへ入れてもらっただけでもあり難かつた。

2日間いて、それから小学校の体育館へ8月いっぱいおりました。それから家に帰り土砂を取り除くんですが、裏にゴミは一杯溜まっていました。

私は、弟の所の様子をみているから、ボランティアの方には「ひどい所へ先に行ってくれ」と言つて、できるだけ自分でやりまし

た。私は我先にという訳にはいきませんでした。ボランティアセンターはすぐそこにあったんですが、それは言えなかった。

町がボランティアセンターを作り、「あなたはどこどこに行ってください。」と言って来られる。このセンターは町が作ったボランティアセンターではなく、地域が作ったサテライトセンターです。皆さんよく頑張ってやられましたよ。

災害対応は贅沢は言えませんが、生命財産を守るのが基本的な権です。それがどこかで少し欠落したところがあったんでしょう。こうなるまでに何かできることがあったんじゃないか？こうなるまでに手が打てなかったか？それが一番悔しい。

坂町は、考え方が田舎で外へ発信することや、外から吸収することが行政にないです。「行政に欠落した部分があると思います。人を批判するような言い方になるので避けないといけんですが、もう少し幅広く大きく目を開いてみて欲しい。

近い人が亡くなったのがまず残念です。この人には何の責任は無い。ありがとうございました。

(平成30年9月26日 柳迫 聴き取り)

坂町小屋浦四丁目

窪野 久野

題目「このカミナリは長いね」

(問)7月6日、強い雨が降りましたが、その時の状況からお話ください。

3日前から降っていたが、私は息子に「この雨は普通の降り方じゃないね。何かあるね」と息子に言っていました。息子はあの日は休みだったんです。明日から仕事じゃけー早めに今日は寝て・・」という話をしていました。昼間の放送を聞いていない。雨の降りようがひどくて、テレビで1時間雨量50ミリ降った時、60ミリ降った時の映像を思い出した。絶対何かあると思っていたら、その晩じゃった。

8時頃と思うが、風呂に入っていたら、「停電じゃー」いうて風呂へ電池を持ってきてくれた。

「上がりんさい」と言われて、とりあえず電池もって2階に上がって、身支度して恐る恐る下に降りてみると、ここまで水がきていた。階段の2段くらい、床上50cmぐらい水があった。私は降りてみると、ずぶつと埋まったんです。「えっ!」びっくりした。泥水が入ってきたんです。ブロックが割れてガラスが割れて入ってきた。上から立て通りからと川とから入ってきた。

当時、私は風呂に入っていたので、風呂に入るまで、「ごろごろいつまでもなる雷よね!」と思っていた。実は雷ではなかった。

私はこの雷は長いねーいつまで雷が鳴るのかなーと思っていた。経験はないし、わからんしね。

朝起きたら、とにかく大変な状況で、泥を出さない！と思って、ドアを開けようとしたが、開けられないのです。裏も表もどこも開けられない。あそこはガラスが割れている。これは大変と思いました。

それから長靴を履いて家の中を歩く。いきなり畳がぶよぶよ。こりゃ畳を出さない！と思いました。が、どうしようもありませんでした。いっぱい泥で畳の上は田んぼに入ったような状態でした。

「わーこりゃーすごい！」と思いました。まさかこんなになるとは思わないもの。

息子は仕事に行く日なので、それどころではないので、電話をかけようとしたが、電話は使えない。携帯で休みを取ることにした。とにかく畳を上げようやーということにしたが、私の力ではどうにもならん。それから私は、泥だしです。

スコップは地下にあったんですが、スコップは取りに行かれないし、箒では仕事にならんし、戸が開かないから、外に出られない。警察や消防などから「避難しなさい」と言う声は聞こえないし、外の放送は聞こえなかった。とにかく雷がいつまでも鳴るねーしかなかった。「避難しなさい」と言うことは言っていたようですが、私の耳には聞こえなかった。

そのまま、明るくなってもここに居た。何かあるので食事はできた。水はだめ、電気はだめなので次第に食べるものがなくなっていた。2日ぐらいしたら公民館へ食事をもらいに行った。風呂には入れないので、水で体を拭いてしばらくそうしました。洗濯は、バケツに水を入れて洗剤を混ぜてその中で洗っていました。川にゆすぎに行っていました。泥水だけ朝早いと少しはきれいなので、そこでゆすいでいました。そのまま絞らずベランダに干していました。

それから数日たってから、「車が近くまで来れる」と言うことで、息子が連れにきてくれました。

息子の嫁さんが、洗濯は川ではいけん。風呂と食事と洗濯、みなしてくれました。それから家に帰ったんですが、きれいにしてもらっていました。どれぐらいおらせてもらったかね。8月いっぱいまでいなかったけどほとんどいましたね。8月の盆過ぎには水が出るようになって、「やったー」と思いました。トイレに困っていましたから。裏には温水器が半分浸かっていました。歩いたら埋まる。抜けんけえ手をついたら、又ここまで汚れる。そういう目をしてきた、水が出るようになって、最後に電気が使えるようになってトイレが使えるようになって、そのときはうれしかったです。

その間は、息子と嫁さんと孫と嫁さんの親戚の人が来てくれて、何日か縁の下の泥を出してくれました。私は水をもらいに行った

りして何日か過ぎましたが、向こう側の縁の下の換気口を壊して、ブロックがあの下に入っていたんですよ。それが斜めになったりしていたので、泥出しに何日かかっていたんですね。泥出しは何日かかかってしまいました。息子と一緒にですが、仕事があるので、はじめは1人でやっていたんですが、職場の人が見に来られました。公園のところにこれしました。その間4〜5人が泥出しです。ベットもだめになる。扇風機は3台流される。室外機は流される。プロパンは埋まっている。温水器は半分埋まってしまう。植木は皆流されていた。

今回の災害は初めて出会った。私は、3歳の頃20年前（17年生まれ）真ん中の道が流れたことがあるのを覚えている。私は生まれた場所はすぐ近くだから覚えている。私は嫁に来てここに家を建てたのですが、20年に流されたことがある。どこかの納屋が流されたことがあると言うことは聞いたことがある。

そこにある「水害碑」は、明治42年の災害。昭和20年の災害、今回は3回目です。

私の覚えているのは公園のすぐそばに生まれたことから覚えていること。畳を上げたのを覚えている。黒い毛布を持って抱えて、上に避難しました。

全然知らずに、いきなりきたわけですから、テレビで言っていたが、「土が来るまで1分かかっていないそうです。」あのときは、水が流れはじめて1分かかっていないので早かったんでしょよ。

上が上がって降りた時にはもうここまで来ていた。とにかく出さない！と言うことで出したけど、ここまで白くなっていた。こはめくれていた。この戸が開かないのでがりがり何回もやっていたら、この戸が開きました。戸の下に泥がいっぱいつまっていたから。

近所の方がお手伝いに来ることはないです。近所の方も大変なので、それぞれが持ち前のことをする。

常会長さんが、回ってきてくれて「来るけー来るけー」と言われていたが、来られなかった。「先に道路を通さんといけんけー」と。「それからじゃー」と言われていました。

もう雷は恐ろしい、又なるんじゃないかという恐ろしさがあります。もう雷はいらんと思っている。

この災害から準備している物は、水といろんな物はあるけど袋にはつめておらん

一応目安で、「ここここにはこれがある。」というようにしている。リュックサックは弁当をもらいに行くのに使っていました。

坂町小屋浦四丁目

小屋浦地区住民福祉協議会 会長

出下一教

7月6日は、朝から雨が激しく降っていました。

7月4日は、雨は一時上がっていました。小降りになっていたと思います。

5日ぐらいいから雨が強く降り続いていましたが、6日になって雨が特に強く降り続き、6日の夜会議をする予定だった。6日の朝7時ぐらいに「会議の中止」の連絡をしました。

奥さんと一緒に、娘が2丁目にいるのでそこに行き、もう一人の娘が4丁目にいるのでそこに行く約束をしていました。

そうこうしているうちに、夕方避難勧告が発令された。一旦家に帰って、近所の高齢者の方の家に行って「避難勧告が出ましたよ。避難しましょう」と誘いに行って避難所まで連れて行きました。

その後、一旦家に帰って娘のところに行って、孫に食事をさせて、ちよっと時間をぐずぐずしていたら、外は道路には泥水がいっぱい流れていました。自動車で移動しようと思ったが、出られないのであきらめて、歩いて行かれるかと思ったが、歩くのも無理な状態だった。家の中で山側から一番遠い2階の部屋で子供と孫には「ここで待機をしとけ。」と言った後、私は近所の方をあとちに行ったりこっちに行ったりしていました。水が出ていたため行動範囲が100mぐらいいしか通れない状態で、水が出ていない区域は行ったり来たりしている状態でした。その辺だけたまたま被害が少なかった。

しかし、ちよっと行ったところは、道路が川の状態に水が流れ、ごろごろ音がするので、「石と一緒に流れているから川を渡って

向こう側に行ったらいけんよ。行ったら怪我するよ。こっちで待機するんよ。家におりんさい」と言っていました。そしたら、停電になったもので、周りが見えない。懐中電灯で照らしても遠くが見えない状況でした。そのとき自動車が1台通ったが、これが動けなくなって、それが川の向こう側だったので、こっちに来らそうと思ったが、川が濁流のようになっていたのでやめた。と言う人が近所におられて、その人はこっちに来れないと言うことで、道路の向かい側で家の2階へ避難した。

私たちがいた側は、川の反対側よりも安全な場所であったが、やむを得ず道路の向かい側で家の2階に入り避難したことになった。私たちはどこも行かれないのでそこら辺をうろろとしていました。

夜遅くなって一旦家に帰って休みました。翌朝、7月ですから5時頃明るくなつての外の様相は、一帯が土砂で埋まり、これまでは全然変わっていました。川の方からどんどん水がくるので、川の向こう側は見えない。安全な高いところから川の状態を見ると川は土砂で埋まり、上を水が流れている。

7月7日は早くから川の周りを見て、これは大変なことだと。危ないのでどこにも行かれない。徐々に明るくなって、様子も徐々にわかったけど、電話で状態はどうか？とか無事かとかかかってくるが、全体の様子がわからない。停電していることから、テレビやラジオから小屋裏のことも坂町も広島も全然わからない。

い状況でした。ラジオも娘のところにはなかったです。

昼ぐらいいになると。少し水の量が少なくなつて、避難できる状態になりました。消防団から「ナフコへは避難してくれ」と言う話があつて、小さい子が二人いるので、私一人でもうにもならないので、途中道路を川のように流れていてロープが張つてある位置を小さい子を抱っこしてわたりながら、ナフコへ行きました。

娘の家の隣におばあさんが1人おられて、「おばあさんも避難させないといけん」と言うことで、帰つて「避難しましょう」と言う「歩くのが難しいので、車いすがないので、負ぶつて行くことにしたが、荷物を持つて負ぶつて行くのに1人では無理なので、たまたま消防団の人がおられて、消防団の人に「おばあさんを負ぶつて行きたいのだが、手伝つてもらえないか」ということで、行きました。途中ロープを渡して川を渡つてるところを渡つたところに、たまたま消防の車があつたので、途中からそれに乗せてもらつてナフコまで行くことができました。ナフコについて避難しましたが、そっちのことが気になるので行ったり来たりしながらしていたら、徐々に被害状況が明らかになつて、3丁目と言うところは水がすぐくあつて抜けなかった。

ここらは土砂で埋まっていました。

土砂の所は、歩けるけど土砂が2階の下まであり、2階のところを歩いているようでした。道が全部そうなつていた。自動車や自転車などは全部使えない状態で歩くしかなかったが、最初の10

日間ぐらいいは毎日1万〜4千歩ぐらいいは歩いていました。ナフコからこの小学校へきて、あちこち見て回つて、そのうち雨があがり、徐々に歩かれるようになっていった。それでも長靴を履いて水は入ってくるような状態でした。

「月曜日10日にボランティアセンターの立ち上げをしたい。」と言うことで集まつてほしいと言うことがあつて、そのときに小屋浦地区の体制をどうするか？と言う話し合いがありました。

小屋浦地区は13町内会があります。町内会長に集まつてもらつて、ボランティアセンター立ち上げに皆さんの協力が是非必要なのでお願いしたいと言うことを伝えました。避難所になっていた体育館に集まつていただきました。13日からボランティアの受付が始まりました。町内会長は、町の社協から依頼のあつた「ニーズ表を持つて各世帯を回つて調べてほしい。」と言うことで2日間調べ終わりました。ニーズ表を町社協へ出して、小屋浦でもボランティアの受付が始まりました。当初は坂町から職員を派遣してもらうことになっていましたが、道路が通行止めになつていて、これなかったこともあるし、通れるようになってもすごい渋滞で、坂から1時間半ぐらいかかっていた。ボランティアに来る人がすごく少なくて、当初は10人とか20人とか言うそのくらいでした。そこで中々進まなかったけど、道路が徐々に渋滞が解消されると、8月になってボランティアの方も増えてきた。一番多いときは500人以上になった。

「最初に道路をしてほしい。それできないと家まで帰れない。」
と言うことで道路から始めた。すると「帰っても玄関先まで泥があるのだから家に入られない」と言うことで、道路の砂を先に除去してほしいということで、重機などで除去することとした。するとボランティアの方にしてもらい仕事の内容も次第に変わってきた。

私は、避難所の運営には関わっていない。

災害の復旧の話は、町の方からの説明会がありました。復旧ではなくて防災対策はどうするか？この地区は2回説明会がありました。これからの支援の方法などいろんなことで、質問が出たりしました。上流の川を直すとか、砂防堰堤を作るとか？復興になるのなら、それも復興の話でしょうが、元々おられた方が少なくなって、元に戻るようになればいいが、安全な地域に住みたいとか、高齢化が進んでいることから難しい問題です。しかし今住んでおられる方の安全を守る必要があることから、今から町の方との話し合いをして、小屋浦は住みやすいし、住みたいという意見が多い。今はやむを得ず仮設住宅に入っているが、早く帰ってきたいけどどうしたら早く帰ってこれるか？高齢者の方は、家を直すのに経済的な面もあるし、中々難しいよねという意見が多い。どうやったら早く帰られるか。難しいところです。

兵庫県立大学の阪本先生や学生さんは最初からお見えになっていました。随分助けてもらいました。

私は、ボランティアのところしかきていないので、よくわからないが、娘のところも被災していたが、2階に1週間ぐらい避難していたので、よくわからない。体育館はスポットクーラーは早かったし、段ボールベットや布団など充実していました。布団は、体育館の体操マットを使用しておられました。

小屋浦は、水害碑というのが上流にあるんですが、明治40年、戦後すぐ昭和20年にもありました。その間の昭和時代にも1回あったと聞いています。水害碑があっても、それがあつたことを知っている人が少なかったと思います。どこにあったか、今回初めて知った人は多かったと思います。

砂防堰堤が壊れてこのような大災害となりましたが、新しい砂防堰堤を今回壊れた堰堤の上流に作るという計画があつて、取り付け道路の工事は始まっていた。中々進まなかったのは、たぶん予算が取られなくなったのではないかと思います。完成時期は随分遅れて2年後には完成する計画で、それは当初の計画で、実際には2年で完成するかどうか？そういう思いはある。

上流の人は「心配で早く完成させてほしい。」という要望はありました。

今回の体験談は沢山の方に聞いてください。私も期待しています。

(平成30年9月26日 柳迫 聴き取り)

坂町小屋浦

匿名

題目「こっちにあった川は砂の山になった。」

(問)状況を教えてください。

7月6日は、放送があったけど、この川の音で聞こえない。何言っているかわからない。ここの道路を「避難しましょう」というのが通った。通って間も無いとき、山の異様な音が2回あった。ちょうど2階に居ったから。それからすぐに木やら砂やら一面に川になっていた。恐ろしかった。家の壁がバリバリ割れるし、向かいの家が潰れるのは見えなかったけど、自宅の壁が崩れたり、川が溢れて全部川になるのは恐ろしかった。家の鴨井(1.5m)まで砂が来とった。1階は全部埋まってしまった。

私は2階から119番に電話して、「怖いから助けてください」言ったら、「今忙しい。何処もなんですよ。」と言われた。私らはよそがわからんので、ここだけだと思っちゃーないですか。「朝まで我慢しておいてください。」言われた。

朝まで1階には下りられんし・・

翌朝、ここの人はみんな避難していた。こっちにあった川は砂の山になって、向こうが川になっていた。向こうの山のほとりが川になっていた。前の道路は水が引いて、砂だけになっていて、歩かれた。ここを普通に消防団の人が歩いて上がってきた。

明るくなった頃、消防団の人に抱いて助けてもらいました。私

は、裸足で着の身着のまま、バスタオルとタオルが2枚ほどあったから鞆に入れていました。裸足で歩いていたら、ここのチート良い家の人がつかけてくれちゃったので、それを履いてナフコへ避難した。私ひとりじゃケーね、裏の人と上の人が懐中電灯で「元気か？」言うてコーやってくれるんじゃないけど、解らんのよ。恐ろしいのと一緒に。

「朝になっても返事がないというて心配しておる。」と言ってくれたけど。当時は私よりずーと上まで砂があるんじゃない。ここに穴を掘って出入りしていたんです。今のように低くなかったから。全体がずーっと砂があっただけです。屋根まで砂がありましたから。その家だったら2m以上ありますね。軒先の樋の所までありました。土が。

避難してナフコに行ってから、その後、体育館へ避難して、様子を見に来たりしていました。

盆ごろには町営住宅に決まったので、ぼちぼち荷物を運んできました。中々恐ろしい目に遭いました。

(問)雨の状態はどうでしたか？

雨そんなには降らんかったと思う。でも2階から見たら、川の高さがまだ1mぐらいあると思っていた。すぐその若い旦那さんが、まだ1mぐらいあるから大丈夫と言っておられた。それが一気に崩れて来て、砂防ダムが崩れたのひどかった。

今日は開けっ放しにしているから家の鍵を締めに来た。

お金はどうすればきれいなるかのー？

きれいに洗っても、錆びたようになってる。

お札でも硬貨でも新品に変えてくれるが、農協は嫌うと思うで。

（平成30年9月 柳迫 聴き取り）

小屋浦二丁目

小屋浦二丁目第三町内 会長

當 田 英 明

題目「協力〔小屋浦2丁目〕」

住民は結束して道路を開き、2次災害の防止を町に要望した、一方片付けが終わった地区は、空き地が増えそうで、活性化に向けて知恵を絞る必要がある。

復旧後も内外の力を合わせて

他の町内会長同様、自分のことは後回しにして、町内の復旧活動に奮闘自宅をボランティアの休憩所に開放した。住民の結束に復旧への手応えを感じつつ、将来は外の力も必要だと語る。

雨水が渦巻く

7月6日1階で夕食を食べていた。18時半ごろから雨足が激しくなり、道路が冠水し出した。19時を過ぎるとさらに激しくなり、

泥水が道路まで入り込み、家屋内のトイレ、ふろの排水口や壁の隙間からもドンドン泥水が吹き上がってきた。裏の1階に住んでいる親子3人が窓を叩いて助けを求めた。

窓しか開かず、びしょ濡れの3人を部屋に引き上げた。あまりにも急に増水したのでテーブルにテレビを引き上げるのが精いっぱいだった。

そのうち、断水になり、22時過ぎには電気も消えた。なぜか郵便局とその向かいの家だけが明かりがついていた。自家用車も水没し、ショートからかライトが朝方までついていた。7時40分に大雨特別警報が出たようだが防災無線は聞こえず、後に午後7時45分に砂防ダムが決壊したと報じられた。

4丁目の人は家が崩壊する大きな音が聞こえたそうだが、この辺は全く静かだった。家の前で濁流が渦巻いていた。

朝方、2階から見える山肌は大きく削られて、大量の土石流が起きたと想像できた。

以前も、大雨で床下が浸水したため、土のうも用意していたが、10m以上の砂防ダムが決壊するとは、大半の住民が予想もせず「まあ大丈夫だ」と考えていたと思う。

翌日朝、自衛隊が安否確認で町内を回り、16時ごろ広島市消防局が来て、ボートなどで2階にいた独居の高齢者たちを避難させた。

8日昼過ぎ、やっと家から出られた。7日は呉道路を救急車や

消防車が走っていたが、「いやに静かだなあ」と思ったら、水尻付近の土砂崩れで呉道路・JR呉線・国道31号線のすべてが通行止めとなり、呉からも通行止めで、陸路は断たれたと伝わった。

上流を優先

私の携帯電話も、自宅の固定電話も3日以上繋がらず、TV・ネットでは悲惨な情報ばかりで、心配した大阪の長男は、8日新幹線が通常運転すると来広し、レンタカーで坂まで来て、通行止めの国道を迂回して歩いて夕方に来た。私達夫婦も坂まで歩いてレンタカーで息子が予約してホテルに潜り込んだ。長男は9月初旬まで、重機のレンタル手配や復旧活動に携わった。

5日間で、水尻の迂回道路が仮設され、12日には大渋滞（広島→小屋浦3時間）でも、小屋浦のナフコまでこることができた。迅速な迂回路の設置とナフコの屋上駐車場の開放は非常にありがたく、ボランティアの受け入れのできるようになった。

10日に各町内会町（住民協会長他12名欠席4名）が集まり、ボランティアの受け入れ準備をした。7月14日からの3連休は、他の被災地に何百人とボランティアが集まったのに、大渋滞に小屋浦のボランティアセンターには、80人弱しか来られず、その方全員は2次土砂災害を防ぐためにも、被害の大きな4丁目に入っていたのだ。

ボランティアセンターとは別に、二―三町内会の住民がライン

で呼び掛けの応じた有志十数人が自転車で来られた。このボランティア集団は「二丁目サポーターズ」と呼称して、毎週末に二―三町内会の復旧に活動していただいた。

大規模半壊の我が家の一階は、全て家具類を撤去した後、クレーンが使えたため、ボランティアさんの休憩所として使っていた。町内の土砂撤去などが一段落したお盆過ぎから、我が家も屋内外の土砂撤去をお願いした。

住民総力で土砂撤去

7月17日、行政、ボランティアなどの支援が不透明な中、「自分たちでできることは自分たちでしよう」と、臨時の二―三町内会を開き、翌日から町内の住民で、年配者の独居世帯の被災ごみを出すことから、「近所隊」（お助け隊）と銘打って活動した。

猛暑の中、一輪車での撤去は困難を極めた。それでも今までの町内会行事の参加者数以上の20数名が撤去作業に汗を流した。他地区のように住めなくて避難する人が少なかったから、集まっていただけのこともあった。

猛暑でした。作業時間以上の休憩が必要でした。その休憩中のおしゃべりが良かったと参加者から聞きました。

豪雨災害の前は、あいさつ程度だった地区の皆さんが助け合い、支え合った活動になった。人間には困難に直面すれば、助け合うことが本能的にあるのかもしれない。

道路上の流水が止まらない。家屋内に溜まった水も、排水ポンプで汲み出してもすぐに溜まってしまふ。家屋への流水が続くと家の土台が傾く危険性も心配した。

隣の町内で、道路上の流水を止めるため。排水溝の蓋（グレーチング）を開けて、流水を排水溝へ導いていた。我々もグレーチングを開けて、道路上の流水を側溝に流し込むようにした。町内100カ所余りのグレーチングを町内の上と下からすべて開口して行った。路上に1m余り溜まった土砂の下グレーチングを探して順番に開け、側溝内の土砂を掻き出していった。徐々に路上の流水が側溝に吸い込まれ。家屋内の溜まった水も減っていった。土砂・被災ごみの撤去に軽トラックを2台レンタルした。広域災害のため、近隣にはなく廿日市・広まで借りに行った。4駆のダンプが効率が良いが当初は入手できなかった。

7月21日、やっとレンタルしたウンボと3トントラックが京都から届いた。町内にウンボが操作できる人がいた事と、町内のご親戚が5時間かけてウンボを持ってこられて、2台で土砂撤去作業を加速させた。

7月25日 前触れなく大型ウンボとダンプ2台が町道の撤去作業を始めた。国交省が依頼した業者だった。8月3日までに二―三町内会の町道の土砂はほぼ撤去された。マイカー出勤できず欠勤していた住民数名が職場復帰できた。

側溝の土砂を完全に撤去しないと、次の大雨に対応できない。

再々の台風予報に側溝内の土砂撤去を急いだが、5m間隔のグレーチング間の土砂撤去は困難であった。

8月3日、大阪からレンタルした大型バキュームが届いた。当初操作に苦労したが、威力は抜群であった。依頼のあった二―三町内会以外の土砂、泥水撤去にも携わった。吸い取った土砂類は、当初は小学校運動場へ捨てられたが、途中から水尻の仮置き場に変更になり、移動時間など作業効率が落ちたが、復旧作業はかどっていった。

2丁目の私達の地域は、土砂・砂ばかりなので、まだスコップが入りやすかったが、4丁目は岩・流木交じりで、3丁目はヘドロ状態で土砂や被災ごみ、流入物は大変だと思う。地形で被害の状況が異なった。

増える空き家

二―三町内会は、41軒中9軒だった空き家が、今後は20軒弱に増えて、町内の4割強が空き家になりそうだ。子どもの家に引き取られたり、施設に入ったりした後、空き家をどうするか迷われている方もおられる。空き家・空地を復興共同住宅などに活用できれば、小屋浦に帰ることを迷われている方々の復帰にもつながると思うのだが・・

9月15日に、広島市のNPO法人MCNの元木昭宏さんが、中区で「防災・減災・作戦会議」というテーマでワークショップ

を開いた。「2丁目サポーターズ」の代表者で7月中旬より復旧ボランティアとして、お仲間とご奉仕して頂いた方々である。

そのワークショップで、小屋浦の復興にトレーラーハウス活用などの提案があった。製作費は1軒300万円〜1000万円。

移動できる利点を生かせば被災者が仮住まいとして住み、その後、地区内の空き地にそのまま移動することもできる。2人なら十分暮らせる。住み慣れた元の場所に住みたいが断念している方も小屋浦に住むことができる。若い人が一時的にトレーラーハウスに住んで、自分のやりたいことに活用することもできる。各自治体でトレーラーハウスを常時共有して、災害が起きた被災地に集めて使うような活用の可能性も考えられる。

これまでは、災害ボランティアは土砂などの撤去をする復旧支援だと思っていたが、被災地を今まで以上の町に再生する、復興ボランティアの活動を教わった。外部の助けや若い人の発想なども復興活動には必要だと感じる。

復興はこれからが本番。小屋浦はまだまだ自然豊かで、夕日は本当にきれいと感動したボランティアさんが多くおられた。西照寺前の天地川はホタルが舞う清流だった。自然の環境に戻せば光の乱舞が再び見られる。都市に近い集落で桃源郷的な環境が再生できれば、多くの老若男女が「行ってみよう！定住しよう」と、関心を引くような、地域コミュニティに再生できる可能性がある。

小屋浦再生を住民視点で、多くの人達の思い、知恵を集めてみ

んなで歩んでいきましょう。

※この記録誌は平成31年完成を目指して作成中

『災害遭遇く避難く復旧・復興く希望』

新たな地域コミュニティ創成へ』

6日夕刻より、西日本に集中豪雨が発生し、想像絶後の甚大な被害が発生した。

在宅していた坂町小屋浦の被災状態と、その後の復旧・復興を経過及び写真は別紙を参照していただき、以下はその体験を基に、自然災害への対処過程は「知る・逃げる・助けあう・創造する」が考えられる。逃げることでできない自然災害を減災し、安全を担保した生活環境と、安心して生活できる地域コミュニティの再生を狭量ながら考えてみる。

（キーワード…よそ事・史実・正常性バイアス・特別警報・防災情報）

第1章

(1) 平成30年7月豪雨災害をどこまで予見できたか？

① 6日日中より、今までにない大雨に対する警鐘が発令されていたが、人は過小評価する傾向があるのか、これほどの災害を予想した人がどれほどいただろうか

② 4日午後台風7号が日本海で温帯低気圧に変わり、ここから

延びる梅雨前線が西日本へ停滞していた。ここに暖かく湿った空気が流れ込み続いて、広島県では6日午後から7日朝にかけて大雨となった。

③小屋浦では、7日夜の1時間の雨量は60mm前後、その前の3日間の総雨量は400mm以上が推定された、と言われている。雨量計が設置されていないので推定。

(2) 過去の豪雨・土砂災害の教訓が生かされていないのは。

①明治40年の土砂災害で44名の死者、昭和20年の豪雨災害では4名死亡した。

②崩壊した砂防ダムは、築72年、高さ11.5m、幅50mの石積み構造、せき止め能力は9000m³で、その4倍の能力を持つ2基目を計画していたが、今回は2基目の能力を合わせた以上の土石流が発生したと推測される。

③今回の豪雨で、河口から1500m上流の砂防ダムが崩壊し、5万m³以上の土石流が800世帯の集落を襲った。15名死亡、1人が行方不明となった。亡くなった16名の平均年齢は78歳であった。年配者は小さい頃「この辺りは100年に1度、大事（大ごと）がある」と聞かされた。「川幅は広がり砂防ダムもあり、今は大丈夫だろう」と思った。

④2008年（坂町水害資料展）で、山と崖に囲まれた地形では、集中豪雨に遭遇すると甚大な被害は必至。と警鐘していた。その歴史を知っている方々でも「長年何も起こらなかった。

た。実際に起こるとは予想しなかった。」と異口同音にこたえる。

第2章 早期避難・基本は自助

(1) 大雨警報、避難勧告が住民には届かず、早期に避難行動に結びつかないのは

①6日 坂町は、15時に「自主避難所」開設、17時35分「土砂災害警戒情報」発表、17時40分「避難勧告」発令、19時40分初めて坂町に「大雨特別警報」が発表され、「避難指示（緊急）」が発表されたが、この時点では、住民の多くが避難できなかった。

②避難所になっている「ふれあいセンター」に避難した人は住民の1%以下。5時に避難所へ行った人はゼロ、一旦家に帰り、又行こうとしたが、すでに無理で結局家に居た人もいた。

第3章 ライフラインの回復、近助（近所）、共助活動

第4章 復旧から復興へ、妨げる要因

第5章 新たな地域コミュニティの創生にむけて

第6章 心身のケア、見えない被災の傷の手当て

第7章 むすび

平成30年7月豪雨：広島県安芸郡坂町小屋浦：被災状況＝復旧→復興⇒希望へ



7月7日朝、少し水位が下がったが外には出れない。8日昼前に歩ける所ができる 个

7月6日夜半避難する車が転落 个



7月8日 1m土砂が溜まる。流水が止まらない 个



鳥居は取り除かれる



7月14日西昭寺本堂は無事だ、1階は天井まで土砂 个





7月8日 2度目の土砂崩れで呉道路・JR・国道が通行止め↑



7月15日流水の中、人力で搬出 ↑



7月18日 まだボランティア入らず、町内総出で撤去作業：暑い↑ 人力では限度、軽トラ2台リース、ダンプが欲しいが・・・



7月22日待望のユンボ\$ ダンプ京都からリースして到着!! 50cm土砂の下の側溝を探して開口、流水を止める ↑



7月23日 上の方からも、ひたすら側溝を開け流水を止める ↑



7月23日 町内の親戚の方もユンボで応援、ありがたい ↑



8月10日ボランティア多数支援に、ドイツの女性も ↑



8月13日アフリカからの留学生もボランティアに ↑



7月28日国交省委託の業者、町道の土砂撤去 ↑



8月30日町道の土砂撤去の後も側溝の土砂を排出 ↑



7月30日料理の提供ボランティア、数回実施 ↑



7月20日～自宅をボランティアさんの食事・休憩場所に ↑



8月4日～1ヶ月、大阪からバキュームをレンタル ↑



8月6日8:15↑今年もお寺でお勤め後、原爆碑にお参り。



8月4日↑NHK夕方、被災1ヶ月経って・・に放映。



洪水は仕方ない 僕らで何もできない
でもこういうことはできる



8月30日↑町内は一段落、やっと自宅の泥出しをやる



8月15日元リビック選手・為末さん取材・・・ ↑



10月5日↑NHK被災3ヶ月、70分の生番組に出演・・



8月30日直木賞作家重松清氏にインタビュー↑



10月5日19:30～NHK生番組
スタッフ約4～50人・・・
沢山の人で制作されている



10月11日西本願寺
ご門主、災害お見舞い
に西昭寺に↑



10月20日復興祭にさだまさしさん、災害碑にもお参り↑



10月21日縮小して秋祭りをを行う↑



10月25日↑歌声コンサート

10月、長崎から、
精霊船が届く
毎月6日灯ろう流しも
継続実施中



遅くまで活動されたボランティア
さんを夕日が癒す↑



10月10日ボランティアで、アフリカ音楽の集い↑



自然に囲まれた小屋浦：復旧から復興・希望へ 感謝も抱いて、みんなで進む↑

②4 【呉市天応宮町】

天応宮町

吉川 三治郎

題目「2018年7月6日 金曜日の夜」

夕方、家内が仕事から帰宅してから焼山に買い物に行き6時半頃に駐車場に着いた。横の路地が水に浸かり通れそうもないので、他の路地を通り帰宅する事にした。

その時に路地横の溝を見るといつもと違い水位が異常に高く、家内と「こりゃー浸かるで！」と話しながら帰宅した。

帰宅後、夕食を食べ、8時頃テレビを見ていると、外をジャブジャブと音を立てて歩く足音が聞こえたので、夕方のことが気になり、カーテンの隙間から外を見ると長靴をはいた人が通っており、くるぶし辺りまで水がきているのが見えた。

私は自宅の基礎が低いので床下に水が入る危険を感じて、玄関の扉を開けると真っ黒い泥水が入って来た。そばの風呂場を覗いて見ると、排水溝から真っ黒い泥水が噴き出すように入ってきて、脱衣場の洗面台の下扉が開き泥水が噴き出して来た。慌てて、家内に犬（ラム）を2階に上げ、まず大事な物を台の上に置こうとしたが、どんどん泥水が上がって来たので、大事な物から順次2階へ上げることにした。

次第に水位が上がってきて、1階の大事な物を探している時間

が無い。引き出し毎に抜き出し 階段にいる家内に渡しながら2階へ上げた。

1階の物を探していると、膝上まで泥水に浸かり、冷蔵庫が浮き上がった。次にレンジ台が倒れレンジが流し台にぶつかり、ガラスが割れた音がした。と同時に、電気が消え真っ暗になった。冷蔵庫を横に押しやり畳の方に行くと、畳が浮き上がり倒れそうになったのであきらめて、2階に避難した。

窓の外を見ると近所の人たちも真っ暗な2階に避難するしかなく、みんなで声を掛け合い励まし合った。

家内の両親の家が線路沿いに有るので、携帯に電話するが呼び出し昔はするが出ない、行く事も出来ない、子供たちとは連絡が取れ無事な事を知らせたが、義両親に連絡が取れないので、子供たちにおじいちゃん・おばあちゃんに連絡を入れる様に頼んだが出ないと連絡が入る。

心配事が次々と出てくる。娘の結婚式が7/8日曜日に予定されているが、真っ暗な中家内と話す、2階に食料や水・トイレも無い

何時頃か覚えていないが、消防がボートで回って来て「大丈夫ですか？」と問いかけられ、「大丈夫です。」と答えると、「また後で来ます。」と言われたが・・・来なかった。

後で分かったことだが、ここより上の方が土砂で大変な事になっていった様だ。

夜中、真っ暗な中、水は無くトイレも無いので家内は辛かった
様だ、外が、明るくなり状況が良く見える様になった。お宮の方
から泥水がどんと流れ込んでいるのが分かった。
線路の方を見ると、線路が防波堤のようになり宮町が溜池のよ
うになっていた。

夕方、町内会長と近所の息子さんが腰まで泥水に浸かり、食料
と水を持って来てくれた。





天応宮町

大之木 美代子

(問) 7月6日の様子からお話し下さい

いつものことですが、雨がひどく降るような時には、友達が来て泊まってくれます。

その晩も(6日6時すぎに)友達が来てくれることになったので、夕ご飯を先に食べていました。その友達も夕食を食べてから来てくれました。

その友達が「どうも今回の雨の降る様子は、いつもと違う。」と言って、外に見に出られました。そして、「これはおかしいは。いつもと違う」と言って帰ってきたと同時に、家の玄関へ水が入ってきました。

直ぐに「靴を上げないといけんわー」と言って、靴を一つ一つ上げていたが、これでは間に合わない、「これは大変なことだー」ということになって、2人は2階へ上がりました。その後すぐに停電になって、真っ暗になったので、ろうそくを取りに1階へ下りました。

友達は懐中電灯を持って来ていたので、2人でトイレに行くのも、何もこの懐中電灯だけで一晚過ごした。外を見たら、線路(JR呉線)の向こうは電気が付いている。うちの方だけが停電になっている。消防やら警察が線路を通るのが見えました。そこで私は一生懸命手を振るが知らん顔で、無視されたと思いながら1晩過

ごしました。

その晩は、2階へ何も持って上がることはできず、明くる朝、1階に下りてみると、畳は浮いて、あらゆるものがゆらゆらしていました。冷蔵庫も浮いているので、食べるものが無い。その時うちの町内会長が前を通られたので、「すいません。飲みものも食べ物も無いんです。」と言うと、「困った。私の所に持ってこれない。まだ水がいっぱいあるので、庭の中にある植木が邪魔をして、ボートが家に近づけない」ということでした。自力で出ないといけないということで、外壁伝いに線路まで行くことができました。それから市民センターへ行って1晩泊まりました。

明くる日、娘が熊野町から山越えして来てくれた。娘の家には友達を泊めてあげることができないので、友達は安佐南区緑井まで連れて行ってあげて、私は熊野へ帰った。

私は、何もなくなったので、服から何まで全て買ってもらわないといけん状態だったので、スーパーへ入って私の服を娘が買ってくれて、熊野へ行った。

あくる日、娘に連れられて家を見に帰ると、少し水が引いていた。それから1ヶ月毎日ここへ通いました。そして、娘と掃除をしました。近所の方が沢山手伝ってもらいました。古い家なので畳の間が多いことと知らない物が沢山あることで大変でした。男の人が沢山手伝ってくれました。仏壇も喪服もダメになりました。それまでは、1階だけで生活していたので大事なものは全て1階

にありました。

「災害が落ち着いたら、再び住みたいと思っていたら、権利を大矢さんが挙げるので、出る時は土地代を払ってください。」と言われたのでいい話と思いましたが、家を砕くのに、500万円ぐらいかかると言われたのでやめました。それなら、「仮設住宅に入って、2年後に民間の住宅に入った方がいいよ」ということにし、大家さんに「出ることにします。」と言って、仮設住宅へ入っています。

今は、おそろしい経験をしているので、早く落ち着いた生活をして、2年後のその時考えることにしている。ここには3人の友達がいるので、そうになったら「近くにアパートを借りようかね。」と言っている。ここに居る時は3人とも「楽しく過ごそうか。」と言っている。

私は、年金だけではしんどい。自分もちょっとしたこずかいは欲しいので、2か月休んだけど、待ってくれていたアルバイト先が9月から行っている。

最後に、7月6日の雨の様子は全然気が付かなかった。友達が、「今日は雨がひどいようなから、泊まらしてね。」と言って来てくれた。あれから、これな1に、と驚いた状態になったが、テレビもラジオも付けていないが、2人だけだったので寂しくなかった。

(平成30年10月4日 柳迫 聴き取り)

題目「10日分の備蓄をしていました。」

わたしは、宗教「真光」という団体に所属しております。

何十年も前から、このような「天変地異があるから、各自で1週間分とか10日分の備蓄をしておきなさい」と教えられてきました。世界中で色々な事が起きているから、「自分で自分を守るように準備しておきなさい。」ということなのです。

以前は「3日間自分で生き延びるように、準備しておきなさい。」という教えでしたが、今では「2週間分を備蓄しておきなさい」と教えられています。

私達のような環境でしたら3日分で大丈夫ですが、大雪だったり、大雨で孤立したりすると、2週間あれば心強く生活できるのではないかと思います。でもその2週間というのは、「非常食ばかり準備するのではなく、日頃食べているものを余分に備蓄しなさい。」ということなのです。

お米を買っても、1個余分に買って2階に備蓄し、次に1個買ってきたとき2階に備蓄し、1個食べるというようにします。毎日非常食ばかりになると普段食べ慣れていないから、賞味期限前になると味が落ちます。常日頃自分が食べているものを少し余分に買ってきて、備蓄しなさい。ということなのです。

いつ災害が来るか分からないものを準備しますから、粗末にし

がちであったり、捨ててしまいます。普段食べ慣れているものを多めに・・・ということなのです。

今では世界中に体験談があるので、例えばお休み前にお湯を一杯飲むとか。それを習慣にしていたおかげで、次に日にポット1杯の水があるのが非常に大切だなーと思われると思うんです。どれだけ役に立ったかわからないと言われるマンションの人は、ちよつとづつちよつとづつ備蓄が大切だと思っています。

(問) 命をどのようにとどめていましたか？その後自分の生活はどうでしたか？

備蓄は沢山ではありません。非常用トイレは水が来て、10分ぐらいで1mぐらいになりましたので、逃げるとか何とかということは、頭にありませんでした。

(問) 7月6日夕方、雨が激しくなりましたが、その時の様子を話して下さい。

8時前、雨もよく降って放送もあるんですが、放送はドンドンあるんですが、窓をあけても雨の音で放送が聞こえない。何か言っているのは解るが、雨の音で何を言っているかわからない。朝からメールに「高齢者は早く避難しなさい。」と言われるけど、私は崖崩れの災害と思って、高い所の友達は、避難しただろうか？と心配していました。自分のお家は、避難することは考えず、安心していました。

水害になる前にお隣の方が「新本さん、土のう袋を分けてもら

えませんか」と言われて来られました。土のうをどうするのか
なー?と思いました。が「いいよ、土のう分けてあげるよ。持って
行って上げるよ」と言って玄関へ出ると、庭に水がいっぱいある
んですよ。水がいっぱいあるので、スリッパではだめなので、雨
靴を取りに帰ったんです。長靴を履いて、外に出たらもう道には、
長靴の中に水が入るほどの深さになっていました。

道路は歩けないので、「悪いけどもういけない」というと、「も
ういいよ。玄関へ水が入ったから要らないよ」と言われました。「土
のう要りません。」と言いながら、携帯で話していました。

そうしていると、水がだんだん深くなるので、「お父さん大変
だー水が来よる」というとお父さんは「毛布を持ってきんさい」
というんです。毛布はあるから、玄関を持っていくため、リビン
グに行くと、もうリビングには水が入っていたんです。

「お父さんリビングに水が入っているよ」というと「じゃー毛
布はいらない。このじゅうたんを上げよう」ということになり、
じゅうたんは小さいが値が高かったので、じゅうたんをたたんで、
ソファアの上に置きました。応接テーブルを食卓テーブルの上に
あげて、私は、カバンと先程沸かした麦茶を持って2階へ上がり
ました。せいぜいそれくらいでした。いつも持っていくカバンだ
けでした。「そこへ梅干しがあるから取ってー」「そのコーヒー
を取ってー」と命令していました。階段の上で主人に「これ取っ
てー・これ取ってー」、「紙袋のお米を高い所へ上げてちょうだ

い。」と言って2人2階へ上がりました。

絨毯はソファアの上に置いていたけど、端が泥水に浸かりだめ
になりました。ソファアは浮いていました。

梅干しと扇風機と缶コーヒーと配達されてきたパック醤油が階
段にあったものを2階へ上げました。テレビは次の日に主人が水
の中に入って持って上がりました。食卓テーブルの上に置いてい
たため、テレビは助かりました。

だから、貴重品とかは一切気にかけていません。普段自分が持っ
ているものと目に見えるものだけです。

次に日になっても貴重品とかは気になりませんでした。でも主
人は次の日に、停電の時に懐中電灯は目の前にあったが、ずっと
付けておく訳に行かないから、キャンドルにマッチを添えておい
ていたのを使いました。非常食品を置いている所へディオデオ
でもらったランタンを使って1晩過ごしました。

でも、落ち着かないので、そわそわした気分でその麦茶をコッ
プに入れて飲んでいました。

翌朝、まだ1m位の水深でしたが、主人は合羽を着て、足首を
くくって部屋の中を1mぐらい水がある中、自分のパソコンとか
大切なものを見に行きました。私は、水深が1mぐらいあるから
動けませんでした。

主人も、合羽を3枚ぐらい使っています。その合羽があったの
は、非常用品として保管していたものです。

私は、ここの災害は台風と置いていたんです。天変地異と言っても台風だから、必ずカップがいるだろう。カップは家族3人いるから3着準備していました。それを主人が次々はき替えて、上を持って上がっていました。

主人は、役員をしていましたからその書類なども持って上がっていました。

次の日は、昼間でも部屋の中は真っ暗なんです。明るくないんです。懐中電灯を持って、柱伝いにパソコンを持って上がりたんですが、両手はつかえないから上がれないんです。それでは何にも持って上がれないので、ヘッドライトを付けて持って上がりました。

カップや寝袋や懐中電灯、ヘッドライトなど、全部人数分だけ準備していました。

だから、お鍋でもやかんでも、捨てる前に、もしかして非常用に見えるかも・・・と考えて収めていました。特にガスコンロです。(問) どんなものを非常用としていたか教えてください。

寝袋、合羽、リュックの中に下着2枚、靴下2枚、ティシャツ1枚、ソックス、ローソク、ライター、小銭、2階の一カ所に見える所においています。

押入れの上に割りばし、石鹸、ガスボンベ、グリル、結婚式でもらったグリル、鍋、ガスコンロをIHに変えた時、捨てる前にあるいはと置いて持っていました。

このかまどで火を焚いて、食事ができるのではないかと置いていました。一番役立ったのは非常用トイレでした。トイレと水があったから逃げようとは思わなかった。しばらくそこに居れるので、2階にトイレはあるし、非常用トイレも持っているし、手洗い場もあるし、お客さん用の布団や寝間着は2階にあるし、たぶん避難所行くよりは良かったと思います。

流れのある水でないので、壊れたり流れたりしませんから。怖さはありませんでした。

おとなしく、水が下がるのを待っていればいいんです。

2、3日したら、水が2、30cmになったから、自分も雨靴を履いて、貴重品やネックレスなどを持って上がりました。通帳なども持って上がりました。

そろそろ落ち着いて、色々なものを整理できました。避難は一切考えませんでした。トイレと水があったから。

水は飲む水が2箱、2リットル6本が2箱、賞味期限の切れた水が2箱ありました。これで飲むのと手を洗ったりする水が4箱ありました。ホテルに行ったら歯ブラシを持って帰っていました。いらなそうに思っているけども一旦置いていました。要らないんだけど、一旦置いていました。

割りばしも置いていました。割りばしはもしかしたら焚き付けにいいのではないかと置いていました。ここで火を焚いて湯を沸かしてコーヒーを飲むことを考えていました。もしかしたら、

庭を掘ってトイレに使うこともあるかな。と持っていました。

全く地面が使えないことは頭になかった。ここでこんな生活ができるかな？と思ったんですが、それぐらい考えていましたが、水が来て1軒づつ孤立して、何があってもあがることもできない、もうすることもできない状態は考えていませんでした。

そして、消防団の人が来て、物資を配給してくれました。ボートで来られたが、大きな道は来られるが、小さな道まではボートが入れないんです。それから家の中へ入ってこようとしても垣根が邪魔をしてこれないんです。そういう時に水の中を歩いて持って来てくれました。残っている人たちに、自治会長様が運んでくれました。2階に居られる人はボートから長い棒を持ってベランダに渡しておられました。「中だけ取ってください。袋はそのままにしておいてください。」次のお家も中身を入れて、渡して行かれますが皆さんベランダに出ておられました。

テレビでやっているような情景でしたよ。後から聞いた話では、「主人のおむつがあつて良かった」と言っておられました。急だったから避難所まで行けなかったんです。だから自然2階に上がっていました。その時、2階にトイレのない家は困っておられました。

断水だからトイレはつかえないです。2階では、段ボール箱に、おむつを敷いて、用をして、その上に又おむつを敷き繰り返し使っておられました。その時おむつが一番いいかなと思いました。保存の場合、安くて便利がいいじゃないですか？簡易トイレより

もおむつがいいんだと思いました。中々おむつの中に用をするのは難しいが、箱におむつを敷いて使えば簡単だそうですね。臭いが鼻につくとそこにはおられないので、そこはよく考えておかないといけません。臭いが取れて臭い袋に入れて処分することがいいですね。

非常用トイレも用をした後、凝固剤を入れてビニールをぎゅっとしておけばいいですから。今回簡易トイレは、ビニール袋に入れて臭いがしないよう箱に入れておきましたが、家は1斗缶にいっぱいになりました。

自分の命は自分で守る、自分で持ちこたえるようにすることが大事だと思います。外のことは皆がしてくれまう。土を出したり、荷物を運び出してくれるなど、いろんな方がやってくれました。だから2、3日頑張っておればいだけなんです。

だから、自分のことは自分で守ればいいんです。

いろんなボランティアの方や学会員の方が助けてくださいました。何とかクリスチャンとか。すごく大勢の方が助けてくれました。消防士の方も赤ちゃんとかその他の方を助けられるでしょう。その人も2階があつたんですが、外から入れるようなドアがあつたんですが、水圧で戸が開かなくて、だからお腹の辺りまで浸かって助けられた後、感染症になつて2週間ぐらい入院されました。土の中には色々な菌がいっぱいいて、そういう意味では、2階にトイレがあれば2、3日何とかかなるということです。それ

から2階に備蓄しておけばどうかなと思いますね。

年配の方は貴重品だけを持って2階に上がったもので、脱水状態になって助けられた。2週間ぐらい避難所に居て、帰った時は皆より少し遅れを取っていたみたいない気になり心配をされたわけです。

ここの地域は、井戸が沢山あります。殆どの家にあるんです。2、3軒に1軒は井戸があります。飲めたり飲めなかったりするんですが、この方は水を取りに行く方はあまりおられなかったです。井戸が沢山あったから、でも今回の水は大腸菌がいっぱいだから飲めなかったということです。だから3日生き延べられるようになっていけばいいということです。

（問）信者の方は皆さんこのようにされておられるんですか？

世界中にたくさんおられます。雪の中でお湯一杯で助かった。というお話を沢山お聞きしていました。それで、私達も「リュックに背負って避難所まで行きなさい。」という訓練があったんです。2人でリュック背負って避難所まで行ったんですが、重たすぎて非常に困りました。

だから、トイレットペーパーも硬くて丈夫なものに取り換えました。軽いものに入れ替えたり、水も少なくしました。水は500グラムのものに変更しました。小さく減らし、欲張って一杯入れないようにしました。いざという時は重いんだ。ということに気が付きました。

やっぱり命を守る方法を教えてくれる。ということはいいことです。

訓練していたら、捨てる前にこうしておこうという準備ができますね。いろんな形で災害は起きるんですが、慌てなくて命を守る方法は沢山あります。避難先が2階で断水の時は、飲む水は沢山ではないが、顔を洗ったり口をゆすいだりことで水をたくさん使うことが判りました。そこで濡れチッシュの大きいのが役立ちましたね。

（平成30年10月27日 柳迫 聴き取り）

天応宮町

井 田 純一郎

題目「庭に水が来て、泳いで家に入りました」

(問) 7月6日に大雨が降り、特別警報が出ましたが、この時どうしていましたか

避難はしなかった。ずーと家に居た。家は自分の背の高さまで浸かった。

水がきたので車を移動しようと玄関へ出ると、「もうこれは大変だー」と言った時が足首程度で、「これは大変だー」と言った時が膝ぐらいになっていた。もの凄く早く水がきたため避難しようとしたが駄目だった。

車がJ Rの線路の下の通路に5、6台が詰まってしまつて、水がはけなくなつた。自動車の上にも自動車が載っている状態だった。堰止めてしまつた。

昭和20年、こちら一帯が池になつたので、その時J R呉線の下に通路を設置した。その時、天応宮町の人々が直訴したが、その時役場は応援してくれなかった。長くかかったが、最後までうちの親父と八百屋の親父が訴えていた。そうしているうちに近所の人々が広島駅長になつたので、それから早く話が進み決まりました。

その時、穴が開いたので、これで安心と思っていた。線路の下にできた穴はJ Rは通行不可とし、車が通れないようにしてしまつた。

それでもあつちもこつちも線路を歩いて渡っていたから便利になつた。バイクや自転車が通っていたが、今回の災害で車が詰まり大変な事になってしまつた。

車庫から泳いで家にたどり着いた。家に入ったら畳が浮いて、家具や仏壇など転倒していた。畳の上を歩くとひっくり返つてブクブク沈んでしまう。眼鏡は落ちなかったが、携帯と家の黒電話が使えなくなつて、音信不通となつた。水がすぐに引かなかったから、こちら一帯は水がよんどんでヘドロが多くなり、ゴミや大木が流れて来た。

5月ごろ、市民センターの職員へ「こちら一帯は川になる恐れがあるので、用心せーよ」と言っていたが、本当になつてしまつた。市民センターに水が入つた。

20年の時は、市民センター一帯は水がいっぱいになつたが、今回は当時よりも土砂が多く、大木も流れた来たので氾濫し被害が大きくなつた。

20年の時は、小学生だったので、握り飯一つもらわれず腹がすいたのを覚えている。親父は兵隊に行っていた。おばあちゃんと子供の3人で暮らしていた。

これからの対応が難しいと思う。これまで呉市から説明会が行なわれていた。もちろん市議会議員も同席していた。その時期に大矢川の上の河川敷に、建物を造っていた。これを何とかしないと危ないと言つたが、県も市も相手にしなかった。そこへ大きな

護岸を付いたから、それが誘発して被害が大きくなったと思う。そのコンクリの塊はポートピアの近くに流れていた。そこから下へぐられて川がどんどん大きくなった。あの時にみんなが応援してくれたが、県は一切聞き入れてくれなかった。河川の整備が遅れていたので、堰堤の土砂もたくさんたまり、今回の災害を大きくしたと思う。この先に雨量表示を県が設置したが、土石流の発生を知らせる表示は無かった。上で土石流が発生したのを知らせてくれれば、対応の仕方があるのに、何の連絡もなく、この状態になった。

大きい川は、危険水位に達すると付近住民へ伝えてくれるが、ここは一切ない。

今回の災害は、昭和20年の時よりも雨の降り方は、そんなに激しいとは思わなかったけど、山にたくさん降ったと思う。低い山だから安心していたが、ここは絵下山からぐるっと廻って下りるから沢山水が出たんだろうね。

今後は「危険水位を超えました」というのを伝えてくれるといいのだが。

被災後、当日は自宅で我慢していたが、翌日には市民センターへ行って雑魚寝をしていた。1日晚だけ寝ると、2日目には、家の様子を見に帰り、ゴミを吐き出していた。

汚れたものは、乾いたら、白い粉が吹くし、何べん洗っても粉が出る。焼山の下水道が破壊され、水の汚物が混ざっているの

マスク着用を呼び掛けていたが、マスクをしてから仕事はできない。2〜3日経つと泥が固まって作業が進まなかった。

おばあちゃんをほったらかして避難したが、後から来てみるとおばあちゃんは木に登っていた。「おばあさん、おばあさん」と呼ぶと、木の上から「ここじゃー、ここじゃー」との返事があった。との話をしてくれた。もう少し市議会議員がしっかりしてくればいいが、裁判をしてもダメだ。ということになり、どうしたらいいかのう。

住民は、再び災害が起きることは解っていたが、行政が動かないのでだめよね。行政の怠慢を強く訴えて欲しい。

この辺は、本格的にリホームが始まったが、私のうちは、業社にお願いし早くすました。今、県や国は、「ホームページでいいました。」というが、これは私達には伝わらない。年寄りは見ることができない。パソコンなどはしない。自分のスマートフォンは使うことができない。個人情報福祉は該当しないようにしてほしい。

呉の断水の時、個人情報全部出した。そうしないと水を配って回ることができない。

(平成30年10月27日 柳迫 聴き取り)

②5 【呉市天応西条】

天応西条三丁目

ペンネーム…H・A

題目「忘れられない体験」

2018年7月6日金曜日

この日は、朝から雨が降っていた。午後になると雨はさらに激しくなり学校から帰った私は、庭にできた大きな水たまりを見てはどこか落ち着きがなく、家の中にいた。

午後7時、父が姉を連れて帰ってきた。それを境にどこからか「ゴロゴロ・パキパキツ」という鈍い音が聞こえて来た。最初は雷かな?と思った。しかしその音が止むことは無かった。心配になり、夜ご飯の支度をしていた母と私は、外の様子を確認してみた。

すると、鼻を強く刺激するような土壌のにおいが漂っていた。家の目の前を流れる川を見ていると、茶色く濁った泥水が膨らんだ感じで、勢いよく流れていた。この時は、まだ心配ない大丈夫だろうと思っていた。

午後7時40分 それでも川のこと気がなった私と母と姉は、もう1度確認しに行ってみた。すると川が溢れて道路が10cm浸水していた。その時だった、川にかかっている橋から大量の土砂が押し寄せて来た。逃げろ!と言わんばかりに避難所へ向かうより

も家にいたほうが安全だと考えた私達は、家の2階へ避難した。

5分もしないうちに家の周りは土砂で囲まれていた。本当に一瞬の出来事だった。電線から火花が散り、ハザードランプを点滅させた車が何台も流されていく、・・・何もかも信じられない光景であった。

私はたまたまポケットに携帯電話を入れていたため、すでに地域の消防団として活動していた父と連絡を取り、状況を伝えた。家は停電し、真っ暗闇な状態。

このたびの西日本豪雨では、自分は大丈夫だろう。災害は他人事という考えが、通用しないことが解った。私の家はハザードマップで調べてみると「土砂災害警戒区域」に含まれていることを知った。自然災害は自分にも降りかかって来ることということを自覚し、早めの準備、早めの避難を心がけることが大切だと感じた。

天応西条二丁目

須藤 忠石

題目「雨の音にかき消されて、迫り来る濁流に気づかなかった。」

このたびの豪雨災害で、私が受けた体験です。（私と妻と愛犬一匹）

呉市天応地区に有る私の家は平屋で、大屋大川と背戸ノ川の2本の川の交わる所から約300m川上の背戸ノ川の側に有り、濁流がきたのは、約100m離れた大屋大川が氾濫し、水と土砂が家の中に押し寄せてきました。

食事を済ませ寛いでいたところ、隣に住む姉が「水が来た」と、大声で知らせてくれ、玄関に出てみると、同じ高さまで水が来ていて、慌てて玄関を閉め、手当たり次第要るものだけを側にあつたビニール製のごみ袋に詰めている間に、畳が浮き始め、あつという間に腰まで水があがり、慌てて妻を背負い、愛犬を脇に抱え、玄関に行き開けようと思ったが、水圧で開けることができず、居間に戻りガラス戸を一杯開けると、水が押し寄せてきて流されそうになりながら、外に降りると胸元（私の身長は182cm）まで水があり、泳ぐように川の土手まで行き、難を逃れました。

天応西条三丁目

井手原 稔

題目「H30、7、6 豪雨災害を体験、そして・・・」

《はじめに》

ゲリラ豪雨、土石流、線状降水帯や河川の氾濫といった雨に係したニュースはテレビ・新聞などで度々見聞きするものの、我が家とは縁のないものと「対岸の火事」感覚で、河川のそばに住まいしながらも、70年間お気楽に過ごしてきました。

この度の西日本豪雨を目の当たりに体験し、水〴〵の威力・怖さをまざまざと見せ付けられ、自然の前には何もできない自分の非力さを痛感する今日この頃です。

《7月6日午後7～50頃》

大雨警報発令中ではあったが、いつものように晩酌、食事と変わりない夕刻を妻と共に過ごしておりました。いつもと違ったのは自宅前の県道を介した幅、約9m・深さ約2mの普通河川「大屋川」の水位を居間の窓越しに再三観ていたことです。

徐々に増水し、水位が護岸天まで1m位を確認したところで、まだ大丈夫かな？とふと上流側の橋に目を向けたところ、橋桁に丈の長い流木が天を指すように引っ掛かり、県道に濁り水が流れ出しているのが目の端に留りました。

これは尋常ではない、大変なことになると直感し、妻に水道水で大鍋などにできるだけ汲み置くよう伝え、2階に駆け上がり上

流を確認しました。

薄暗い夕闇の中に、我が家に流れ込んでいる濁流の川（※我が家の表側の河川＋県道＋隣地駐車場＋裏側市道）が目に見え込んできました。遠くには4か所の橋が確認できましたが、そのいずれもが流木などによりダム状態で、道路や住宅地に濁り水があふれており、1番上流側の橋には乗用車が逆立ち状態で掛かり、その上を濁流が荒波をあげながらこちらに向かっていました。視線を我が家に戻すと、愛車は庭先で泳いでいるし、流木が外壁にボディーアタックし

「ドスン、ドスン」と不気味な振動を伝えてきました。

階下から妻が「タイヘン、水が寝室に入ってきている」、降りてみると出窓や掃き出し窓、玄関引違戸の隙間からヒタヒタと茶色の水が止め処なく流れ込んでいました。外の様子も気になりましたが、水の排除が急務、2人がかりで雑巾などで激闘、また下側の出口から雨の中裸足で外に出て寝室のサッシ周りの瓦礫の排除など東の空が白む4時過ぎまで続けましたが、濁り水に根負けし、諦めました。

その後、2階で眠れぬ仮眠をとり、家周りのチェック開始。

前後の道路、隣接駐車場は、完全に河川状態、渡るのは不可能、陸の孤島状態です。

一方、本来の河川（大屋川）はというと、土砂が目いっぱい溜まっており、僅かの流れはガードレールやフェンスを越えて河川

と化した道路に流れ込んでいました。

道路の濁流は所々で大きく波打っており、大きな岩かな？よく見るとアスファルト舗装があちこちでめくれ上がっていたのです。一方、家の周りかというと庭もこよなく愛した家庭菜園も一面の土砂、瓦礫。夫婦の健康増進のために卓球場に鞍替えした倉庫も卓球台の高さまで土砂の山。見渡す限り（オーバーかな）の土砂、今後どう処分すれば。と思わず天を仰ぎました。とりあえずできるところからと、家周りの片付けから手をつけました。

土砂・瓦礫の撤去は、業者さんに依頼するしか致し方ありません。特に寝室部の大木交じりの瓦礫は重機なしでは対応できない程ひどいものでした。

水道は辛うじて茶色の水が出ていましたが、3日目位には止まってしまいました。電気はというと、初日は停電、周りのお宅は「あかあか」と照明が灯っていました。

実は、ブレーカーの親が落ちていたのです。外回りのコンセントや電気器具を総点検し、DK、洗面、風呂、2階が使えるようになりました。

それからが大変でした。泥の詰まったエアコンの室外機4台、石油給湯器、井戸用ポンプ、外部冷蔵庫そして外部コンセント、これらを使用できるように水洗い、分解、油さし等々の結果、エアコン2台と冷蔵庫は復帰しましたが、後はダメ、ガックリです。

次は、生活用水の確保です。水道が止まり、汲み置きも底をつき、また井戸ポンプ故障のなか、為すすべなしの状況で、飲用には近所の井戸水をペットボトルに頂き、雑用水には裏の道路側溝を流れる濁り交じりの湧き水をバスタブに貯めて洗濯、トイレ、行水にとフル活用です。近場に水源があったことは非常に幸運でした。

《そして》

河川や道路の復旧がゆつくりと進む中、我が家の復旧も徐々に始まりました。

家周りの片付け、堆積した粘っこい土砂の撤去、市民センターでの手続き、辛うじて生き残った菜園のトマト、なす、ピーマン、ゴウヤ、などの掘り出し等、朝から晩まで猛暑の中 真っ黒に日焼けしながら頑張りました。

ボランティアの皆様や呉市雇用の業者さん、そして親戚や知人の助けを頂き、土砂の撤去が9月下旬に概ね終わることができました。

皆さんへの感謝の気持ち・言葉では言い尽くせませんが、一言「ありがとうございました」。

家や外構、設備の復旧用途は程遠し状況ですが、めげずに頑張つて参ります。

《終わりに》

この度の災害を私なりに考察しました。

この地域は、同様の災害が昭和20年にも発生していたことを聞かされました。生まれる前のことなので知る由もありませんが、氾濫エリアが今回と酷似しており、私の親の家もその折に流失し、その後同じ位置に再建した生家も今回全壊しています。

自然の営みには人智では計り知れない多くの事があり、治山・土木事業の限界を思い知られるところです。

河川沿いの山肌の崩落（土石流）による流下物の膨大な量の把握が不十分あるいは土石流発生の頻度、規模の想定が過少ではなかったか、との反省が求められているように感じます。

昨今の災害発生のメカニズムは1昔前と違ってきており、地球温暖化などに起因するであろう自然現象に土木行政が対応できかねる事象が年々増加しているように感じるのは私だけでしょうか。終わりに、私は住まいを補修し元の生活にいずれ戻ります。が、全壊など原地再建を諦められている方々、知恵を絞り安全な街づくりに向け共に頑張りますよう

（添付写真補足・・・番号は裏面に記入）

①我が家上流側対岸のさわだ理容院の3階から撮ったもの。

中央電柱部の住宅が我が家です。手前の瓦礫は理容院への橋に掛かったものです。

②わが家の2階から上流側を撮ったもの。右端が理容院です。

右から「屋川＋県道＋隣地駐車場＋市道」全てが河川です。
③我が家2階から前面県道と大屋川を撮ったもの。
④水が退いた駐車場からわが家の寝室部の瓦礫の状況を撮ったもの。



写真①



写真②



写真④



写真③

天応西条三丁目

藤 田 繁 逸

題目「天応地区は谷間だから、

大量の水が流れることは想像していた。」

(問) 7月6日の状況からお話してください

7月6日 避難準備情報が出て、テレビでは線状降水帯が発生しているのが確認できたので、「これは危ない」と直感し、夕方5時過ぎ、この辺（水が出る所が解っていた。と地図を出し位置を示す）、まず、藤川さんのところに電話して「以前、そこは水が出たところだが今の様子はどうか？」と尋ねた。「大したことはいないよ。少ししか出てないよ」との返事だった。

次に中学校の下の金子さんの所へ電話した。「金子さん。今どうなってる？」と電話すると「水がたくさん出ました。もう少ししたら溢れるよ」と言った。「危ないから早う逃げんさいよ。」と言って、次に角の谷村さんへ電話した「金子さんの所は水がたくさん出ました。」と言ったら、「もう来よるよ」と言った。「2階に上がっておりんさい」と伝えた。

ここらは、逃げ場がないので2階でじっとしておりんさいよ」と言った。金子さんが2軒ある家に「避難しんさい」と伝えたらしい。続いて藤川さんの所へ電話したら「沢山水が出ました」と言ったので「避難しんさい。」と言ったら「お母さんが足が悪いので出られない」と言った。時間がないので、「2階に上がっ

ておりんさい。」と言った。

この町内会は1区から6区まであり、300軒ある。そのうちの1区の区長に電話した「1区は谷間だから大丈夫」との返事でした。次に4区区長の末永さんへ電話した。

「これから吉浦に親戚があるんで、そちらに避難する」と言って出て行きました。後から聞いた話だけど「全く近所に連絡してない」。次に6区区長さんに電話して「5区・6区は中学校へ避難する」と言った。

この人たちは防災リーダー研修を受けている。

次第に水が増え、これは一人ではどうにもならない状況となった。川崎鉄工さんへ電話した。「うちは大丈夫、山手には水がたくさん流れている」との話であった。「気を付けてね」と言って、川のこっちの家で大和さんへ電話した「川の水が多くなった。」と言った。「気を付けてください」と言って、次に25班の酒井さんへ電話した「ここは大丈夫・道路に水がたくさん出ているけど」との返事であった。次に大畑さんへ電話した「水がたくさん出たので、避難しんさいね」と言った。「わかった。避難する。」と言った。しかし後から聞いた話ですが、この人は避難しようとしたら水が沢山で外へ出られなかった。とのことでした。川の向こう側の方に「今大畑さんが避難してもらった。」と言うと、自分も避難すると言った。

この地図で家が流れた所へ電話したが、電話は通じなかった。

そこで、7時前にそこへ行ってみると、電柱が倒れて電話線が足れているし、一帯が停電していた。これでは連絡できないので、すぐに池本さんに電話して「水が家に中に入ってどうにもならん状態だ」と言った。とにかく避難を呼びかけたが、中には避難しなかったお家もあったようで、夫婦2人で家の片隅にいた。との話もある。

下の方で華さんと言うお家があるが、ここからの電話で「2階に上がったけど下りられない。助けてくれ」との電話があった。すぐに西消防署狩留賀出張所へ電話をかけた。すぐに消防隊によって市民センターへ救助された。このように時間が無かったです。

(問) 今のお話を聞くと、時間的に余裕がないようですが、実際はどうでしたか？

直ぐだった。昭和21年の枕崎台風の話聞いていた。当時からは整備され石垣が積まれているので大丈夫だろうと思っていた。まさか山が崩れるとは思わなかった。

天応地区は谷間だから、大量の水が流れることは想像していた。日頃の川はちよろちよろ流れているが、バケツをうつすほど激しい雨が降ると予想外の水が出るから避難しないとだめよ。と言ったら、その人は避難していた。

それから「自治会館でみんなが会長を待っとるよ」との電話が入り、集会所では70人近くの方が避難しておられました。みんな

はお互いに「助かって良かったね」と言っておりまして。

問題は避難勧告が遅かったと思う。12時ごろから出ていたが、2時間近く遅れていたのだから被害が起きた。上の橋が流れたため下水管が切れて、川崎鉄工から「川の中がおかしい。泡だらけになっている。」との情報があった。

近い区長さんに行ってもらうと、「下水管が壊れ、一帯が臭い」と言ったので、市役所へ電話した。センターの対策本部が無いので、呉の水道局へ電話した。すぐに市役所の人々が調査に行ってくれた。その後、報告があり「下水管が壊れている。橋も1カ所壊れている」との報告で「早く応急処置をしてください。」とっておきました。その後、センターへそのことを報告した。

地区の真ん中は被害が無い。川から両側が被害を発生している。31号線バイパスや鉄道付近は少し高いので、宮町一帯が水没した。土砂がたまって川の1列が壊れている。川は溢れたのだと思う。上の家が2、3軒壊されて、その壊れた家が橋に引っかかって、あふれて川の近くの家が被害が出たのだと思う。

広島市役所に出ている人がいて「おじさん、家はどうなってる」と言うて、「すごいことになったと、流されている」と伝えた。海田から歩いて帰ると、「上に上がってはいけん」と止められて、「近所の人に、親に会えない」と大文句を言っていたが、2時間後には落ち着いていた。その人は、車の中で休んでいた。諦めたんでしょ

(問) 昭和21人にも災害があつたことを聞いていたので、みんなに電話したのか？

そうです。親から水が出る所を聞いていたから、すぐに3か所の水の出る場所の近くの人に「そこは危ないよ」と電話しました。中学校の法面が下がっているのと、裏山の上の岩が校庭に落ちて来て、危なかった。「金子さんに逃げなさいよ」と言ったのに、後から聞くと逃げていないのが解った。

「どうして逃げなかったのか？」と聞くと、「逃げようとした家から外に出られなかった」と言っていた。

今回、水道も止まりました。下水道も止まりました。電気も止まりました。最初どうしたらいいかわかりませんでした。

(問) 今回の災害で教訓は？

今年、防災リーダーを受けてもらいましたが、全然役に立ちませんでした。山口大学山本晴彦教授に言わせると「防災士ならともかく、防災リーダーは聞いて帰っただけなので」と言っておられました。

これまで、訓練はしているが、意識が低い。「班長が来るように言いましょうや。」と言って集まったのが30人。停電というところで、握り飯をして、西消防署が研修する。その時「アンケートを取るのなら、防災関係だったら、それようなアンケートの仕方があるんだ。」と言ってもらったので、「来てもらえますか？」と言うと、「郵送してあげる」と言ってもらった。アンケートを取

る少し手前だった。

民生委員と自治会役員、包括センターなど約20人位集まって、1年半ぐらいあるので、印刷しておりました。しかし今でもそのままあるので落ち着いたごろアンケートすることにした。

アンケートをすると、支援の必要な人がいることや災害について協力してくれる人のことが進むと思う。

(問) 今後、地域の防災リーダーはどうしていきますか？

自治会の会員に対しては、講義をすることはできる。

自助・公助などについて話をするが、咄嗟の場合いざ行動しなさいということになると、できない。私の方が役を受けていなくても、早く手を打つことができる。

防災士でも実地訓練をしていないと役に立たない。多少はやっていると思うが、経験を身に付けた者でないといけない。

折角6人ほど、50軒づつ受け持ってやってもらっているのに、今回の災害を受けた時、ボランティアに「自分の所に来なさい」と自分勝手な動きをするので、「協力しなさい」と言って初めてスムーズに動き出した。情けないよと思った。

今回から、私に情報が早く来るようになった。

(問) 会長は今年で何年目ですか？

今5年目です。自治会の青年部から始まって、昔の青年団から、私が会長になるまでに、秋祭りだけ、自治会を助けて欲しいコミュニケーションを取るために、夏祭りを始めた。その前に盆踊りを

始めた。

(問) 災害対応は、どうでしたか？

今回の災害は、ほとんどが逃げ遅れているから、この集会所へ来ていた、避難準備の時に集会所へ来ていたらほとんどが大丈夫であった。自分の所は大丈夫だと思っていたものがあった。電話したらほとんどの人が家に居る現実であります。

電話をして「戸を開けてみんさい」と言う「まこと、まこと」言うて、「今から出たらダメよ。2階など危なくないところにおりんさい」ということになった。でもうちの地区で7人、下の地区が1人。焼山から避難して1人なくなった。中で死んだのは12人、上から落ちてくるスピードはすごいものがある。

天応の復旧はよその地区より早い、と言われている。住民だけで「こうしてください。」と訴えてきた。いいことだということ、で、県会議員や呉の土木事務所など呼んで、説明してもらった。その後報告してもらいながら、近回の被害はマップ道理になっていない、ことに気が付いた。そこで、自分たちが気付いたことを入れた「自分達のマップを作りんさい」と言っている。危険箇所や避難経路を入れたものを作ることはいいことだ。

今の団地で、若い世帯と70代の世帯で考えが違ふ。

若い方は、子供がいるので「どうにかしてもらいたい。」という。これから工場や空地を使った新しいまちづくりを検討している。根本的な川の整備をしないといけない、と私は思っている。

昭和21年の災害の時、川が道になり、道が川になった。中学校の下で川がカーブしているところには、進駐軍の倉庫があった。そこが流されて川になった。その進駐軍の土地に砂を入れて、自分の土地だと言っていたが、今回の災害で全部流された。

(平成30年10月4日 柳迫 聴き取り)

天応西条三丁目

島 地 志一郎

あちらこちらで初雪の便りを聞く頃となりました。皆様にはお元気で御過ごしでしょうか？

7月6日の豪雨から4カ月余り、やっとお手紙を書いています。その間、皆様には大変ご心配をおかけし、励ましのお言葉や色々なお心遣いを頂戴し誠にありがとうございました。

幸い私どもは床下浸水で済みましたが、大屋川沿いの家は少し上流から橋に堰き止められた土砂で川が氾濫し、軒並み水害や土砂災害を受けました。すでに床下・床上浸水の家は修理が始まっていますが、取り壊す予定のほとんどがまだそのままだ状態です。私どもも落ち着くにはもう少し時間がかかりそうですが、皆様からの温かいお気持ちに支えられて、元気に送る日をしております。これから本格的な寒さに向かいます。どうぞ皆様くれぐれもご自愛くださいませ。

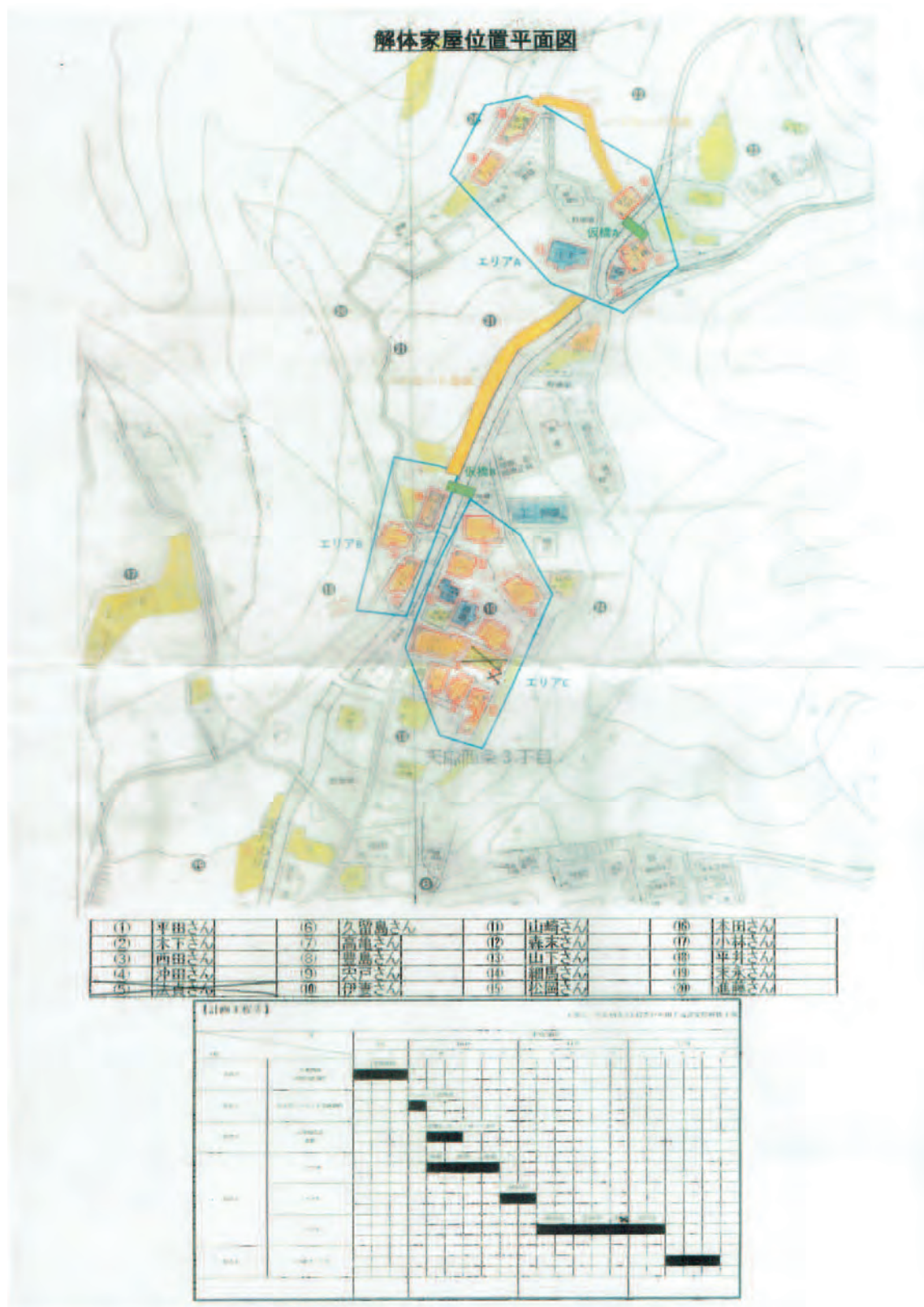
誠に延引ながら心よりお礼申し上げます。



庭を走り回った水が引いた後には、大量の土砂が残されていました。

幸い家屋は、床下浸水でしたが、8月初旬まで基礎部分が土砂に埋まっていました。川と化した家の前の道路は7月いっぱい水が流れていました。





②6 【竹原市下野】

竹原市下野

内 山 修

題目「平成30年7月豪雨から学んだこと。」～後世への警鐘～

平成30年7月豪雨により尊い命を亡くされたご遺族の皆様方には夷心より、哀悼の意を表します。また、救助や復興に携わるすべての皆様に感謝申し上げます。

7月6日の夕方にかけて、竹原市は今まで経験したことのない、豪雨に見舞われました。私は午後5時に消防団（竹原市田の浦地区）から招集がかかり、警戒に当たっておりましたが、雨は激しさをますますばかりで、携帯から「避難勧告が発せられた音声」が鳴り響いておりました。竹原小学校近くの住宅の裏山から濁った山水が流れだしたため、直接家の門を叩いて、避難を呼びかけました。消防車両の拡声器では豪雨により音声が聞き消され、全く響きませんでした。

そんな中、午後9時ごろ、港町地区に火災による出動命令が下りました。「まさかこんな大雨の中で火災が・・・」半信半疑で出動しました。現地に行きますと、投光器から照らされた建物は土砂で埋まり、異様な火災現場でした。土石流が民家を押しつぶした結果、何らかの弾みでプロパンガスに火がついたそうです。火はなかなか消えず、土砂で足を取られましたが、逃げ遅れた3

名の住民を団員のリレーで救出しました。

そうした中、携帯が何度も鳴るのに気づきました。「実家が土砂で埋まっている、急いで現場に向かうように」と課長から連絡を受けました。

頭が真っ白になりましたが、火災現場は大混乱で、新庄町の実家についたのは午前2時を過ぎていました。現地は真っ暗で電気もないため、最初はよく見えませんでした。投光器のある場所までいくと、実家は無残な姿に変わり果てておりました。「2次災害の恐れがあるので、これ以上の搜索は無理です。明日朝から救出を行います」と消防署員からの通告でした。父と姉は助からないと言っているように聞こえました。雨は降り続き、裏山の状況も分からない中、難しいとわかっていても、なんとか救出をしてもらえないのかと思いました。

母は奇跡的に裏山を見に行つて、勝手口に入ったところを土砂が直撃したので、出口に近く、近所の人の迅速な救出により、九死に一生を得る結果になりました。

結局、次の日は消防署も自衛隊も道路が不通のため来られず、地元消防団、地域の人々に救出していただきました。午後2時に父、午後3時に姉が遺体で発見されました。

母の話ですと、午後8時ごろに避難指示が出て、テレビの画像が乱れ始めたそうです。おそらく、そのころには裏山にあるアンテナが崩れ始めたのではと推測しています。その時に避難してい

ればよかったのですが、母も姉も足が悪く、父が逃げると言わないと逃げられない状態でした。母はそれでも避難しようとうそくや着替えを準備していたそうです。（確かに捜索中に土砂の中から避難用のカバンがでてきました。）しかし父は翌日の新聞配達で午前2時ごろには起きないといけないため、なかなか逃げようとせず、「明治からこの夏山は崩れていない。大丈夫だ。」と言っていたそうです。母が「納屋の離れはもう少し山から離れているから、そちらに避難しよう」と言っても、父は「納屋の方が山に近い、納屋の方が危ない」と言って避難しようとしなかったそうです。結局、午後9時ごろから雨がさらに激しくなり、落ち着かない母は裏山を見に行ったそうですが、暗い山は何も変化を感じず、勝手口から台所に入ったとたん、「ドーン」という地響きとともに、家が斜めに押しつぶされました。幸い、台所は土砂が反対方向を押しした関係で、跳ね上がり、スペースができていました。母はその隙間で死を覚悟したそうです。しばらくすると遠くから名前を呼ぶ声がしました。近所の方が駆けつけてくださり、懐中電灯の明かりを頼りに、台所をはい出たそうです。父と一緒に部屋だと、即死でした。

家は再建すれば済みますが、命は帰ってきません。普段はテレビで見る他地区の災害の様子も自分のこととして考えるきっかけにもなっていないことが父の行動で分かります。被災者と話をしていると、「わしはここで死ぬ、悔いはない」と言って避難行動

していない人が沢山いらっしゃいました。避難ができないことはないけれど、やはり「今まで大丈夫だった。これからも大丈夫だ。」という過信は危険なシグナルです。これまでは「偶然崩れなかっただけ」と意識して行動につなげなければ同じことが何度も起きると思います。私が後世につたえたいことは以下のとおりです。

1、避難しないことで、万が一被災した場合、多くの方に迷惑をおかけすることになる。

2、「避難勧告が出て、避難する。」と言っても全員入れんから、避難しない。」と言う方には避難所でなくても、親戚、子ども、知り合い等、避難する場所は他にもあるのではないだろうか。

3、命が助かってても、損害保険に入っていないと、再建のスピードが上がりません。自然災害については加入保険の再点検が必要です。命とお金はセットです。見舞金や義援金だけでは再建は不可能です。

4、地震、雷、火事は予測が困難ですが、水害はある程度事前に予測ができます。情報を得て、早めの避難しかありません。

5、どうしても避難ができない場合には直上避難しかありません。父も姉も2階であれば、生存確率はあがっていたかもしれません。

6、復興はご近所の連携が不可欠です。普段からお互いに助け合う場を共有すべきです。

トラブルを抱える地区は復興のスピードが上がりません。

7、行政は災害工事のロードマップを事前に住民に説明しておくべきです。

被災地では「権力者が先に工事している」とかデマが飛び交います。すぐにできない理由を説明しておかないと、災害トラブルが発生します。

8、災害時は道路が寸断されるため救助活動は地元の方しかできません。常備消防については、今回の災害で、地元職員が少なく、全く機能不全でした。常備も非常備も地元職員とするべきです。

9、災害時は、道路が寸断され孤立集落が多くできましたが、う回路があると救助も迅速に行えます。市道整備は着実に進めるべきですし、幅員が6m以上ないと、緊急車両の駐車スペースもなく、復旧スピードもありません。

10、今回の災害ではテレビ、携帯からの情報で多くの方が避難情報をつかんでいたかと思います。しかしながら避難所に駐車場がないから車で行かれないと多くの方から意見をいただきました。新設避難所を設置するのであれば駐車場スペースは不可欠です。

11、防災は地域リーダーが欠かせません。地域でリードする防災士を育成し、消防団と連携し、活動できる環境を行政が整えるべきと考えます。

12、防災予算は国の仕事です。ハード整備予算については建設国債を使用し、プライマリーバランス黒字化の計算から除外すべきです。防災予算を増やすと医療介護費を削減するとなると市民生

活に支障をきたし本末転倒です。国民の命を守ることが国の仕事です。

デフレ化で国債を発行して、財政破綻する根拠が分かりません。これはデマでしかありません。

②7 【竹原市新庄】

竹原市新庄町

植 向 進

平成30年7月6日、午後3時半頃から厳しい雨、私の家の横を流れる谷川、午後6時15分頃、石の流れる音がして、川を覗くと水の色が茶色ではなく、黒色か黒茶色か今までにない色でした。表に出て空を見上げると、雨の隙間がない様な雨でした。市から避難指示が有り、娘がいる西野町まで避難しようと思い、午後7時頃に車で主人と向いました。

途中の道路は水に浸かって危険な状態でしたが、何とか避難することができました。翌日には自宅に帰れると思っていましたが、夜が明けると周囲は大変な様相でした。

川の水や土砂が道に氾濫し家に帰れない状態、次の日から避難所になっている公民館へ移り10日避難生活しました。久しぶり10日目帰宅したところ、水道も断水20日間、帰宅2日目に家の上へ

行って見ると大変、崩れて流れた石、砂、木など・・・「避難したお陰で恐い思いをしなくて本当に良かった。」と思いました。帰宅後、無事に農作業もできました。

家の裏山に堰堤がありますが、左右の山のホトリなど削り流され大変です。早く工事などしてもらいたいものです。

②⑧【竹原市田万里】

竹原市田万里

野村時代

竹原市田万里町は、竹原市の端、一番北西部にあります。

町の真ん中を川が流れていて、その川を挟むようにして、国道2号線と旧道が東に向かって走っています。集落は、その川を挟んで南北に位置し、後ろは山です。

6日、大粒の雨が降っては止みを繰り返し、夕方になつて大降りになりました。

消防団が「速めに避難をしてください。避難場所は公民館です」と、連呼します。

「よう降るねえ、怖いねえ」と言いながら、早めに夕食を済ませました。我が家は6人家族ですが、長男は会社に出勤していました。5人で夕食を済ませて、私は、用があるので裏の勝手口

から外に出ると、一歩踏み出したその足に、水の勢いを感じ、「大変だ、水が流れよる。避難しんさい！」と、叫びました。

家の裏は山で、我が家は細い谷間の下にあり、山に治って細い溝があり、水の多少はあるものの年中水が流れています。それだけ谷が深いと言うことです。

孫2人と嫁に避難をさせ、私たち夫婦は家で様子をみていました。水は、細い溝が溢れ、すぐ横の田んぼに流れ込み、山のまさ土と田んぼの土と一緒にして、家の裏の石垣から屋敷内へと流れ落ちているのでした。流れ落ちる水の幅はだんだんと広くなり、見る見るうちに石垣の全面から流れるようになりました。無理は分かっていてのに消防署に連絡すると、「行けない。1階ではなく、2階に上がるように」言われました。

雨は、まっすぐに、ドドッと、滝のように降り続きます。暗くて何も見えず不安な一夜を過ごしました。

夜が明けると、雨は止んでいましたが、家の東西から前の溝川や大川に向かって大水が滝のように流れていました。水に混じった土を外に送り流すために、スコップで前(南)に、前にと送ります。その作業の真っ最中に、裏のシャッターの下が壊れて大水が流れました。雨が止んでも大水は流れ続けているのです。思えばシャッターがなかったら、東側の納屋は流されていただろう。避難した若者に、家の前の水が引いたので帰れるよと連絡し、やっと6人揃いました。

その後は何日も何日も裏庭や家の床下（もちろん畳を上げ床板もはいで）の土のかき出しの作業が続きました。しばらくして、リフォームした南側の床下も浸水しているのが分かり、そこは業者に頼みました。

畑にもたくさん土砂が流れ込んでいます。

正直、疲れ・体重も減りましたが、家が建っていて、家族がみんな生きているので、良かったね、と言っています。

また、こんなことが起こっては大変と、翌日、裏の石垣の上に土嚢を敷き詰めたのは、言うまでもありません。

②9 【竹原市東野】

竹原市東野町

自治会 会長

山 田 榮次郎

題目「西日本豪雨と私」

この度の豪雨は、私の町も例外でなく、73年ぶりという死者が出るなど大きな被害をもたらしました。

7月6日に大雨洪水警報・大雨特別警報が発令されましたが、私の家は道路よりすこし高いところにありますが、側には背戸川と賀茂川が流れ、駐車場は道路沿いにあります。

消防団の人が「車は移動した方がいい」と言われ、少し離れた広場に移動する時は、川が氾濫しつつあり道路には20cm程の水でしたが、帰りには水かさが増しやつの思いで家に着くと、あつという間にまわりは海となり家が孤立しました。このような状況でしたが、電話は通じておりましたので、自治会役員と市災害対策本部と連携をとり情報収集に務めました。

そのとりくみは、市指定の避難場所は床上浸水したため、避難場所を当自治会が独自で覚え書きを交わしていた東洋コルクさんと長音寺さんに約125名の人が避難していたことがわかり、役に立ったことにほっとしています。また、避難した人はお米をもちより炊き出しをしていましたが、途中から市へお願いし、食料が届くようになりました。

7月7日の朝は、水嵩が減少したことから町内を一巡し、被災者と会話しながら被災状況を撮影しましたが、あまりの被害に絶句しました。その帰りに国道432が約50mにわたり陥没していることがわかり、応急措置として自治会所有のカラーコーンを南と北に置き、二次災害を防ぐことができました。が、あくる日は通行止めになりました。

その他、ため池や水源地そばの賀茂川が決壊するのでは等、問い合わせが相次ぎ対応に追われました。そして一人暮らしのお年寄りに非常食を配るため、民生委員と連携し届けることができました。また、市提供の消毒液を配るため床上・床下浸水の家庭を

調査し配布することができました。

これまでの被害状況は、死者1名、負傷者1名、損壊・床上・床下140戸、道路、橋、河川、山など45力以上、農地への土砂流入、そして停電・断水など甚大な被害となりました。

これを受けて、災害廃棄物の仮置き場が必要となりましたが、市の指定場所は約7km離れた位置にあるため、自治会として町内にある長音寺さんの駐車場をお願いし、市の指定場所にしていただいたことから、被災者から大変喜ばれました。

また、断水の最中 市からの連携のもとに給水所の設置や各地域で被害がある中で、東野町に自衛隊による仮風呂場を設置いただき、とても有り難いことでした。

振り返ってみますと、この度の豪雨は、一瞬のうちに河川の氾濫や山が崩壊し、川がないのに遠く離れた民家に土砂や大木が直撃し大惨事となりました。

このことは山河の自然は人間の心を和ましてくれる一方 凶器となる恐ろしさを痛感しました。

今後の課題としては、浸水した空き家を市と所有者との連携のもとにどう 取り組んでいくか、そして、一人暮らしのお年寄りや障害者など弱者の人と早くから連絡をとり、避難するための推進体制を確立することが急務と考えます。

結びにあたり、私の心境として川柳を一句
「河溢る護身責め役葛藤す」と作りました。

今も復興に向けて、関係機関に要望書を提出し、取組を進めていますが、一日も早く普段の生活に戻れることを願っています。

約300m以上離れた山の崩壊で、土砂や大木が流出し民家を直撃した。



自宅の周りが河川氾濫し、海状となった。



国道 482 号線が約 50 m にわたり陥没





R185 線港町
(竹原市内と忠海を結ぶ幹線道路が土石流により通行止めの状況)



東野町
(賀茂川 大福地橋)



R432 新庄町
(河内インターに通じる道路が河川氾濫により崩壊)



三原市本郷川から沼田川を撮影
(中央に見えるのは、広島中央フライトロード高架橋)



賀茂川右岸 東野町 (土砂と泥水)



R432 新庄町
(竹原市内へ通じる幹線道路が土砂崩れにより通行止め)



東野町流木



東野町中条 流木等

③〇【東広島市黒瀬町】

黒瀬町市飯田

大野 昭慶

題目「民生委員としての活動が、災害時に命を守ります」

この団地は市飯田自主防災会の3班で、3班には難病を持つておられる方がおられます。主人は脊柱管狭窄症を手術され、杖をつかないと歩けない、台所に立っていても杖を持たないと3分も持たないという方の当時見守り活動をしていました。その隣に、男性で84歳、私が民生委員をしていた時から関わっている視野狭窄症の人がおられます。この方は5m先しか見えない状態で、災害の時は光しか見えない状態でした。私の声が頼りという状態で、奥さんは血圧が高いし、この2人を面倒見るようになったんです。

これまでの状態について説明します。前区長の時（平成26年8月）に市飯田（いちいいだ）に自主防災会ができました。洋国団地の役員は避難誘導班になりました。区長が自主防災組織を作ってくれた時、私は民生委員でしたから、「ここが土砂災害危険区域になったから、避難訓練をしようや」と、当時の自治会長に提案しました。それは東北大震災の際、当時地区の民生委員が54名亡くなっていることを報道で知り、一人も皆殺しにしない。ということで避難訓練を提案したわけです。そして、洋国団地で2年がかりでようやくやることになりました。しかしながら訓練

参加率は25%だったので、3月開催された団地総会で訓練参加率を高めることを訴えました。

団地の評議委員は3年で変わることになっているが、変わった評議委員がやるかといえどそれは難しい。また、1度に全員が変わることもあるので、自治会長経験者が顧問となって一緒にやろうということになっています。27年には東広島市から出前講座に来ていただき、避難訓練を行いました。普段から、ここは土砂災害危険区域だから、普段から訓練は必要と考えています。

たまたま今年の3月ぐらいから、洋国団地の地震回数を調べていました。その結果全国で平均18回起きているのが判りました。それから7月に豪雨災害が発生したので、団地の後ろの大平山に登って、3、4カ所大きな石が転がっているのを見つけました。

当日の状況は、私が見守り対象としている難病を持っている2人、視野狭窄症の方と脊柱管狭窄症の方を安全なところに避難したことを確認しました。どうしてこのようなことをするようになったかというと、私は、労災病院の総合職について、新潟労災病院へ赴任した時、阪神淡路大震災が起きました、その時に本部から「マニュアルを作りなさい。職員を派遣しなさい。」という指示が出ました。それから門司、和歌山、広島へ帰ってきて東北大震災が発生しました。そのようにしていることから、今のよう

に医療に関わるようになっていったわけです。当時の広島労災病院を「総合病院にしたい」ということから、院長が「医療の原点

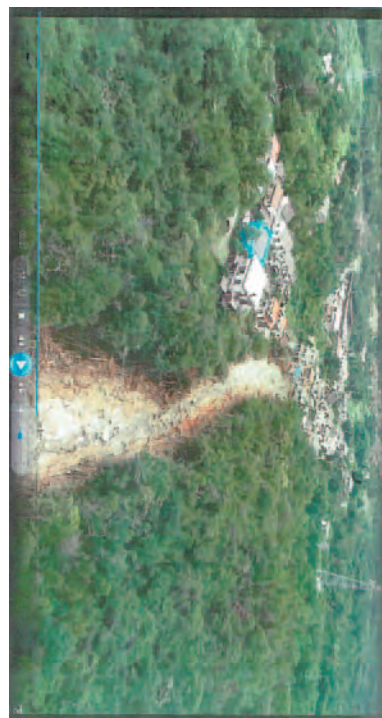
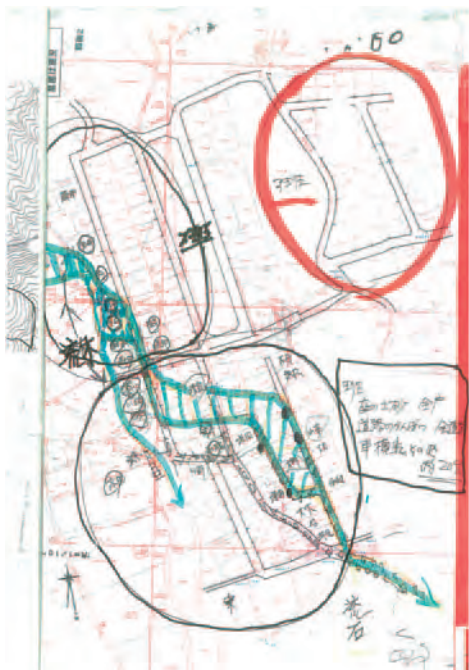
は救急にあり」といって、600人以上の職員が団結し救急部ができました。民生委員になった時に29年には、記念事業として「災害時一人も見逃さない」という運動をやることとなり、院長が「一切急患を断つてはいけない」ということになり、一晩に25人から30人の患者を診ていました。

4月5日から救急部を開設します。ということになり開院すると、お腹に包丁が刺さった人が来て、助かりました。そのあとも同じような方が救急車で来ました。そのようなことで、良かったなーと思いました。若い医者勉強になるし、若い医者来るしで今の状態になっている。

今の防災活動を皆は「ようやるねー」というのですが、地域での苦労はありません。

民生委員を7年やりました。その間に東北大震災が発生し、沢山の要援護者が亡くなった関係で、私はここでリストを作って、すべての地区住民の状況が判っていました。それが今では役立っています。

災害は「備えれば憂いなし」みんなで一生懸命やればいいと思っています。



広島県中小企業家同友会 青年部1泊交流会」発表原稿

洋国団地 元民生委員児童委員 大野 昭慶

「やっぱり地域が大切！」

〓西日本豪雨災害を経験して伝えたいこと〓

みなさん こんにちは。先ほどご紹介にありました、黒瀬町洋国団地の住人の大野昭慶といいます。

私の住んでいる洋国団地は、民家が約50件程度の小さな団地ですが、7月の豪雨災害ではその半数の家が山からの土石流に飲み込まれました。あれから数か月経ちはしましたが、まだまだ復旧までは相当な時間がかかります。しかし、幸いなことに死傷者は一人も出ませんでした。

本日は、広島県内の様々な地域からお集まりの皆様、7月の西日本豪雨災害時の洋国団地の様子やその時の住民の行動、日ごろの災害に対する備え、そして、なぜ死傷者が出なかったのか、そこから得られた教訓というのをお伝えし、皆様にも防災に対する心構えというものを今一度考えるきっかけにしてもらいたいと思います。

1、自己紹介

まずは自己紹介からしたいと思います。

名前は大野昭慶といいます。昭和18年3月18日生まれ。現在75歳になります。出身は呉市です。

私の経歴ですが、昭和37年から平成6年までの34年間、中国労災病院に勤務し、総合職として医事・用度営繕・会計・給与・庶務などを経験しました。

退職後は、洋国団地の自治会長を経て、その後民生委員児童委員に就任しました。現在では、民生委員児童委員も退任しております。

民生委員児童委員の説明ですが、まず役目としては①地域の高齢者などの見守り支援を日ごろから行うこと。②災害時に、要支援者の情報を行政や関係機関につなぐこと。大きな役割としてはこの二つです。

次に、民生委員としての心構えとして、「災害時一人も見逃さない」というのを大事にしています。一人暮らしの高齢者や高齢者だけの世帯、障害のある方、幼い子供を抱えた子育て世帯、その他自力で、あるいは家族だけで避難することが困難な方など、避難時に何かしらの支援が必要な方ほど民生委員が気配りをおこななければいけないと思っています。

次に、私がなぜ民生委員児童委員になったのか。ですが、当時の行政区長が「これからは地元住民である団地から民生委員を出す必要がある」という方針の元、私を推薦してくれました。そういうご縁がきっかけです。

2、なぜ防災について取り組もうと思ったか？

次に、ではなぜ私が防災に取り組もうと思ったか？ですが、中国労災病院での「医療の原点は救急にあり」という院長の方針や、それに基づいた病院の3次救急、(特に小児科)としての受け入れ体制、「全ての救急患者の受け入れを断ってはいけない」という院長の指示から、命の大切さというのを学びました。「全ての救急患者の受け入れを断ってはいけない。」の精神は、「災害時一人も見逃さない」に通じていると思っています。

新潟労災病院在任中には、阪神淡路大震災が発生しました。本部から指示があり、医師、看護師など職員を派遣しました。この時に災害マニュアル作成の指示がありました。

7年間の民生委員在任中に東北大震災が発生し、当時現地の民生委員54名が亡くなりました。

この震災を経験し、要援護者支援と福祉マップづくり「災害時一人も見逃さない運動推進の手引き」のマニュアルに基づき、地域住民の家族構成や要支援者、高齢者の健康状態の把握に努めました。これらの活動がきっかけで、日ごろから地域社会で助け合うこと、支え合うことが大切だと学びました。

「共助Ⅱ三軒両隣Ⅱ声を掛け合う」ということです。

そして、阪神淡路大震災・東北大震災での経験を活かし、防災

に対する取り組みとして洋国団地自主防災会則を作成しました。

3、7月豪雨災害時の行動・状況

そして、7月の西日本豪雨災害が起きました。

私は、気象状況から、大雨が降り災害が起きる可能性があると判断し、午前中に2軒、避難場所の確認と避難の意思を確認するため家庭訪問をしました。

1軒目は、視野障害のある80代男性と高血圧症の70代女性の家庭。2軒目は歩行困難者の80代男性と90代女性の家庭。避難時に支援が必要な家庭を中心に回りました。

そして、午後6時ごろ、救援要請があり自家用車で避難所の黒瀬保健福祉センターへ向かいました。この特点での災害状況としては、黒瀬町で一番大きな川、黒瀬川が氾濫寸前。ため池も氾濫寸前で通行不能。東広島県道路は交通規制がかかり、国道375号線という主要道路は大渋滞、という状況でした。

私は、避難所にたどり着くことが出来ましたが、この時点での避難者はまだ2組目でした。あの日の私の行動としては、これだけです。

豪雨が収まり、団地の被害情報がわかっていきました。自家用車が20台流されたり、団地道路全般に流石土砂、家屋全般にも土

砂が流入、団地内にある民営の工場には流木が5mの高さまで積み重なりました。今後の雨量・地震規模によっては、いつ2次災害が起こってもおかしくない状況でした。

しかし、幸いなことに団地住民にけが人・死者は1人も出ませんでした。

4、日頃の防災対策

次に、7月豪雨災害までにどのような対策をしたかをお話したいと思います。

まず、洋国団地の取り組みとして団地役員会にて次の内容を協議・説明しました。

①自主防災会マニュアルの作成

②雨天時・緊急時の確認事項

具体的には

- ・川の状態確認の担当者
 - ・その状態を見守り対象者に伝える
 - ・1次避難場所の確認
 - ・避難時に助けが必要な住民のリスト作成
 - ・緊急連絡の際の連絡表の作成
- 災害が起きた時、起こりそうな時に誰がどのような行動を取る

かを明確にしました。

次に、緊急告知ラジオを全世帯へ配布しました。費用は自治会で負担しました。ただ、このラジオも持っているだけでは意味がないので、各戸を訪問し日常的に聞く習慣をつけるようにしました。

他には自治会で避難訓練も行いました。重度障害者については、障害者団体の防災研修会や防災講座に受講してもらうなど、その人に応じた訓練というのを行いました。

次に、私自身の取り組み、日頃の活動としては、次のようなことをしました。

①気象庁の1年間の1日平均の地震回数を調べました。

その結果、全国で震度1～5の地震が日平均18回も起こっているということが分かりました。

②団地付近の大平山という山へ登り、現地調査をしました。

するとあちこちで多数の落石を発見。山全体が崩落の危険があることに気付きました。

③団地内の高齢者などに雑談しながら、予想される災害について話をしました。例えば、南海トラフ大地震やテレビ番組の放送内容などです。

先ほども言いましたが、私は豪雨当日は近隣の人たちに事前に声掛けは行いましたが、避難の手伝いとかというのはほとんどしておりません。それよりも日頃からの防災対策と意識付けをしっかり行っていたからこそ、緊急時には自治会防災マニュアルに従って住民がそれぞれの役割を全うし、助け合い、協力し合ったおかげで、結果的に死傷者が出ることなく済んだのだと思っています。実際に、避難勧告は知らなかったが、お隣さんが避難を促してくれたから助かった人や、隣近所同士、無我夢中で救出活動に当たったりと、そういう風に行動することができたのだと思います。

このように、医療現場で学んだ命の大切さ、災害時に一人も見逃さないという精神を念頭に、常日頃から地域の人たちと防災について話し合い、様々な対策をしていく中で、やはり地域の大切さというものを改めて思ったわけです。

そして、みなさんにもお伝えしたいことは、「まさか」という言葉です。災害はいつも突然で、かつ被災を想定していないというところ。そして、「こんなことになるならもう少し準備しておけばよかった。備えあれば憂いなし」ということです。

5、将来起こりうる災害

①日本は地震が多く、近い将来南海トラフ大地震の発生が予測されています。

今後10年間で発生する確率は70～80%とされています。

③東広民市が想定している自然災害として津波が挙げられます。安芸津町で、太平洋側都市10mと想定されています。

④今年も多数発生した台風による土砂災害が今後も発生すると思われます。

6、今後の取り組みとして

①美談ではなく教訓にすることが大切です。今回の豪雨災害で一人も犠牲者が出なかったことは決してきれいな話ではありません。日頃の避難訓練の参加意識が低かったり、避難訓練をする必要はないという声もあります。団地内ではまだまだ共助が浸透していない方も多くおられるので、もっと共助の意識を持つてもらおうよう、要支援者支援の体制の確立強化が必要だと感じました。

②その為の後継者の育成として、会場に張り出しております資料等を後世に伝えて残すことが必要だと考えています。現在75歳なので、南海トラフ地震も予想されるので、若い世代に行動してほしいと思います。この事はまだまだ解決できていない問題なので、今後もしっかりと取り組んでいきたいと思っています。

③次に団地内の避難訓練の意識がまだまだ低く、地域的な早期避難訓練の確立と習慣化を進めていきたいと思っています。

④もう一つ大切なことは、災害後の住民の「心のケア」になります。こういう大きな災害が起こると、夜眠れない、気分が落ち込む等、生活環境も変わり精神的ストレスが相当かかります。行政と連携を取りながら対応していく必要があります。

私が、自治活動で大切に行っている事をお伝えしたいと思います。活動の原点「五つの安い」です。

「口」は、人を励ます言葉や感謝の言葉に使うために使おう、

「耳」は人の言葉を最後まで聴いてみてあげるために使おう。

「目」は人の良いところを見るために使おう

「手足」は人を助けるために使おう

「心」は人の痛みがわかるために使おうです。

それでは最後に、今日私から皆様へ「2つの準備が大切」ということをお伝えして終わりにしたいと思います。

1つ目の準備は、有事に備えて具体的な対策をしておくということです。何事も車前に準備するところが大切で、起こった後では遅いのです。

今回、起こった災害で一人も犠牲者が出なかったことは、日頃

から防災意識とその準備をしていたからです。

「備えあれば憂いなし」ということです。

2つ目の準備は、心の準備が大切ということです。

私になせこれだけ長年に渡って、防災について租種的に活動ができていくかというと、正直なところ自分でもよくわかっていません。過去に生死を彷徨ったり、何か壮絶な経験をしたわけでもありません。しいて言えば、医療現場に従事したことや災害を経験したということが挙げられますが、一番は、平和な日常への感謝・人を大切に・地域を大切に・

そして未来を大切に、というのが私の根本的な価値観なのだと思います。そういう人間なのだと思います。

地元・地域住民を守りたいという思い、熱意誠意が私の信念です。何事にも「揺るがぬ信念、たゆまぬ努力」それが熱意誠意と考えています。

だからといって、皆様にも私と同じように防災について常日ごろから行動してもらうというのは、現実的には難しい部分もあるかと思っていますので、今日お伝えした話の中から、「準備の大切さ」というのを今一度者えるきっかけにしてみたい、今後の皆様の会社経営に置き換えて、ご参考にしていただければと思います。

ご清聴ありがとうございました。

7.06豪雨災害の概要

1 災害件数（速報値）

災害区分	西宗吉	大山 松風	八本松 北	中央	みなみ	下組 総合	原	統計
地区	1	4		1		1		7
土石流								
出水				2			1	3
内水氾濫	1			5	1			7
崖崩れ				2		2		4
橋破壊	3					1		4
建物破壊			1			2		3
床上下浸水	8		1	12		2		23
道路浸水	1			2	1			5
道路土砂	1	1		1		1		4
法面崩壊	2			1		4		7
合計	17	5	2	26	2	14	1	67

※災害対策本部に報告があったもの（H30.07.15） 調査の所数は30区域

2 各避難所の避難者数

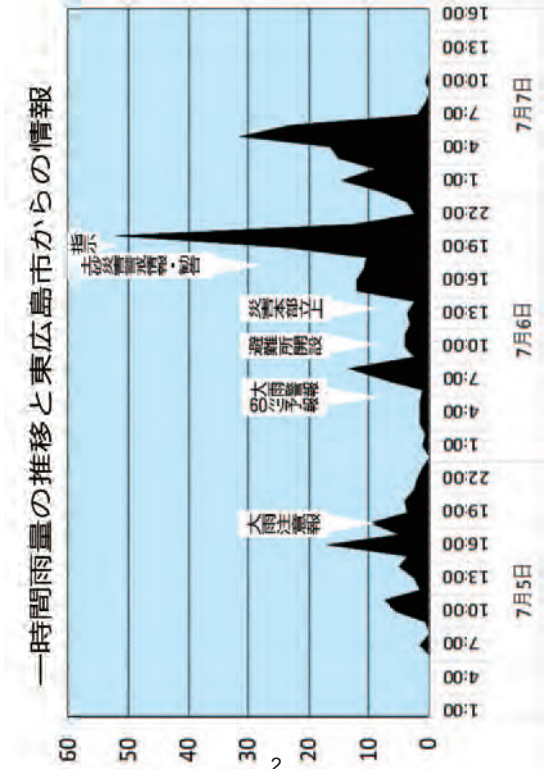
日	地域 センター	宗吉 第1	中央	合計
6	43	16	16	75
7	29	4		33
8	1	3		4
9		1		1
10		2		2
11		2		2
12		2		2
合計	73	30	16	119
地 域	八本	33	17	64
	他	40	13	55

※ 延べ人数

7. 0 6
西日本豪雨災害
八本松小学校区災害記録

平成30年7月

八本松住民自治協議会災害本部



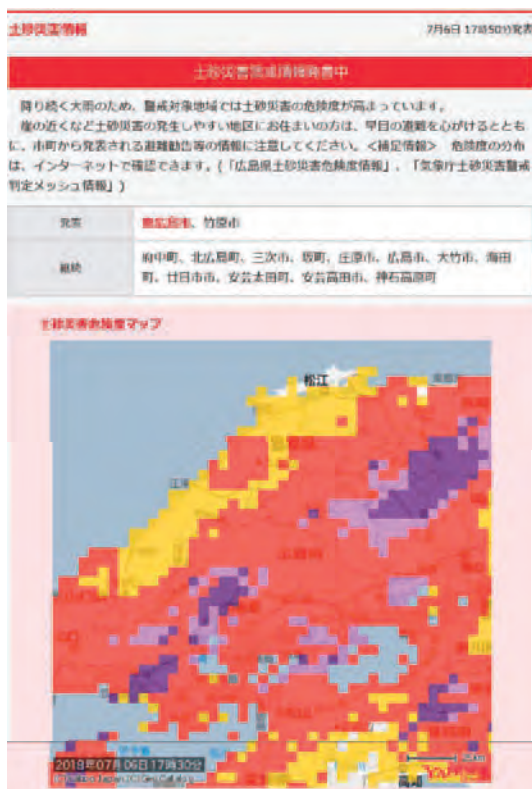
東広島市危機管理課情報 メール配信

月日	時間	情報	内容
7月5日	13:32	今後の気象情報に注意	日本に発達している前線前線の影響により、東広島市では激しい雨が断続的に降る可能性があります。
7月5日	17:59	避難勧告	河内町入野 入野川付近 鶴亀山老人集会所開設 2階以上へ避難
7月5日	18:44	洪水警報、大雨注意報	
7月5日	20:19	避難所開設	安芸津文化センター
7月5日	23:40	避難所閉鎖	安芸津文化センター
7月6日	2:42	注意報（大雨、洪水）	【土砂災害】注意期間：7日未明にかけて 以後も続く
7月6日	5:40	大雨警報	ピークは6日夕方、1時間最大雨量60ミリ
7月6日	9:54	避難所開設	八木松地域センター 他9カ所
7月6日	10:06	洪水警報	大雨・洪水警報
7月6日	13:30	八木松住民自治協議会災害本部上	本部長、副本部長
7月6日	17:50	土砂災害警戒情報	東広島市全域 （土砂災害の危険性が非常に高くなっています。市から発表される避難勧告の発令に注意してください）

3

月日	時間	情報	内容
7月6日	18:17	避難準備情報	避難勧告（志和、福富、安芸津）以外の地域
7月6日	18:40	避難支援関係者発動	地域の状況を確認し、身の安全を確保した上で、可能な範囲で要支援者の避難支援
7月6日	18:50	避難勧告	東広島市全域
7月6日	19:09	避難支援関係者発動	地域の状況を確認し、身の安全を確保した上で、可能な範囲で要支援者の避難支援
7月6日	19:40	大雨特別警報	全域
7月6日	19:47	避難支援関係者発動	地域の状況を確認し、身の安全を確保した上で、可能な範囲で要支援者の避難支援
7月6日	19:57	避難指示（緊急）	大雨特別警報の発令され、災害の発生する可能性が高めて高くついていることにより、東広島市全域に「避難指示（緊急）」を発令しました。
7月6日	21:42	避難所追加	1カ所 八木松は 川上小学校
7月6日	20:06	避難支援関係者発動	地域の状況を確認し、身の安全を確保した上で、可能な範囲で要支援者の避難支援
7月7日	10:50	大雨特別警報解除	
7月7日	22:19	洪水警報解除	
7月8日	11:09	災害関連物搬置き場案内	運動公園他7ヶ所
7月13日	9:57	災害総合相談窓口設置	市役所1階ロビー

4



5

1. 図に示される雨量データをもとに、「土砂災害」の危険度を4段階の色で表示しています。土砂災害発生の危険度が高まっている地域にお住まいの方は、少しでも安全な場所への早期の避難を心がけてください。

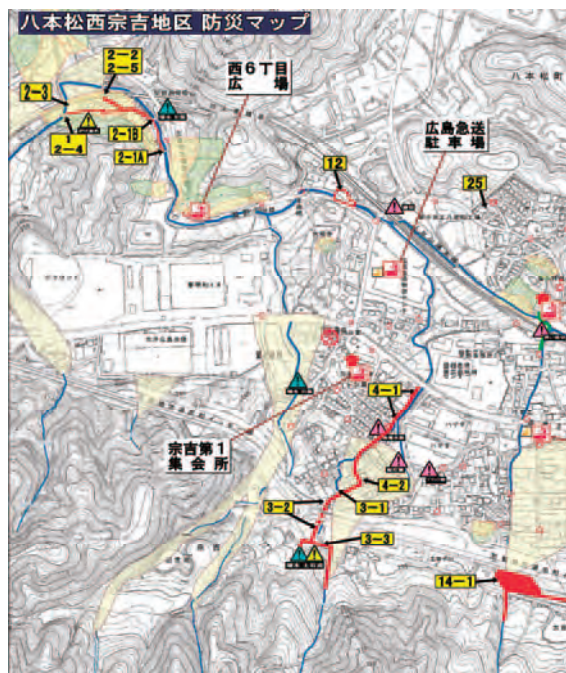
■極めて危険 多くの「土砂災害発生時に避難する極めて危険な状況。特に、土砂災害が発生しているおそれがあります。この状態になる前に避難を完了してください。まだ避難していない場合は、身の安全を確保してください。

■非常に危険 「土砂災害がいつ発生してもおかしくない非常に危険な状況。速やかに土砂災害警戒区域・危険箇所などの外の安全な場所へ避難してください。

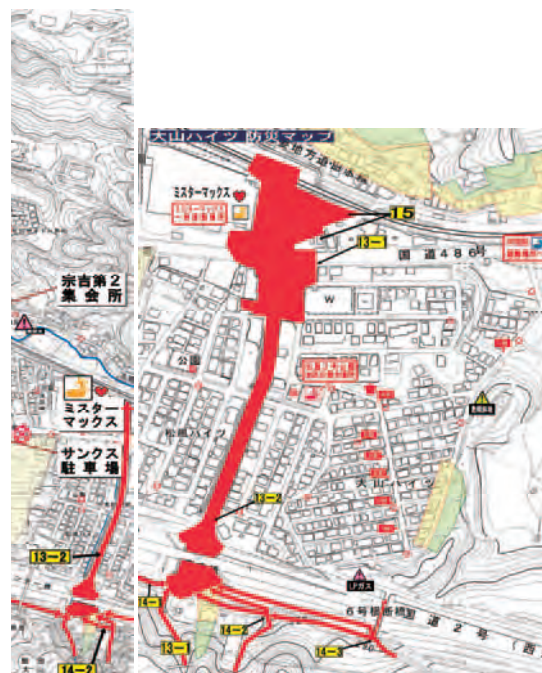
■警戒 「土砂災害への警戒が必要です。避難準備をし、早期の避難を心がけてください。

■注意 「土砂災害への注意が必要です。今後の情報に留意してください。

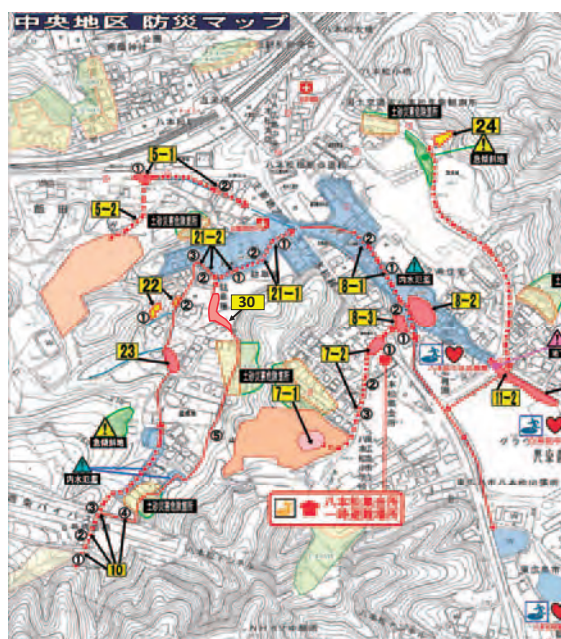
6



7



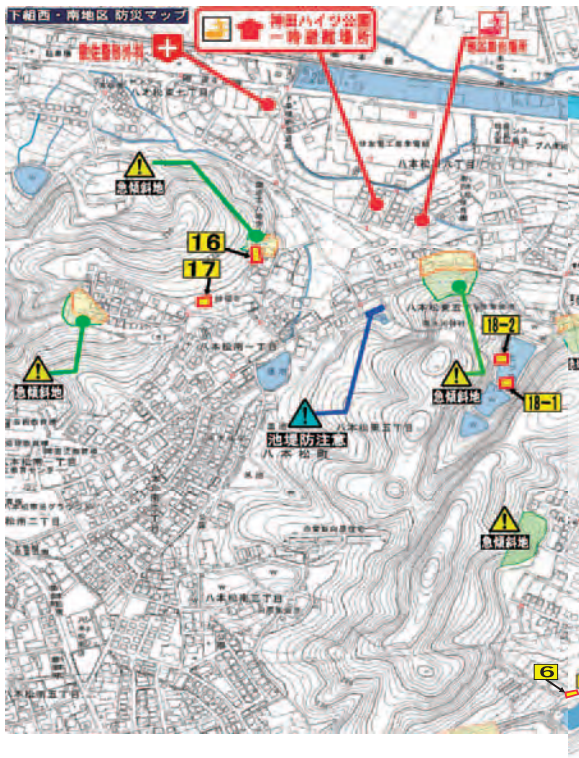
8



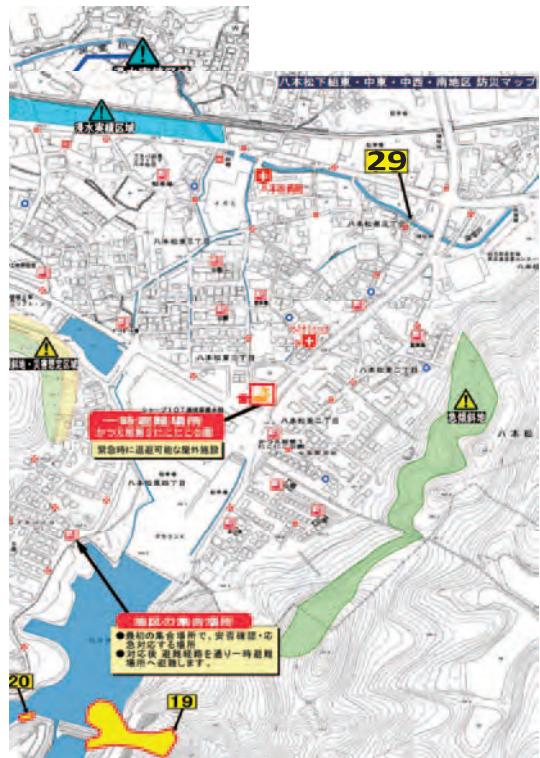
9



10



11



12

7.06豪雨災害状況報告							受付順		
番号	1	区分	避難	場所	八本松西6丁目	連絡日	7月6日	調査日	7月7日
規模	1世帯								
状況	アパートに住む外人の方2名がけがの恐れがあるとの報告。会社の同僚の家に避難したとの報告。橋が流された現場の直近で相当な恐怖があったものと推測								
対応	避難所担当市職員へ概要報告(6日)								
番号	2-1	区分	橋破壊	場所	八本松西6丁目	連絡日	7月6日	調査日	7月7日
規模	2ヶ所								
	八本松西6丁目の集落に八本松方面から通る2つの橋（A：高橋さん前、B：切田さん前）が破壊されている A：橋の東側基礎部分が流亡し橋と道路が分離 B：橋の西側基礎部分が流亡し橋が落ちている								
対応	避難所担当市職員へ概要報告(6日) 河川港湾課職員へ調査結果報告(7日)								
番号	2-2	区分	ガード下浸水	場所	八本松西6丁目	連絡日	7月6日	調査日	7月7日
規模	1ヶ所1世帯								
	流された橋の上(NO2-1の2番目の橋)の道路を乗り越えた濁流が家屋(武田さん宅)を直撃 床下浸水させ 現在鉄道のガード下をくぐるこの道に貯留 志和方面への通行が遮断 加えてこの集落の2ヶ所の橋が破壊されたため孤立している								

13

番号	2-3	区分	法面破壊	場所	八本松西6丁目	連絡日	7月6日	調査日	7月7日
規模	1ヶ所								
状況	八本松方面と志和方面の河川の合流地点に架かる鉄橋下の法面が崩れている								
対応									
番号	2-4	区分	橋破壊	場所	八本松西6丁目	連絡日	7月6日	調査日	7月7日
規模	1ヶ所								
状況	八本松と志和の境界に架かる橋の基礎部分が流亡し橋が落ちている このため2-1 2-2に示す橋とガード下の道が封鎖されこの地域の7世帯が孤立している(車の移動不可) 人間は危険ながらも通行可能 住民の意見 橋の高さを高くしてもらいたい 77歳になるが初めてのことでこれだけの水位になるまで気が付かなかった 水位センサーも付けてもらいたい								
対応									
番号	2-5	区分	ガード下浸水	場所	八本松西6丁目	連絡日		調査日	7月9日
規模	1ヶ所1世帯								
状況	流された橋の上(NO2-1の2番目の橋)の道路を乗り越えた濁流が家屋(武田さん宅)を直撃 床下浸水させ 現在鉄道のガード下をくぐるこの道に貯留 志和方面への通行が遮断 加えてこの集落の2ヶ所の橋が破壊されたため孤立している								
対応	14								

規模	0						
状況	集落の孤立を解消するため、鉄道のガード下に貯留する泥水と土砂を地域の方と関係者約30名で除去 付近にゴミステーションを移設 郵便物、新聞等の配達ルートを確認した(7月9日) 市の維持課で検討し仮設の橋を作ることに決定 し発注済み 1ヶ月程度はかかる 場所は橋内さん宅前に架かる橋 市で車の移動に伴う経費負担はできない (7月13日) 別に J R 開通までの間以前あった路切を復活する (J R 協議中)						
対応							
番号	4-1	区分	土石流	場所	八本松西 5 丁目	連絡日	7月6日 調査日 7月7日
規模	流域 4 5 0 m						
状況	丘陵の最上部を走るバイパス側道に直接山から発生した土石流が側溝とは別に道路上を国道 2 号線まで流れ下る (道路距離約 4 5 0 m) 早朝から地域住民の方総出で路上の土砂を除去 上流には浸水した家もある (国道出口付近)						
対応	避難所担当市職員へ概要報告(6日) 河川港湾課職員へ調査結果報告(7日)						
番号	4-2	区分	土石流	場所	八本松西 5 丁目	連絡日	7月6日 調査日 7月7日
規模	3 世帯						
状況	上流からの土石流が道路上を川のように下り伊藤さん宅付近の 3 世帯を浸水させた 土砂の流れてきた高さは床面ぎりぎり 土石流の高さは約 5 0 c m 高 (中間の道路屈曲部分)						
対応	6 日 集会所への避難指示						

15

番号	3-1	区分	土石流	場所	八本松西 5 丁目	連絡日	7月6日 調査日 7月7日
規模	2 世帯						
状況	最も被害の大きかった上流の側溝のそばの林さん宅付近の 2 世帯 地域の方の応援で土塵が横たわっている						
対応	避難所担当市職員へ概要報告(6日) 河川港湾課職員へ調査結果報告(7日) 6 日 2 階への						
番号	3-2	区分	土石流	場所	八本松西 5 丁目	連絡日	7月6日 調査日 7月7日
規模	流域 4 5 0 m						
状況	県道 8 3 号線のアンダーパスで土石流の処理をする子どもたちを含む地域の人たち 大量の土石流がこのトンネルに集まり通過 (下流からの情景)						
対応							
番号	3-3	区分	土石流	場所	八本松西 5 丁目	連絡日	7月6日 調査日 7月7日
規模	流域 4 5 0 m						

16

状況	土石流はトンネルの左右 2 ヶ所の深流 (土砂ダムなし) で発生し、バイパス側道に流れ込み下方へ (瓦礫は小さいものが多い) トンネルの直下に多くの住宅が見える (上流からの情景)						
対応							
番号	5-1	区分	出水	場所	八本松飯田	連絡日	7月6日 調査日 7月7日
規模	道路約 100 m						
状況	田中学習塾東側の道から国道 486 号線に出水 土砂が道路及び側溝に堆積 雨水は歩道 (登下校道約 100 m) を東側に流れその先の坂道 (登下校道) を下り、学童の登下校を妨げている						
対応	避難所担当市職員へ概要報告(6日) 河川港湾課職員へ調査結果報告(7日)						
番号	5-2	区分	出水	場所	八本松飯田	連絡日	7月6日 調査日 7月7日
規模	道路約 120 m						
状況	降雨時は業者により池が埋められ造成された約 6,000 m ² (150 m × 40 m) の更地に降る雨水が既存の池水と合流し道沿い (120 m) に流出している						
対応							

17

番号	6	区分	崖崩れ	場所	八本松東 4 丁目	連絡日	7月6日 調査日 7月7日
規模	1 ヶ所						
状況	刈又池南端の西の崖が幅 5 m 高さ約 4 m にわたって崩れ下方の道路を覆い片側通行止めの状態						
対応	6 日山本郡会長他地域の自治会等関係者で路上の土砂を撤去し、9 日には復旧工事まで施されている						
番号	7-1	区分	出水	場所	八本松町飯田	連絡日	7月6日 調査日 7月11日
規模	1 ヶ所						
状況	午後 8 時ごろ八本松小学校グラウンド造成工事 (山の土砂を大幅に撤去) 沈砂池 (素掘り 径 40 ~ 50 m 深さ 2 m 程度) 豪雨で一挙に集まり排水口 (上向き) の 1 m 上まで溜まった。						
対応							
番号	7-2	区分	出水	場所	八本松町飯田	連絡日	7月6日 調査日 7月11日
規模	1 6 0 m						

18

状況	沈砂池の大量の砂交じりの水は開口部から側溝に流入したが下方の側溝の容量が少なく砂交じりの水は最大水深30cmとなり道を下り、北側の団地の雨水と合流し130m下の県道67号線を超えて流出 下方の家屋の床下・床上浸水の原因となった								
対応									
番号	8-1	区分	床下浸水河川	場所	八本松町飯田	連絡日	7月6日	調査日	7月7日、7月
									
規模	8世帯80m								
状況	広島銀行裏一帯の集落 川幅1m 深さ1mの小さな川（源流は国道バイパス第5横断橋を經由して来る山水、今回は相当な量が出水しているNO10記載）が氾濫 約50cm高さまで出水 範囲は川沿いに長さ200m程度 また、上流約80mでは水が引いた後でも流れが緩いため水路に約40cmの土砂が堆積し下水口が水面の下にきている（下水道は未設）								
対応	八本松集会所へ6名避難								
番号	8-2	区分	床下浸水	場所	八本松町飯田	連絡日	7月6日	調査日	7月11日
									
規模	0								
状況	この地域で最も低い地点（水路の東側で水路の上端より1m弱低い位置） 住民の方は「午後8時ごろ水は床下（1m弱）まで来てなかなか引かなかった 20年ごろ前 市が側溝に蓋をしたため路上に集まった水の排水機能が落ちたのも浸水が大きくなった原因の一つ 以前 市に「レナジ」に変更申請していた 川が小さいのも大きな原因 この地点に東西南北の水が集まる」と話された								
対応	家の周囲に溜まった土砂を袋に詰め搬出作業を行っている								

19

番号	8-3	区分	床下・上浸水	場所	八本松町飯田	連絡日	7月6日	調査日	7月11日
<div><div></div><div></div></div>									
<div><div></div><div></div></div>									
規模	0								
状況	小学校方面からも相当な水（No7-2）が流れ水路西側の2世帯が床下・上浸水し避難された 特に西北側の貸家は小学校方面から来る道の高さ1m以上水位が上がり床上浸水が認められる								
対応	周辺は後片付けされている								
番号	9-1	区分	内水氾濫	場所	八本松南2丁目	連絡日	7月6日	調査日	1月0日
<div><div></div><div></div></div>									
<div></div>									
規模	1ヶ所								
状況	6日午後7時25分 集中豪雨中 子供クリニック前 水路上面より低い場所は 深さ30cm以上浸水 通行不能 家屋までは浸水していない 過去の最大水位より低い なお、この水路は南1、2、3丁目の雨水を流すもので この位置から50m下流に3、4丁目の水路の合流点で浸水する水位の基準になっている（この地域の路面はその基準水位よりも低い）								
対応									





20

番号	9-2	区分	調整池確認	場所	八本松南3丁目	連絡日	7月6日	調査日	1月0日
									
規模	1ヶ所								
状況	6日午後6時20分 3丁目最上流の池を埋め調整池としたもの 池には雨水が貯留しているが オーバーフローには相当の余裕がある								
対応									
番号	9-3	区分	七つ池水位	場所	八本松南3丁目	連絡日	7月6日	調査日	1月0日
									
規模	1ヶ所								
状況	6日午後7時30分 集中豪雨中 大曾場公園西の七つ池流入水路と七つ池の2ヶ所の流入口 まだ多少の余裕がある（当初の水位が少し低かった 子どもクリニック先生談）								
対応									

21

番号	10	区分	土石流	場所	八本松飯田	連絡日	7月6日	調査日	7月7日
									
									
									
規模	7世帯								
状況	第5横断橋の南側の山は急斜面 現状でも滝のように山に敷設された急傾斜側溝を流れ落ちている 当時は左右の側溝からの雨水も合流し大量の土石流となり陸橋を渡り右の側溝をとおし宅地の方向（NO8）に流れたものと思われる 特に今回は橋の上を通った土石流は側溝にはいらず左側の路上を通り7世帯の民家のそばを通過して下流に流れた バイパス南の山水をこの場所で受け陸橋をとおして駅前地帯に流れる構造となっており駅前の小川では受けきれないものがある								
対応									
番号	11-1	区分	出水	場所	八本松南2丁目	連絡日	7月6日	調査日	7月7日
									
状況	中学校北の弾薬道路のアンダーパスに濁流が入り、バスに設置された常設ポンプでは排水しきれず1m以上の水位となり、中学校東側の側道も濁流が滞留し通行不能となった								
対応									

22

番号	11-2	区分	出水	場所	八本松南2丁目	連絡日	7月6日	調査日	7月11日
  									
規模	0								
状況	その原因はこの地域の雨水を受けるバスの南側にあるタメマスから大量の濁流が逆流したため これは弾薬道路方面の大量の山水（当プレマーション北側の山の出水で山が崩れている）の流入と八本松中学校交差点下で合流（N O 8の水路）する地点の水位が上がり逆流したたためと思われる								
対応	7日朝 水中ポンプでポンプアップし土砂を除去した（消防団とおやじの会）								
番号	12	区分	床下浸水	場所	八本松西6丁目	連絡日	7月6日	調査日	7月7日
 									
規模	2世帯								
状況	志和に至る道の北側の一段低い位置を川と並行に走る道がある 夜7時ごろからこの川が増水し直ぐに路上約50～60cm高さにあふれ民家（福島さん）を直撃 床下浸水 11時になっても水の引きはなかった また、ガードレールのない出水時は川の区別がつかない道路を多くの車が通って危険であった（福島様）								
対応									





23

番号	13-1	区分	土石流	場所	八本松西2丁目	連絡日	7月6日	調査日	7月7日
									
規模	0								
状況	バイパス南の山腹から発生した土石流は①大谷さん宅の西側の谷（土砂ダム有）からバイパス高架の下を通り溝迫交差点を埋め尽くし500m下流にあるJRの鉄道まで流れた。住民の方によると夕方6時頃は何もなかったが夜8時ごろからあっという間の出来事で溝迫交差点では深さ1m程度の土砂厚で多くの車（約30台）が動けなくなった他 周囲の店舗や民家の周囲を埋め尽くした また下流のミスターマックスや交差点付近の民家、駐車場も直撃した								
対応									
番号	13-2	区分	土石流	場所	八本松西2丁目	連絡日	7月6日	調査日	7月7日
 									
規模	0								
状況	上流は莫大な流木で 岩石も大きく規模の大きさが伺え 一つの沢によるものではなく複数の土石流の合流が原因と思われる 道路幅18-20m 団地は一段と高い場所にあり 傾斜4/1003°（土石流開口部から溝迫交差点まで400m 高低差16m）もあり滞留しないため団地に影響しなかった								
対応									

24

番号	14-1	区分	土石流	場所	八本松西3丁目	連絡日	1月0日	調査日	7月7日
									
状況	②大谷池西150mの位置にある沢（この位置に国土交通省の小さなダムとありますが）が大きな土石流を生じ バイパスの工事現場（100m×40m）を埋め尽くし、水量も多く東側の側道約200m下り大谷さん宅西側の土石流と合流している								
対応									
番号	14-2	区分	土石流	場所	八本松西2丁目	連絡日	1月0日	調査日	7月11日
									
規模	0								
状況	溝迫交差点土石流は①大谷さん宅西側の谷、②大谷池西の谷に加え、③池の谷馬頭神社の谷（①の谷より100m東）からも大量の土石流が発生し側道と溝迫交差点に通ずる西条バイパスを下降している なお、この谷は県の復旧治山事業により防災工事がされている								
対応									
番号	14-3	区分	土石流	場所	八本松西2丁目	連絡日	1月0日	調査日	7月11日
									





25

規模	0								
状況	更に、③の土石流より約130m東の④第6横断橋付近の沢からも土石流が発生し側道と溝迫交差点に通ずる西条バイパスを下降している これら4つの土石流が2号線バイパスの構造から一つに合流し今回の甚大な土石流となったものと思われ、今後の専門的な解析をふまえた構造改善と迅速なハザードマップの見直しが必要である								
対応									
番号	14-4	区分	土石流	場所	八本松西3丁目	連絡日	1月0日	調査日	7月7日
  									
規模	0								
状況	7日6時 国土交通省へ溝迫付近国道バイパス緊急復旧依頼（土久岡本部長） 7日10時30分 重機2台により交差点緊急復旧 夕刻に国道部分開通 9日15時 バイパス部分復旧作業開始 9日午前中 八本松小学校児童登下校ルート安全調査 10日午前中 児童安全登下校支援								
対応									
番号	15	区分	建物破壊	場所	八本松西1丁目	連絡日	1月0日	調査日	7月7日
									
規模	1棟								
状況	JRの鉄道まで下った土石流が通沿いに逆流し溝迫交差点下の近藤さん宅を直撃、倉庫を半壊し本宅の床下浸水 近くの駐車場にも土石流が堆積								
対応									

26

番号	16	区分	建物破壊	場所	八本松南1丁目	連絡日	7月7日	調査日	7月10日
									
規模	2棟								
状況	下組東で約40mの高さの山で急峻な南側斜面（急傾斜地・災害想定区域）が崖崩れた（高さ10m幅20m赤土 傾斜角60度位） この崖崩れは小幡さん宅の裏で発生し、近接した倉庫を全破壊 7mくらい離れて現在建設中の居宅を高さ1mの土砂が襲い居宅を歪む等の被害を出した 崖崩れは3回にわたり発生した模様								
対応	建築業者の手により復旧が進んでいる（7日から）								
番号	17	区分	崖崩れ	場所	八本松南1丁目	連絡日	7月7日	調査日	7月10日
									
規模	1ヶ所								
状況	16と同じ山の西斜面に位置する砂福寺の墓地の墓が崖崩れ（幅3m高さ2.5m）で流される 南側より平坦な地域だが墓地の裏山は南側からの雨水が流れ集まる場所に当たり崖崩れが出たと思われる								
対応	7月10日復旧作業中								
番号	18-1	区分	池理体崩壊	場所	八本松東4丁目	連絡日	7月7日	調査日	7月10日
									

27

規模	1ヶ所								
状況	八本松東集会所東側にある2つのため池のうち上の池の堤体（上部幅5 m幅、勾配4.5								
対応									
番号	18-2	区分	林道路崩壊	場所	八本松東4丁目	連絡日	7月7日	調査日	7月10日
									
規模	1ヶ所								
状況	下の池の西側林道（幅約3 m）の低くなっている道の路肩が池に削れ落ちている（幅約1.5 m 長さ約10 m 高さ約2.5 m）								
対応	市の確認調査表有り								
番号	19	区分	土石流	場所	寺家	連絡日	7月7日	調査日	7月10日
									
規模	1ヶ所								
状況									
対応	刈又池東側の60 m以上の高さの山で前谷礫松線の法面工事の切れている谷部分に大型の崖崩れ（幅約5 m～20 m 高さ約20 mが発生）で土砂は前谷礫松線を乗り越え2つの刈又池に流入 特に上の池には大量の土砂が池中央付近まで流れていることから土石流の								
対応	9日夕刻に道路部分復旧								



28

番号	20	区分	林道路崩壊	場所	寺家	連絡日	7月7日	調査日	7月10日
									
規模	1ヶ所								
状況	刈又池南側を通る林道（幅約2m）が幅2m長さ約15mにわたり刈又池に流亡 道成りでは最も低い位置 道の南側は高さ20mの山で雨水がこの場所に集まり路肩が崩壊したものとと思われる								
対応									
番号	21-1	区分	床下浸水	場所	八本松町飯田	連絡日	1月0日	調査日	7月11日
									
規模	1施設								
状況	第5横断橋（NO10）からくる出水で内水冠塞 山田脳神経外科を床下浸水 この病院の位置が濁流に直撃される位置にあり、今後の増水で病院機能を犯されること心配されている								
対応	上流部分に土嚢を積み上げて今後の増水に備えている（市の協力を得て地元自治会施工）								
番号	21-2	区分	河川土砂堆積	場所	八本松町飯田	連絡日	1月0日	調査日	7月11日
									
規模	160m								

29

状況	上流も流れがゆるやかで土砂の堆積が多く 5 c mの水位でもほぼ満水状態 排水パイプも水中に埋没 1 m径のパイプも半分以上土砂で埋まっている 1 mパイプから山田脳神経外科の67号線側の溜めすまで 1 6 0 m								
対応	この付近の土砂の除去を地元で14日に行う予定								
番号	22	区分	法面、崖崩れ	場所	八本松町飯田	連絡日	1月0日	調査日	7月11日
	<div>1</div> <div>2</div>								
規模	1ヶ所								
状況	同道さんの事務所の法面と裏山の崖崩れ（1 0 m幅 5 m高）倉庫は残っている								
対応									
番号	23	区分	床下浸水	場所	八本松町飯田	連絡日	1月0日	調査日	7月11日
	<div></div> <div></div>								
規模	1世帯								
状況	第5横断橋からの濁流が路上を流れ下り河原さん宅を直撃 道路下の暗渠水路を明渠水路にするよう要請が出ている								
対応									
番号	24	区分	崖崩れ	場所	八本松町飯田	連絡日	1月0日	調査日	7月11日
	<div></div> <div></div>								

30

規模	1ヶ所					
状況	東ブレマンション北の山（約50m高）の急峻な部分が出水とともに崩れ、濁流が弾薬道路を下降しアンダーパスの溜めますに流入					
対応						
番号	25	区分	崖崩れ	場所	八本松町飯田	
				連絡日	1月0日	調査日 7月11日
						
規模	1ヶ所					
状況	弾薬庫との境界にある福原さん宅の裏が崖崩れ 上に防火水槽（40t）もあり市による復旧を強く要請されている なお、復旧要望書が宗吉北区自治会長から市へ提出されている					
対応						
番号	27	区分	出水	場所	八本松町原	
				連絡日	1月0日	調査日 7月11日
						
規模	1ヶ所					
状況	小倉山の山水が小倉林道をとおり八本松ポンプ前から県道に流出 七つ池西の県道67号線の側道の低い部分から七つ池に流入 発生源は土砂災害警戒区域に指定されている（二瀬川右7310）					
対応						

31

番号	28	区分	内水氾濫	場所	八本松南1丁目	連絡日	1月0日	調査日	7月12日
									
規模	1ヶ所								
状況	蓮池にこの地域の雨水が一挙に集まり水位が上がり（排水口より20cm高い水位）このため側溝の水が逆流しこの地域の低い地帯（大迫さん付近約30m）に貯留した（約10cm水深） 池の水位が上がった原因は池の排水口（子供クリニック方面に流れる）に物が詰まっていたため								
対応	7日朝 近所の方により排水溝のごみを除去され水位は下がった								
番号	29	区分	橋破壊	場所	八本松東3丁目	連絡日	1月0日	調査日	7月15日
									
規模	1ヶ所								
状況	老朽化した橋（長さ6m 幅2m）橋の西側から（黒瀬川流域）の流れで西側のガードレール湾曲、南西側の基礎部分に亀裂 橋の中央部に古い亀裂 橋も西南側に傾いている 川幅5m 橋の高さ2mの川が氾濫した模様 両方の道20～30mに土砂が上がっている ナイトウデンキから市へ連絡 7/8日確認済み 通行止め 南側の民家に床下浸水の跡								
対応	0								

32

番号	30	区分	内水氾濫	場所	八本松町飯田	連絡日	1月0日	調査日	7月15日
									
規模	1ヶ所								
状況	第5連絡橋を通過して10-4の側溝に流入した泥水は農地に氾濫（水田に流入）し被害を及ぼす								
対応	0								

33

③1 【三原市木原】

木原六丁目

奥 田 愛 矢

題目「絶望と再起の狭間で」

7月7日 午前12時過ぎ、2階の廊下にいた私は突然の地鳴りと揺れに座り込みました。停電と共に、家が揺れ始め、3・4回の大きな衝撃と共にガラスが壊れ続ける音、ゴォーという不気味音が続き、懐中電灯を持ち、2階の階段から1階を照らすと、5段目まで土石流が家の中まで流れ込んでいました。テレビで見たことがある…とまさか、この三原市木原6丁目福地地区の私の家に、このような恐ろしい事態が起こるとは――。

それから、主人を呼び、1階で寝ている母を腿まで土砂に浸かりながら、助けに行きました。

幸い私の家は、鉄筋コンクリートで、出来ていたので流されることはありませんでしたが、キッチンの流しまで土石流で埋まり、風呂場には折れた電柱が突き刺さり、1m以上のコアストーンが、ドアの間に挟まり、重機で細かく砕いて運び出さなければなりませんでした。

それよりもっと恐ろしかったのは、12時20分頃、裏のお宅が、火事になり、土石流が家も外も流れているので逃げる事ができず、真っ暗な中ただひたすら、火の手を見つめながら、じっとし

て居る他ありませんでした。

私の家の横には、2m幅の川が流れている丁度S字の部分に当たり、流木やコアストーンが直撃してしまい、石垣がえぐられ、日本家屋の離れが壊れてしまいました。池の鯉が私達家族の身代わりになってくれたのだと思います。

少し明るくなった4時頃、川を隔てた鉄骨2階建て倉庫を見てびっくりしました。

私の車が土石流に埋もれて見えません。隣の主人の車も流されたらしく、3mの高さの石碑も流されていました。

組うちの方の家が流され、90歳の女性が亡くなられ、私の倉庫の裏の家は、1階部分の壁が、なくなっていました。

8時過ぎ、消防隊の方たちに、助けていただきました。

近所の方達に、「上のため池が決壊したら、お宅のミカン畑は、真下でしょ。大丈夫？」と聞かれました。姑が70年かけて育てた畑は、半分以上流されました。

でもその時はまだ、これから続く大変な作業のことを考える気力もありませんでした。

③2 「三原市下北方」

下北方一丁目

ペンネーム：M・H

題目「豪雨災害を振り返って」

平成30年7月6日（金）は二度と忘れることのない日となりました。

7月に入り、ほぼ毎日降り続いた雨量は結果として、「西日本豪雨災害」の一因になりました。

その日、広島東洋カープの試合が終了した午後10時頃に、近所のお宅から町会役員の私の方にけたたましく電話が入りました。「土砂崩れが起きましたので、取りあえず電話しました」との連絡でした。急いで、各班長に連絡し自宅への連絡が既に取れないお宅もあったが、土砂崩れに遭った被災者宅へ行き、真っ暗闇のなか大量の土砂でどうすることも出来ないことがわかり、三原市の災害対策本部に連絡したが、「危険だから、命を守る行動に出てください。現場から避難してください」とのことで、全員（5〜6名）に帰宅してもらおうと呼びかけをしようとしたところ、妻から「すぐに戻ってきて」との電話が入ったが、雨も小康状態であり「もう少しして帰ろう」との思いであった。電話を切り、土砂の搬出に来てくれた町内の方に「対策本部から避難する指示があったので、今日はお帰りください」と皆さんにお知らせ

をした。と同時に、またも妻から「早く戻ってきて」と怒号の電話が入り、これはただ事ではないと思い、急いで坂道を下り、約100mの我が家をめがけて急いで帰路についた。

約半分の道のりを過ぎ、県道を渡って帰ろうとした。すると、30分前に渡った県道が様変わりしていた。今までに見たことないようなものすごい勢いの濁流が県道を流れており、膝ぐらいまでの大量だったが、道幅約6mの県道を渡るのに5分程度かかったと思われる。勢いが強く流れていたので「高齢者が行方不明になるのはこういうことなのか」と一瞬思いながら、何とか渡りきり我が家にたどり着くことが出来た。もちろん、歩道伝いに帰ったが水位も、既に膝上くらいまでに達していた。

我が家に帰り、帰ってきた道を振り返ると、道路、歩道などは水位が相当高くなっており木々やプラスチック製品などのゴミ類が勢いよく流されていた。次第に我が家にも浸水してきて恐くなり、2階に駆け上がった。この日は、知人の方が「車で帰れない。」とのことで我が家に宿泊することとなった。

土砂崩れの現場から帰るまでの間、家族が生活必需品を取りあえず、何点か2階へ持ち上がったが短時間しかなく、最低の物しか持ち上げることは出来なかった。

全員が2階へ上がり、押し寄せてくる濁流の水位はあつという間に上がり、どこまで上がってくるのか不安が続き、明け方まで水位が気になり眠りにつくことはなかった。

翌日、7月7日（土）午前8時30頃にはついに、14段あった階段のうち9段が水没し、上から5段の階段しか見えなくなった。段々とこれからどのように避難したらいいか考えも出来ない速さで水位が上がってきました。以降は、水位は上がらず終息になり、午後2時頃には、水が引き9段の階段が見えるようになった。災害情報はラジオで聞き入り、バナナのみ生活を余儀なくされた。2階にあったトイレは逆流で利用出来ず苦慮した。また、2階から近所の様子を見ると、救命ボートが行き交いし、高齢の方などを運ぶ姿が見られたが、絶対数が足りないようであった。

翌日7月8日（日）午前7時30頃には庭の一部が見え始め、家族から歓声が上がったような気がした。水位が下がったため、1階に降りてみると信じられないほどの風景が目の中に人つてきた。ピアノをはじめタタミ、本棚、食器棚など全ての物が折り重なり、まるで地震後の光景を見るようで、元の姿の跡形もなく何が起こったのだろうと立ちすくみ、ただ啞然とするばかり涙さえ出ました。

携帯電話や水道・電気などが一切断たれた状態が3日ほど続き、不便な面は多くあったが、家族全員の絆をはじめ、近所の方々から2階に避難している我々に「元氣ですか。大丈夫ですか。」など激励の声などに励まされ、豪雨災害という難関を越えることが出来たように思います。

被災者として、また町内会役員として町内会会員の支援に大き

な役割を果たせなかったが、会員の皆様から様々な支援を頂いたこと、また、ボランティアの皆様のご協力、知人友人など多くの皆様のご支援などにより今日までたどり着くことが出来ました。改めて皆様に感謝申し上げます。

最後になりますが、居宅の改修も道半ばではありますが、皆様方のご支援に背か無い様に、家族ともども完全復興に向け頑張っております。

③③（三原市沼田西町小原）

沼田西町小原

匿名

私の住んでいる環境ですが沼田川沿いで川から3m～3.5m位低い所にあります。水害を受けやすい、浸水危険度の高い所です。毎年、5月ごろ梅雨入りから10月末までの期間は、大雨、台風のために安心して寝れない日々となります。日頃から水害には神経質になり、頭からはなれることはありません。

今回も自宅前の道路端に三原市が農業用水路の支流から逆流して入る水を防ぐ1.1mの防壁工事の最中でしたが、この防壁も何の役にも立ちませんでした。濁流が上の道路を超えてきました。今回の7月6日の豪雨で、自宅は1階が水没し、大規模半壊に

なりました。

初めて、避難所に避難しました。今までは自宅近くの高い場所に避難して車の中で待機していた。

7月6日避難所に行くまでの状況ですが、18時ごろから逆流が始まり、自宅前の道路が冠水する前に車を高い場所に移動させた。

結果、移動した場所に水が来て、車（軽トラ）は、水没 廃車

・19時過ぎに着の身着のまま、貴重品を持って避難所（小学校体育館）に行った。避難時、隣に声掛けした。ペット（犬）がいるので避難所へは行かないで、自宅2階に垂直避難、避難経路が全てすべて冠水する恐れがあるため、早めに避難した。私が避難所へ行くときは問題なかったが、1時間後には道路は冠水して通行止めになった。

・避難所に行ったが、体育館を解放しただけで、何にもなく車に積んでいた座席の座布団、レジャーシートを床に敷いて夜が明けるのを待った。次の朝避難者数人で近くの工場の販売機で飲み物、パンを購入、コンビニではレジが使用できないので売ってくれない。食堂に行ってお願ひして、作ってもらった。何とか食料を手に入れた。停電、断水、通信不能、道路閉鎖で孤立状態が数日続いた。ライフラインが少しずつ復旧し避難所にも差し入れ、支援物資等も届き、改善された。多くのみなさんに助けていただき感謝しています。

・この地域では、避難訓練等は1度も行われていません。訓練は

必要です。

・対策本部から指示が出たら、「ここは大丈夫だろう」と思わず、少しでも早く安全なところに避難することです。

・現在の場所に住んで35年、平成5年には床上浸水、50cmくらいの水が来るのは毎年、数回、その都度避難しています。

・私は普段から妻とどこに逃げるか？どこの道が安全か話しています。

川の傍に住んでいれば水害に対して敏感になります。いつもダムの放水が問題になっていますが、私にとっては自宅から25m上の水門とポンプが問題です。苦しい思いをしました。

今回の水害で家を解体（35年間に終止符を打ち）現在の場所よりはましな地を求めて移住を考えています。

現在は、県みなし住宅で多くのみなさんの支援を受けて生活しています。感謝しています。覚えてないのか・忘れたのか・今の私の健康状態では、思い出して文章にはなかなかできませんでした。皆様のお求めの趣旨と違っていましたら破棄してください。



これが問題の水門



一番奥が自宅 水が道路を超えて来た。



③4 【三原市沼田西町松江】

沼田西町松江

ペンネーム…M・M

素足にキティちゃんの健康サンダル、半袖Tシャツにジーンズ、ちよっとした肩掛け布バッグ。中身はサイフ、手ぬぐい、運動免許証、モバイルバッテリー、スマホ、水筒、一口ドーナツ1個。体育館は暑いかもしれないから団扇、蚊に刺された時の為のかゆみ止めの薬、床に直接寝ると痛いだろうからキャンプ用マットと寝袋……これが7月8日の私の装備！土曜の朝は自宅に帰るつもりでしたのでかなりの軽装。

このあとひと月以上体育館生活になると判っていたら……

7月6日金曜日、研修会の為に安浦に行っていました。降り続く雨に呉線が不通になるなど交通に影響が出た為、研修会が早めに終了することになり、私はJRを利用して幸崎から参加していた方と一緒に12時半ごろ会場をあとにしました。2時過ぎに自宅に帰った。私は遅めの昼食を取り、買い物に行き、いつものように夕食の支度をしました。特に変わったことと言えば、ママさんバレーチームのキャプテンから、「体育館が避難所になるかもしれないので、今日の練習は中止です。」と連絡を貰っていたことぐらいでした。その時も雨は降り続いていました。

以前、自宅前の道路に水が溢れたことがあます。動かすことができなかった近所の車が浸水したこともあったので、もしものことを考えて18時過ぎに車を少し高いところに移動させてから夕食にしました。車を移動させてから1時間もたない19時前頃にFM告知ラジオから「沼田西小学校が避難場所になりました」との声。いつの間にか水路からあふれている水、いつもと違う雨の降り方にざわざわと不安になり、隣に住む母に声を掛けました。その少し前に中学校への避難放送があった時には、中学校までは遠く、行き帰りを考え躊躇したのですが、母が小学校ならと行くと答えましたので避難することにしたのです。ですが、そんなに大事とはとらえていませんでした。

後でわかったことですが、小学校の避難所開設は正午頃、当然その時は自宅に居ませんでしたので、私は繰り返し放送されたであろう何度目かの放送を聞いた。ということのようです。あの時小学校が避難場所になったことを聞かなかったら、母が行くと言わなかったら、不安を抱きつつも、もしかしたらあのまま自宅にとどまっていたかも知れません。

地域の消防団に所属する夫が団服に着替え出勤した後、私たちもすぐに支度をしようと母と話をし、息子にも準備するよう声を掛け、一時避難させた車を取りに走りました。より激しく降る雨と水路から溢れ道を流れる水、車を取りに行けたのはあの時がラストチャンスだったのかなと思います。

私が車を取りに行く短い時間の間に母は父の位牌、各2〜3枚の着替え、肌布団、薬、通帳印鑑、サイフ、カメラなどをバックに詰めて準備していました。

初めに母を乗せ体育館に向かいました。真っ暗闇のなかヘッドライトに照らされた路面は、怖いけれどそれでもまだ大丈夫と思える状態でしたが、母をおろしもう一度自宅に車を走らせたときには、あふれる水で縁石は半分くらい隠れており、尋常ではない雨水に恐怖を感じました。ほんの数分間の事なのに、もう一度小学校に辿りつけるだろうかと不安に思いながらハンドルを握っていました。

小学校の体育館には30人弱くらいの人とペットが数匹。広い体育館の中思い思いの場所に座ったり、運動マットに横になっていたりされている中に、ご近所さんのお顔もあり少しホッと思いました。自分では放送を聞いて「すぐに避難した。」と思っていたましたが、すでに何人かの方々が体育館にはおられました。体育館に着き、何となく居場所を確保できたので、先ほど感じた恐怖は少し薄れ「バレーボールの練習が休みになったのに違うことで体育館に来ちゃったな」と呑気に、寝袋を敷いた様子の写真を撮ったりしていました。その後、はっきりした時間はわからないのですが夜中に停電になり、体育館の屋根を打ち付ける雨の音がいつそう激しく、体育館裏の溝も水が溢れて、床まで水が上がってきそうでした。こんな雨の降り方は変だし、何かがおかしいと感じ

つつも、まだ明日の朝は自宅に帰れると思っていました。

明け方、薄明るくなってきたところに「松江は全滅じゃ」と声が聞こえました。何がどうなって全滅なのか？全滅ってなんなん？と、急いで体育館を出た私が見た景色はちよつと理解できない光景で、自宅の方向は道も田んぼも畑も川も全部、何もかも全部、茶色い水の海でした。

自分のところではもしかしたら大丈夫かもしれない、いやそんなことはありえない、本当はもう自宅が水の中にあることはわかりすぎている、けれど・・・どうしても間近で確かめたい、そんな気持ちで、家族からは「もう行ってみても、どうにもならん。」と言われましたが、一人自宅のほうに向かいました。

夫は夜中消防団で出ているときに、かなりの水が来ていることは知っていたようで、母は避難したことを伝えてあったお隣の方から、夜中電話を貰ったらしく「平屋のおばちゃん家は、もう屋根しかみえん」と聞いていたようです。

雨は少し小止みになってはいましたが、まだ降り続いているなか、私は子どもの頃通学路だった車の通らない道を、傘をさして進みました。もうずいぶん通ってなかった道、神社の階段下には水が溢れていましたがそこは水の中を歩き、上から滝のように流れてくるところは近くにいた方が盾になってくださりながら、自宅に向かいました。道が広くなり自宅が近くなってくると、茶色い水の中に漂う青や白い色のコンテナが見えました。その光景に

あきらめだったのか納得だったのか説明できないのですが、どうしても近くで確認したかったはずなのに、結局は少し離れたところから写真を数枚撮って戻ってきてしまいました。その後、昼過ぎにもう一度見に行こうと思った時は更に水が増えていてたどり着くことができませんでした。家の様子を見た後、家族とどんな話をしたか。あまり覚えていません。

友達や親戚、離れて住んでいる子どもに家が大変なことになっていること、命が無事ということを知らせなければいけない。と思いました。頼みの綱の私のスマホは、しばらくするとバッテリーは有っても電波状態が安定せず、すぐに圏外になってしまったりして、なかなか連絡できませんでした。

ぽつぽつと連絡が取れはじめ、少ないながらもほかの地域の子が体育館にもたらされました。今は町内から出られないこと、自宅に残っていた人たちがボートで救出されること、2号線で大渋滞が起きていること、断水が起きていること、自分たちで食べ物や何かしななければならぬこと・・・食事については当然ながらそのことを考えて避難をしていますがから朝からすぐに困ることになりました。

近所の方々の知恵とご支援のおかげで、7日の朝はパンを頂き、お昼はあたたかいお味噌汁とおにぎりが作れました。しかし当初は40人近くの方が体育館に居ましたので、後片付けをしながら直

ぐに次の食事はどうしたらいいんだろうと考えていました。他にも、水洗トイレのタンクにプールの水を入れてトイレを使えるようにしたのですがこれがなかなかの力仕事。仮設のトイレが設置されるまで、仮容器に水を貯めるため夜中にバケツリレーをすることもありました。

一刻も早く自宅を何とかしたい気持ちでいっぱいでしたが、水が引かないことには何もできない、そんな状態が3日間続きました。

その間にも、ボランティアに来てくださったっていた全体の先生やNPO法人の方から、避難所生活の基本的なこと、体調管理・衛生管理のこと、これから長く続く片づけ作業の注意点についてなど教えて頂きました。九州電力の方々が昼夜を問わず電気を供給し続けてくださり、体育館では灯りのある生活ができました。また、物資についても近所の方々、友人、親族、NPO法人、様々な方に基づいぶん助けて頂きました。離れて暮らす子どもたちからも様々な情報が届けられ、その後行政からも職員が派遣されました。

避難して4日目の午後にやっと自宅に入れました。信じられないくらい激しかった雨があがったあと、災害レベルの酷暑、断水だったこともあり、片づけ作業は本当に大変でした・・・暑さと慣れない作業、喧嘩も言い合いもありました。水没した家屋をどうしたらいいか？どこから？何から手を付けたらいいのか？いつになったらこの作業は終わるのか？自分たちの行っていることは

正解なのか・・・

一生懸命泥だらけの家具や畳を運び出しました、冷蔵庫も電子レンジも、テレビやパソコン、布団、洋服、本、アルバム・・・果てしなく、いつまで続くのかと思っていた片づけは、ボランティアの方々や、子どもたち、親戚、友人たちの力でだんだん終わりが見え、家の中はきれいになっていきました。ひとつだけ・・・今思えば無意識に避けていたのか、私が一度もやらなかった作業があります。家から100mも離れていない空き地が災害廃棄物の仮置き場で、運びだす場所はずごく近かったのに・・・1か月以上かかった片づけの間、私は結局一度もその場所へ廃棄物を持ってはいきませんでした。大切だったものが考える間もなく否応なくゴミになっていく・・・仕方のない事だったし、あれが最善だったと分っているのだけれど、やらなかった・・・心の中で折り合いが付けられなかったから・・・かも知れません。

あの日から5ヵ月、まだ自宅の1階は床もない壁もないトイレもない何もなし・・・母は叔母のところに移り住み、私たちが家族は市営住宅に住んでいます。

時々、もうずっとこのまま？と思うこともあります、もう一度あの場所にゼロから生活を作っていこうと考えています。

失ってしまったものもたくさんあります。でも、得たものも、気付いたこともたくさんあります。

前を向き、顔をあげて、
少しずつ頑張っていきたい
と思っています。



7月6日 18時過ぎ自宅前



7月7日6時30分頃

題目「被災のあと、他県に転居」

沼田西町松江
是安義正

私は80歳、妻は75歳の後期高齢者です。
私たちが住む、木造2階建て、築25年の家が、先の西日本豪雨で、床上2m10cmの浸水被害に遭い、全壊の査定を受けました。
今回の三原の雨は、7月5日（木）夕方ごろから雨量が多くなり始めました。翌7月6日（金）14時すぎには、沼田川の水位が上がりだし、三原の各地で避難勧告が開始した。ということ、テレビで知りました。一方、町内からの情報は、全くありませんでした。

なお、「FM告知端末ラジオ」の申し込みを、前年の平成29年12月25日に提出しておりましたが、実際にラジオが届いたのは、すでに豪雨も過ぎ云った、平成30年7月31日の宅配便でした。

当時の状況は、以下の通りです。

7月6日（金）18時、まず、自宅の車を避難させました（軽と普通車の2台）。

同、19時30分ごろ、玄関口まで水が来はじめたので、大丈夫だろうとは思いますが、万一を考えて、庭先にあったメダカの入った水がめを家の中に入れました。

その後、さらに水位が高くなってきたので、妻は万一に備え、

電気釜にあったご飯で「おにぎり」を作りました（5〜6個。これは翌朝、朝食として半分食べました）。

停電で暗闇の中、懐中電灯の明かりで室内を見渡しながら、持てる物だけを、水につかりながら、2人で2階に持って上がりました。

ふと、そのとき足元に、小さな物が動いているのに気がつきました。それはメダカです。12匹いたメダカが、廊下の隅に、かたまって泳いでいました。玄関に入れた水がめは、すでに水没していました。

「元気に生きろよ……」と私は小さく呟いて、すぐに現実に戻り、持てる物を物色する作業を続けました。しかし家の中は、畳が浮き上がり、家具類が倒れ、サイドボードのガラスが割れる音が響きます。さすがに身の危険を感じ、水位も膝上まで達し、体も冷えてきたので限界だと思い、妻と話して2階へ避難することにしました。時計は、7月7日（金）の深夜3時を指していました。しかし、2階に上がってはみたものの、停電のためにテレビは映らず、外との情報は途絶え、横になってみましたが眠れるはずもなく、水位が階段を1段ずつ上がってくるのを懐中電灯で見ながら、ひと晩じゆう不安に怯えていました。

夜が明け、外が明るくなって、いよいよ2階も危ないと感じ、家から脱出することを考えました。しかし、水位は1階の屋根まで来ています。ボート以外での脱出方法はないと考えましたが、

その救助を求める方法が見つかりません。携帯電話は通じていませんでした。

2階の窓を開けて、裏のNさん宅を見ると、同じような様子で、2階にいる母親と小学生の子どもさん2人が、外部と連絡を取っておられました。外は一面の泥水で、子供たちは不安げに母親のそばにいました。

Nさんの奥様が必死に連絡を取る姿を見て、私たち2人も神に祈りました。そうしたら、運良く救助隊と連絡が取れました。そして私たち2人も、隣家のHさん夫妻の手を借り、2階から無事ボートで救出されました。

その後の状況は、以下の通りです。

7月7日（金）0:00ごろ、ボートで救出され、「松江団地の公民館」へ一時避難。

同12:50 棕梨ダムの放流で、さらに水位が上がる可能性あり、十分に注意するよう、東京に住む子供から連絡が入った。（インターネット情報）

同17:00ごろ 沼田西小学校の体育館」の避難所に移る。（その後、8月25日まで、ここでの生活が続きました。）

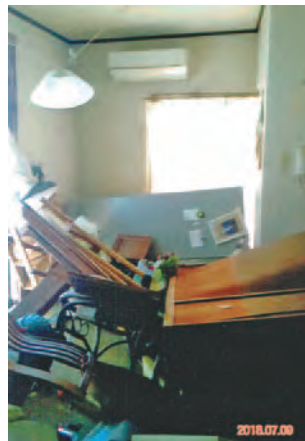
豪雨から一夜明けた7月7日（金）の10時ごろ、私たちは救助隊員の指示で、最低限の荷物をリュックに入れてボートに乗り、

本当の「身ひとつ」で避難所に入りました。このタイミングでの避難では、何も持って出ることはできません。

「早めの避難」は理屈では判っていても、25年間、特に問題なく過ごした経験もあり、この大きな災害を予知して対処することはできませんでした。

私たち2人は、遠く三原を離れて、富山県高岡市に居住しています。

今回の体験を今後の生活にどう活かしていくのか、真剣に考える年日です。



沼田西町

宮垣里枝

題目「平成30年7月6日西日本豪雨災害

沼田西小学校体育館避難所の記録」

はじめに

三原市危機管理課からの要請を受けて沼田西連合町内会（町内会・自治会）で、7月6日13時に初めての避難所を開設しました。今年4月に市危機管理課主催の「地域の防災力を高めよう」出前講座を町内会・自治会の会長は受講していましたが、避難訓練をしたこともない状況でした。避難所開設の町内放送・有線放送を行い、各町内会・自治会の連絡網も流して、松江地区の民生委員のKさんと小学校の体育館の鍵を開けました。危機感を持ちながらも、沼田西町は大丈夫だろうと思っていました。

夕方から激しさを増した雨の中、夜にかけて避難してこられた方達と、体育館の堅い床で思いがけない寒さのなか、激しい雨音を聞きながら過ごしました。

7月7日の朝を迎え明るくなると、松江下組一帯が海のようになっていました。

自宅に戻られた方や、親族の所へ行かれた方もいましたが、被害を受けられた方が残られて、避難所の運営が始まりました。

私は夫が町内会長なので、6日の夕方から一緒に体育館に避難していました。かろうじて自宅は被災しませんでした。連合会

の方は男性なので、食事準備などは難しい状況だったのでお手伝いすることになりました。そして避難所の最後の日まで、運営に関わらせていただきました。

一時的に避難された方も含めて約70名の方が、避難所を利用されました。

最初の3日間

7月7日の松江地区・小原地区の海のような浸水の状況・周囲の崖崩れを見て、あり得ないことが起こったと呆然としました。

町内会も避難者も「一泊して帰宅できる」と思い、食料品の準備をしていませんでした。防災倉庫がありました。鍵がないので倉庫の備蓄の確認も出来ませんでした。「朝ご飯をどうしようか？」と相談していると、避難者のNさんが「工業団地の大日本印刷にこれから出勤するので、工場内の自動販売機のパンが購入できるように交渉してみる」と言ってくれました。崖崩れや浸水した道路を避けて会社に行き、購入することができました。

朝食として、ひとりにパン1個・カロリーメイト1本・自販機の飲料1本を、子どもから順番に選んで食べたのが初めての食事でした。

夜中3時過ぎから停電したので、ガス炊飯器とガスの調理施設がある松江上組公民館を使用させていただいて、避難者で炊き出しをすることにしました。親族の方と来られていたIさんがお米

や野菜などの食料品を提供してくださり、協力しておにぎりと味噌汁を作りました。

お米が足りなくなり地域の方からも支援していただきました。崖崩れや浸水した中を、食料品の購入に行ってくださいでしたが、停電でレジが使用出来ないので販売してもらえませんでした。たまたま開いていた飲食店で総菜の注文を受けてくださり、夕食に届けていただきました。

自宅で被災して来られた方と、ボートで救助されて本郷の福礼集会所にいらした方も来られ、沼田西町体育館避難所39名、町民センター7名になりました。この時、福礼集会所の支援者の方からカレーの差し入れを頂きました。

水が使用出来る間は避難者で協力して炊き出しをしました。そして町内外からの差し入れをいただいて、食事と飲料を確保することができました。(断水は9日から15日頃まで)

降り続いた雨が上がった夜、停電で周囲が真っ暗なのに、空には見たことがないほどの星が輝いていました。とてもきれいな星空と、地上の泥水の海の現実に、自然の驚異を感じて言葉にならない思いを抱きました。(停電は7日午前3時頃から8日午後1時頃まで)

10日になって行政からの食料品等の支援が届くようになりました。

避難所の運営で気をつけたこと

- ①情報の共有とコミュニケーション
- ②衛生管理など
- ③役割分担
- ④記録をすること
- ⑤会話と感謝

①情報の共有とコミュニケーション

- ・情報を共有するために、入り口近くの壁面に、「家の掃除に行く方へ・浸水家屋に入るときの注意」
- 「生活スケジュール」「お水の情報（井戸水使用できます等）」などを大きく書いて掲示しました。通路側のフェンスにも外部から来られる方たちに見えるように掲示しました。
- ・避難所で生活する方と継続して関わる支援者を、ホワイトボードにマグネットで表示して所在が確認できるようにしました。
- ・9日朝からミーティングを始め、行政からの情報や連絡事項を伝え、運営についての話し合いをしました。最後の日まで続け、皆さんで「今日もご安全に」の言葉で終了していました。
- ・コミュニケーションをとるために、生活スケジュールを決めて、共有スペースを設置してからは食事は同じ場所と一緒にしました。午前と午後に時間を決めて、水分補給タイムを行いました。

- ・支援物資はテーブルに並べて、品名を書いた紙を掲示して分かりやすくしました。

- ・町民センターに避難している方に、食料品・生活用品・情報などを町内会長が毎日届けました。

(7月21日まで運営)

- ・町内会との連携のために、体育館避難所で連合町内会役員会を行い、「避難所は避難している人だけの場でなくて、助け合いの場にしたい」と伝え、運営の理解と協力を求めました。後日、断水の時に沼田西町全戸に支援物資として水やマスクなどの生活用品を届けることができました。

- ・避難所に来られない被災された方に、行政などの情報をコピーして、各戸に届けました。

- ・連合町内会は会長を中心として、行政と連携して要望を届け、町内の連携を相談しながら行っていました。

②衛生管理など

- ・トイレの問題

体育館でトイレが高齢の方の使用が困難な和式が2基だったので、7月6日夜の豪雨の中、他の施設からポータブルトイレを持ってきて設置しました。断水になり、許可を得てプールの水を使用しましたが、当初は汲むためのバケツがなく、溜める物もない状況でした。

多くの方が使用されるので、スリッパを履き替える位置・手洗

い場などを表示しました。外部から使用できる仮設トイレが設置されるまでは、厳しい状況でした。

・手指消毒

自宅に4本の手指消毒剤があり、出入り口・トイレ・食事の場所に設置しました。行政の支援が届くまで使用することができました。9日には水が出なくなり、15日頃まで手洗いが十分にできない状況だったので、気を使いました。手洗いができるようになってからも、手指消毒は継続しておこないました。

・食事・食料品の管理

- ・気温が35℃36度あったので、1台しかない冷蔵庫に入らない生ものはなるべく食べきるようにしました。

7月17日には冷蔵庫をもう1台と冷凍庫を用意していただきましたが、毎日届くお弁当は入らなかったため、冷凍庫で保冷剤を凍らせて、クーラーボックスで保管するようにしました。テーブルの消毒・手指消毒は食事のたびにしていました。

- ・電気が復旧した後に、ボランティアの方が、ウォーターサーバーを設置してくださり、暑い中恵みの水でした。電子レンジも貸していただき、とても助かりました。

・健康管理

- ・東日本大震災の支援経験のあるボランティアのDさんが8日から関わってくださり、家の片付けに行く方への注意、衛生管理などの情報がいただけました。

Dさんと松江地区の民生委員Kさんで、独り暮らしのお年寄りや支援の必要な方の訪問をしてくださいました。そして、援助が必要で希望される方は、送迎して避難所に来ていただきました。

- ・生活スケジュールを作成するときに、家の掃除に行く方は、着替えることは難しいので昼食は体育館に入らずに、外のテーブルで食事をしていただくことにして、「作業の方はテラス席」としました。

- ・気温が35℃36度の状況で、家に片付けに行かれた方が熱中症で救急搬送（7/16）されました。その後は食品管理の担当の方が、冷蔵庫で冷やした物と冷凍した物の2本の飲み物を準備してください、持って行っていただくようにして、熱中症予防対策を行いました。

- ・環境整備

連合町内会の方が、清掃やゴミの分別をこまめにしてくださいました。毎日のカーテンの開け閉めから、蚊取り線香の準備など、細やかな心遣いで環境を整えてくださいました。

- ・居住スペースの確保

行政の方やボランティアの方・一般の方が来られるようになった時期に、居住スペースの確保が必要と考えるようになりました。

行政の情報掲示板と衝立を使用して、ミーティングや食事をす

るテーブル、食事準備スペース・支援物資のスペースなど共有の場所と、ベッドや荷物のある居住スペースを分けました。居住スペースは比較的広かったので、衝立などの仕切りしないで、避難者がいつでも話ができる状態で生活をしていました。

③役割分担

- ・運営のために、報告・連絡・相談を基本として役割分担が必要になりました。

- ・総括と行政対応

- ・外来者対応

- ・支援物資受付

- ・支援物資管理

- ・支援物資配布

- ・ボランティア対応

- ・環境整備

- ・食料品管理と食事準備など

- ・連合町内会の支援者が主に行い、避難者・ボランティアの方にも担っていただきました。

- ・上記以外にも、縫い物得意な方に、支援物資のズボンの裾上げをお願いしました。

- ・松江地区の民生委員Kさんは、避難所だけでなく町内の支援の必要な方に配慮してくださいました。

- ・町内の女性会・JA女性部の方はサポート出勤表を作成して支

援してくださいました。

④記録をすること

- ・避難所にいる方の名簿
- ・届けていただいた支援物資の記録
- ・ミーティングの内容の記録
- ・提供した食事の内容や食数など

（出来ない時もありましたが、大切だと思い記録しました。この記録をもとに避難所閉所後には出来るだけお礼の連絡をさせていただきました。連絡が届かなかった方、申し訳ありませんでした。）

⑤会話と感謝

- ・避難所にいらしている方は、大変な状況なので、最初のうちは厳しい言葉が出るときもありました。コミュニケーションをとる事が必要と思い、皆さんでお話が出来る環境を出来るだけ作るように心がけました。

・町内外の方からの差し入れ・ボランティアの支援・NPO等支援団体の援助・行政の支援・保健師さんや看護師さん・薬剤師会の方・民生委員さん・女性会・JA女性部・町内会の役員さんの協力などで、避難所の運営が継続出来ていたので、感謝の心と言葉を伝えるようにしました。

工夫したこと

①食器がなかったので最初は公民館のお椀にラップをかけて使用しました。断水になったので、支援物資でいただいた紙皿やコップも使用しました。断水が解消して、食器が洗えるようになってからは、キャンプ用品やお椀を使用しました。

②開設当初は停電で、飲料は量も限られていたので、決まった位置に置いて、名前を書いたマイコップを使用して飲んでいただきました。

電気が復旧して、ウォーターサーバーを設置していただければ、飲みたいときに冷たい水が飲めようになり、皆さん喜ばれました。

ひとりに飲料1本お渡しすると、飲み残しが出てしまったので、クーラーボックスに保冷剤を入れボトルの蓋に開封した日時を記入して、避難所に居るときはマイコップで飲んでいただくようにしました。そうすると、冷えた物を飲むことが出来て、飲み残しもなくなりました。

多くの方からいただいた支援

・ADRA JAPANから紹介していただいた福岡県朝倉郡東峰村の自治会長さんが7月15日17時から九州北部豪雨災害の体験談を話してくださり、避難者と町内会の役員で聞くことができました。

「温度差があっても、みんなで寄り添う」・「行政に声を直接届ける」など参考になりました。東峰村の役場の方も来られて、一輪車やスコップなどの物資の支援もいただきました。

・A D R D J A P A Nからの「水害にあったときに」の冊子はとても参考になりました。避難所の運営の考え方を教えていただき、情報や物資の支援をしていただきました。

・三原市防災ネットワークの防災士の方が、何度もいらしてくださり、その時には避難所運営の相談をさせていただきました。他の被災地や避難所の状況の情報も知らせてくださり、参考にさせていただきます。

・防衛省の入浴支援で「はくおう」の船まで、毎日マイクロバスで送迎していただきました。(初めて利用させていただきました7月15日はボランティアの方が自家用車で3往復してくださいました。)被災した自宅の片付けの後に入浴と洗濯ができて、とても助かりました。7月28日からは、みはらし温泉を利用させていただきました。医師会からは洗濯ボランティアもしていただきました。

・災害鍼灸マッサージプロジェクトの方が週末に何度もいらしてくださいました。お話をしながらの鍼灸治療とマッサージは、疲れた身体と心を癒してくださいました。

・松江地区の沼田西変電所が浸水したので、停電が長く続くと思っていた。しかし8日のお昼に、体育館避難所の駐車場

に九州電力の方が高圧発電機車でくださいました。思いがけず早く明かりがついたので、みんなで拍手しました。13日には北陸電力から食料品の支援もいただきました。

・避難所となった沼田西小学校は校長先生を初めとして先生方が支援してくださいました。

・給水車を手配したり、自宅から水を運んでくださったたり、自宅の井戸水を使用させてくださる方もいらっしゃいました。町内外の方からの差し入れやボランティアの支援をいただきました。運営支援者の方たちは、アイデアを出し合い、より良い運営ができるように協力されました。

・支援物資で保存可能な物は、町内の備蓄としてリストを作り保管しています。

避難所の生活

大きな家族のようでした。出かける時には「遅れないようにね。行つてらっしゃい」と声をかけて、帰ると「お帰りなさい」と迎えてくださいました。

一緒に生活する人として、互いに大切に思われていることが感じられました。

浸水家屋に入るとき注意

・写真を撮る

・素手で触らない（破傷風注意）

・長袖、長ズボン、頭をおおうもの（帽子）、手袋、マスク着用して入ること

生活スケジュール

6:00まで 寝る

（朝早く起きられる方いらしたので・・・）

朝食準備

6:30

ミーティング

7:30

昼食

12:00

（作業の人はテラス席）

夕食

19:00

ライト減灯

21:30

消灯

22:00

※基本ルールなので、都合に合わせてください。

困ったこと・残念だったこと

①情報の共有

・避難情報や行政の情報が伝わっていない方々がいたこと

・災害の初期は携帯電話が繋がらず、テレビ・告知端末ラジオがなくて情報が入らなかったこと

・被災直後は行政の職員の常駐がなく、行政の情報はいるまで

時間がかったこと

②食料品

・食料品の備蓄がなかったこと

・食料品の賞味期限の短い物が重なったとき

・避難所の生活が長期化して、支援のお弁当などが同じメニューが続くと、辛くなったこと

・気温35℃36度の時の、お弁当や生の食料品の管理

③生活環境

・高齢者や子ども、生活に困難を抱える方が過ごすには厳しい環境だったこと

・支援物資が届くまでの手指消毒などの衛生用品や生活用品がなかったこと

・体育館避難所なのでトイレが和式で2基しかなかったこと

・支援の布団やベットが届くまで、床や体育館のマットに寝るしがなく、身体の負担が大きく、痛くなったこと

・室温が35℃36度で体調を崩す方がいたこと（7/17にエアコン設置していただきました）

・ペットと避難を希望される方の環境が難しかったこと

④ボランティアの方

・来られる時間と、援助が必要な時間が合わないことがあったこと

・仕事の内容が、思われている事とお願いしたい事が違っていた

こと

⑤ 支援者

・町内会・自治会の連合会と支援者で運営をしていたが、仕事をしている支援者もいて、長期化すると寄り添う心があっても、時間的・体力的に厳しくなったこと

課題と思われること

① 避難情報や行政の情報が、必要な全ての方に届くようにすること
と 地域の方が、情報を入力する方法を知ること

② 支援物資が届くまでの食料品・生活用品の確保

③ 断水や停電の時の備え

④ 感染症を予防するための、衛生管理と知識（トイレや消毒など）

⑤ 体調を崩さないための、生活環境の確保（空調設備・布団やベットなど）

⑥ 被災された方が前向きに生活するための、心身のケアと寄り添う心のある支援

⑦ 高齢者や子ども、生活に困難を抱える方が、生活できる環境の確保

⑧ 運営主体は誰がするのが適切なのかということ

（被災者の多くの方は、自宅の片付けなどで運営は厳しい状況でした。長期化すると、コミュニティとして、運営する方法も

あると思いますが・・・被災の地域や状況で違うと思います。）

終わりに

避難所で生活されていた方たちは、厳しい状況にかかわらず前向きで、お互いを大切に思われていました。物がなくても、工夫しながら生活していました。東峰村の方がおっしゃった「温度差があっても、寄り添う心」が必要だったと思います。

被災されたSさんは縫い物がお上手でした。長年愛用されたミシンが使用できないと伺い、女性会の方からミシンをお借りして、ズボンの裾上げをお願いしました。その頃にSさんに皆さんから布が届きました。Sさんはその布で、体育館で過ごしたお札に、正面玄関の大きなカーテンを作ろうと考えられました。限られた布を工夫して、金魚の模様を飾った素敵な作品が完成しました。

避難所閉所の日に学校に寄付して、とても喜んでいただきました。

後にSさんは「振り返っても何もない、縫うこと、物を作る事があれば、生きていける」と思ったと話してくださいました。

避難所で、被災された方の前向きな折れない心と、物が無い状況の時は、発想の転換をして、ある物で工夫して生活することが大切だと学びました。



被災状況 1



被災状況 2



被災状況 3

沼田西小学校体育館避難所は8月25日に避難所の運営を終了しました。
 体育館の近くを通ると、私は今でも「ただいま」と帰りたい気持ちになる時があります。



体育館配置図



運宮委員



朝のミーティング



町内会地図



食事風景



炊き出し風景



手作りカーテン



段ボールベット搬入



はくおう号



経産省クーラー設置



支援物資



支援物資

公益社団法人 砂防学会

会長 海 堀 正 博

平成30年7月豪雨災害による西日本土砂災害に係る

第一次緊急調査に基づく緊急提言

2018年（平成30年）7月5日から7日にかけて降った「平成30年7月豪雨」により、西日本の広い範囲で230名超の犠牲者を出す甚大な被害が発生した。土石流、がけ崩れ、地滑りといった土砂災害による犠牲者が119名と特に多く、そのうち広島県は87名と突出している。（2018年8月1日現在、国土交通省まとめ）。公益社団法人砂防学会では、この災害の甚大性、広域性に鑑み、土砂災害、土砂災害緊急調査委員会を設置して災害調査団を派遣し、災害メカニズムに関わる基礎データを収集して、二次災害防止や応急対策を含む土砂災害の防止軽減に関する提言を行うことにした。

まず、第1次調査として数人毎に5つのチームを編成し、7月21日～8月2日にかけて広島県を中心に緊急調査を行った。その結果わかってきたこの災害の特徴を整理するとともに、被災地域や今後の防災について緊急提言を行う。

I、調査で分かったこと

1、広島県内の崩壊や土石流等による災害のほとんどが、7月6日の19～20時前後と翌7日の4～5時前後の強い雨が集中する時間帯に発生していたこと。しかし、その前の6日18時の

段階において、降り始めからの累加雨量はすでに200mm、250mmを超えており、7日24時までには多くのところで総雨量が500mm～600mm超になったこと。

2、雨が止んで2～3日後においても源頭部崩壊地の下方から多くの湧水が認められたこと。それゆえ、崩壊発生後にも継続した湧水の流下により流路の一部が深く侵食されたところが多く見られ、下流への土砂礫混じりの濁流が継続し、ため池や谷埋め盛土の暗渠が閉塞した箇所では、決壊が懸念されたこと。

3、この地域には、風化の進んだ花崗岩や流紋岩が多く分布しており、巨大なコアストーンも多く、大量の雨水を受けて山頂や尾根のすぐ近くや30度以下の緩い傾斜地においても多くの崩壊が発生し、土石流化していたこと。崩壊発生地点や流路の周辺には水の湧き出しや、地盤が支持力を失った箇所等が多数確認されたこと。

4、崩壊土砂が流動化して、崩壊土砂が流動化して巨石混じり・細粒土混じりの土石流に発展し、溪床や溪岸を侵食して拡大し、下流の居住エリアを襲っていたこと。また、斜面がもとと明瞭な谷地形を有していないところでは、広い幅で崩壊土砂や土石流が流下したこと。

5、流域によっては複数の支流域で斜面崩壊や土石流が同時多発し、多方向からの土石流によって居住エリアが二重に三重に襲われていたこと。道路上を流木混じりの土石流が流下し、その

結果、土砂礫等が居住エリア一帯に氾濫・堆積して被害を拡大させていたこと。

6、砂防堰堤が破壊されたところも数力所あったこと。堰堤全体が破壊されたものは1950年（昭和25年）に施工された石積み構造であり、他も戦中・戦後すぐの時期に施工されたものであった。一方で、透過型・不透過型ともに砂防堰堤の効果が発揮された箇所も数多くあったこと。

7、治山堰堤が破壊されたところが十数力所あったこと。古い時代の石積み構造の堰堤だけでなく、コンクリート製の堰堤にも大きな損傷を受けたものもあったこと。一方で、効果的に山地災害防止機能を発揮した治山堰堤も数多く認められたこと。

8、土石流襲来の2―3時間前の時点で、居住エリアへの泥水の流れ込みや異様な臭いに気付き、声をかけ合って避難した地域住民がいたこと。

9、谷出口周辺や谷筋の方向での人家の被災度が大きかったこと。また、10度以上の急な勾配の所にも多くの人家が建っており、流木混じりの土石流により被害が生じていたこと。

10、流木が河道を閉塞させる等被害を拡大させた事例も見られ、それら流木のほとんどは、広葉樹林主体の林地、また、流路周辺の樹林地から生産されたもので、スギ・ヒノキ等の流木は極めて少なかったこと。

11、土石流等の流動性の高い現象が高速道路や国道、県道ほか生

活道に入り込んで流下し、広い範囲に及ぶことで、災害の拡大につながっていたこと。また、被災地域の孤立化につながっていたところもあったこと。このことが災害発生時の人々の避難行動や災害後の救助・救援・復旧活動にも大きな支障を来していたこと。

Ⅱ・緊急提言

上記のような状況を踏まえ、被災地域や今後の防災に対して緊急提言を行う。

1、今回の大雨を受け、崩壊、土石流により荒廃し、土壌層が露出したところや岩盤河床になったところが広い範囲で分布している。このような箇所では多量の土砂が不安定な状態で残存しており、土砂礫混じりの濁流等が高速で流下する事態も懸念されるため、今後も警戒を続ける必要がある。

2、今回からうじて崩壊や土石流が発生しなかった斜面でも、崩れの兆候が認められる箇所がある。すべての箇所を把握することとは困難であるが、レーザープロファイラなどの非接触型の調査方法を活用して危険地域の調査を行う必要がある。

3、土石流の発生危険性の高い溪流の谷出口周辺では、ソフト対策の強化が必要である。そのような場所の住民に対しては、当面はたとえ空振りが増えようとも、早期の自宅外への避難を強く働きかける必要がある。土砂災害防止法による指定が行われた場合には、空振りを恐れず早期避難を確実に行うような警戒

避難体制の強化や住民への防災教育が必要である。

4、土砂礫や流木、洪水を一旦貯留する施設は砂防施設だけでなく、ため池などもある。今回ため池で停止していた土石流等もあったことから、ため池の堤体の補強により、非常時に防災機能を期待できる可能性もある。流域の中の限られた諸施設を管理している省庁が連携しながら総合的に活用したり監視するような取り組みが必要であると思われる。

5、戦中・戦後すぐの時期に施工された石積み砂防堰堤については、砂防堰堤としての機能が現在においても期待できるものであるかどうかの緊急調査が必要である。

6、土石流の発生が想定される溪流における集落直上流の基幹の砂防堰堤については、土石流の流体力や巨石等による衝撃力を考慮した設計基準を満たすよう補強や改築を行うことが重要であり、そのための技術開発を進めることが必要である。治山堰堤においても同様に山地災害を防止するための技術開発を進めることが望ましい。

7、河床勾配が急な山地河川や溪流を背後に控えた地域では、流域面積が小さくても、総雨量が極めて大きな豪雨を受けて大量の土砂生産があると、急激に流量、流砂量、流木量等が増大する。山地部での土石流対策だけでは不足する土砂捕捉能力に伴う平野部への土砂流出、及び、平野部での流下能力不足などが相まって、土砂・洪水氾濫が生じている事例も多く、このよう

な箇所の点検を早急に行うとともに、施設配置計画や施設設計の際に適切な対応を行うことが必要である。

8、国土交通省の調べによると、大雨に関する情報や避難情報が早くから出されていたにもかかわらず、土砂災害警戒区域内で犠牲になった人や自宅内で犠牲になった人の割合が高いことが判明している。一方で、砂防学会調査団は早期の段階で自宅外への避難行動につなげていた住民の存在を確認している。住民の警戒・避難の実態については今後、詳細に検証することが必要である。

9、道路などの地域インフラへの影響を与えた土石流等の実態の把握に努め、地域交通を支える高速道路、国道、県道のほか、住民が避難するために必要な生活道路等を保全するための土砂災害対策についても、今後検討していくことが必要である。

10、今回の被災地と重なる広島地域では戦後だけでも、1945年（昭和20年）9月の枕崎台風豪雨災害、1967年（昭和42年）7月の呉市周辺の豪雨災害、1999年（平成11年）の豪雨災害に見舞われている。犠牲者の少なかつたものまで含めるとさらにその数は増える。豪雨特性と土砂移動現象発生との関係について、詳細に比較・検討する必要がある。

11、地球温暖化に伴う気候変動による影響は避けられないことを踏まえ、これまでの経験に基づいた土砂災害対策だけでは必ずしも災害を未然に防げないことを認識し、これまでに増して

「事前防災」に関連する対応が必要である。また、破壊された砂防堰堤、治山堰堤に対する復旧工事は原型復旧ではなく、できる限り「改良復旧」を推進するべきである。

以上、ここに緊急提言を行うものである。なお、被災地や被災住民が一日も早くもとの平穏な生活に戻れるよう、復旧・復興に向けた取り組みが着実に進捗することを心から願っている。

（平成30年8月17日）

あとがき

柳 迫 長 三

私は、今年で69歳になります。8年前に消防職を退職し、その後「自分が好きなことをやらしてもらおう。」と、妻に言い放し、市内の防災士に呼びかけ「広島市防災士ネットワーク」を結成しました。その時は不安と希望に満ちていたことから、妻の「どこかパートでもゆつくりした方がいいのでは？」と心配してくれることに全く気にとめることなく、今まで突き進んできました。この間、いわゆる「庄原ゲリラ豪雨」で実家の山林が集中豪雨で崩壊し、今では自分の持山さえ確認できない状態で、自分の所有する山林が被災すると役所への手続きや災害復旧の当事者として、大変であることを自身が体験しました。このとき、海堀教授は「柳迫さんとともに調査等ができる幸運に恵まれました。ありがとうございます。」とおっしゃってくださいました。

さらに、消防職員であった平成11年（1999年）6月29日に発生した土砂災害で犠牲者の出た安佐北区勝木自治会の当時の会長が、「二度と犠牲者を出さないために力を貸してほしい。」と頼りにしていただいています。「どうしたらいいんですかね？」と言いながら、もう20年が経過しようとしています。

私は、平成26年8月20日広島豪雨災害で、体験談集の発行を行いました。体験談集の発刊は、実体験された方の思いや経験を後

世に残すことと集中豪雨や大地震などの発災時、自分がどう行動すべきか？迫り来る土砂や洪水に直面すると誰も最適な行動ができない。ということを理解していただきたいと思っています。自分が判断を下す前に、一旦避難して安全な場所で最適な行動を考えて欲しいと思います。特に60歳代から80歳代の男性は、異常な現象を自分で確認するまでは避難しない傾向にあります。自分に自信がある方は、これまで数々の難局を突破してこれ、自然災害も同じように考えられています。

現代は、地球温暖化や酸性雨による異常現象で、これまでとは違った現象が頻繁に発生しています。私達は地球の異常現象に敏感に行動して行かなくてはなりません。しかも高齢化・核家族化などで私たちの周りを見渡すと、老人の1人・2人で暮らす世帯が多いのは感じておられるでしょう。先日私の自治会で老夫婦世帯のご主人が亡くなりました。80歳の奥さんは「これからは一人ですからよろしくお願いします」と言われ、息子さんは「家族葬で行いますから近隣の方へは連絡しない」と言われました。今後は「残された奥さんに何かあったら、だれが駆けつけるんですか？」と、自治会長の私は言ってしまいました。「他人に迷惑を掛けたくないのは十分理解できますが、しかしそれとこれは違う。」大きな声で言いたいわけです。

災害は、予告なく突然襲ってきます。その自然災害はこれまで築いてきた財産や家族を一瞬のうちにばらばらにしてしまってい

ます。毎年繰り返される災害に関するニュースで、近隣と協力して取り組んだ方は、被害が小さいことは皆さんが判っています。まさしくこれが「減災」であります。人の災害に対する認識を変えていくこと。事前に備えること。地域住民は、助け合うことによって、本来の人間として生き抜くことにつながると思っています。「3人寄れば文殊の知恵」と言われるように一人でも多くの仲間を増やすことにつきます。時には衝突することもあります、命を守るためには我慢です。

「地域づくりは防災から」をキャッチフレーズに活動する私は、これからも災害に備える方法や災害によって命を落とさない地道な活動が続けていきます。歳をとる余裕はありません。これからは「減災」活動が中心であると思っています。特に市内の自主防災組織で他の模範となる組織や団体を紹介する「市民防災講座」や、防災町歩きを行った後、我が町防災マップを作成する支援活動や避難訓練を行い、より多くの市民が避難訓練に参加し避難体験をしていただくことを進めていきたいと思っています。

「平成30年7月豪雨災害体験談集」の感想や今後の取組で参考になることがありましたら、気軽に私に連絡ください。

体験談集編集に当たり、被災者の皆さんには失礼なこともあったかと思えます。これも自身の目的を達成したいがために為したものとご理解いただければ幸いです。

自宅が被災し、復旧工事も進まないにもかかわらず。執筆して

くださいました皆様には改めて感謝いたします。ありがとうございました。

「平成30年7月豪雨体験談集」をこれからの防災活動の参考にしていたければ幸いです。

平成30年7月豪雨災害(広島県)

体験談集

発行日：平成31年3月6日

編著者：海堀正博 柳迫長三

発行所：(公社)砂防学会 広島市防災士ネットワーク

印刷所：(株)インパルスコーポレーション

表紙写真提供：

広島市東区馬木8丁目 ayutomo 氏

広島市安芸区矢野南3丁目 高山 和代 氏

広島市安芸区矢野南4丁目 井上 順子 氏

本書籍の記事・写真などの無断転載を禁止します。